
僕とブラコン姉妹の日常

マロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とブラコン姉妹の日常

【コード】

N0680Q

【作者名】

マロン

【あらすじ】

主人公の文弥和人とブラコン姉妹の話

第1話（前書き）

初めての連載です。がんばって続けていききたいと思うのでよろしく
お願いします。

第1話

第1話

僕の名前は文弥ふみやかずと和人17歳。

「ふあああ」

僕は、欠伸をしながら、時計を見る。

「6時か」

時計を確認した後、ベットから起き上がり着替えを済ませ朝食を作りキッチンへ向かった。

僕の家は両親が仕事でほとんど家にいないため朝食は僕が作っている。

姉と妹がいるのだが二人が僕が作った料理が良いというので、僕が作る事になる。

今日は、洋食にしようと思い、必要な材料を冷蔵庫から取り出した。

「とりあえずスクランブルエッグを作るか」

卵に牛乳、塩、バターを加え、混ぜ合わせる。厚手の鍋に流し入れて火にかけ、木しゃもじで鍋底をこそげるように全体を手早くかき混ぜる。

「そろそろかな」

僕は、出来上がったスクランブルエッグを皿に盛り付ける。他にもベーコンやトーストを用意して朝食の完成。

朝食ができたのでそろそろ二人を起こしに行こうとした時、なにやら服をギョツと掴まれた感じがしたので後ろを見ると、まだ眠そうな顔をした妹がいた。

「亜姫おはよう」

「兄さま、おはよう……ございます」

今、僕に挨拶したのが妹の文弥^{ふみや}亜姫、身長は少し低めで、髪はセミロングくらいにしている。おとなしい性格で基本的に口数は少ないけど、極度のブラコンで僕には良く甘えてくる。

「朝ご飯できたから座って待っててね」

僕がそう言っていると亜姫は「わかりました……」と言ってリビングに向かった。

「和ちゃん……」

僕を呼ぶ声が出て後ろを振り向くと、今度は姉の文弥^{ふみや}美晴、亜姫と同じでおとなしい性格。スタイル抜群で学校でも人気が高い。

「はる姉、おはよう」

「おはよう……」

「朝ご飯できてるから早く食べよう」

「うん．．いつも、ありがとね」

「気にしなくていいよ」

僕とはる姉も朝食を食べるためリビンググに向かった。

「いただきます」

「「いただきます．．」」

三人そろった僕たちはようやく朝食を食べ始めた。

「兄さま、おいしいです．．」

「和ちゃんは、料理が上手」

「ありがとう、そう言ってもらえると僕も作るかいがあるよ」

そんな、他愛もない話をしながら僕たちは朝食を済ませた。

第1話（後書き）

どうもマロンです。今回、初の連載に挑戦します。がんばって更新していききたいと思っていますので長い目で見守ってください。

第2話

第2話

朝食を済ませた僕たちは、準備を整え学校に向かっていた。

「おーい！和人ー！ー！ー」

しばらく、歩いていると聞きなれた声が聞こえてきたので、僕たちは足を止めた。

「おはよう、涉」

「おう！おはよう和人」

今、僕に挨拶したのは親友の皆本涉^{みなもとわたる}、僕とは小学校からの付き合い。運動神経抜群でバスケット部に所属している。成績の方は、お世辞にもよろしいとは言えないけど・・・

「美晴先輩と亜姫ちゃんも、おはよう！」

「おはよう・・・」

「おはよう・・・じいいます」

亜姫とはる姉は、涉とは面識があるが、二人とも少し苦手らしい。

多分、自分とは性格が合わないからだろう。

渉が来たところで僕たちは学校へ向かい始めた。

「なあ、和人」

「どうしたの？」

渉が急に真剣な顔つきで僕に話しかけてきた。

「なんで・・・なんで俺は、モテないんだ！」

僕は、危うく転びそうになった。だって、いきなり真剣な顔で何を言うかと思えば、なんでモテないかなんてそんなの僕がわかるわけではないじゃないか。

「僕に聞かないですよ・・・」

「じゃあ、誰に聞けばいいんだ！」

「亜姫やはる姉とかにでも聞いてみれば」

「なるほど・・・」

僕がそう言うと、渉は亜姫とはる姉に同じ質問をしていた。そして、二人は口をそろえて何の迷いもなく。

「「うるさいから」」

と答えた。

その答えを聞いた渉は、ショックを受けてその場に膝をついてしま

った。

「亜姫、はる姉、いくらなんでもその答えはちょっと・・・」

そう言うと、二人はまた口をそろえて

「「私は、兄さま（和ちゃん）以外に興味がない」」

いやいや、その発言はやばいでしょ。いろんな意味で。

そんな、やりとりをしていると学校に到着した。

学校に到着し上履きに履き替えていると、ドサドサという音がした。音の場所は、おそらく亜姫とはる姉の所だろう。

僕と渉は、亜姫とはる姉の様子を見に行った。

「亜姫、はる姉なにかあったの？」

僕がそう聞くと、亜姫もはる姉もたくさんのある物を見せてきた。

「それって、ラブレター？」

二人はコクリとうなずいた。

「こりゃーまた、たくさんあるなー」

二人のラブレターを見て渉がそう言った。

二人は、すごくモテるため、良くラブレターをもらっている。

二人がモテるのは、知っていたけど、まさかここまでとは

「どうするのそれ？」

僕が聞くと二人は

「捨てる……」

ひどい！

「せめて少しは、目を通してあげれば？」

「どうして……」

「だって、二人のために書かれたものでしょ。なら、少しは目を通してあげてもいいんじゃない」

「和ちゃんが……そういうなら」

と言っではる姉はラブレターをかばんにしまった。しかし、亜姫は納得してない様子。

「兄さまは、私たちが告白されてほしいの？」

「そういうことじゃなくて、せつかく亜姫のために書いてくれたものだろう？ だったら読んであげないと可哀想じゃないか」

僕がそう言うと、亜姫もしぶしぶラブレターをかばんにしまった。

「和人！そろそろ教室行かないとやばいぞ！学校にはきてるのに遅刻しちや意味ない！」

「嘘！」

僕は、時計を確認する。すると、チャイムが鳴るまで後五分ぐらいしかなかった。

亜姫とはる姉のラブレターの件で時間を使っていたらしい。

「和人急ぐぞ！」

涉は、そう言いながら走りだしていた。

「亜姫、はる姉、僕たちも急がないと！」

そう言っ僕たちも自分たちの教室に急いだ

第3話

第3話

亜姫とはる姉のラブレターの件も終わり、僕と渉も教室に着き自分の席へと向かった。

「いや、危なかったな」

「そうだね、危つく遅刻になるかと思った」

「まあ、何とか間に合って良かった良かった」

僕たちは、そんな会話をしながら席に着いた

「それにしても、亜姫とはる姉のラブレターの量には驚いたね」

「そうだな、まあ、ファンクラブがあるんだからラブレター貰っても不思議じゃないけどな」

「え！ファンクラブもあるの！」

「なんだ、和人知らなかったのか？」

渉が不思議そうな顔をして僕を見た

「二人がモテるのは知ってるけど、まさか、ファンクラブまであるとは思わなかったよ」

「ファンクラブっていつても、周りの奴が勝手にやってるだけだけどな」

「改めてそんな話を聞くと、やっぱり二人はすごいと思うよ」

「二人とも校内でも一位、二位を争う美少女だからな、ファンクラブができてても不思議じゃない」

「ファンクラブってどんなことしてるんだろ？」

「さあな、でも気をつけたほうがいいぞ和人」

「なんで？」

「ファンクラブの奴らはお前のことを敵と認識してるから」

「なんで！僕何もしてないよ！」

「和人は、二人に愛されてるからな、ファンクラブの連中がそんなお前を妬んでるんだよ」

「ちなみに聞くけど、ファンクラブの規模ってどれくらい？」

「多分、校内の男子生徒の九割以上がそうだと思う」

男子生徒の九割以上って周りほとんど敵じゃないか・・・

「さらに付け加えると、一時期お前を抹殺しようと思つ奴もいたらしいぞ」

「僕何もしてないのに・・・」

僕、少し涙出てきたよ

「まあ、それを聞きつけた美晴先輩がそいつらに鉄槌を下したらしいけど」

はる姉「ーーーーー！何やってるの！僕の知らないところでなんか暴力事件が見え隠れしてるんだけど！！」

「でも、美晴先輩もそんな事しなくても良かったと思うけどな、和人、性格に似合わず喧嘩強いし、誰かが抹殺しに来ても自分で何とかしちゃうだろうし」

「あつさりと変なこと言わないでくれる・・・」

「まあ、なんやかんやでお前も気にする必要ないと思っぜ」

「気になるよ・・・」

そんな話をしていると、先生が入ってきたので僕たちは、話をやめて前のほうを向いた。先生は一通り連絡事項を済ますと職員室に戻って行った。

先生の話も終わり僕たちも一限目の授業の準備を始めた。

午前中最後の授業が終わり、時間は昼休み僕と渉も弁当を食べようと自分たちの昼食の準備をした。

「あれ？」

「どうした？和人」

「なぜか、僕の弁当箱とはる姉の弁当箱がある」

「なんで、お前の鞆に美晴先輩の弁当箱が入ってるんだ？」

「わからないけど、ちょっと届けてくるよ」

「俺も付いていっていいか？」

「どうして？」

「まあ、純粹に美晴先輩を拝みに行きたい」

「それは、純粹とは言わないよ・・・」

「いいから、早く行こうぜLET'S GO！」

「なんで、そこだけ英語なんだよ」

なぜだか、テンションの高い渉の後を追う僕は、はる姉のいる教室に向かった

第4話

第4話

はる姉の弁当を届けに僕たちは今、はる姉がいるであろう教室に着いたのだが……

「文弥さんよければ俺と一緒に昼食を食べませんか？」

「……」

はる姉は今、同じ学年の人から昼食の誘いを受けていた。

「入りづらいなあ」

「あれ？和人君と皆本君じゃないどうしたの？」

僕が困っていると、はる姉の友達の鳩羽美里先輩はなばりみさとが僕に話しかけてきてくれた

「はる姉の弁当が僕の鞆になぜか入ってたんで届けに来たんですけど、なんか今の状況では入りづらくて」

「なるほど、そういうことなら私が呼んできてあげるわよ」

「ありがとうございます」

「ちょっと待っててね」

そう言うと、美里先輩は、はる姉のいるところに向かった。

「美里先輩も美晴先輩に負けないくらい綺麗な人だよな」

渉が美里先輩の後姿を見ながら僕に話しかけてきた。

「そうだね、しかも何でもそつなくこなす人だから周りからの人望も厚いし」

「やっぱり類は友を呼ぶ的な感じなのかね」

「そうかもね」

そんな話をしながらはる姉の方を見ていると、美里先輩が僕達に手招きをしていた。

「どうしたのかな？」

「さあ？とりあえず行ってみようぜ」

僕と渉は、はる姉と美里先輩のいるところに向かった

「ゴメンね。呼びに行くって言うつといて逆に呼んじやって」

「いえそれは、気にしないでください」

「連れて行くこうと思ったんだけど、ここにいる源口君が強情で連れていけなかったのよ」

「はあ」

僕は、その強情と呼ばれている源口先輩を見た。

気のせいかすごく睨まれている気がする。

「これで分かったかしら、美晴はちゃんと弁当を持ってきてるの、だからあなたと昼食をとる必要はないの」

「俺はまだ、文弥さんから断られてはいないだったら弁当だけ置いて関係ない奴は引っ込んでくれないか文弥さんの弟君」

「え？」

「君はあくまで弁当を届けに来ただけで一緒に食べようとは思っていなかったんだろ、だったら、ささと弁当を置いて教室に帰ってくれないか。今から、文弥さんは俺と一緒に昼食をとるんだ」

「そうなの？はる姉？」

「違う・・・この人が勝手に・・・言ってるだけ」

「はる姉はこう言ってますけど」

「それは君たちが周りにいるからだよ、文弥さんは恥ずかしがり屋だからね」

「違う・・・」

「源口君いい加減にあきらめたら？何回、美晴を誘ったって美晴は、あなたに興味がないんだから」

「文弥さんは弟がいるから素直になれないだけだ。ホントは俺と一緒に食事したいに決まってるじゃないか」

(なんか自己中心的なひとだなあ)

僕は、心の中でそう思いながら、はる姉を見る。はる姉は少し困っている様子だ

「はる姉なんだったら僕たちとお昼食べる？」

「いいの？和ちゃん・・・」

「僕たちは別にかまわないよ」

「じゃあ・・・」

はる姉が答えを言いかけた時に

「何勝手な事を言ってるんだい、文弥さんは俺と一緒に食事をするんだよ邪魔しないでくれるかな」

「邪魔なんてしてませんよ、僕は、はる姉の好きにすればいいと思っ
っていますから」

「そうよ、美晴は今から私たちと一緒にお昼を食べるの、むしろ邪魔なのはあんだのほうよ」

僕の中の続いて美里先輩がそう言った。これ以上は無駄だと判断したのか源口先輩は僕を少し睨みつけた後、黙って食堂のほうへと向

かった

「ふう、やっと行ってくれたわ」

「すみません美里先輩なんだか迷惑かけちゃったみたいで」

「和人君は気にしなくていいのよ。悪いのは全部アイツだから」

いつのまにか源口君からアイツに変わってるしなんてことを思っていたらはる姉に袖をつかまれた

「和ちゃん・・・お弁当」

「ああそついえばまだ渡してなかった、はいこれ、はる姉」

「・・・ありがとう」

僕は、はる姉に弁当を渡した

「さて、私たちもお昼食べましょ」

「そうですね、どこで食べましょうか？」

「屋上とかでいいんじゃないか」

「私は・・・どこでも」

「じゃあ、屋上に決定！」

「じゃあ、屋上に行きましょうか」

お昼を食べるため僕たちは屋上に向かった

第5話

第5話

僕たちは亜姫も誘い皆で今、昼食をとっている

「屋上で食べるのもたまにはいいね」

「そうだな、そしてなにより、こんな美少女達と食事できるなんて最高じゃないか！」

「涉さつきからなんかテンション高いね」

「あたりまえだ！美少女に囲まれてテンションが上がらないわけがない！」

「皆本君は相変わらず元気だね」

「俺から元気とつたら何も残りませんから！」

「それを自分で言ったら終わりだよ涉・・・」

「和ちゃん・・・」

「何はる姉？」

「さつきは・・・ありがとう」

「どっしたのいきなり？」

「さつき私が・・・教室で困ってたら・・・助けて・・・くれたから」

「僕は、何もしてないよ。それに、僕より美里先輩にお礼を言ったほうがいいよ。」

「何言ってるんの和人君、美晴を助けたのは和人君でしょ」

「そうだぞ、和人、あの先輩お前に怒り丸出しだったのに全然ビビってなかったし」

「そんなことないよ・・・僕は、何もしてないし源口先輩が怒ってた時も内心ビビってたし」

「しかし、あの先輩かなりのナルシストだよな〜そうでないとあんなにしつこく美晴先輩に迫ったりできないだろうしな」

「そうなのよ！あいついつつも美晴が嫌がってるのに！それは、美晴が恥ずかしがり屋さんだからって言っしてしつこく食事に誘ってるの！全然自分が悪いと思ってるのよ！」

美里先輩は源口先輩の文句を言いながらお弁当をガツガツ食べていた

「源口先輩はいつもあんな感じなんですか？」

「そうよ！自分がモテるって勘違いしてるのか知らないけど！あのレベルまで行くと最早ストーカーよ！」

「確かにな、あれはもう犯罪者予備軍のレベルだ」

「そんな渉まで」

「和人君は優しすぎるのよ。あんな奴に同情する必要なんてないわ」

「まあまあ美里先輩少し落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか！」

「美里・・・少し・・・落ち着いて」

「美晴までそんなこと言って少しは危機感を持ちなさいよ」

「大丈夫・・・だから」

「どうしてそう言い切れるのよ」

「いざとなったら・・・和ちゃんが・・・守ってくれる・・・から」

「あーなるほど」

「え！僕！とういうか美里先輩もそれで納得しないでください！」

「じゃあ、守ってあげないの？」

「そういうわけじゃないですけど」

「和人君、少し真面目な話になるけどアイツはホントに最低な奴なんだからね」

「どうしてですか？」

「アイツは有名な女たらしでね、女の子を手に入れるためなら手段を選ばないほどのクズよ」

「そんな！」

「だから、さっきは冗談交じりに言ったけど今度は真面目に言わせてもらうわ。和人君どうか美晴を守ってあげて。これは、美晴の親友としてお願いなの」

「和人、お前ここで断ったら男じゃないぞ」

「渉・・・」

渉も怒っているのだろう、さっきとは一変して真面目な顔になっている

「わかりました・・・僕にどれだけの事が出来るかわかりませんが出来る限り、はる姉を守ります」

「和ちゃん・・・」

「ありがとう、和人君」

「さすが！俺の親友！」

渉が僕の肩に腕をまわして来た

「安心しろ！俺も協力するからよ」

「ありがとう、渉」

話もひと段落した時、亜姫に袖をつかまれた、そういえばさっきからいたの忘れてた

「どうしたの？亜姫」

「姉さま・・・ばかり・・・ずるい・・・私も兄さまに・・・守ってもらおう」

そう言って亜姫は、僕にぎゅっと抱きついてきた

「ッ!!」

「和人君モテモテ」

「亜姫恥ずかしいから離れて!」

「嫌・・・」

「はる姉助けて!」

「私も・・・」

「なんではる姉まで抱きついてきてるの!？」

「だったらついでに私も守って」

「美里先輩まで！」

「アハハハハ和人がんばって全員守れよ」

「笑ってないでなんとかしてよ！渉」

「無理」

「即答！？」

「兄さま・・・大好き」

「私も・・・和ちゃん・・・好き」

「私も好きよ〜後輩として〜」

「そんなことはいいから離れてーーーーー！」

こんなやりとりをしながら僕たちの昼休みは終わっていった

第6話（前書き）

なんか・・・無理やりうざいキャラを出したせいで話がめちゃくちゃ
になっている気がする・・・

早く今の話を終わらせなければ！！

第6話

第6話

午後の授業も終わり、僕は帰る準備をしていた。僕は部活に入っておらず基本的にまっすぐ家に帰ることになる、はる姉たちも部活はやっていないので僕たちは、いつも下駄箱のところで待ち合わせすることになっている。そして今日は、渉も部活が休みらしく一緒に帰ることになり今は、下駄箱のところで皆を待つてる所だ。

「久しぶりだな和人達と帰るなんて」

「そうかもね、渉は普段部活があるから大変だよね」

「それを言ったら、毎日家事をしてる和人のほうが大変だと思うぞ」

「そんなことないよ、もう慣れたしね」

「そういうもんか」

「そういうもんだよ」

そんな、会話をしていると亜姫・はる姉・美里先輩がやってきた

「和ちゃん・・・おまたせ」

「あれ？珍しいわね皆本君がいるなんて」

「今日は、部活が休みなんすよ」

「兄さま・・・早く帰る」

「そうだね、皆そろったし帰ろうか」

「うん・・・」

僕は靴を取り出すため下駄箱に手を入れた。すると、一通の手紙が目に入った

「なんだそれ？」

涉が興味津津にこちらを見てくる

「なになに？どうしたの？」

靴をはきかえた美里先輩たちもこちらに集まってくる

「僕の下駄箱に手紙が入ってたんですよ」

「それってラブレターじゃないの？」

「「ッ！！！」」

「なにー！ー！そうなのか和人！？」

「僕に分かるわけないでしょ、まだ中身も見えないのに」

「じゃあ！早く見てみるよ！」

「そんなせかさなくても・・・」

僕は、入っていた手紙の中身を確認するため手紙のを開けたするとそこには

話がある、校舎裏で待つ 源口

とシンプルに書かれていた

「なんか・・・嫌な予感しかしないんだけど」

「まさか、早くも和人君を呼び出すとは・・・」

「完璧に和人を目の敵にしてるな」

美里先輩と渉が手紙を見ながらつぶやいた

「ぶっしょ、これ」

「行かなくていいんじゃないか、なんか企んでるの見え見えだし」

「そうね、確実に和人君に何かする気よアイツ」

「でも・・・行かないとまた、はる姉に何かするかもしれないし」

僕たちはどうすればいいかわからなかった、すると

「和ちゃん・・・」

はる姉が僕を呼んだ

「何？はる姉」

「無理して……行かなくても……いい」

「でも、そしたらはる姉に何かあるかもしれないし」

「私は……大丈夫……だから」

「はる姉……でも……」

「大丈夫……だから」

はる姉は、そう言っつて僕に笑顔を向けている。

僕は、その笑顔を見て決心がついた

「行くよ……僕」

「和ちゃん！……」

「和人本気か？」

「うん……今日のはる姉が困っているのを見て、美里先輩の話聞いて僕が行かないといけないと思うんだ、はる姉を守るって約束したしね」

「和人君……私から言っつといてなんだけど無理していかなくてもいいんだからね、いざとなったら先生にでも言えばいいことだし」

「心配してくれてありがとうございますとつごぞいます美里先輩。でも、無理して
るわけじゃありませんから」

「本当に？」

「もちろんです」

「やれやれ、そこまで言われたら仕方ないわね」

「美里！……」

「大丈夫よ、美晴、和人君なら」

「そつだな和人なら大丈夫だろ」

「……でも……」

「姉さま……兄さまなら……大丈夫」

「そつだよ、はる姉僕は大丈夫だからさ」

「和人君がもどってくるまで私たちはここで待ってることにするわ
ね」

「僕は、それでもいいですけど、どれくらい時間が掛かるかわかり
ませんよ？」

「いいわよ別にどうせ帰っても暇だしね」

「そうですね、じゃあちよっと思ってきますね」

「兄さま・・・がんばってね・・・」

「ありがとうね亜姫」

そう言って僕は、校舎裏へと向かった

第6話（後書き）

どうも、マロンです。なんかほのぼのした感じの小説を書くつもりだったのに4、5話あたりから殺伐とした感じになってしまいました。次ぐくらいで今話を終わらせてほのぼのとした話に戻したいと思っています。話が分かりづらと思います但至少目を通していただけると嬉しいです。

第7話

第7話

指定された校舎裏に行くと、源口先輩は僕を睨みつけながら歩み寄ってきた

「よう、来たか文弥和人」

「僕に一体何の用ですか？」

「とぼけんなよホントは分かってるんだろ」

「はる姉の事ですか・・・」

「ああ、あの女、俺が何回告白してもいい返事をくれなくてなあ、そろそろ我慢の限界なんだよ」

「はる姉がいい返事をくれないのはあなたに興味がないからでしょ。そんな、話をするためにわざわざ僕を呼んだんですか」

「うるせえ！こつちが下手にでてりゃ、あの女いい気になりやがって！俺が付き合ってやるって言うてんのにずっと無視し続けやがって！むかつくんだよ！だから、てめえを人質にとって無理やりにも俺の女にしようとおもってなあ」

「・・・なんだって」

「お前を人質にとればあの女も俺のいいなりになる、他にもお前の

妹やあの女の親友とか言ってる鳩羽美里も俺のものになるだろうか
らな」

源口先輩はゲラゲラと下品な笑い声をあげた

ああ、コイツ本当にクズなんだな。僕は心底そう思った、こんな奴
にいままでやる姉は困らされていたのかと思うと反吐が出そうになる

「まあ、そんなわけだからよ、お前は黙って俺の人質になってれば
いいんだよ」

そう言いながら、源口先輩はポケットからナイフを取り出してきた

僕は、もう我慢の限界だった

「調子に乗るなよクズ」

「なんだと!」

「お前みたいなクズにボクがやられるわけないだろ」

「いい気になってんじゃねえぞ! コラア!」

源口先輩は叫びながら僕にナイフを振り上げてきた

僕は、それを紙一重でかわし源口先輩の顔を殴る

「がはっ!」

源口先輩は、僕の攻撃に怯み少し後退した。僕はすかさず距離を詰

め源口先輩の横腹に回し蹴りを入れる。その衝撃に耐えられず源口先輩は数メートル吹っ飛んだ。

「ヒイイ」

今の攻撃で戦意を喪失したらしく、源口先輩は完全に僕を怖がっていた

「これ以上、はる姉や僕の周りの人に何かしてみろ！次はこんなものじゃ済まないと思え！」

「すみませんでした・・・もう何もしません・・・許してください」

源口先輩は泣きながら僕にそう言った。

僕は、その言葉を聞いた後、泣いている先輩をそのままにし皆のところに戻った。

僕は、皆のところに向かったそして、真っ先に僕を見つけた、はる姉が飛びついてきた

「和ちゃん！」

「うわ！はる姉危ないよ」

「和ちゃん・・・良かった・・・良かった」

「はる姉・・・」

はる姉に続いて他のみんなも集まった

「和人君、良かった」

「和人大丈夫だったか？」

「兄さま・・・怪我不い？」

「心配してくれてありがとう皆、僕は大丈夫だよ」

「それにしてもさすが和人君ねアイツは今どうしてるの？」

「多分、まだ泣いてると思います」

「お前一体何したんだよ和人・・・」

「それが、相手の話を聞いてたらあまりのクズっぷりにぶち切れしちゃって」

「なるほど、それで喧嘩になったと？」

「まあ、そんな感じかな」

「ふうん、和人君でも切れるときがあるのね」

「ハハハ、まあ」

「兄さま・・・怪我不いから・・・安心」

「ありがとう亜姫」

僕は、皆と会話した後いまだにくっついていて、はる姉に話しかける

「はる姉、僕は見ての通り大丈夫だから、もう泣かないですよ」

「でも・・・私の・・・せいで・・・和ちゃんを・・・危ない目に・・・
・・・合わせちゃった」

「僕は、気にしてないから。僕は、はる姉に笑顔でいてほしかった
だけだから」

「和ちゃん・・・」

「だからもう気にしないで、はる姉は笑顔のほうが綺麗なんだから」

「うん・・・」

僕がそう言つと、はる姉は涙をぬぐって笑顔に戻った

「さて、美晴も笑顔に戻って一件落ち着いたことだしそろそろ帰りま
しょうか」

「そうですね」

僕は、自分の鞆を取り帰ろうとした時

「和ちゃん・・・」

はる姉に呼ばれ振り向こうとした時、ほっぺに柔らかい感触がした

一瞬何が起こったかわからなかった。しかし、すぐに理解したはる姉が僕のほっぺにキスしたのだ

「は、はる姉!？」

「今日の・・・お礼」

「へえ〜美晴もなかなかやるわね」

「和人——————!羨ましすぎるぞコノヤロー——————」

「姉さま・・・抜け駆け・・・ずるい・・・」

僕が、驚いてぼくとしていると、はる姉が僕の前に立ち、今日一番の笑顔を向けてきた

「和ちゃん・・・早く・・・帰る」

「え、ああ、うん・・・」

こうして、僕たちは無事トラブルを解決し自分の家へと帰るのであった

第7話（後書き）

どうも、マロンです。

何とか、今の話を終わらせることができました。

今の、話を終わらせるだけで7話も掛かってしまいました。

これからは、文章を眺めにし、少しの話数で終わらせるようにしたいと思います。

感想やアドバイスを頂けるとうれしいです！

第8話

第8話

朝僕は、妙な違和感とともに目が覚めた。

違和感といっても体調が悪いとかそういうのじゃなくて

なぜか、いつもより布団が膨らんでいる気がする・・・僕は、布団を剥ぎ中を確認するとそこには

「すうすう・・・」

僕の布団の中ですべて気持ちよさそうに眠っている亜姫を見つけた

「なんで、僕の布団の中に亜姫がいるの！」

僕は、必死に頭をフル回転させた、確か昨日は、はる姉の騒動も終わりその後は、普通に家に帰って、普通にご飯を食べて、風呂に入り、テレビをしばらく見た後、歯を磨いて、部屋に入り寝たはずだ（もちろん一人で）

僕が全力で頭を回転させている間に、亜姫が目を覚ました

「ふみや・・・兄さま・・・おはよう・・・ございます」

亜姫はまだ完全に目が覚めていないらしく、まだ少し寝ぼけている

「ああ、おはよう・・・じゃなくて！なんで亜姫が僕の布団で寝てる

の！」

「兄さまと・・・一緒に・・・寝たかった・・・から」

「一緒に寝たかったって・・・」

「兄さまは・・・私と一緒に寝るの・・・嫌ですか？」

亜姫が上目づかいで聞いてくる

「い、いや別に嫌とかそういうことじゃなくてね。亜姫も年頃の女の子なんだから常識で考えると一緒に寝るのはちょっと・・・」

「常識なんて・・・関係ない・・・私は・・・兄さまが・・・好きだから・・・一緒に・・・寝たいの」

「い、いやでもね亜姫」

僕が、亜姫の言葉にとまどっていると、部屋の扉が開いた

「和ちゃん・・・もう朝だから・・・起きて」

「・・・」

「和ちゃん・・・なんで・・・ここに・・・亜姫が・・・いるの？」

はる姉がストレートな質問を投げかけてくる、しかもちよっと怒っている気がする

「え、えっとそれは、亜姫がいつのまにか・・・」

「私が・・・兄さまと・・・一緒に・・・寝たから」

僕が、理由を言いきる前に、亜姫がはる姉に向かってそう言った

はる姉は、亜姫の言葉に驚きながら話を続ける

「今の話・・・本当なの・・・和ちゃん？」

「その、どうやら僕が寝ている間に布団に潜り込んだらしく」

「そう・・・」

僕が、そう言うと、はる姉は少し肩を落としながら亜姫の方を向いた

「亜姫・・・和ちゃんを・・・困らせたら・・・ダメ」

「兄さま・・・私と・・・寝るの・・・嫌じゃないって・・・言った・・・だから・・・困ってない」

「それは・・・亜姫を・・・悲しませないため・・・本当は・・・困ってる」

「困ってない・・・」

「困ってる・・・」

「困ってない・・・」

「困ってる・・・」

「困ってない・・・」

「困ってる・・・」

このままじゃ、永遠と、このやりとりが続くと思えば僕は二人の仲裁に入った

「二人とも少し落ち着いて・・・」

「兄さま（和ちゃんは）・・・黙ってて」

「はい・・・」

一瞬で、止められた。

「だいたい・・・姉さま・・・昨日、兄さまに・・・キスした・・・
だったら・・・私が・・・兄さまと・・・一緒に寝るのも・・・私
の自由」

僕の自由はないのかな・・・

「あれは・・・和ちゃんに・・・助けて・・・貰ったから・・・そ
のお礼・・・あの場で・・・すぐにお礼がしたかったから・・・だ
からキスした・・・それ以外に何もなかった・・・から」

いや、他にももっとたくさんあったと思うよ

「姉さまは・・・ズルイ・・・私だって・・・兄さまと・・・キス
したいのに・・・それなのに・・・抜け駆けして」

あれ、今ものすごく気になるワードがあったような・・・

「だったら・・・今・・・キス・・・すればいい・・・そのかわり・・・今日の夜は・・・私が和ちゃんと・・・一緒に・・・寝る」

はる姉ーーーーー！自分が何言ってるか分かってるの！今とてつもない事言っただよ！

「・・・なるほど」

「亜姫！なんでそこで納得するの！」

僕のツツコミを無視して亜姫は、僕のほっぺにキスしてきた

「あ、亜姫！」

「兄さまと・・・キス出来た」

「亜姫・・・良かったね」

「うん・・・姉さま・・・さっきは・・・ごめんなさい」

「気にしなくていい・・・私も・・・ムキになってた」

あれ！いきなり仲直りが成立してる！

仲直りが終わった二人は何事もなかったかのように僕の部屋から出て行った。僕は、亜姫にキスされたほっぺをさすりながら呆然としていた

あれから、しばらく呆然としていた僕をはる姉が呼びに来た後、すぐに朝食を済ませ学校に向かう準備をした。

今、僕は学校へ向かう道を歩いているのだが

「あの二人ともなんで僕と手をつないでいるの？」

「手をつなぎたいから」

さいですか・・・

「家族で仲よくするの・・・大事」

「いや、それとこれとは関係ないと思うんだけど」

そう言っではる姉はつないでいる手をぎゅっと握った

学校に向かう途中のため当然、僕たち以外にも生徒がいる。なのにこの二人は、つないでいる手を放そうとしない

うっすら周りからの視線が痛い

僕は、この視線に耐えながら学校へと向かうのであった。

あの視線に耐え僕はようやく学校へ着いた。

「兄さま・・・昼休み・・・一緒にお弁当・・・食べましょう」

「和ちゃん・・・午前中の授業が終わったら・・・和ちゃんの所に・・・行くから・・・教室で・・・待っててね」

二人は、僕にそう伝え自分たちの教室に向かった

今日は、朝からなんだかすごく疲れる日だ、そんな事を思いながら僕も自分の教室へと向かった

「おはよう和人」

教室に入ると、渉が自分の席から僕に挨拶をしてきた

「おはよう渉・・・今日は、早いね部活の朝練？」

「まあな、来月練習試合が入っててな顧問の先生が妙に気合入れちやっつてさ〜もう。大変なんだよ」

「渉も苦労してるんだね」

「まあ、お前に比べりゃ大したことないけどな」

「なんで？」

「お前、今日、美晴先輩と亜姫ちゃんに手つながれながら登校しただろ」

「なんで、知ってるのさー！」

「そりゃあ、学校中で話題になってるからな」

「嘘……」

「ホント」

道理で教室に入った時、妙な殺気を感じたわけだ

「まあ、気にすんなよ和人」

「すぐく、気にするよ」

「誰もお前にちよっかい出したりしないと思うし」

「どうして？」

「お前に手を出したら、自分たちが文弥姉妹からひどい目に会って皆わかってるから」

「それはそれで、なんか複雑だなあ」

そんな、会話をしているとチャイムが鳴った

先生が教室に入ってきて、それまで話していた生徒も自分の席に着いた

「え、来週の金曜日には体育祭があるので、今日の放課後クラスの委員長は、出場競技を皆で決めるように話し合ってください」

先生は、体育祭の連絡をした後、号令をかけ教室を出て行った

そういえば、来週は体育祭かすっかり忘れてた

そんなことを思いながら僕は、授業の準備を始めた

第9話

第9話

午前中の授業を終えて、僕が教科書をかばんにしまっていると、はる姉と亜姫がやってきた

「和ちゃん・・・おまたせ」

「兄さま・・・お弁当・・・食べよ」

「いいけど、どこで食べるの？」

僕が、二人に聞くと、二人とも声を合わせて

「「ここ」「といた

「え！ここって教室で食べるの！」

「「うん」「

「なんでまた・・・」

「「兄さま（和ちゃん）がいつも・・・座ってる・・・席で・・・食べたい」「

なんとも仲のいい姉妹な事で、間の開け方まで同じとは・・・

そんな、やりとりをしていると昼飯を買って渉が戻ってきた

「お、めずらしいな美晴先輩と亜姫ちゃんがこっちの教室に来るなんて」

「一緒にお弁当食べようって誘いに来たんだよ」

「ふうん、そうなのか」

「しかも、この教室で食べるらしい」

「なんで、ここなんだ」

「僕がいつも使ってる席で食べたいんだって」

「屋上とか中庭とかいろいろ他にも場所あるのにな」

「まったくだよ」

渉と話していると、話に置いて行かれたはる姉と亜姫が片方ずつ僕の袖を引っ張ってきた

「和ちゃん・・・早く食べよ」

「兄さま・・・早く食べましょう」

「あ、うん」

「今日は一段と和人にべったりな気がするぞ」

「気にしたら負けだよ・・・」

僕は、渋にそう言いながら鞆から弁当を取り出した

はる姉と亜姫は周りからイスを借りて僕の席の近くに座りお弁当を食べ始めた

僕も自分の弁当を開けて食べ始めた

「和ちゃん・・・あ〜ん」

はる姉が僕に箸を差し出してきた

「っ！兄さま・・・あ〜ん」

はる姉に対抗するかのようにはる姉も僕に箸を差し出してきた

「い、いいよ自分のがあるし」

「・・・・・・・・・・（グスン）」

「わ、分かったよ食べればいいんでしょ食べれば」

僕は、なかばやけくそ状態で二人が差し出してきたのを食べた。

視線が痛い

「・・・・・・・・・・（ノノノ）」

なんか、二人の顔が紅くなってるような

「くそ〜なんで和人ばかり」

「文弥君つてもしかしてシスコン？」

「死んでしまえ」

僕に対して様々な言葉が発せられる、いくらなんでも最後のはひどいんじゃないかな

「和ちゃん・・・もう一回・・・あ〜ん」

「兄さま・・・こっちも・・・あ〜ん」

再び僕に箸を向けてくる二人、このままじゃ僕にシスコンの称号がクラスから与えられてしまう

(なんとか、この場を回避しなければ)

僕が、打開策を考えていると、僕が困っているのを察してか涉が話を振ってきた

「そういえば、美晴先輩と亜姫ちゃんは何の体育祭の出場種目何にですか決めた？」

「ナイスだ涉！これに便乗して僕も話を振る」

「そ、そうだよ二人とも出場種目決まってるの？」

「まだ・・・決まってない」

「じゃ、じゃあ出たい種目とかないの？」

「私は・・・100m走とか・・・出てみたい」

「そっか、はる姉は運動得意だし向いてるんじゃないかな」

「ありがとう・・・和ちゃん」

「亜姫はどつなの？」

「私は・・・運動が・・・あまり得意じゃないので・・・借りもの競争・・・とかがいいです」

「ああいうのは、借りる物によって勝敗がきまるからね亜姫にはいかもしれないね」

「はい・・・」

しまった、亜姫は運動が得意じゃないからこういった話題はあまり好きじゃない、あきらかに落ち込んでいるのがわかる

「亜姫、運動でもなんでも一生懸命やることに意味があるんだよ、だから、少しぐらい運動が苦手でも一生懸命やればいいんだよ」

僕は、そう言って亜姫の頭をなでてやる

「はい・・・がんばります」

亜姫は、頭をなでられて嬉しそうにしている。元気出してくれてよかった

僕が、亜姫の頭をなでていると、隣で、はる姉がむすっとしている

「はる姉、なんで怒ってるの」

「別に・・・怒ってない」

はる姉は、怒ってないと言っているが、僕からみれば怒っているようにしか見えない、怒っているといっても本気の怒りではなくどちらかというとすねている感じだ

「和人、お前は相変わらず鈍感だな」

涉が僕にそう言った、何が鈍感なんだろう

「はる姉も怒ってないで、はいあ〜ん」

僕は、はる姉に自分の弁当をあげた

すると、はる姉は、ニパアッと明るい表情になり僕の差し出した弁当を食べた

「姉さま・・・やられた」

「どうかしたの亜姫？」

「なんでも・・・ありません」

亜姫が何かいったようだが良く聞き取れなかった

「和人、自分でフラグを立てていることに気づいてないのか・・・」

「何が？」

「いや、なんでもない」

なんで、僕は涉に残念な人を見るような眼で見られているのだろうか

僕は、わけがわからないまま残りの弁当を食べた

こんな感じで僕たちの昼休みは終わった

ちなみにこの昼休みの後、僕は陰でシスコンの称号を与えられたのはまた別の話

第10話

第10話

放課後になり僕たちは、体育祭の出場種目を決めていた

出場種目を決めるのはいいけど、何やら変な種目が混じっていた

100m走やりレーそして借り物競走これはいい、でも

男子限定種目のバトルロワイヤルってなんだ？

「それでは、今から出場種目を決めたいと思います。」

出場種目を決めようとした時、渉がクラス委員長に質問をした

「男子限定種目のバトルロワイヤルってなんだ？」

「これは、校長の気まぐれで提案された種目でその名の通り代表の男子生徒にバトルロワイヤルをやってもらいます」

なんて提案をしてくれたんだ校長・・・

いつも、元気な渉でさえこの種目には若干引いている

「他に質問はありますか？」

皆、黙っている

「ないのなら、種目を決めたいと思います。ではまず、この種目にこの人を推薦したいという人はいますか？」

そういつた瞬間、男子生徒が一斉に手を挙げて

「……………文弥をバトルロワイヤルに推薦します……………」

「なんで……………」

「……………お前が憎いからだ……………」

クラスの男子が声を合わせて僕にそう言った

「僕が何をしたっていうのさ！」

「何をしただと！俺たちの前で美晴先輩や亜姫ちゃんとイチャついてただろ！」

「俺たちの学園のアイドルと弁当を食べてあまつさえ、あ〜んなんてしてもらってただろ！」

皆が、僕に対してそれぞれ罵声を浴びせている、しかもそのすべてが、はる姉と亜姫とお昼を食べたことだった

「そんなこと言われても、はる姉や亜姫とは家族だし……………」

「……………黙れ！シスコン……………」

「酷い……………」

僕が嘆いていると横から涉が僕の肩に手を置く。そして、一言

「和人、人生何事も経験だ！がんばれ」

僕は、これまでこんなに親友を憎んだことはないよ

そんなこんなで僕は無理やりバトルロワイヤルに出場することになってしまった

他のみんなも出場種目が大体決まり僕たちの体育祭の話し合いは終わった。

結局僕が出ることになったのは、バトルロワイヤルをはじめとし100m走や借り物競走にも出ることになった

僕は、沈んだ気持ちのまま下駄箱まで向かった。

下駄箱に行くとはる姉、亜姫、美里先輩がいた。

「やつほー和人君！」

「美里先輩どうも……」

「和ちゃん……どうしたの……元気ないね」

「うん、ちょっとね」

「兄さま……何か……あったの」

「もしかして、和人君バトルロワイヤルに選ばれたの？」

「・・・はい」

「ありやりや、そりゃ落ち込みもするわけだ」

「どういこと・・・美里」

「ほら今日、体育祭の出場種目を決めたでしょ？その種目の中に男子限定の種目でバトルロワイヤルがあったじゃない」

「兄さま・・・それに出なきゃ・・・いけないの」

「うん・・・」

「でも・・・どうして・・・和ちゃんなの？」

「僕が一番知りたいよ、クラスの男子全員の総意で勝手にきめられたんだよ」

「なんか、なんとなく理由がわかってっちゃうような気がするわ」

「どうしてなの・・・美里」

「美晴と亜姫ちゃんは知らない方がいいと思うわ」

「「？」」

はる姉と亜姫は何が何だかわからない様子だ

「はる姉たちは、何に出るの？」

「私は・・・100m走と・・・リレーに出る」

「私は・・・借り物競走・・・です」

「私は、美晴と同じ競技よ」

と皆が自分の出る競技を僕に教えてくれた

「和人君は他に何の種目に出るの？」

「100m走と借り物競争に出ます」

「大変ね和人君も」

「おかげさまで」

「兄さまも・・・借り物競走・・・出る？」

「うん、亜姫お互い頑張ろうね」

「はい・・・（／／／）」

亜姫が僕に返事をした瞬間、はる姉が後ろから抱きついてきた

「ちょ、ちょっと！はる姉どうしたの!？」

「なんでも・・・ない」

「あらあら、美晴は意外と嫉妬深いわね」

美里先輩が微笑ましいといった感じでこちらを見ている

「そんなこと・・・ない」

「・・・私も」

そして、いつもの流れで亜姫もひっついてくる

「あ、亜姫まで！二人とも今日はなんだか様子が変だよ！」

「「そんなこと・・・ない」」

どうして、うちの姉妹はこういう時だけ意気投合するんだろ

「ほらほら、二人ともそろそろ離れてあげないと和人君帰れないわ

「よ

美里先輩が二人にそう言うと、二人はしゅしゅといった感じだが僕から離れてくれた

「はあ、ありがとうございます美里先輩」

「どういたしまして」

「まったく、二人はどうしていつも僕にひっついてくるの?」

僕がそう聞くと二人は声を合わせて

「「好き・・・だから」」

「なんでこんな時だけ息ぴったりなの！」

「まあまあ、和人君、二人は君のことを本当に思っているからこそ、
こういった行動をとっちゃうのよ」

「なら、もう少しひつつくのをやめてほしいです」

「二人とも不器用なのよ」

「そんなもんですか」

「そんなもんよ」

「和ちゃん・・・そろそろ・・・帰る」

「え、うんそうだね」

「兄さま・・・また・・・手つなご」

「え！それはちょっと・・・」

「・・・(シユン)」

「わ、分かったからそんな悲しそうな顔しないで！」

「和ちゃん・・・私とも」

「はる姉まで、はあ、分かったよ」

「ふふ、和人君もなんだかんだで一人に甘いわね」

美里先輩が僕を見てそう言った

僕は、二人と手をつなぎ帰った。そのころには、僕の沈んだ気持ちも治っていた

第11話

第11話

あれから数日経ちが経ち、今日は体育祭当日

僕はいつもよりも早起きして弁当作りに取り掛かっていた。

なぜなら

いつもは、自分とはる姉、亜姫の分を作ればいいけど。

昨日、美里先輩と涉が僕の作った料理を食べたいというので、それだったらいつもの弁当箱じゃなくて、大きな重箱にしようと思ったわけだ。しかし、重箱をどこにしまったか忘れてしまい、いつもより早く起きて重箱を探したというわけだ

まあ、意外と簡単に見つかったからよかったけど

そんなわけで、僕は今、全力で唐揚げを揚げている。他にも、たまご焼きやウインナーなどすでに何品か仕上げている。

唐揚げを仕上げ、その後もいくつかの料理を仕上げ、重箱に詰めたひと段落し時計を確認すると、そろそろ、はる姉と亜姫が起きてくる時間になっていた

僕は出来上がった弁当を邪魔にならない所に置いておき、今度は朝ご飯の方の支度をした。

準備をしていると、はる姉が起きてきた

「和ちゃん・・・おはよう」

「おはよう、はる姉、今朝ご飯の準備してるからちょっと待っててね」

「手伝おうか？」

「ありがとうはる姉、じゃあ食器とか出しといてくれる」

「うん・・・わかった」

はる姉が食器のしまっぺある棚からいくつかの食器を取り出しテーブルに並べる

僕はできた料理を皿に盛っていく

「こんなもんでいいかな」

朝食の準備が終わると、亜姫も起きてきた

「おはよう・・・兄さま」

「亜姫、おはよう朝食できたから皆で食べよ」

「はい・・・」

僕たちはそれぞれ席について朝食を食べ始めた

「兄さま・・・おいしいです」

「ありがとう、亜姫」

「和ちゃん・・・今日は何時ぐらいに・・・起きたの?」

「え〜と、五時かな」

「眠く・・・ないの?」

「少し眠いけど、それぐらいに起きないと今日は五人分のお昼の準備もあつたし間に合わなくなるからね」

「大変だったら・・・起こしても・・・良かったのに」

「でも、起こすのも悪いからさ」

「兄さま・・・手伝ってほしい時は・・・言ってください・・・いつでも・・・手伝います」

「ありがとう、ホントに手伝って今度から言っようにするよ」

「和ちゃん・・・無理・・・しちゃだめだよ」

「分かってるよ、はる姉」

朝食を食べ終え準備をして、僕たちは学校へ向かう

「お〜す、和人!」

「おはよう、渉」

「おう！おはよう和人、今日はいよいよ体育祭だな！」

「そうだね、美里先輩と渉の要望通り、今日はちゃんと二人の分も弁当作ってきたよ」

「ホントか！それは楽しみだな！」

「重箱に入れてきたから皆で取っていくような感じになるけどね」

「いいんじゃないか、その方が楽しいし」

「じゃあ、楽しみにしててよ。結構自信作だから」

「それじゃ、お昼までに腹空かせとかないとな」

渉と話していると、美里先輩とも合流した

「おはよう和人君、今日はお昼楽しみにしてるわね！」

「はい、頑張つて作ったんでいっぱい食べてくださいね」

学校に着いた僕たちはいったん別れ自分たちの教室へと向かった

僕たちは、体操服に着替え外に出て自分たちのクラスが集まっている場所へと向かった

そして、時間になり体育祭が始まった

教員らの何名かがいくつかの注意事項をして開会式が終わり。競技がない者は自分のクラスのテントへ今から競技の者は軽い準備運動を始めた。

「わくわくするな和人！」

「渉は運動得意だからね」

「和人もだろ、部活に入っていないのがもったいないぐらいだぜ」

「僕は、普通だよ」

そんな会話をしていると、最初の競技が始まった

「この高校ってなんだかんだで運動神経いいやつ多いよな」

渉が競技を見ながらつぶやいた

「そうだね、運動部なんかも結構レベル高いし」

「でも、こういう時って地味に文系部とかも強いよな」

「あゝ確かに」

「そう考えると和人のバトルロワイヤルも危ないんじゃないか」

「嫌なこと言わないでよ……」

「ハハハ悪い悪い、お！競技が終わった見たいだぞ」

「次は、障害物競争だっけ」

「ああ、俺も出るから応援よろしく!」

「了解」

「さて、行くか」

「頑張つてね」

「任せとけ!」

渉は手を振って、競技のスタート場所へと走りだしていた

障害物が始めつた、平均台やネットなどのありがちな障害物が設置してあった

いくつかの、レースが終わりいよいよ渉の番だ

「うおーーーーー、やってやるぜーーーーー」

渉がスタート場所で叫んでいた、いくらなんでもテンション高すぎだよ渉……

そして、スタートのピストルがなる渉は見事なスタートダッシュを決め、他の人より若干前の位置を走っている

渉は、設置してある障害物を軽がる突破していく、そして全ての障害物を抜け見事一位でゴールした

しばらくして、渉が戻ってきた

「おつかれーぶっちぎりのゴールだったね」

「まあな、いい感じにスタートダッシュも決まって満足のいく走りだった！」

障害物が終わり次の種目の放送が流れる

「次は、100m走です。出場する人は集まってください」

「あ、僕も行かないと」

「頑張れよ和人！」

「うん」

出場選手が集まり、競技が始まった

僕の番になり、スタートの構えをとった

ピストルの音に反応し僕は走り出した

皆、結構早かったけどなんとか一位をとることができた

僕は、自分のレースが終わりその後の経過を見ていた

しばらくすると、はる姉の出番が来た

僕は、そのレースを見て驚いた、はる姉はピストルの音で一気に走り出しそのまま、ものすごい早さでゴールした

100mが終わり僕は、自分のテントに戻った

「和人おつかれー」

「ふう、何とか一位でゴールできたよ、それにしても、はる姉はやっぱり早いなあ」

「ああ確かにあれはレベルが違うな」

その後、しばらく僕たちの出る競技はなかったので涉と僕は競技を見ながら談笑して時間をつぶした

いくつかの競技が終わり、次は借り物競走だ僕はスタート場所へと向かう

レースは一年生からのスタートなので最初に亜姫が出る

亜姫の番になり亜姫はスタートして50mほど行ったところに置いてある机の上の紙をとった

亜姫は、しばらく紙を見た後、こちらに向かって走り出した

「兄さま・・・これ」

亜姫が僕にお題の書かれた紙を見せる、お題を見て僕は絶句する

一番親しい異性にお姫様だっこしてもらいゴールする

確かに、条件としては、あってるんだろう。でも、これはちょっと

「兄さま・・・早く・・・お姫様だっこ」

亜姫は若干、頬を染めながら僕にお願いしてくる

「でも・・・これは」

「兄さま・・・早くしないと・・・他の人に・・・ゴールされてしまいます」

亜姫が急いでと僕を急かす

僕は、覚悟を決めて亜姫をお姫様だっこした

「兄さま・・・重くない・・・ですか」

「重くないさ・・・むしろ・・・軽いくらいだよ」

「良かった・・・」

「さてと早くゴールしないとね」

「はい・・・（／＼／＼）」

亜姫は、さっきよりも顔が赤くなっていた

「亜姫、顔赤いけど大丈夫？」

「大丈夫・・・です」

「そっか、少し急ぐからしっかりつかまってね」

「分かりました・・・」

亜姫が、僕をつかんでいる手にギュっと力を入れる

僕は、できるだけ早くゴールするため全力で走った

そして、無事一位でゴールすることができた

僕は、とてつもない殺気を感じながらのゴールだったけど

そのあと、自分のレースも一位でゴールして午前の部は終了した

第12話

第12話

午前の部が終わり、お昼休みになった

僕は、亜姫を連れて一度、自分のクラスのテントに戻り、渉と合流してから三年のテントの方へと向かった

三年のテントに向かうとはる姉と美里先輩がいろんな人からお昼に誘われていた

あれ・・・？なんか、デジャヴを感じるような

「渉、どうしよう」

「俺に言われても」

「だって、嫌な予感しかしないんだもん」

「兄さま・・・姉さま達に・・・声かけないの？」

「声かけたいけど・・・前に色々あったからなあ」

僕たちが戸惑っていると、はる姉と美里先輩がこちらに気づいた

二人は、人込みをかき分けてこちらにやってきた

「はあくなんとか抜けれたわ、ごめんね皆待たせて」

「あ、いえ気にしないでください、呼ばなかった僕達も悪いんで」

「和ちゃん達・・・こっちに来てたの？」

「うんちよつと前にね、どうしたらいいか迷ってるとはる姉達が気づいてこっちに来てくれたから」

「そうなんだ・・・」

「そっか、和人君は前にも同じことがあったからね、仕方ないわよ」

「和人、皆集まったしそろそろ移動しないか？このままじゃ、俺たち多分殺されるぞ」

そう言つて、渉はさっきまではる姉たちがいいた場所の方を指さす

皆、僕と渉を睨んでいる、これもなんかデジャヴを感じる

「兄さま・・・睨むやつ・・・許さない」

「まあまあ、亜姫、今はとりあえずこの場を離れよう」

「そうね、このままじゃ和人君と皆本君が危ないだろうし」

「でも、どこで食べるんスか」

「中庭でいいんじゃない」

「そうですね、あそこなら結構広いし、他の人が既にいても邪魔に

ならないだろうし」

「そうときまれば、さっそく行くつぜ。俺もこの視線に耐えられない」

「僕もだよ・・・」

僕たちは、逃げるようにこの場を離れ中庭に向かう

中庭に向かった僕たちは、適当な場所に座りお弁当を広げる

「ふう〜やっと、お昼だ」

「和人君の料理美味しそうね」

「ありがとうございます」

「和ちゃん・・・食べよ」

「そうだね、じゃあ皆どうぞ召し上がれ」

「いただきます!」

「いただきます・・・ます」

皆が合掌をして僕が作った弁当を食べる

「うめえ!めちやくちやうまいぞ和人!」

「ホント!このたまご焼きなんか味付けが絶妙だわ!」

「ありがとう涉、美里先輩」

「いや、それにしても、美晴と亜姫ちゃんは毎日こんなおいしい料理が食べれるなんて、羨ましいわ」

「和ちゃんは・・・料理が上手」

「兄さま・・・さすがです」

「そんな、皆ほめすぎだよ」

「そんなことないわよ、私も料理できるけどこんなに上手くは作れないわ」

「美里・・・料理できるの？」

「できるわよ、少しだけど」

「へえ、食べてみたいですね美里先輩の料理」

僕の言葉に、はる姉と亜姫がぴくつと反応した

「いいわよ、今度、持ってきてあげるわね」

「いいんですか？」

「いいわよ、今こうしてお昼作って来てもらったしね」

「じゃあ、楽しみにしてますね」

「和人君にみたいに上手くできないけどね」

僕と美里先輩の会話に再び、はる姉と亜姫がぴくつと反応した

「……………(じ……………)」

「ちょ、ちよつと……美晴に亜姫ちゃんそんなに睨まなくても……」

「いくら美里でも……和ちゃんに……手を出したら」

「倒します……」

「ちょ、ちよつと二人とも落ち着いてよ」

僕が二人をなだめると、二人は少しだけ落ち着いた

「だ、大丈夫よ二人が思ってるような事は考えてないから」

「ホント？」

「もちろんよ」

「怪しい……です」

「信じてよ亜姫ちゃ……………ん」

美里先輩が若干涙目で二人にお願いする。なんで、美里先輩涙目なんだろ？

「はる姉、亜姫よくわかんないけど喧嘩はよくないよ」

僕が二人をなだめると、二人は落ち着いたらしく

「美里・・・ごめん」

「すみません・・・でした」

「気にしないでいいわよ」

「罪作りなやつだな和人」

「なにが？」

「ホントに鈍感だなあ」

「？」

僕が、どういふことか考えていると、美里先輩が話題を変えた

「そういえば、和人君さっきの借り物競走で亜姫ちゃんお姫様だったけど、どういふ内容だったの？」

「え〜とですね、確か一番親しい異性にお姫様だったこともらってゴールするだったと思います。でも、どうしていきなりそんなこと聞くんですか？」

「あの時、美晴が横でピリピリしててね、なだめるのが大変だったのよ」

「だって・・・亜姫だけ・・・お姫様だっこ・・・羨ましい」

「そんなこと言われても、お題がそうだったから」

「周りの目も殺気がこもってたからな、特に一年生」

「はあ〜最近、人に睨まれることが多い気がする」

「大変ね和人君も」

「兄さま・・・お姫様だっこ・・・迷惑だった？」

「迷惑じゃないよ、競技なんだし亜姫が気にすることないよ」

「でも・・・」

「亜姫は、僕にお姫様だっこされて迷惑だった？」

僕が亜姫にそう聞くと亜姫は首を横に振った

「だったら、お互い気にする必要ないんだよ」

「兄さま・・・」

「和ちゃんは・・・やさしいね」

「そうかな？」

「うん・・・やさしい」

「やれやれ、和人のやつまた自分でフラグを立てたな」

「そうね、まあそれもいいんじゃないかしら」

「そうっすね、あいつあれで幸せそうだし」

「そ、そんなことより皆、早くご飯食べないとお昼休み終わっちゃ
うよ」

僕は、何だか照れくさくなって目の前にあった料理を無言で書き込
んでいた

第13話

第13話

体育祭も午後の部に入り、全体の盛り上がりも最高潮に達している
感じた

しかし、一部の人だけは違った

もうすぐ、男子限定種目のバトルロワイヤルがあるからだ

さつき、プログラムを見たときは、詳しいことは競技前に説明する
って書いてあったけど

まだ、細かいことが知らされていないプレッシャーと不安で皆ピリ
ピリしている

僕はクラスのテントで渉とどういいう競技なのか考えていた

「どんな、ルールなんだろう？」

「そりゃーバトルロワイヤルって言うくらいだから潰し合っくんじや
ないか」

「でも、物騒すぎるでしょ」

「まあ、あんまり危ないことはないだろ、一応、学校行事だし」

「そうであることを祈るばかりだよ」

そうこうしているうちに、放送が流れた

「まもなく、男子限定種目バトルロワイヤルを始めます出場選手はスタンバイしてください」

「じゃあ、行ってくるよ」

「健闘を祈る」

出場場所に行くと、先生がルールの説明を شدした

「え〜この競技は自分の体に風船をつけて割る競技だ、武器はこちらで安全なゴム製の武器を用意しているので、使いたいやつを勝手に選んでくれ、そして、個人的にこの競技に優勝した奴は賞品がもらえる」

なんか、思ったたのより全然安全そうだなとか思っていると選手の一人が先生に質問をした

「賞品は何なんですか？」

その質問を聞いた先生は、得意げな顔で

「賞品は、最近新たにできたレジャープールのチケット五枚だ！！」

「！！」

「……………おお〜！！！！！！！！！！」

皆それを聞いてやる気を出していた

今先生が言っているレジャープールというのは最近この街にできた大きなレジャー施設である。若い人に人気の場所でデートスポットなんかなにも指定されている中でもプールの種類が豊富らしく流れるプールから迫力のあるウォータースライダーなど多種多様に存在するらしい

「それでは、各自武器を選んでください」

先生がそう言うと我先にと武器の取り合いが始まった

僕の武器は、僕は適当にその場にあった武器をとる

こ、これは！

僕が手にしたのは不良なんかが良く手にはめてそうな感じの武器だった

簡単に言うとメリケンサックだ

なんで、メリケンサック！ていうかゴム製だよこれ完成度高すぎだよ！

戻すこともできず僕は仕方なく武器を装着した

範囲はグラウンド全体でスタート地点は自分のクラスのテントの前かららしい

僕が持ち場に着くと渉が話しかけてきた

「和人、武器なんだった？」

「メリケンサック」

「は？」

「だから、メリケンサック」

「まあ、なんだ・・・がんばれよ！」

「慰めにもならないよ・・・」

「まあ、和人なら余裕だろ」

「余裕じゃないよ、皆リーチの長い武器手に入れてるし、過酷すぎるでしょ」

しばらくして、皆持ち場に着いたらしく先生がスタートのピストルをならそうとしていた

「それでは、よーい始め！」

先生がスタートのピストルを鳴らすと全員がこちらに突っ込んできた
ん？全員？

もう一度確認する、やっぱり全員こちらに突っ込んできている

「・・・」

こっとなつたら逃げる！

僕は、全力で他の選手から逃げた

「待てーーーーー！文弥和人ーーーーー！」

「なんで、僕なんだーーーーー！」

「それは、お前が文弥姉妹や美里さんとイチヤイチャしているからだよーーーーー」

「イチヤイチャなんかしてないよ！」

「嘘をつくんじゃない！お前が美里さんに料理をしてもらって情報ですでに聞いているんだよ！」

「それだけじゃねえ！さっきの、借り物競走でも亜姫ちゃんをお姫様だっこしてただろ！」

「それは、競技だからじゃないか！」

「うるせえ、そんなの関係あるか！」

皆が僕にとびかかってくる

僕がなんとかそれを避けると、ドミノ倒しのように倒れて何人か自滅する感じになってくれた

僕は、その隙になんとか距離をとり体勢を立て直した

「ふう、危なかった・・・」

このまま、逃げてても埒があかない

「攻めるしかないかも・・・」

僕は、小声でつぶやくと集団のほうへと突っ込んでいった

それに気づいた何人かが武器を構えなおす

「文弥和人が来たぞ！」

「血祭りじゃー！」

僕に向かって繰り出される攻撃を最小限の動きでよけて、相手の風船を割る

僕の武器では必然的に殴る形になるので、僕が攻撃した人は数メートル吹っ飛んでしまった

（しまった！力加減を間違えたかも・・・）

僕が心配していると選手の方は驚愕の表情を見せながら起き上ってくれた、良かった

周りの人たちも今の一撃をみて啞然としていた

僕は、その機を逃さないために攻撃を続ける

結果・・・

バトルロワイヤルは、思いのほか早く終わりそのまま終了を迎えたのだった

その後、他の競技も終了しテントなどの片付けを終え僕たちは帰宅しているところだ

「いや〜それにしても今日の和人君の活躍はすごかったわね!」

「和ちゃん・・・強かった」

「兄さま・・・素敵です」

「皆、ありがとう」

「そつえば、なんで和人君あんなに強いのか?」

「え〜と強いかどうかはともかくとして、僕は昔から良くからまれてたんですよね」

「なんで?」

「はる姉と亜姫は昔から可愛くて人気があって良く告白されてたんですよ。まあ、いつも振ってましたけどね」

「それと和人君が強いのに何の関係があるのか?」

「僕は、二人とは家族ですからね、振られた人が怒って真っ先に僕に矛先を向けてきたんですよ。それで、二人に心配をかけるわけにもいかず自分なりのやり方で戦い方を身につけました」

「さらりとすごいこと言うわね和人君」

「そうですか？」

「和ちゃん・・・そんな事があつたの」

「知りません・・・でした」

「まあ、内緒にしてたしね」

「まあ、和人は運動神経がいいからな少し鍛えれば十分強かったよな。今じゃ、たいていの奴にはまけないだろうしな」

「そんなことないよ」

「謙遜することないわよ和人君、そのおかげで賞品も手に入れたんだから」

「ああまさか、あのレジャー施設のチケットが手に入るとはな」

「そうだね、ちょうど五枚あるんだし皆で行こうよ」

「いいの？和人君」

「構いませんよ、折角貰ったチケットなんですから使わないともったいないですよ」

「それなら、遠慮なく」

「渉も来るでしょ？」

「もちろんだ！部活さぼってでも行くぜ！」

「いや、それはどうなの」

「でも、その前にテストがあるのよねー」

「ああそうだった！」

「先生たちもしっかりしてわよねー、このチケット夏休みに入らないと使えないんだもん」

「まあ、いいんじゃないですか夏休みのほうが皆、都合付くし」

「それもそうね」

「和人、また勉強教えてくれよ」

「うん、わかった」

「皆本君は成績悪いもんね」

「うっ！そんなズバツと言わなくても・・・」

「渉は、部活に時間使ってるからね仕方ないと言えば仕方ないけど」

「和人ーお前だけは俺の味方だなー」

「ちょっと！抱きつかないでよ」

「いいじゃないか！友として熱い抱擁を」

「でも、はる姉と亜姫がいまにも襲いかかってきそうな感じなんだけど」

渉にそう忠告すると渉は、ドキっとなり二人を見ると、二人はものすごい形相で渉を睨んでいた

「や、やだな〜美晴先輩に亜姫ちゃん、ちょっとした友達とのコミニケーションじゃないか」

「「問答・・・無用」」

その日、渉は星になった・・・

第14話

第14話

体育祭が終わって数日たったある日の休日

僕は、はる姉と亜姫とリビングでテスト勉強していた

僕たち学生には期末テストという難関が残っていた、普段部活動にいそんでいるものや授業中に眠ったりしている者もこの時ばかりは、皆死ぬ気で勉強するようになる

そしてそれは僕も例外ではない、ということまで今こうしてリビングで勉強しているわけである

僕たちが勉強していると、ピンポンと家のインターホンが鳴った

「ん？誰だろ？」

僕は、勉強している手を一回止めて玄関に向かった、そして、玄関の扉に手をかけると

「和人ー助けてくれー！」

「うわー！渉」

家の前で泣いている渉を見つけた

「ど、どうしたの渉？」

「和人！勉強を教えてください！」

渉の話によると、今日は自分でテスト勉強するつもりだったらしいのだが、教科書に手をつけた瞬間、頭の中が真っ白になったらしい。このままじゃ自分の夏休みはないと判断しここに来たという。

「事情はわかったよ、まあ、テスト勉強する約束だったしね別にいいよ」

「すまない和人！この恩は一生忘れない！」

「大袈裟だよ渉」

「そんなことねえよ！やっぱ持つべきは勉強のできる親友だな！」

「とにかく上がってよ、僕たちも今テスト勉強してたところだし」

「ああ、お邪魔するぜ！」

そうして僕たちはリビングに向かった

「なあ、和人」

「何？」

「俺なんかすごく睨まれてないか？」

「き、気のせいだよ多分」

「気のせいじゃないと思うんだけど」

「とにかく、ソファーにでも座ってよ」

「ああ、サンキューな和人」

僕たちがリビングに入った瞬間、はる姉と亜姫がなぜか渉を睨んでいた

「どうしたの二人とも？」

「「なんでも・・・ない」」

「そ、それならいいけど」

「和人、早く勉強教えてくれよ」

「うん、ちょっと待ってね」

僕は自分の勉強道具を取り、渉と勉強を始めた、僕たちの家には普段食事をするテーブルとくつろぐためにソファーではさまれた低めの机がある。僕はさっきまで食事をするときに使うテーブルにいたけど渉と勉強するならこっこのほうがいいと思い移動してきた

僕は、再び勉強を始めたのだが

「なんで二人までこっちに来てるの・・・」

「「気にしないで」(ください)」」

「そう言われても・・・」

僕がソファアの方に移動した瞬間なぜか二人までこっちに来て勉強を始めたのだ

「だって僕の両隣りにいるんだもん、気にするなって方が難しいよ」

「気にしないで(ください)」

気にしないでの一点張りなので僕はあきらめて勉強を始めた

「なあ、和人ここの計算はどうやるんだ？」

「そこは、この計算式を使うんだよ」

「なるほどなくじゃあここの計算もそうか？」

「うん、そうだね」

「和人の教え方分かりやすいよな」

「そうかな」

「ああ、バカな俺でも簡単に理解できるからな」

「ハハハ、そんなことないよ。涉の覚えが早いからだよ」

涉と話をしていると亜姫に袖をひっぱられた

「どうしたの？亜姫」

「兄さま……この英語の……訳を……教えてください」

「ん？これはね、この文法を使ってこう訳すんだよ」

「ありがとうございます……ございました」

「どういたしまして」

「あ、はる姉この問題よくわからないから教えてくれない」

「ここは……この式に……代入すれば……解ける」

「なるほど、ありがとうございます。はる姉」

「気にしないで……いい」

こんな感じでしたらしく勉強を続けていると

ゴーンゴーンと時計の音がした

「もうこんな時間か、そろそろ晩御飯の支度しないと」

「そうなのか、だったら俺はもう帰るかな」

「一緒に食べていったら？」

「いいって、いきなり押しかけてきて晩飯まで御馳走になるわけにはいかねえよ」

「そんな、気にしなくていいのに」

「それに今日は家に帰って昨日、録画しといた番組見たいしな」

「それなら仕方がないね」

「悪いな折角の誘いなのに」

「気にしなくていいよ、また暇なときにも遊びに来てよ」

「ああ、そうさせてもつよ。さて帰るかな」

涉は勉強道具を片づけ玄関へと向かう

「気をつけてね」

「おお～また学校でな」

涉は軽く手を挙げて帰って行った

「さて、晩御飯作らなきゃ」

「兄さま・・・晩御飯・・・作るの・・・手伝います」

「じゃあ、手伝ってもらおうかな」

「はい・・・」

「和ちゃん・・・私も」

「もちろん、たまには皆で作るのも楽しいだろうしね」

「まかせて……」

その後、僕たちは買い物に出掛け皆で晩御飯の用意をして食べた

(なんか、久しぶりに充実した一日だったな)

そんな事を思いながら僕たちの休日は終わった

第15話

第15話

カリカリカリカリ…… カチカチカチカチ……

教室には時計の針の音とペンを走らせる音だけが聞こえる

今は、期末テストの真っ最中そしてこの教科が終われば期末テストも終了というわけである

僕も、残り時間を気にしながらテストの答案を埋めていく

そして……

キンコンカンコン

テスト終了のチャイムが鳴った

「それまで、テストを後ろのほうから集めてください」

先生の指示に従い後ろの席の人が答案用紙を回収していく、回収した答案用紙を少しばかり確認した後

「テストが終わったからって浮かれるんじゃないぞ」

と一言忠告してから教室を出て行った

「よゝ和人テストどうだったよ」

僕が自分の席でかばんに荷物を入れてっていると渉が話しかけてきた

「まあまあかな、渉はどうだったの？」

「和人のおかげで赤点は回避できそうだ」

「良かったね、渉今回がんばってたもんね」

「まあな、たまにはちゃんと勉強しとかないなと思っつてよ」

「そうなんだ」

「和人はまた上位に入りそうなのか？」

「分からないよ、一応それなりに勉強はしたけどテストが返ってこないことには」

「いいよな〜お前は頭がいいからテスト返却も不安じゃなさそうで」

「そんなことないよ、それに僕なんかよりよっぽど頭がいいのが身内にいるしね」

「美晴先輩か」

「うん」

「あの人弱点ねえな」

「確かに僕も普段普通に暮らしてるけど、はる姉が苦手そうなもの

は特になさそうだしね」

「亜姫ちゃんも頭いいのか？」

「うん、多分はる姉と同じくらい成績いいんじゃないかな」

「マジでか」

「おおマジだよ」

「すげえなああの二人は」

「まっただよ」

自分たちで話しといてなんだけど若干二人して落ち込んでいる

「落ち込んでても仕方がない、帰るか」

「そうだね、でも涉は部活じゃないの？」

「部活は明日からだ」

「そうなんだ、じゃあ帰ろうか」

「おう！」

僕たちはかばんを手に取り教室を後にする

「和ちゃん・・・」

昇降口に行くとすでにはる姉が待っていた

「はる姉、おまたせ亜姫はまだ？」

「うん・・・後・・・美里も来る」

「そうなんだ、じゃあ待ってよっか」

「うん・・・」

しばらくすると、亜姫と美里先輩もやってきた

「お待たせ々みんな」

「お待たせ・・・しました」

「皆そろったし帰ろうか」

「おお、またこの五人だね」

「そうですね、最近結構この五人で帰るの多いかもしれませんね」

「それもそうだな」

「五人？・・・」

「はる姉、なんで疑問分なの？」

「あ、そうか・・・皆本君も・・・いたんだ」

「ひどっ!」

「美晴先輩それはあんまりっす・・・」

「ごめん・・・」

「大丈夫よ美晴、皆本君はこういうキャラなんだから」

「美里先輩まで・・・」

最早、完全に落ち込んでしまった渉を慰め僕たちは帰宅し始めた

「和人君と皆本君はテストどうだったの？」

「まあまあですかね」

「俺は、赤点は回避できそうです」

「へえ、和人君はともかく皆本君まで赤点がなさそうだとは・・・」

「なんでそんな深刻そうな顔するんすか!!!」

「だって皆本君らしくないじゃない皆本君は赤点取ってなんぼでしょ」

「そんなことないっすよ!!!俺だってやる時はやります!!!」

「ほお、でもどうせ和人君に勉強教えてもらったんでしょ？」

「うっ!なぜそんなことを・・・」

「だって、皆本君いつもより自信があるような口ぶりなんだもん。でも、その反応をみると凶星みたいね」

「まあまあ、美里先輩からかうのはそろそろそれぐらいにしてあげてくださいよ」

「まあ、これだけイジリたおせば私も満足だわ」

「なんかしらんけど、無駄に疲れた」

「大変だね、涉」

「他人事だな和人」

「ソナナコトナイヨ」

「なんで、急に片言になったんだよ」

「気にしない気にしない」

「まあいいや」

「それよりこれから、皆で遊びに行かない？」

「いまからですか？」

「そうよ、美晴は別にかまわないって言ったけど和人君たちはどうするっ？」

「僕はいいですけど」

「私も・・・兄さまが・・・行くなら」

「俺も特に用事はないから別にいいけどお金とかどうするんすか？」

「そういえばそうだね、僕も今お金持ってないよ」

「そういえば私もだわ」

「じゃあ、なんで誘ったんすか・・・」

「いや、テストも終わったし早く遊びたかったからさっいね」

「それなら、各自いったん家に帰ってからどこかに集合するのはどうですか？」

「そうね、じゃあ、お昼ご飯家で済ませてから一時に駅前に集合でどう？」

「それで、いいんじゃないっすか」

「そうだね」

「決まり、それじゃあ各自一時に駅前に集合ということよ」

「分かりました」

僕たちは、駅前に集合する約束をし家へと帰宅した

第16話

第16話

家に到着した僕たちは、とりあえず着替えてお昼を食べることにした。

昼食を食べ終え。僕は、自分の部屋に戻り私服に着替えて、必要な財布や携帯などをポケットに入れた

僕は、早く支度が終わるけれど、はる姉や亜姫は女の子なので結構時間がかかる

僕は、リビングに戻りはる姉と亜姫が来るのを待つことにした

しばらく、テレビを見ているとはる姉と亜姫が部屋から降りてきた

「和ちゃん・・・おまたせ」

「兄さま・・・お待たせしました」

僕は、二人を見て思わず見とれていた

二人とも軽く化粧をし、はる姉は髪を後ろで束ねてポニーテールにし服装はカジュアルな感じで、ワンポイントにペンダント付けている、一方の亜姫は髪は普段通りにして服装は、パープルのワンピースを着ておりこちらはワンポイントにブレスレットをしている

「兄さま・・・似合ってますか？」

僕が、二人を見ながら黙っていると亜姫が僕に服の感想を聞いてきた

「あ、うん似合ってた二人とも可愛いよ」

「……（／／／）」

僕がそう言うと二人は照れてしまった

「和ちゃんも……その服カッコイイよ」

「ありがと、はる姉」

僕の服装は、特にこだわってるわけではないので、適当ジーンズを履き、上は七分のカットソーを着ているだけなのだが

「兄さま……そろそろ……家でないと……待ち合わせに遅れます」

「あ、ホントだ、じゃあそろそろ行こうか」

「はい……」

僕たちは、戸締りを確認し家を出た

家を出て二十分ぐらい歩いて僕たちは駅前に到着した、駅前の周辺には買い物できるとこや遊べる場所が結構集中しているので毎日たくさんの人でにぎわっている

「早く来すぎたかな」

「集合まで・・・あと・・・十五分ぐらい・・・ある」

「その辺で待つてようよ」

「兄さま・・・あそこ・・・噴水のところは・・・どうですか？」

「そうだね、あそこなら目立つから涉と美里先輩も気付きやすいだろうしあそこでいいんじゃないかな」

僕たちは、噴水の近くに行き二人を待つことにしたのだが

「なんか、カップルばかりだね」

「ここは・・・デートスポットでも・・・あるから・・・カップルも・・・いっぱい・・・いる」

「へえ〜聞いたことはあるけど予想以上にいっぱいいるんだね」

「周りに・・・遊んだりできる・・・場所が・・・いっぱい・・・あるからだと思います」

僕たちが、雑談をしながら二人を待つっていると前のほうからこちらに向かってやってくる二人の男がいた・・・嫌な予感がする

「ねえねえ、彼女たちこんなやつといないで俺たちと遊ばない？」

「・・・・・・・・」

二人は男の人の言葉を無視している

「無視しないでさく俺たちと一緒にどっか行こうぜ」

「あなたたちに・・・興味がないから・・・いや」

なんか、二人ともこういう時は息が合うんだよね

「そんなこと言わないでさく遊びに行こうぜ」

「しつこい・・・今・・・友達と・・・待ち合わせしてるから」

「兄さま・・・別のところに・・・行きましょう」

亜姫が僕の手をとり、はる姉も僕の袖につかまっている

「そうだね、そろそろ時間だし歩いてたら会うかもしれないしね」

僕たちが、移動しようとした時、男の人が亜姫の腕をつかんだ

「いいから、来いっついていてるだろ！」

口調がやや怒り気味だ

「話して・・・私は・・・兄さま・・・以外に興味がない」

「そんな、優男な兄より俺たちといたほうが絶対おもしろいからさ」

「そっちの彼女もさく楽しいことしようぜ」

はあ、穩便に自然な形で済ませようと思ったけど助けないとだめか

もね

僕は、男の人の腕をつかんで

「そろそろ、やめてもらえませ」

僕が、男の人に注意の言葉を言いきる前に僕の体が宙に舞って噴水へと落ちた

「「和ちゃん（兄さま）！」」

男の人が僕を殴ったのだ、殴るの早くない・・・

「さわんじゃねえよ！クズ！てめえさつきから目障りなんだよ！こつちは、この二人と遊びに行きたいんだよてめえみたいな優男には用はないんだよさつきと消えろ！これ以上痛い目に会いたくなければな」

そういつて、男二人はこつちを見ながらゲラゲラと下品な笑い声をあげた

「兄さま！」

「和ちゃん！大丈夫！？」

「大丈夫だよ二人ともいきなりだったから防げなかったけど」

僕は、噴水から出て二人を睨んだ

「ああ、なんだよその目は文句あんのかよクズ！」

「はあ、クズはそつちだろ早く二人を放せよ」

「てめえ、ザコがカツコつけてんじゃねえぞ！」

さっき、僕を殴った奴とは別のもう一人の男が今度は僕に殴りかかろうとしてきた

が・・・拳が僕の顔まで届くことはなかった

なぜなら、男の腕は誰かに掴まれているからだそして、そのだれかとは僕が良く知ってる人物だった

「よお、和人大丈夫か？」

「涉、来るのが少し遅いんじゃない」

「そうか？時間には間に合ったぞ」

「僕が殴られる前に来てほしかったよ・・・」

「意外だなお前が殴られるなんて」

「いきなりだったんだよ、仕方ないでしょ」

「ふん」

「ちよつと！私もいるのよ！」

「美里先輩」

「は〜い和人君お待たせつてビショビショね大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。少し冷たいけど今夏だしすぐ乾くと思いま
すから」

「殴られた方は？」

「そつとも大丈夫ですよ、いきなりなんでビックリしましたけど威
力自体はそんなでもなかったですし」

「おい！てめえら無視してんじゃねえぞ！コラア」

「それより、和人こいつら誰だ？」

「はる姉と亜姫をナンパしてた人たちだよ」

「それで止めようとしたらいきなり殴られたと」

「そういうこと」

「だから、無視してんじゃねえ！」

渉の掴んでいた手を振り払い男が渉に殴りかかった、そしてもう一
人は僕に向かって殴りかかってきた

僕は、男の拳を受け止め噴水へと殴り飛ばした

渉のほうも、噴水に飛ばしたらしく同じタイミングで男二人は噴水
にダイブした

「やれやれ、最近絡まれる回数が増えてる気がするよ」

「大変だなお前も」

「渉にも迷惑かけたね助けてもらっちゃってありがとう」

「気にすんなよ、いつも勉強とかで世話になってるしなこれぐらいどっつてことねえよ」

「ちよつと〴〵男二人で話し盛り上げないでよ」

「あ、すいません美里先輩」

「和ちゃん・・・殴られたとこ・・・痛くない？」

「兄さま・・・ごめんなさい・・・私たちのせいで」

「二人とも気にしないでよ、殴られたとこも痛くないし二人のせい
つてわけじゃないからさ」

「でも・・・」

「今から遊びに行くんでしょ、だったらいつまでも落ち込んでちゃ
だめだよ」

「はい・・・」

「はる姉もね」

「分かった・・・」

「話は、まとまったみたいだな。で、こいつらどつするっ。」

渉は、噴水から出てきた男二人を指さす

「「ひい！」」

男二人は、渉にいらまれて腰を抜かしている

「放っておけばいいんじゃない、戦意喪失してるし」

「いいのか、また絡んでくるかもしれないぞ」

「その時はその時でなんとかするよ」

「まあ、和人が言うのならしゃあねえか」

渉は僕がそう言つと納得したようだが、はる姉と亜姫は納得していない様子だ

「どうしたの二人とも？」

「納得・・・いきません」

「どつして？」

「この人たちは・・・兄さまを・・・傷つけました」

「和ちゃんを・・・傷つけた・・・人は・・・誰であろうと・・・」

許さない」

二人は、完全に怒っている様子だ。二人はめつたに怒ることはないのだが、本人たち曰く、僕を傷つける奴は鉄槌を下さないと気が済まないらしい

「でも、僕が大丈夫って言ってるんだし、もういいじゃない」

「でも……」

「じゃあ、二人はどうしたら気が済むの？」

僕が、聞くと二人は口をそろえて

「「海に沈める……」」と答えた

「怖っ！怖すぎるよ確実に死人が出るよそれは！」

「ばれなければ……大丈夫」

「そういう問題じゃないよ！」

僕が、二人の説得に困っていると美里先輩が助け船を出してくれた

「ほら、二人ともいつまでも、そうやって怒っていると和人君に嫌われちゃうわよ」

美里先輩の一言ではる姉も亜姫もいつもの状態に戻った。すごいな美里先輩……

「そろそろ、移動しようぜ」

「そうだね、そろそろ行きましようか」

「それじゃ行きましょ」

「まずどこに行きますか？」

「そうね、デパートなんてどう？夏休みに向けて服買いに行きたかったのよね」

「それじゃあ、デパートに行きますか」

「決定、それじゃあレッツゴー」

美里先輩の提案で僕たちはとりあえずデパートに向かうことにした

第17話

第17話

そんなこんなで僕たちはデパートに到着した。

デパートに到着するころには濡れていた服もすっかり乾いていた、濡れたのが夏場で良かったよ

「さて到着したし早速、服でも見に行きましょう」

「もしかして、俺たちもついていくんすか？」

「当たり前でしょ、女の子に荷物持たせる気なの皆本君は」

「いやだって、この流れだと確実に女性陣の買い物時間がなくなるじゃないっすか、なあ和人」

「確かにそうかもね、でも、女の子なんだし服を買ったりするのに時間が掛かるのは当たり前じゃない」

「さすが、和人君、将来はきっと良い旦那さんになるわね」

「ありがとうございます」

「和ちゃんは・・・お婿に行かない」

「美晴、気持ちは分かるけど和人君だっていつか結婚するのよ」

「そんなこと……ない」

「兄さまは……私と……結婚します」

「亜姫……変なこと言わないで……和ちゃんは……私と……結婚する」

「二人とも！変なこと言わないで、兄妹で結婚できるわけないですよ！」

「じゃあ……そのまま……いいです……名字同じだから……結婚してるような……ものです」

「さらつと、変な発言しないで！周りがこつち見てるから！」

僕に変な視線が次々と突き刺さる、耐えるんだ僕

「そうよ二人とも、和人君は私のお婿に……ごめんなさい」

美里先輩がはる姉と亜姫に僕を婿にするなんて発言をしたから二人が同時に美里先輩を睨んでいた。

睨まれた美里先輩はすぐさま二人に頭を下げていた

「やれやれ、美里先輩、服買いに行くんじゃないんすか」

ここで、今のトークにしびれを切らした渉が話を元に戻した

「あ、そうだったわね、良し！それじゃあ行くわよ！」

美里先輩ははる姉と亜姫から逃げるようにして洋服売り場へと急いだ
洋服売り場に来た僕たちというか女性陣はさっきまで変な空気だっ
たにもかかわらず今は互いに服をススメたり、この服はどうかなど
三人で話していた

「女ってすげえな和人、さっきまでの空気がもう元に戻ってる」

「そうだね、僕たちはすごいアウェーな環境だけど」

「長くなりそうだな」

「ある程度は覚悟しておいたほうがいいよ」

「だな」

それからしばらく、三人は別の店に行ったり一回見た店に戻ったり
して自分が気に入った服を買っていった

僕たちは、その間ずっと雑談していた

いくつか、服を買って満足したのか三人はこちらに戻ってきた、も
のすごい量の買い物袋を持って

「ふう〜買った買った」

「すごい量ですね」

「そうかな、これでも少ないほうだと思うけど」

「和ちゃんたち・・・待たせてごめんね」

「気にしないでいいよ、はる姉」

「そうっすよ、俺たちも意外と雑談で時間つぶせましたし」

「そう・・・」

「兄さま・・・服・・・いっぱい買いました」

「気に入ったのあった？」

「はい・・・今度・・・兄さまに・・・着て見せてあげます」

「それは、楽しみだね」

「さて私たちはいろいろ買ったし和人君たちは何か買いたいものかないの？」

「僕は特には、ないですね」

「じゃあ、俺に付き合ってもらっていいっすか？」

「皆本君は何買うの？」

「最近出た新しいゲームでも買おうかなと思いついてこういふときじゃないと中々買いに行く時間がないんすよね」

「ふ〜ん、まあ、私たちもいっぱい待たせちゃったしねいいわよ」

渉の要望によりゲームショップへ行くことにした

そして、ゲームショップに到着

「さて、売り切れてないといいんだけど」

「どんな、ゲームなの？」

「ん、ああ、アクションRPGのゲームだよ今回は結構クオリティもいらしくてさ、結構楽しみにしてたんだよな」

「そうなんだ」

「和人君はゲームやらないの？」

「そうですね、あんまりゲームとかはやりませんね」

「じゃあ、普段は何してるの？」

「基本的には家事ですね、時間が余れば読書したり、まあたまにゲームもしますかね」

「ふうん、家事ってやっぱり大変？」

「最初のころは大変でしたけど、今は、慣れたしそうでもないですよ」

「美晴や亜姫ちゃんも手伝ってるんでしょ？」

「はい、洗濯とかはさすがにね下着とかもあるだろうし、後は部屋

の掃除とかも良く手伝ってもらってますよ」

「でも、もっと遊びたいんじゃない高校二年生だし」

「そんなことないですよ、こうやって皆で出掛けたりしてますし時間があるときはよく渉とゲーセン行ったりしてますから」

「それならいいわ、美晴の親友兼学校の先輩としてちょっと心配だったから聞いてみたんだけど、何も問題なさそうね」

「心配かけてすみません」

「気にしないで、私が勝手に心配しただけだから。でも、何かあったら相談してよね身内に話ずらいこともあるかもしれないし」

「その時は、美里先輩に相談しますね」

「よろしい、いつでも相談を受けてあげましょう」

「ハハハありがとうございます」

僕たちが話していると渉が目的のゲームを見つけたらしくレジへと向かった

会計を済ませた渉が嬉しそうにゲームを持って戻ってきた

「よっしゃー！手に入れたぜ」

「よかったね、渉」

「おお！最後の一本だったから危なかったぜ」

「さて、皆本君の買い物も終わったし、カラオケにでも行きますか
！」

「いいっすね！久しぶりに歌うぜ！」

「さあ、行くわよ皆！」

「おーーーーー！」

そう言っつて美里先輩と渉は走り出した

「二人とも元気だね、僕たちも行くこうかはる姉、亜姫」

「うん……」

「はい……兄さま」

僕たちも後を追うように走り出した

そして、カラオケ店に到着、人数や名前を書いて指定されたボックスへと向かう

「さてまずは誰から歌う？」

「まずは、俺から行くぜ！」

「がんばってね皆本君！」

「がんばれー渉」

「まかせとけ！」

渉が曲を選びマイクを手にする選んだ曲はポ○ノグライティーのア
○八蝶

BGMが流れ始めるそして歌詞の冒頭部分に入る

渉がノリノリで歌を歌う正直めちゃくちゃうまい。そのまま音が外
れることもなく最後まで歌いきった

『95点』

「皆本君、歌うまいわね」

「まあ、得意な曲ですからねこれぐらいは出せるっすよ、次はだれ
が歌うんすか？」

「じゃあ、私が行こうかしら」

「がんばってくださいね美里先輩」

「まかせておきなさい！」

美里先輩が曲を選ぶ、選曲は一○窃のハナミ○キ

「先輩めちゃくちゃうまいよな」

「そうだね」

『97点』

「よし！皆本君に勝ったわ！」

「な、なんだと！」

「さて次は和人君ね！」

「え！僕ですか！僕は最後でいいですよ。はる姉か亜姫が歌ったら」

「私・・・兄さまの歌・・・聴きたいです」

「私も・・・和ちゃんの・・・歌・・・聞いたこと・・・ない」

「ほら！やっぱりここは和人君が歌うべきなのよ！」

「いいですけど、あんまり期待しないでくださいね」

「がんばってね和人君！」

僕も曲を選んだ、選曲はONE DOAFTのワンダフルデーズ

イントロが流れる

「和人君うますぎ・・・」

「和ちゃん・・・素敵（／／／）」

「兄さま・・・かつこいい（／／／）」

「さすがだな和人は」

『100点』

「なんだお前は！弱点とかないのか！」

「うわっ！いきなりなに涉」

「和ちゃん・・・上手だったね」

「兄さま・・・素敵・・・でした」

「和人君は将来歌手にもなれる可能性がでてきたわね」

「そんな大袈裟だよたまたま運がよかつたんだよ、ほら次は、はる姉か亜姫の番だよ」

はる姉が僕からマイクを受け取り亜姫がもう一本あるマイクを手取る

「あれ二人で歌うの？」

「うん・・・」

「がんばり・・・ます」

二人の選曲は、S M O Pの世界に○つだけの花だ

そして、結果は・・・

『100点』

「文弥家は一体どんな血筋なんだ・・・」

「ここまで来ると最早、神の領域ね」

美里先輩と渉が僕たちの点を見て唖然としていた

それからは各自バラバラの順番で曲を歌った

時間もだいぶたったのでそろそろ引き上げることにした

「ふう〜今日は楽しい1日だったわね」

「和人は噴水にダイブだけだな」

「いまさら、いやな事思い出させないでよ渉」

「ハハ悪い悪い」

「でも・・・今日は・・・ホントに・・・楽しかった」

「そうだね、またこうして遊びたいよね」

「何言ってるの、後1週間ぐらいで夏休みなんだから、皆でバンバン遊ぶわよ和人君が手に入れたレジャープールのチケットもあるしね」

「そうですね夏休みはたくさん遊びたいですね。ね、はる姉、亜姫」

「そつだね・・・和ちゃん」

「兄さまと・・・いっぱい・・・思い出・・・作ります」

「ううして、トラブルもあったけど今日も楽しく1日が終わった

第18話

第18話

あれから数日、僕たちは今、終業式の最中だ、これが終われば後は教室に戻って成績表を貰えば皆の待っていた夏休みというわけだ

校長の話が続くなか、渉が僕に小さい声で話しかけてきた

「なあ、和人」

「どうしたの、渉」

「なんで、校長の話ってのは長いんだろっな」

「我慢しなよ、終業式が終われば夏休みなんだから」

「それにしても長くないか、もう20分は話してるぞ」

「そうかもしれないけど、きつともう少しだよ」

「そつであることを祈るばかりだな」

結局、校長の話は40分たってようやく終わった

その後、淡々と終業式が終わり生徒は自分たちの教室へと戻って行った
自分たちの教室に戻った僕たちは、先生から成績表を渡され

その後、簡単に夏休みの諸注意を話してHRは終わった

「和人、成績どうだったんだ？」

「いつも通りだよ」

「いつも通りって事はまた上位か？」

「まあ、一応半分より上にはいるよ、渉は？」

「俺は今回、いつもより調子良かったんだよな」

「良かったじゃない」

「ああ、これで無事夏休み突入だぜ」

「そうだね」

「さてと、部活に行かないとな」

「今日は、部活あるんだ」

「まあな、体育館の中暑くてしょうがねえよ」

「がんばってね、渉」

「おお、じゃあな和人」

渉は荷物を抱え体育館のほうへと走って行った

「さてと、僕も帰るかな」

僕も帰るべく昇降口へと向かう

昇降口に行くとすでに亜姫、はる姉そして美里先輩が待っていた

「和ちゃん……今日は……少し……遅かったね」

皆のところに駆け寄るとはる姉が僕にそう言った

「ごめんね、渉と話してたら遅くなっちゃって」

「そうなんだ……」

「で、その皆本君は？」

横に居た美里先輩が聞いてきた

「今日は、部活があるんだそうです」

「そういえば、皆本君ってバスケット部だったっけ」

「はい、体育館の中って暑いんだよねって言いながら部活に向かいましたよ」

「あいかわらずね、皆本君も」

「そうですね」

「兄さま・・・帰りましょう」

「うん、そうだね」

僕たちは歩きながら再び話を始めた

「兄さま・・・成績は・・・どうでしたか」

「いつも通りだったよ、亜姫は？」

「私も・・・いつも通り・・・でした」

「はる姉と美里先輩は？」

「私も・・・いつも通り・・・だった」

「私も特に変化なしかな」

「三人とも成績いいからね」

「そんなこと・・・ありません・・・兄さまに・・・教えてもらったから・・・です」

「でも、説明したら一回で理解するしやっぱり成績いいと思っよ」

「ありがとうございます」

「テストの話はこれくらいにして夏休みの話しましょ」

「夏休みの話・・・？」

「そうよ！今から夏休みだしいろいろ遊びに行きたいじゃない」

「前に賛成しといてなんでなんですけど、美里先輩とはる姉は受験勉強と
かもあるんじゃない」

「気にしなくていいわよ、そんなこと」

「そんなことって・・・」

「大丈夫よ、少し遊んだだけじゃ成績もあんまし下がらないだろう
しね」

「そうですか」

「和ちゃんは・・・心配しなくても・・・大丈夫」

「ホントに？」

「うん・・・」

「それならいいけど」

「で、どうする夏休み？」

「美里先輩はどこかに行ってみたいんですか？」

「そうねえ〜とりあえずお祭りは欠かせないわよね、後はプールに
も行くわけだし、他にも遊園地とか行きたいわよね〜」

「予定満載ですネ・・・」

「もちろん、皆でね」

「ハハハ、できるかぎり開けておきますね」

「お願いね」

「渉も都合が合うといいんですけど」

「合わなかったらしょうがないんじゃない、私たちと違って皆本君は部活が忙しそうだし」

「でも、行くときは聞いておくようにしますね」

「そうね、やっぱり遊びに行くのは多めに越したことはないものね」

「はい」

「兄さま・・・夏休みは・・・家事・・・手伝いますね」

「私も・・・手伝う」

「ありがとう、二人とも」

「あ！家事で思い出したんだけど、私まだ和人君に料理してあげてないわね」

「ああ、そんな話もしましたね」

「夏休み中に作ってあげるわね」

「そんな悪いですよ」

「気にしないの、私が言いだしたことだしね」

「でも、夏休み中じゃ大変でしょうし」

「それなら、いつそのこと夏休み中にお泊りでもしましょうか」

「え！家にですか！」

「もちろんよ！それとも迷惑かしら？」

「僕は、別にいいですけど、はる姉と亜姫は？」

「私は・・・別にいい」

「私も・・・かまいません」

「よし、これも予定に入れておかなかっちゃ！」

「涉と日が被る時にしてくださいね」

「どうして？」

「いや、さすがに女の子3人に男一人は身内と知り合いでもちよつと居ずらいというか・・・」

「そうかもしれないわね、じゃあ早めに皆本君の予定聞いていく

れないかしら」

「いいですよ、分かったら連絡しますね」

「了解」

これから、楽しい夏休みになりそうだな僕は心の中で少しワクワクしながら家へと帰宅した

第19話

第19話

「うん」

カーテンから差し込む光で僕は目が覚めた

「ふああ、夏だからやっぱり暑いなあ」

そんな独り言を言いながら時計を確認すると

「嘘！もう8時じゃないか！早く朝ごはん作らないと」

僕は急いで下に降りる、下に降りると、はる姉も亜姫もすでに起きていた

「ごめん二人とも！今から朝ごはん作るから」

僕が急いで朝食を作ろうとすると二人がそれを止める

「兄さま・・・大丈夫です・・・もう作りましたから」

「ホント、ごめんね」

「気にしなくて・・・いいです」

「でも・・・」

僕が、申し訳なさそうにしているとはる姉が声をかける

「和ちゃん・・・部屋の・・・目覚まし時計・・・鳴らなかったでしよ」

「そつえば、鳴ってないような」

僕は慌てていたせいでまったく気付かなかったが、確かに昨日ちゃんとセットしたはずの目覚まし時計が鳴った記憶がない

「でも、どうしてそれをはる姉が知ってるの？」

「私が・・・鳴る前に・・・止めたから」

「え？どうしてそんな事を」

「夏休みに・・・入ったし・・・和ちゃんに・・・ゆっくり・・・休んでいてもらいたかった」

「兄さま・・・いつも・・・早起きですから・・・夏休みぐらい・・・ゆっくり寝ていて・・・ほしかったんです」

「だから・・・」

二人が少し不安そうな顔でこちらを見ている

「そつか、ありがとね二人とも」

僕がお礼を言うと二人ともパアッと笑顔になった

「和ちゃん・・・ゆっくり休めた？」

「うん、おかげ様でね」

「兄さま・・・朝食・・・食べましょう」

「そうだね」

僕は、朝食を食べるためイスに座る

テーブルには、みそ汁や焼き魚などのおいしそうな和食が並んでいる

「うわぁ〜おいしそうだね」

「私たち・・・和ちゃんみたいに・・・うまく作れないけど・・・
頑張って作ったから・・・どうぞ・・・召し上がれ」

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

二人が作ってくれた朝食を食べる

「おいしい！すごくおいしいよ、はる姉、亜姫」

「ホントに・・・？」

「もちろん、僕が作ったのなんかより全然おいしいよ」

「兄さまに・・・喜んでもらえて・・・嬉しいです」

「おかわりも・・・あるから・・・いっぱい食べてね・・・和ちゃん」

「うん、ありがとね、はる姉」

あまりにおいしいので朝から2杯もおかわりしてしまった

それから、朝食を終え食器を片付けようとしたら二人に止められてしまった

「和ちゃんは・・・ゆっくり・・・してて」

「でも、朝もゆっくり寝かせてもらったし、食器洗いぐらいは僕がやるよ」

「兄さまは・・・テレビでも・・・見ててください」

「でも・・・」

僕が何か言う前に二人とも、キッチンへと移動してしまった

僕は、少し申し訳なく思いながらも二人に言われた通りテレビでも見てゆっくりすることにした

僕がソファに座ってテレビを見ていると食器を洗い終えた二人が戻ってきた

「はる姉、亜姫ごころうさま」

「ん……気にしないで……いい」

「二人でやったから……早く終わりました」

「二人もこつちでテレビでも見たら」

僕がそう言うと二人は僕の両隣りに座った

それからしばらく、皆でテレビを見て過ごした

その後、掃除や洗濯そしてお昼まで二人で用意するということが僕の出番はなく

なんだかんだで、今日はほとんど動いていない気がする

お昼も食べ終わり、僕は、テレビを見るのも少し飽きたので何かしようと考えていたら亜姫に話しかけられた

「兄さま……あの」

「どうしたの、亜姫？」

「その……買い物に付き合って……くれませんか」

「買い物？」

「はい……」

「うん、いいよ今日は一日いろんなことをやってもらったしね買い物ぐらい付き合おうよ」

「ありがとうございます」

僕は、部屋に戻って準備をし、亜姫と出掛けたのだった

「そういえば、はる姉は？」

「姉さまは・・・家で・・・待ってるそうです」

「そうなんだ、所で亜姫どこに行こうとしてるの？」

「前に・・・皆で・・・遊びに行った・・・デパートに」

「何かほしいものもあるの？」

「夕食の・・・材料を買ったり・・・しよつと」

「それなら、近所のスーパーでもいいんじゃないの？」

「いえ・・・一応・・・本屋にも・・・よりたいので」

「そうなんだ、そういえば亜姫とこうして二人で買い物に行くの初めてかもね」

「いつもは・・・皆で買い物・・・行きますから」

「なんか新鮮な感じだね」

「そうですね」

しばらくして、デパートに到着した。亜姫の意見でまず夕食の材料を買ってから本屋に行くことにした

「少し・・・買いすぎました」

夕食は、帰るまで秘密ということで購入した物をほとんど見せてはもらえなかったのだが、どうやら少し買いすぎてしまったらしい

「荷物は、僕が持つよ」

「でも・・・」

「今日は、何もしてないからこれぐらいはさせてよ」

そう言って僕は、材料を入れ終わった袋を持った

夕食の買い物も終わり、本屋に無っている途中でアクセサリーショップが目に入った

「亜姫、ちょっとだけ待っててくれる」

「？」

僕は、持っていた荷物を近くにあったイスにおいてアクセサリーショップに入った

アクセサリーショップでの買い物を済ませた僕に亜姫が質問してきた

「兄さま・・・何を・・・買ったんですか？」

「今は秘密だよ、夕食の後に教えてあげるね」

亜姫は、不思議そうにしながらも了解し僕たちは再び本屋に向かった。本屋に行き、亜姫は前から気になってた小説を購入、僕も集めている小説の新刊を買い本屋を後にした。

その後、家に帰り

はる姉と亜姫の夕食の準備が始まった

匂いから察するにどうやら今日はカレーらしい

数十分後、カレーも完成しサラダや飲み物をそろえ僕たちは夕食を食べ始めた

夕食の後、しばらくして僕は二人を呼んだ

「はる姉、亜姫ちよつといい」

「和ちゃん・・・どうしたの」

「兄さま・・・何か・・・用ですか」

「用って事でもないんだけどね」

僕は、ポケットから小さな袋を取り出す

「はい、これ今日一日、二人のおかげでゆっくりさせてもらったからね、そのお礼だよ」

袋を二人に渡す

「いいの・・・貰っても？」

「もちろん、そのために買ったんだから」

「ありがと・・・開けてもいい？」

「どうぞ」

二人が袋を開ける

「かわいい・・・」

僕が二人に買ったのは、ペアのイヤリングだ

「兄さま・・・ありがとうございます・・・これ大切に・・・
しますね」

「ハハハ、僕の勝手なセンスで選んだから気に入ってもらえるかど
うか不安だったんだよね」

「とつても・・・かわいい・・・和ちゃん・・・ありがとね」

「喜んでもらえると、僕もうれしいよ」

そのあと、二人は僕にイヤリングをつけて見せてくれた、二人とも
すごく似合っておりとても気に入ってくれたので僕も買ってよかつ
たと思った

こうして僕は、今日一日のんびりとした生活を送ることができた

第20話

第20話

夏休みに入って数日、僕は相変わらず家事にいそしんでいる

前のように一日何もしないのは退屈だからやっぱり僕も家事をするよと二人に言ったら、渋々ながらも二人は了承してくれた

しかし、そんな二人は今、見たい映画があるらしく姉妹で仲良くお出かけ中だ

そのため、必然的に僕は今一人というわけだ

家事を一通り終えた僕は少し休憩しようとソファーに座りテレビを見ることにした

しばらく、テレビを見ていると家の電話が鳴った

「誰だろう?」

僕は、ソファーから立ち上がり電話に出た

「はい、もしもし」

「もしもし、その声は和人君?」

電話の相手は美里先輩だった

「はいそうですね、どうしたんですか。家の電話にかけてくるなんて」

「いや、それがね、美晴の携帯に電話したんだけど電源切ってるみたいだね、それで家の方に電話したのよ、それで、美晴はいる？」

「すみません、今、はる姉は亜姫と一緒に映画を見に行っていてないんですよ」

「そうなの、まあいいわ用事があるのは和人君のほうだし」

「僕ですか？」

「ええ、和人君にお願いがあるの」

「なんですか？」

「ちょっと、私に付き合ってくれない」

「今日ですか？」

「ええそうよ」

「うーん、いいですよ家に居ても暇ですし」

「ホント、ありがとう和人君」

「でもなんで、僕に用事があるのにはる姉に連絡したんですか直接僕にすればいいのに」

「いや、美晴の許可取らないと私後からひどい目にあいそうだし」

「どうしてです?」

「和人君はわからなくてもいいのよ」

「はあ」

「それじゃあ、今日のお昼に駅前に集合ね」

「分かりました」

「それじゃ、ね」

美里先輩は、用件を済まして電話を切った

「さてお昼か、まだ少し時間あるし宿題でも済ませておこうかな」

僕は自分の部屋に戻り宿題を始めた

切りのいいところで宿題を済ませ時計を確認すると、11時20分
だった

「そろそろ準備しないと」

僕は、タンスから服を取り出し着替えた

素早く着替えを済ませ、僕はリビングにはる姉たちには置きを
残しておく

戸締りを確認し僕は待ち合わせの場所へと向かう

20分ほど歩き駅前に到着した、駅前に到着するとすでに美里先輩が待っていた

「あ！おい和人君こっちこっち」

「すみません待たせたみたいで」

「そんなに待っていないから気にしないでいいわよ、用事頼んだのはこっちなんだしね」

「それでその用事って何なんですか？」

「まあ、大したことじゃないんだけどね、ちょっと買い物に付き合っ
つてほしくて」

「僕にですか？」

「うん、主に荷物持ちを」

「ハハハ、なるほどそういうことですか、いいですよいつもお世話
になってますしね」

「ありがと！和人君」

「それじゃあ、行きましょつか」

「そうね、それじゃあ、まずはあっちのほうに行ってみましょっ」

「了解です」

こうして僕と美里先輩は買い物始めた

「ねえねえ、これなんかどうかな」

「似合ってるんじゃないですか、明るい感じで美里先輩にもぴったりだと思えますよ」

僕たちは今、洋服売り場に居る少し前にも来たような気がするがそこはまあ、女の子だということと納得しとくことにした

「ねえ、聞いてる和夫君」

「え？はい、なんででしょう」

僕が、ぼくとしていると美里先輩が僕を呼んだ

「やっぱり聞いてなかったでしょ」

「すみません、ぼくとしちゃって。どうしたんですか？」

「こっちの水色の服と、こっちの白い服どっちがいいと思う」

美里先輩が両手に服を持ち僕に聞いてくる

「そうですね、僕は水色のほうがいいと思いますよ、なんか夏って感じがしますね僕的にはですけど」

「じゃあ、水色にしようかな。会計済ませてくるからちよっと待つ

「ててね」

「分かりました」

美里先輩はレジの方へと向かったのだが・・・

なぜだか、美里先輩がアタフタしている、僕は美里先輩の方へと向かった

「美里先輩どうしたんですか？」

「和人君、それが財布忘れちゃって」

どうやら財布を忘れてお金が払えないようだ

「そういうことなら僕が買いますよ」

「でも、悪いわよ私が誘ったんだし」

「気にしないでください、どうせ家に居ても暇なだけでしたしね。困ってるときはお互い様ですし」

僕は、財布から洋服の代金を取り出してレジに置いた

店員が袋を美里先輩に渡した

「ごめんね、和人君」

「謝ることないですよ、僕が勝手にやったことですから」

「でも・・・」

「うーんじゃあ、あれは日頃お世話になっている僕からのお礼というところでどうですか」

「お礼？」

「はい、美里先輩には学校で良くお世話になってますからそのお礼です」

「・・・分かったわ、いつまでもこうしていても和君に迷惑かけそうだし、今日はそういう事にしとくわ、ありがとね和人君」

「どういたしまして」

それからも、別の店を回ったりゲームセンターに行ったりして楽しんでんだ

そして、夕方

「今日は、ありがとね和人君、結局全部お金払ってもらっちゃったし」

「そんな、こつちだって今日一日楽しかったですし、これぐらいの出費大したことないですよ」

「でも、それじゃあ私の気が済まないわ、何かお願いとかない？」

「じゃあ、今度泊りに来た時においしいご飯御馳走してください」

「そんなのでいいの？」

「ええ、これでも結構楽しみにしてますから」

「分かったわ、それならとってもおいしいのを作ってあげるわ」

「ありがとうございます」

「それは、いいんだけど結局いつ泊まりに行ってもいいの？」

「2週間後ぐらいですかね、涉もその時なら問題ないらしいですし」

「そう、じゃあ2週間後楽しみにしててね」

「ええ、期待してますね」

「それじゃあ、今日はありがとね」

「途中まで送りましょうか？夕方とはいえ女の子が一人で帰るのは危ないだろうし」

「大丈夫よ、そんなに遠くないし」

「そうですか、それじゃあ気お付けてくださいね」

「ええ、バイバイ和人君今日一日楽しかったわ！」

「はい」

美里先輩は、僕にそう言って走り出した、しばらく先輩を眺めて僕

も家へと帰宅した

家に帰宅すると、はる姉と亜姫が玄関でお出迎えしてくれた

「和ちゃん・・・お帰り」

「兄さま・・・おかえりなさい」

「ただいま、二人とも。今日は、映画楽しかった？」

「うん・・・和ちゃんは・・・誰と出掛けてたの？」

「美里先輩だよ」

「美里と？」

「うん、なんか買い物に付き合ってたんだったよ」

「「ッ!!!」」

「僕もどうせ暇だったしね、おかげで今日一日は楽しかったよ」

「和ちゃん・・・それって・・・デートって事？」

「えーデートじゃないよ！僕は、荷物持ちしただけだし」

「でも・・・二人つきりで・・・お買い物」

「兄さま・・・どこに行きましたか？」

「え〜と、ゲームセンターや洋服や後はいろんな所を転々としてたかな」

「美里・・・羨ましい」

「？」

「兄さま・・・こういう所は・・・鈍感です」

「??？」

結局そのあと、細かく今日の内容を話す羽目になってしまった

どうしてだろう??

第21話

第21話

夏休みも、7月が終わり今日は、8月1日午前10時

今、僕は渉の家に向かっている

なぜかというと、渉が早めに宿題を終わらせて夏休みをエンジョイしたいというので僕が手伝うことになったからだ

渉の家は、僕の家から徒歩で約15分、比較的に近い場所にある

渉の家に着きインターホンを鳴らす

少しすると、玄関のドアが開いた

「はい、どちらさまですか？」

出てきたのは、渉のお母さんの皆本春香さんだ

「文弥ですけど、渉はいますか？」

「あら！和人君！久しぶりね」

「はい、お久しぶりです」

「今日はどうしたのかしら？」

「涉に宿題を手伝ってほしいって頼まれまして」

「そうなの、わざわざごめんなさいね〜こんな暑い中そんなことのために来てもらっちゃって」

「一人でやるより、二人でやるほうがはかどりますから」

春香さんとしばらく話していると涉が二階から降りてきた

「おう！和人！よく来たな上がってくれ」

「うん、それじゃあ春香さんお邪魔しますね」

「ええ、ゆっくりしていつてね」

靴を脱ぎ涉の部屋へ向かう

部屋に入り勉強道具を取り出す、一通りそろえてお互いに宿題に取り掛かる

「久しぶりだな、涉の家に来たのも」

「確かにな、最近は良く皆で出掛けてたもんな」

「そうだね」

「たまには、遊びに来いよな」

「でも、迷惑じゃない」

「全然、むしろ来てほしいくらいだ」

「どうして？」

「由香がな和人は来ないのかって事あることに聞いてくるんだよ」

渉の言う由香とは渉の妹で亜姫と同じ年の高校生だ、ただ僕たちとは高校が違ったため滅多に会えないのだ

「ハハ、由香ちゃんは元気」

「ああ、相変わらずだよ」

「そういえば今日は見かけないね」

「今日は部活なんだってさ」

「そうなんだ、って渉も部活じゃないの」

「うちの高校の部活は基本的に8月はあんましやらないからな結構暇なんだよ」

「そんなに部活やらなくて大丈夫なの？」

「ああ、練習したい生徒のために学校自体は開けてるからな頼めば体育館も開けてくれるし自主練してるやつも多いんだよ」

「へえ〜そうだったんだ知らなかったよ」

「和人は部活に入っていないから知らなくてもいいことだしな」

「渉も練習に行くんだろ？」

「まあ行くけど、俺の場合は夏休みは遊びたいからあんまり行かないな」

「やっぱり練習はきついのか？」

「そりゃあな、自主練つっても2時間はやらないと体がなまるからな、練習した日は家帰ってもなんもやる気起きねえよ」

「大変だね」

「まあな、ところで和人この問題はどうやってやるんだ？」

「そこは、この公式にこの式をあてはめるんだよ」

「なるほどな、サンキュー和人」

「どういたしまして」

こんな感じで、勉強を続けていると春香さんがやってきた

「どう勉強はかどってる和人君」

「はい」

「渉、バカだから和人君の邪魔になってるんじゃない」

「そんな邪魔だなんてお互い話しながらやるから楽しくやっています」

「よ」

「バカの所は否定しないのかよ・・・」

「い、いやそういうわけじゃ」

「いいのよ、気にしなくてホントのことなんだから」

「うるさいな、そんなこと言ったために俺の部屋まで来たのかよ」

「違うわよ、お昼出来たから和人君も食べてって言おうとしたのよ」

「だってよ和人、とりあえず下に降りるか」

「そうだね」

僕と渉は、勉強をひとまず止めてお昼を頂くことにした

下に降り渉と向かい合うような形で席に座る

「それじゃあ食べるか」

「うん」

用意してもらった食事に手を伸ばす

「すみません、僕の方までお昼用意してもらっちゃって」

「渉に勉強教えてもらってるんだもの当然よ」

「そつだぞ和人、遠慮すんなよ」

「和人君、今日は夕方まで家に居るの？」

「そのつもりです」

「和人がいないと俺いつまでたつても宿題終わらないし」

「何言ってるの自分でもやらないとだめだよ」

そんな会話をしていると玄関の扉が開く音がした

「お母さん、ただいま」

少しするとリビングのドアが開いた

「お帰りなさい由香、ご飯できてるから早く食べちゃってね」

「分かった、でも、その前にシャワー浴びたいよ汗かいちゃって」

「よう由香おかえり」

「なんだ、バカ兄貴いたの・・・って和人さん！」

今、涉をバカ呼ばわりしたのは涉の妹の皆本由香ちゃんみなもとゆか。バレー部に所属しており学校でも屈指のアタッカーらしい、高校が違ったため最近は会うことがなかったのだ

僕を見た由香ちゃんは驚いた顔でこっちを見た

「こんにちは、由香ちゃん相変わらず元気そうだね」

「こ、こんにちは、どうして和人さんがここに」

「渉に呼ばれてね、一緒に宿題やるうって」

「そ、そうなんですか、でもうちのバカ兄貴じゃ和人さんの宿題の助けにはならないんじゃない」

「そんなことないよ、今回は雑談でもしながらって感じだったしね」

「俺がバカ呼ばわりされていることはスルーなのか・・・」

「こ、ごめん渉」

「和人さんが謝ることないですよ、ホントのことですし」

「それより、由香あなたシャワー浴びるんじゃないの？」

「あ、そうだった!」

春香さんに言われ由香ちゃんは少し恥ずかしそうにその場を後にしてお風呂場へ向かった

「はあ、まったくいつからあんなに生意気になったのか」

由香ちゃんがリビングから出て行くのを見て、渉が口を開いた

「まあまあ、元気があっていいじゃない」

「いいわけあるかよ、毎日毎日事あるごとにバカ呼ばわりするんだぜ由香の奴」

「ハハハ、苦勞してるね渉も」

「笑い事じゃねえよ、はあ、俺も亜姫ちゃんみたいな妹がほしかったな」

「ダメだよそういうこと言っちゃ、由香ちゃんだって十分いい子じゃないか」

「実の兄をバカ呼ばわりでか？」

「愛情表現の一つだと思っよ」

「こんな愛情表現はいやだっつうの」

「兄ならもつと器を広く持たないと」

「善処するよ」

「そういえば、話は変わるけど。泊りの件は大丈夫なんだよね？」

「ん、ああそのことが、大丈夫だぜとくに用事もないしな」

「そっか、それなら良かった」

「おう、楽しみだな和人の家に泊まりに行くの」

「あら〜何の話？」

僕たちの会話を聞いていた春香さんが僕たちに質問してきた

「皆で、和人のうちに泊まるっていう話だよ」

「へえ〜そうなの、和人君は迷惑じゃないの？」

「そんなことないですよ、むしろ楽しみなくらいですから」

「誰が来るの？」

「まあ、来るのは涉とうちの学校の先輩が一人ですよ」

「それでも、亜姫ちゃんや美晴先輩もいるから人数的にはそこそこ
って感じだよな」

「そうだね」

「そうなの、あ！ねえ和人君ひとつお願いがあるんだけどいいかしら？」

「なんですか？」

「由香も泊りに行かせていいかしら？」

「由香ちゃんをですか？」

「ええ、和人君たちと高校も違うしこういつときじゃないとなかなか遊ぶ機会ってないから」

「そういつことなら僕はいいですけど、由香ちゃん忙しくないんですか？」

「そうですね、由香がきたら聞いてみましょ」

「そうですね」

「由香が来るのか・・・」

「何か文句があるのかしら涉？」

「いえ、なんでもありません」

「よろしい」

そんな話をしていると由香ちゃんがリビングに戻ってきた

「ふう、さっぱりした」

「由香早くお昼食べちゃいなさいね」

「はい」

春香さんに言われ由香ちゃんがイスに座ろうとする

「あの～和人さん隣いいですか？」

「うん、いいよ」

「失礼します」

「ねえ、由香ちゃん」

「なんですか？」

「今度、僕の家で涉と学校の先輩がお泊りに来るんだけど、よかつたら由香ちゃんもどう？」

「え！わ、私ですか！」

「うん、うちにも由香ちゃんと同じ年の妹がいるし仲良くなれるといいなあって」

「でも迷惑じゃないですか？」

「そんなことないよ、人数が多いほうが楽しいだろうしね」

「いいんですか？」

「もちろん、由香ちゃんが忙しくなければだけど」

「い、いえ行かせていただきます！」

「そ、そう。良かった」

由香ちゃんのトーンがいきなり大きくなって僕は少しびっくりしてしまっ

こうして、由香ちゃんも泊りに来ることになった

第22話

第22話

由香ちゃんがうちに泊まりに来る話も終わり、僕と渉はお昼を食べ終え再び部屋に戻った

「これからどうするよ、和人」

「うーん、宿題もひと段落してるし僕もさすがに一日中勉強はちょっとな」

「和人にしては珍しいセリフだな」

「そうかな？」

「和人は真面目だからなそういうことは言わないタイプだと思ってたぞ」

「僕だって普通の高校生だからね、遊びたい気持ちのほうがあるんだよ」

「それなら、ゲームでもするか」

「そうだね、僕はあんまり詳しくないからどんなのをするかは渉に任せるよ」

「了解」

僕たちはゲームの準備を始めようとしたら、ドアをノックする音が聞こえた

「誰だろ？」

「母さんか由香しかいないだろ」

「まあね」

渉がそう言いながら、自分の部屋のドアを開けて確認する

部屋の前には、由香ちゃんが立っていた

「なんだ由香か何の用だよ」

「べ、別に用ってわけじゃないけど」

「なんだよ」

「か、和人さんに用事が」

「え？僕に？」

「はい、そ、その出来ればでいいんですけど、勉強を少し教えてもらえたらいいなって」

「俺と和人は今からゲームするところだったんだよ」

「そ、そうだったの」

渉から話を聞き、あからさまに落ち込む由香ちゃん

「僕は別にいいよ、ゲームと並行しながらやればいいし」

僕がそう言つと、由香ちゃんは暗い表情から一変して明るい表情に戻った

「でも、迷惑じゃないか？」

「いいよ、全然。とはいえゲームと並行してやるつもりでいるから渉の部屋でやることになるけど」

「まあ、俺は別にいいけどよ」

「じゃあ、決まりだね」

「よ、よろしくお願いします」

「うん、僕でよければ」

こうして、由香ちゃんの勉強を見てあげることになった

ゲームの方は、勉強も教えやすいようにと1ターンずつ交代していくテーブルゲームになった

そんなこんなで、勉強を教えてほしいと言って勉強を始めた由香ちゃんだけど、元々学校での成績もいらしく、僕が教えるのはちょっとした応用問題だったので、そんなに教える必要はないっばい

「和人さん、この問題がわからないんですけど」

「こじは、こじやっつて解くと答えが出るんだよ」

「なるほど、ありがとうございます和人さん」

「どういたしまして、分からない所があったらまた聞いてね」

「は、はい!」

「和人、次お前の番だぞ」

「うん、分かった」

こんな感じで、午後もあつという間に時間が過ぎた、時間も遅いし僕も帰ろうと思ひ勉強道具をしまっていると渉が話しかけてきた

「なあ和人、折角だからさ晩飯も食ってけよ」

「でも、悪いよ」

「気にすんなよ、母さんも夕飯いつもより多めに作ってるばいし」

「そうですねよ、ぜひ食べていってください!」

由香ちゃんも会話に交じり、夕食に誘ってくれた

「でも、僕も帰って夕飯の準備しないといけないし」

「たまには、甘えろよいつも作る側なんだからたまには、作ってもらう側でもいいじゃねえか」

「そうですね、勉強教えてもらいましたし。食べていってくださいよ」

「由香が作ったわけじゃないけどな」

「う、うるさいなあ！分かってるよそんな事」

そんな会話をしていると、不意に春香さんが部屋にやってきた

「和人君、よかったら夕飯も食べて行ってね」

春香さんも夕食の誘いに来たようだ

「和人、そういうわけだから夕飯食ってけよ」

「じゃあ、そうさせてもらおうかな」

「そうそう、たまには遠慮なんかせずに甘えりゃいいんだよ」

「ありがとう」

「それじゃあ、下に降りましょう和人さん」

「うん、そうだね」

下に降りると、おいしそうなカレーの匂いがした

「おいしそうだね」

「そうだな、それじゃあ食うか」

「その前に、家に電話入れてもいいかな」

「別にいいぞ」

僕は、鞆から携帯電話を取り出し家に電話する

「はい・・・もしもし」

「あ、はる姉」

「和ちゃん・・・どうしたの？」

「今日は、友達の家で夕飯を御馳走になることになったから、夕飯は、はる姉たちで作ってもらえないかな」

「ん・・・分かった、帰りは気をつけてね」

「うん、ありがと、それじゃあね」

僕は、電話を切り形態を閉じる

携帯をしまい、渉の隣に座る

「ごめんね、待たせて」

「出たの美晴先輩か？」

「うん」

「夕飯誘っておいでなんだけど、美晴先輩たち夕飯どうするんだ？」

「材料は冷蔵庫にあるだろうし、はる姉も亜姫も料理ができないわけじゃないから大丈夫だと思うよ」

「それなら、問題ないな。さてと、俺たちも食おうぜ！」

「そうだね」

「それじゃあ、いただきますね春香さん」

「どうぞ〜いっぱい食べてね」

僕は、スプーンを手に取りカレーをすくって食べる

春香さんの作ったカレーは絶妙な辛さとコクを持ち合わせていてもすごくおいしかった

「どうかしら、今日は少し辛さを変えてみたのだけど」

「とてもおいしいです」

「おいしいよ、お母さん」

「おお、うまいな」

「ありがと〜皆、いっぱいあるからどんどんお代わりしてね〜」

春香さんは、一足先に夕食を食べ終えていた

しばらくして、渉が口を開いた

「そういえば、和人」

「何？渉」

「今日、勉強してもらったってんだけど、もう一個頼みがあるんだよ」

「ちょっと！バカ兄貴あんまり和人さんを困らせたらだめでしょ！」

「ぼ、僕は別に気にしてないから大丈夫だよ由香ちゃん」

「そ、そうですか」

「うん、それで頼みって何なの渉？」

「ああ、明後日学校でバスケの練習をしようと思っただけでできれば和人も協力してもらいたんだよ、和人は運動神経いいからさion1の相手をしてもらいたんだよ」

「いいけど、僕なんかでいいの？他にも相手はいるでしょ」

「お前がいいんだよ、和人なら多少本気でやってもへばないだろうしな」

「分かったよ、協力するよ」

「悪いな、今度なんかお礼するからさ」

「気にしなくていいよ、夕食御馳走になったしね」

「すいません和人さん、兄貴が迷惑かけちゃって」

「迷惑だなんてそんなこと思ってないよ僕は」

「そうですか、それならいいですけど」

「家に居てもほとんど暇だしね」

「じゃあ、集合は今日と同じぐらいの時間に学校の体育館に集合な」

「うん、分かったよ」

こうして、僕たちの夕食の時間は過ぎて行った

夕食を食べ終わってから少しして、あまり長居しても悪いので僕はそろそろ家に帰ることにした

玄関に向かうと、渉と由香ちゃんも見送りのため玄関に来てくれた

「和人、今日はわざわざ悪かったな」

「気にしないでよ、僕も楽しかったし」

「和人さん、またいつでも遊びに来てくださいね」

「ありがと、由香ちゃん時間があればそうさせてもらおうかな」

僕が、荷物を肩にかけドアを開けようとする、春香さんも玄関にやってきた

「よかつたわ、和人君がまだ帰ってなくて」

「どうかしたんですか？」

「帰る前にこれを渡しておこうと思って」

そう言つて、春香さんが僕に一つの茶封筒を渡す

「なんですかこれ？」

「今日は、和人君に渉と由香の勉強を見てもらったし、お小遣いよ」

「そんな、悪いですよ夕食も御馳走になったのに」

「気にしないで、バイト料みたいなものだから少ないけどそれで好きなものでも買ってね」

「で、でも」

「貰つとけて和人」

「渉、でも」

「言つたら、たまには甘えろつて今日ぐらい遠慮しなくても罰は当たらねえよ」

「そうですよ、和人さんいつもバカ兄貴がお世話になってるし」

「そうよ、和人君こういうのは、貰っておくのが礼儀ってものよ、」
そう言っつて、皆僕に笑顔を向けている

「分かりました、では折角なので貰っておきますね」

「ええ、またいつでも遊びにいらっしやい」

「ありがとうございます、それじゃあお邪魔しました」

「じゃあな、和人また明後日な」

「うん、じゃあね、」

こうして、僕は自分の家へと帰宅したのだった

第23話

第23話

8月3日、涉のバスケの練習相手をする約束をし今日はその当日である

僕は運動部に入っているわけではないので体操服と2本程ドリンクをかばんにしまい。

準備を整えていこうとしているのだが

「ねえ、ホントに行くの二人とも」

「うん・・・」

「はい・・・」

僕の前には制服に着替えた、はる姉と亜姫がいる

そう、この二人はついてこようとしているのだ

僕が、昨日二人に涉と練習するので学校に行くと言ったら

「私も・・・行く（行きます）」

と言っただ

「ついてきても面白い事なんか全然ないよ」

「別に・・・かまいません」

「それに暑いだろうし」

「私たちは・・・特に・・・気にしない」

「でも」

「兄さまは・・・私たちに・・・ついてられるのは・・・迷惑ですか？」

亜姫が上目づかいで僕に聞いてくる

「そ、そんなことないよ」

「それなら・・・行きます」

「分かったよ」

「ありがとう・・・和ちゃん」

「ありがとうございます・・・兄さま」

僕はつくづくこの二人には勝てないなと実感する

「それじゃあ、行こうか」

「はい・・・」

僕たちは家を出て学校に向かう

しばらくして、学校に到着した、渉とは体育館で落ち合う予定だ、体育館で練習するから当たり前なのだが

学校に到着し、体育館へ向かうと、渉ともう一人この学校の制服とは違う制服を着て立っている女の子がいた

「由香ちゃん！どうしてここに？」

「あ、和人さんおはようございます！」

「よう、和人」

「おはよう渉、由香ちゃんどうしてここに」

「え〜とその、バカ兄貴が和人さんに迷惑かけないか見張りに来たんです！」

「そ、そうなんだ」

そんなに信用されてないのかな、渉って

「ホントは和人に会いたかったただけだろ」

「う、うるさいな！」

僕には良く聞こえなかったのだが、ぼそつと言った渉の言葉に由香ちゃんが過敏に反応した

「どうしたの、由香ちゃん？」

「な、なんでもありません！和人さんそのお二人は・・・」

「あ、そっか、由香ちゃんは初対面だっけ。紹介しとくね、左に居るのが僕の姉の文弥美晴で右に居るのが妹の文弥亜姫だよ」

「和ちゃん・・・その子は？」

「この子は、皆本由香ちゃん涉の妹だよ昔からよく涉の家で遊んでいたから、そのときよく一緒に僕たちと遊んでたんだ」

「は、はじめまして、皆本由香です和人さんには良くお世話になってました」

「美晴です・・・よろしくね・・・由香ちゃん」

「よろしく・・・由香さん」

「亜姫は由香ちゃんと同じ年だから仲良くしてあげてね」

「は、はい!」

「おい和人、挨拶も終わったし早く着替えようぜ」

「そうだね、行こうか涉」

僕と涉は着替えるために更衣室に向かった

着替えも終わり僕たちは軽い準備運動をしている途中だ

「久しぶりだなあ〜和人とバスケの練習やるのは」

「そうだね、いつからやらなくなったんだっけ」

「中学三年あたりじゃないか」

「そのぐらいだっけ」

「多分な」

そんな他愛もない話をしながら準備運動を終わらせる

「それで、具体的にはどんな練習をするの？」

「基本は1on1だけど、さすがにそれだけじゃ飽きちゃうからな。フリーシユートの勝負でもするか」

「良く分からないから、渉に任せるよ」

「そうかなら、今言った内容でいいな」

「僕は、それでかまわないよ」

「じゃあ、早速始めるか」

「うん」

僕たちは、お互いに少し距離を置きいつでも動ける体制に入る

「とりあえず、5分ぐらいやるか」

「そうだね」

「由香ー、タイムちゃんと見とけよ」

「言われなくてもちゃんと見るわよ、和人さん頑張ってください
いでに兄貴も」

「俺はついでかよ」

「ハハ、由香ちゃんらしいけどね」

「それじゃあ、行くぞ」

「いつでもいいよ」

僕が、そう言うと渉は途端に走り出し、僕のほうへと向かってきた
僕も渉の持っているボールを取ろうと前が出る

ある程度近づくと渉はフェイクを混ぜながら、僕を抜こうとする

僕もそれに負けないように、どうにか踏ん張って渉の前に居るよう
に心掛ける

それが、2、3分続いたころ渉が僕を抜こうと少し足を速めてきた

しかし、僕も練習を頼まれた以上そう簡単に抜かせるわけにはいか
ない

僕は、渉の持っていたボールをタイミングをはかって奪った

そして、渉のほうのゴールへと走る

「させるか!」

渉が、そう言っただけ僕の前に立つ

渉は、僕からすぐにボールを奪い返して僕の方のゴールに向かう

そんな感じで、練習は続いた

そして5分がたち、ひとまず1on1を止めた

「ふう、やっぱり和人との勝負はおもしろいな」

「そう?」

「ああ、お前強いからなこっちも本気でやれて楽しいんだよ」

「喜んでもらえてよかったよ、さすがに渉は強いねボールとってもすぐ取り返されちゃったし」

「何言っただ、あの状況でボールをとれるのはお前ぐらいなものだ」

「まあ、やる以上はこっちも本気でやらないといけないと思ったからね」

「よし！そんなじゃもう一回やるっぜ」

「もちろん」

そんな感じで、僕たちはほとんどの時間を1on1に費やした

結局僕は、涉からあまり点は取れなかった

しばらく練習してから僕たちは休憩をとった

思った以上に体育館の中は暑く僕はもうすでに汗だくだった

「ほらよ、和人」

僕がスポーツドリンクを飲んでしていると涉がタオルを投げてきた

「ありがとう、涉」

「おう」

僕たちが休憩をとっていると、女性陣が話かけてきた

「和ちゃん・・・大丈夫・・・具合悪くない？」

「大丈夫だよ、ありがとねはる姉」

「うん・・・」

「それにしても、和人さんバスケうまいですね」

「そうかな」

「はい・・・兄さまカッコ・・・よかったです」

「でもさすがに、渉にはかなわないよ」

「おいおい、帰宅部なのに俺から点数すごく取ってたのは誰だよ」

「そ、そんなことないよ、渉のほうが多くシュート入れてたし」

「バスケット部が帰宅部に負けるわけにはいかないからな、ちょっとヤバかったけど」

「アハハ、ところで練習はどのくらいやるの？」

「そうだな、後1時間ぐらいだな」

「そっか、ちょうどお昼だしそれぐらいがいいかもね」

「じゃあ、休憩も取ったし練習再開と行きますか！」

「そうだね」

そして、僕たちはまた練習を再開した

1時間後、僕たちは更衣室に設置してあるシャワー室で汗を流して着替え帰宅することにした

着替えを済ませ僕たちを待っている三人の場所へと向かう

女性陣と合流した僕たちは、その後渉の提案によりファミレスで昼食をとることにした

運動していた僕たちは結構おなかが減っていたのでいつもより多めに食べた

ファミレスで昼食を食べ終え僕たちは各自家に帰ることにした

「じゃあな、和人今日はありがとな」

「気にしないでよ、僕もいい運動になったよ」

「和人さん、今度はお泊りの時に会いましょうね」

「そうだね、来週だからすぐに会えるね」

「はい、そうですね」

「じゃあ、僕たちも帰るよじゃあね渉、由香ちゃん」

「おう、じゃあな」

「はい、亜姫ちゃんもまたね」

「はい、由香さんまたお泊りの時に会いましょう」

いつのまにか仲良くなっていた由香ちゃんと亜姫は別れのあいさつを交わす

こうして、僕とはる姉そして亜姫は自分の家へと戻った

第24話

第24話

今日はいよいよ、前から約束していた皆がお泊りに来る日だ

今回は、由香ちゃんも来ることになり亜姫も楽しみにしているようだ

僕は、皆が来るまでの間少し暇なので部屋で本を読んでいることにした

しばらく本を読んでいると、下の階からインターホンが鳴る音がした

僕は、本をしまつて下に降りる

「はい」

僕が、玄関を開けると渉と由香ちゃんが立っていた

「よう、和人来たぞ〜」

「お、お邪魔します。和人さん！」

「二人ともいらっしやい、さあどうぞ上がって」

「お邪魔するぞ〜」

「し、失礼します」

二人をリビングに連れて行く

「和人、荷物はどうすればいい？」

「うん、どうしようかな」

「とりあえず、渉は僕の部屋に置くといいよ」

「分かった」

「由香ちゃんは、亜姫の部屋に置くっか」

「でも、いいんですか？」

「私は・・・いいよ」

「ありがとう、亜姫ちゃん」

「ん・・・部屋・・・こっちだから」

亜姫が由香ちゃんを部屋に案内する

「渉は僕の部屋知ってるよね」

「ああ、勝手に置いてきていいか？」

「うん、別にかまわないよ」

渉が僕の部屋に向かおうとすると、またもやインターホンが鳴った

「美里先輩かな」

「まあ、来てないのは美里先輩だけだしな」

僕は、再び玄関に向かった

「今、開けまーす」

ドアを開けると美里先輩が立っていた

「こんにちは、和人君」

「いらっしやい美里先輩、どうぞ上がってください」

「ええ、お邪魔するわね」

美里先輩とリビングに向かうと、荷物を置いて下に降りて来ていた
亜姫と由香ちゃんが話していた

「あら？知らない子が一人いるわね」

「はじめまして、皆本由香です」

「皆本？もしかして皆本君の妹？」

「はい、兄貴がいつもお世話になってます」

「前に涉の家に行った時、由香ちゃんもお泊りに参加することにな
ったんです」

「へえ〜皆本君にも妹がいたのね。私は鳩羽美里よろしくね由香ちゃん」

「すみません、急に参加してしまっって」

「気にしなくていいわよ、人数は一人でも多いに越したことはないしね」

「ありがとうございます、美里さん」

由香ちゃんと美里先輩の紹介が終わった後、はる姉が二階から降りてきた

「いらっしゃい・・・美里・・・ゆっくりしていいってね」

「ええ、美晴。お言葉に甘えてそうさせてもらっわ」

「お、皆もう揃ってたんだな」

涉も荷物を置き、1階に降りてきた

「さて、みんな揃ったところで少し話があるの」

美里先輩が皆が揃ったのを確認し話を始める

「なんですか？」

「実は、お泊りの間にいろんな所に遊びに行こうと思っているのよ」「遊びについてどこに行くつもりなんすか？」

涉が、美里先輩の言ったことに最もな質問をする

「とりあえず、夏休み前にも言ったけど、まずカラオケね、そして遊園地にも行こうと思ってるわ」

「ホントに全部行くつもりだったんですね」

「もちろんよ」

「後、プールにも行くけど由香ちゃんは水着持ってきてる？」

「いえ、泊るといふことしか聞いてなかったの」

「まあ、それは仕方ないわよね。そこで！」

美里先輩がバンと机をたたいて立ち上がる

「お邪魔してからすぐ出いきなりだけど、今から水着を買いに行きたいと思います！」

「今からですか？」

「そうよ、由香ちゃんにも必要だし私たちも水着ほしいし。ついでに今日の夕飯の材料の買い出しもできて丁度いいじゃない」

「そう言われれば、確かに」

「でしょ」

「美里先輩一ツいっすか」

渉が美里先輩に再び質問をする

「水着を買いに行くのはいいとしても、由香の分のプールのチケットはどうするんすか？」

「そういえばそうね」

「あの、私はその時留守番でもしてますから別に気を使っていただけなくとも」

「でも、それじゃあ由香ちゃんが寂しいじゃない」

「普通にチケット買えばいいんじゃないですか」

「まあ、そうね」

「渉のあそこのプールのチケットっていくらぐらいなの」

「さあ、でも人気の場所だからな〜結構するんじゃないのか」

「そうなの、まあいいか」

「まあいいかって和人お前がお金出すつもりなのか？」

「うん、そうだけど」

「そ、そんな悪いです。私のせいで和人さんにお金を使わせるわけには」

「気にしなくていいの、こっちがお泊りに誘ったんだし。誘うときにこういふことを言っていなかった僕のせいでもあるし」

「で、でも」

「気にしないでね」

「いいのかよ和人、金なら俺が出すぞ」

「いいよ、前に涉の家に行ったときに春香さんに貰ったお金もあるし」

「そうか、じゃあ由香お言葉に甘えろよ」

「そ、それじゃあ和人さんいいですか？」

「もちろん」

「ありがとうございます！」

「さて、話も終わったことだし水着買いに行くわよ」

「じゃあ、行きますか」

僕たちは、家を出てデパートに向かった

第25話

第25話

家を出てからしばらくし、僕たちはデパートに到着した

「さて、早速水着を見に行こうかしらね」

「僕と渉も行くんですか？」

「そうよ、どうして？」

「皆、結構時間かかるかもしれないしその間に夕食の材料でも買っておこうと思ひまして」

「夕食の材料は後でも構わないでしょ。さあ行くわよ！」

そして、僕たちは水着売り場へと向かった

水着売り場に到着早々、女性陣は各自で自分の水着を探し始めた

前にもデパートで夏服を買った時、僕と渉は大分待たされた記憶があるの、今回も結構時間がかかると思ひ僕たちは水着売り場のすぐ近くのベンチに腰かけて待っていた

「はあ、また待たされなきゃいけないのか・・・」

「しょうがないよ」

「どうして、女の子ってのはこつも買ひ物が長いもんかね」

「そりゃあ、好きなものがいっぱいあるからどれ買おうか迷うんじゃないの？」

「でも、実際買っても使うのは1回か2回ぐらいだけ」

「そうかもしれないけど、女の子はやっぱり水着でもなんでもオシヤレなものを来ていたいものですよ」

「まあ、そうかもな」

「和人君、皆本君。ちょっと来てくれる？」

僕たちがベンチに座って話していると、美里先輩が僕たちを呼んだ

「どうしたんですか？」

「ある程度自分たちの好みの水着を買ったから最後に和人君たちにどんなのがいいと思うかみてもらおうと思って」

「自分たちの好きなのが買えばいいんじゃないっすか」

「だから、いくつか選んでどれがいいか悩んでるからこつして二人を呼びに来たんじゃない」

「分かりました、とりあえず行こつよ涉」

「そつだな」

僕たちは美里先輩の後に着いていき皆のところに向かう

少し行くと、皆がそれぞれお気に入りのお水着を持って待っていた

「さあ、どれがいいと思う」

とりあえず、皆が持っている水着を見てみる

まず、はる姉は紫の色のビキニと黒いビキニの二つを持っており。次に亜姫は白い色のワンピースと水色のワンピースの水着を持っている。同じく由香ちゃんも亜姫と同じタイプのワンピースでこちらは、オレンジとピンクの色のを持っている。最後に、美里先輩は赤い色のビキニと黄色のビキニを持っていた

「皆、二つには絞れたんだけど、どっちにしようかここで悩んじゃって、というわけで二人ともどれがいいと思うか言ってみて」

「そう言われても、涉はどう思う？」

「よくわかんねえな」

「とりあえず、どっちの色がその人に合っているか選んでくれればいいのよ」

「和ちゃん……どっちが……いいと思う？」

「うーん、はる姉は紫の方が似合うかな」

「じゃあ……こっちに……するね」

はる姉は、紫の色の水着に決まった

「兄さま・・・私は・・・どうですか？」

「か、和人さんどっちがいいと思いますか？」

続いて、亜姫と由香ちゃんが聞いてきた

「亜姫は水色のほうが似合うかな、由香ちゃんはオレンジのほうが似合うと思うよ」

「じゃあ・・・これにします・・・兄さま・・・選んでくれて・・・ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます和人さん」

「うん、どういたしまして」

「じゃあ、最後に私ね和人君どっちが似合うと思う？」

「そうですねえ、美里先輩は赤い方が似合うと思いますよ僕は」

「そうじゃあ、こっちにしよう」

「なんやかんやで和人、ちゃんと決めてるじゃないか」

「まあ、聞かれたわけだしどっちでもいいって言つのは適当すぎるし」

「お前らしいけどな」

こんな感じで、女性陣の皆は水着を買い終わった

水着も買い終わり、次は夕食の材料を買いに食品売り場へと向かった
食品売り場に行きカゴをとる

「さて、皆は何か食べたい物とかある？特に和人君！」

「なんで僕なんですか？」

「前に料理食べさせてあげるって言ったでしょ」

「そつえば」

「どうせ食べさせるなら好きなものを食べさせたいじゃない」

「うん、それじゃあシチューとか」

「和人君はシチューが好きなのね」

「そうですね」

「分かったわ、じゃあシチューの材料を買いに行きましょう」

何を作るかも決まって僕たちは材料をかうため野菜売り場やお肉
売り場やいろいろなところを回った

そして、夕食の買い物も終わり僕たちはデパートを出た

当然のことながら、荷物持ちは僕と涉だ

「さすがに、5人分の材料が入っていると重いね」

「そうだな、結構鍛えてる方だけどそれでもこれは結構重いな」

「和人君、少し持とうか」

「大丈夫ですよ。夕食は作ってもらわうわけだからこれぐらいはしな
いと」

「そうじゃあ、ものすごくおいしいの作らないとね」

「期待してますね」

そして、家に到着

家に到着した僕らは、とりあえず夕食の材料をキッチンに運び、い
くつか買ったお菓子やジュースなどを冷蔵庫に入れたりした

「さて、作るうかしらね」

美里先輩が夕食を作るうとキッチンで準備を始める

「美里・・・私も・・・手伝う」

「ありがとう、美晴」

「すみませんね、わざわざ作ってもらって」

「気にしないで、和人君たちはゆっくり休んでて」

「はい、何か分からないことがあったら聞いてくださいね」

「ええ、ありがと和人君」

こうして美里先輩とはる姉は夕食作りに取り掛かった

残った僕たちはテレビを見たり、話をしたりして時間をつぶした

「皆、夕食できたわよー」

しばらくして、美里先輩が僕たちを呼んだ

テーブルにはシチュー、パン、サラダと洋風な夕食が並んでいた

「さあ、皆どんどん食べてね」

「おおーつまそうだな」

「うん、すごくおいしそう」

「それじゃあ、いただきますね」

「どうぞ召し上がれ」

僕たちは、それぞれシチューを口に運ぶ

「う、うまいー」

「うん、すごくおいしいよこのシチュー！」

「美里さんって料理がお上手なんですね」

「ありがとう由香ちゃん」

「すごく・・・おいしいです」

「美里・・・このシチュー・・・すごくおいしい」

「美晴と亜姫ちゃんもありがとう」

僕たちはワイワイと楽しく夕食を食べた

夕食も食べ終わり僕はお皿を洗おうと思いきッチンに行くところ

「和人君、どこに行くの？」

「お皿を洗っておこうと思いました」

「私がやるからいいわよ」

「食器を洗うぐらいは僕がやりますよ」

「なら俺も手伝っぜ」

「ありがとう、渉」

僕と渉はキッチンに行き、食器を洗い始める

食器も洗い終わり、僕たちはテレビゲームやトランプなどをして時間をつぶした

そして、時間も大分たち、時刻は現在深夜の12時

「そろそろ寝ましょうか」

「そうね、それじゃあ皆お休み」

「和ちゃん・・・お休み」

はる姉と美里先輩は部屋へと戻って行った

「兄さま・・・お休みなさい」

「和人さん、おやすみなさい」

「うん、二人ともお休み」

亜姫と由香ちゃんも部屋へと戻って行った

「僕たちも寝ようか」

「そうだな」

僕と渉も部屋へと戻った

まだ、お泊りは続くけど今日だけでもすごく楽しかったなと僕は心の中で思いながら、僕は眠った

第26話

第26話

ジュジュジュ、ジュジュジュ

目覚ましの音が鳴り僕は、音を消すため起き上がる

時刻は6時、僕は着替えるためタンスから服を出す

今は、お泊りで渉も部屋に居るから起こさないようにしそっと着替える

着替え終わったとき、後ろから声が聞こえた

「うーん、もう朝か」

「おはよう渉」

「おう、和人おはよう」

「ごめんね、起こした?」

「いやなんとなく目が覚めた」

「そう、僕は今から朝ごはん作るためにリビングに降りるけど、渉はどうする」

「そうだな、俺も起きるか」

「分かった、布団は畳んで隅にでも置いておいてくれる」

「了解」

渉は素早く布団を畳み、僕と一緒にリビングに降りた

「渉は、和食と洋食どっちがいい？」

「どっちでもいいぞ俺は」

「じゃあ、和食にしようかな」

「俺も手伝うぜ」

「うん、ありがと。じゃあ、味噌汁作ってくれる、僕は魚を焼くから」

「分かった」

そうして、僕と渉は朝食作りに取り掛かった

しばらくして朝食も出来上がり、テーブルに料理を並べていると、はる姉と美里先輩がリビングに降りてきた

「和ちゃん・・・おはよう」

「ふあゝ和人君、皆本君おはよう」

「おはようす」

「はる姉おはよう美里先輩もおはようございます」

「和人君起きるの早いわね」

「いつもこれぐらいに起きてますからね、6時ぐらいに勝手に目が覚めちゃいますよ」

「そうなの、私は朝は苦手だからそれは真似できないわね」

「そうなんですか？」

「ええ、さすがに6時には起きれないわね」

そんな話をしていると、亜姫と由香ちゃんも起きてきた

「兄さま・・・おはようございます」

「和人さん、おはようございます」

「おはよう二人とも、ご飯できてるから皆で食べよう」

「はい・・・」

「ありがとうございます」

こうして、僕たちは朝食を食べ始めた

朝食を食べ終え、僕たちはしばらく休憩していた、ちなみに食器は亜姫と由香ちゃんがやってくれている。自分たちだけ何もしていな

いのは悪いかららしい

少しして、食器を洗い終えた亜姫と由香ちゃんが戻ってきた

「お疲れさま二人とも、ごめんね全部任せちゃって」

「気にしないで・・・ください」

「そうですよ、私たちだけ何もしないのは悪いですしこれぐらいのことはさせてください」

「別に気になくてもいいのに」

二人と話をしていると、美里先輩が今日の予定について話し始めた

「さて、今日はどうしようかしらね〜どこか行きたい場所がある人」

「そんな、いきなり言われても」

「何、皆行きたいところないの？」

「そうっすね、俺も基本的には休日は家でゆっくりしてるタイプだし和人もだろ」

「うん、そうだね。はる姉と亜姫は行きたいところある」

「私も・・・特には」

「私も・・・です」

「じゃあ、由香ちゃんはどつ」

「え？あの、その」

「どつしたの？別に遠慮しなくてもいいのよ」

「そつだよ、由香ちゃん」

「え、えつとそれじゃあ遊園地に行きたいです」

「遊園地が、行くつと思つてたしちようどいいわね」

「そつですね」

「まあ、いいんじゃないの」

「そつ……ですね」

「じゃあ……準備しないと」

由香ちゃんの提案により行先は遊園地に決定した

僕たちは、準備をするために一回自分の部屋へと戻る

部屋に戻り、財布や携帯を持って忘れ物がないかを確認し部屋を出る

準備をすませて部屋を出るとすでに皆準備ができていた

「よし、皆そろつたし行くつかしらね」

家を出て僕たちは駅に向かう、遊園地は駅をいくつか乗りついでと
ころにある

駅に到着し切符を買って電所に乗り込む

しばらくして目的の駅へと停車した

電車を降りて、駅を出てから少しだけ歩くとかなり規模の大きい遊
園地が見えてきた

「やっぱりでえなここの遊園地」

「そうだね」

「すみません私のわがままに付き合ってもらって」

「気にしないでいいの、私たちも来る予定だったしね」

「由香さんが・・・気にする・・・必要ない」

「ありがとね、亜姫ちゃん」

「それより、早く入ろうぜ」

「うん」

「それじゃあ、行くとしますか」

僕たちは入場料を払い、遊園地の中に入った

第27話

第27話

遊園地に入った僕たちは、入ってすぐ遊園地のマップを見て何処に行くか決めていた

「まず何に乗ろうかしら」

「近い場所から行ってみたらどうですか」

「それもいいけど、マップを見た限りじゃ絶叫系の乗り物も多いみたいだから最初はやっぱり絶叫マシンでしょ」

「これなんかどうですか、ここから結構近いし」

「確かに、じゃあここにしましょうか」

「そうですね」

「兄さま・・・一緒に乗りましょう」

「和ちゃんは・・・私と乗る」

「私とです・・・」

「私と・・・」

乗り物が決まったところで、はる姉と亜姫がどっちが僕と乗るか言

い合いを始めた

「まあまあ、二人ともたくさん周るんだから」

「じゃあ・・・私と」

「私と・・・です」

「ほら、美晴も亜姫ちゃんも落ち着いて」

ここで、美里先輩が二人の間に割って入った

「こんなこともあるつかといいものを用意してきたわ」

「いいもの・・・?」

「ええ、これよ」

そう言つて美里先輩がとりだしたのは6本の割り箸

「アトラクションに乗る前にこの箸をひいて同じ色の人とペアで乗るのよ」

「何処から出したんですかその箸」

「女の子には謎がつきものなのよ」

「そうですか・・・」

「とりあえず、アトラクションの所まで移動するわよ」

とりあえず移動する事になった僕たち

そして、アトラクションの前に来て美里先輩が皆にさっきのクジをひかせる

僕のペアは亜姫になった。そして、はる姉のペアは美里先輩、涉のペアは由香ちゃんになった

「兄さま・・・一緒に乗りましょう」

「そうだね」

「それじゃあ、乗るわよ」

そんなこんなでようやく乗り込んだ僕たちであったが

「兄さま・・・手・・・離さないでね」

亜姫が少し震えていた

そういえば、亜姫はこういった絶叫マシンは苦手だった

「大丈夫、離さないから」

「・・・はい」

そんなこんなでアトラクションが動き始める

今、乗っているアトラクションは上に上がり下に落ちるフリーフォ

ールタイプの絶叫マシンで亜姫はまだゆっくりと上へ上がっているだけなのに、すでに顔が青ざめている

「亜姫、大丈夫？」

「はい・・・大丈夫・・・です」

そんなこんなで、てっぺんに到着そして一気に下へと落ちる

「キャーーーーー」

下に落ちると同時に叫び声が聞こえる

あれ？でも、これは亜姫の叫び声じゃなくて美里先輩と由香ちゃんのだ

なぜか、隣にいる亜姫の叫び声が聞こえてこない

あの様子だと叫び声をあげると思ったのに、そう思い隣の亜姫を見してみると

亜姫は気絶していた・・・

アトラクションが終わりなんとか亜姫を起こしてアトラクションから降りる

「亜姫、大丈夫？」

「なんとか・・・大丈夫です」

「亜姫ちゃん、絶叫系苦手だったのね」

「亜姫ちゃん、だいじょうぶ」

「由香さん・・・心配してくれて・・・ありがとうございます」

「はる姉は大丈夫だった？」

「これぐらいなら・・・大丈夫」

「しかし、ホントに大丈夫なのか亜姫ちゃん弱り方が尋常じゃないけど」

「多分大丈夫だと思うけど、一応休憩させるから皆は遊んできて」

「いいの和人君？」

「ええ、今の状態の亜姫を放っておくわけにもいかないですし」

「じゃあ、ひとつ別のに乗ったら戻ってくるわ」

「分かりました」

「じゃあ、行ってくるわね」

「はい、楽しんで来てくださいね」

皆が移動するのを見た後、僕は近くのベンチに亜姫を座らせる

「少し休んでようね亜姫」

「兄さま・・・すみません・・・来たばかり・・・なのに・・・
迷惑をかけてしまって」

「気にしなくていいよ、何か飲み物とかいる？」

「いえ・・・大丈夫です」

亜姫が飲み物は大丈夫と言うので僕も隣に座ることにした

「まだ辛い？」

「楽になって・・・きました」

「そつかでも、皆が戻ってくるまで僕の膝に頭置いて寝ててもいい
よ」

「...」

「どうしたの？」

「なんでも・・・ありません・・・それじゃあ・・・失礼します」

「うん、どうぞ」

亜姫が僕の膝に頭を置くように寝はじめ

「兄さま・・・」

「なに？」

「呼んでみただけです」

「そっか」

その後は、亜姫と軽い話をしたりしながら時間をつぶした
しばらくして、皆が帰ってきた

「ただいま〜あら亜姫ちゃんが膝枕されてる」

「うらやましい・・・」

「アハハ、何に乗ってきたんですか？」

「また、絶叫系よ今度は回転ブランコタイプの」

「めちゃくちゃ楽しかったぜ」

「よかったね渉」

「和人さん、亜姫ちゃんは大丈夫ですか？」

「うん、もうだいぶ楽になったみたいだから大丈夫だよ」

「そうですか、よかったです」

「それじゃあ、次は何に行こうかしら」

「できれば、あまり絶叫っぽくないのが」

「そうねえ、コーヒカップなんてどうかしら」

「ちょっと子供っぽくないっすか」

「そうかしら」

「僕は、別にいいですよ」

「私も・・・それでいい」

「私もいいですよそれで」

「それじゃあ、コーヒカップに行きましょうか」

そしてコーヒカップに到着。またくじを引いてペアを決める

今度のペアは美里先輩だった

「よろしくね、和人君」

「はい、お願いします美里先輩」

そして、コーヒカップに乗り込む

「コーヒカップなんて久しぶりね」

「そうですね」

そして、コーヒカップを回し始める

最初はゆっくりだったのだが、美里先輩がこれじゃあ生ぬるいということでもものすごい勢いで回し始めた

降りた時、僕は少し酔ってしまった

「ごめんね〜和人君、少し回し過ぎちゃった」

「いえ、気にしないでいいですよ」

「次はどこに行くんすか、美里先輩」

「そうねえ〜皆本君なんかいい案ない？」

「それじゃあ、お化け屋敷なんてどうっすか？」

「え！お化け屋敷！」

涉の案に反応したのは由香ちゃんだった

「由香ちゃんどうかしたの？」

「い、いえ何でもないですよ美里さん」

「？」

「まさか由香お前お化け屋敷が苦手なのか」

「そ、そんなわけではないでしょバカ兄貴！あ、あんな子供だましに怖がるわけないでしょ」

「その割には声が震えてるけど」

「うん、うるさい！」

「それじゃあ、お化け屋敷に行ってみましょうか」

僕たちは、お化け屋敷に移動し始めた

お化け屋敷に到着し再びくじを引く

今度の僕のペアは由香ちゃんになった

「よ、よろしくお願いします和人さん！」

「うんよろしくね」

「順番は私と皆本君、次に美晴と亜姫ちゃん最後に和人君と由香ちゃんね。5分後に次のペアが入ってきてね」

「分かりました」

「じゃあ行きましょ皆本君」

「了解つす、じゃあいつてくるぜ和人」

「うん、行ってらっしゃい渉」

美里先輩と渉がお化け屋敷の中へと入る

5分後、はる姉と亜姫がお化け屋敷の中へとはいっていく

「次は僕たちの番だね」

「そ、そうですね」

「由香ちゃん、さっきは渉にああ言ってたけどホントはお化け屋敷
苦手なんじゃない」

「そ、それはその」

「言いたくなかったら言わなくていいよ。でも、無理しちゃだめだ
よ」

「は、はい分かってます」

そして5分がたち僕たちが入ってくる番がやってきた

お化け屋敷の中に入って見ると思ってた退場にリアルな作りだった

「手でもつなぐ？少しは怖さがやわらぐかもしれないし」

「い、いいんですか」

「僕は、別にいいよそっちが嫌じゃなければだけど」

「そ、それじゃあ。お、お願いします」

といつことで由香ちゃんと手をつないでいくことにした

少し歩くといかにも出そうな井戸が見えた

そして、井戸の中から髪の毛の長い女の人が出てきた

「キヤーーーー！」

由香ちゃんが僕に抱きついてくる

「だ、大丈夫由香ちゃん」

「す、すいません和人さん」

「僕は、別に大丈夫だから」

それから、またしばらく進みようやく出口に到着した

外に出ると皆がジュースを飲みながら待っていた

「お、和人に由香やつと出てきたか」

「ごめんね待たせて結構時間掛かった？」

「俺たちの2倍ぐらいだぞ」

「由香ちゃんはお化け屋敷が苦手だったのね」

「す、すいません」

「はい・・・由香さん・・・ジュース」

「ありがとう、亜姫ちゃん」

「兄さまにも・・・ジュース」

「ありがとう、亜姫」

「それにしても、やっぱり由香はお化け屋敷苦手だったんだな」

「うー!」

「涉止めてあげなよ」

「分かってるよ」

「由香ちゃん、気にしなくていいよ苦手なもの一つや二つあって当たり前なんだから」

「ありがとうございます、和人さん」

「さてと、いくつかアトラクションも周ったしそろそろお昼でも食べない」

「丁度時間もいいころ合いだしいんじゃないですか」

「俺も腹ペコだぜ」

僕たちは、お昼を食べるため遊園地内にあるレストランへと向かった

第28話

第28話

レストランに到着し、店員に案内されたテーブルへと向かう
テーブルに着いた時、美里先輩がまたくじを出してきた

「さあ、くじを引いて」

「ここでも、くじを引くんですか？」

「当たり前じゃない、ペアになった人は和人君の隣ね」

「ご飯の時ぐらいくじで決めなくてもいいんじゃないっすか」

「でも、自分たちで決めたら戦場になるわよ」

「た、確かに・・・」

「じゃあ、引くか」

「そうだね」

「それじゃあ、順番に引いてね」

美里先輩の指示で皆が順番にくじを引く

結果、僕の隣は涉になった

「なんか、変な組み合わせになったわね」

「そうですか？」

「まさか男同志になるとは」

「なんか・・・複雑です」

「大丈夫・・・和ちゃんに・・・そっちの趣味は・・・ないから」

「バカ兄貴、和人さんに何かしたら許さないからね！」

「なんで飯食う時に席が隣になっただけでこんなに言われなきゃならないんだ・・・」

「僕が知りたいよ・・・」

「まあ、決まっちゃったんだから仕方ないでしょ」

「なんだろう、このアウエーな状況は」

「気にしたら負けだよ、涉」

「・・・だな」

「さて注文を決めないと」

僕たちは、各自食べたい物を決める

「和人お前はどうぞするよ」

席が隣同士なので、僕と渉は一つのメニューを一緒に見ている

「どうしようかな、とりあえずドリンクバーを頼んで。後は、ハンバーグとライスのセットでいいや」

「俺もドリンクバーは頼むとして、ステーキとライスのセットにするか」

「決まりだね」

「美里先輩たちは決まりましたか？」

「ええ、私はミートスパにするわ。後、ドリンクバー」

「私は・・・ドリアと・・・ドリンクバー」

「私は・・・雑炊と・・・ドリンクバーです」

「私は、唐揚げ定食とドリンクバーです」

「皆、ドリンクバーは頼むんですね」

「なんか、レストランに来たらドリンクバーは頼まないといけない気がするのよね」

「あゝなんか分かるっすわ、特に飲まないのになんか頼みたくなるっすよね」

「そうかもね」

「じゃあ、注文しますか」

注文も決まり、店員を呼んで注文を頼んだ

ドリンクバーは各自、自由に取りに行けるので

とりあえず、女性陣を最初に行かせることにした

「おまたせ」

女性陣が戻ってきたので、僕と渉も飲み物を取りに行くことにした

「うーん、とりあえずメロンソーダにしようかな」

「俺は、レモンスカッシュにするか」

コップを取り飲み物を入れて自分達のテーブルへと戻る

「和人君たちは、メロンソーダとレモンスカッシュなのね」

「はい、女性陣は紅茶とコーヒーで分かれていますね」

ちなみに由香ちゃんと亜姫が紅茶ではる姉と美里先輩がコーヒーである

ドリンクを飲みながら皆で話をして料理を待つ

そして、徐々に注文した料理が運ばれ全員分の料理が来て僕たちは

料理を食べ始めた

「普通のレストランにしてはなかなかおいしいわね」

「そうですね」

「和人、ステーキ少しやるからハンバーグ少しくれよ」

「いいよ、はい」

「サンキューそんじゃ、ほい」

僕と渉は、互いに少しハンバーグとステーキを交換した

それを見ていた、美里先輩が

「和人君と皆本君ってなんか仲が良すぎる気がするんだけど」

「そんなことないと思いますけど」

「これぐらい、普通じゃないっすか」

「そうかしらねえ、美晴たちはどう思う」

「仲良すぎ……だと思っ」

「私も……そう思います」

「私は、普通だと思いますよ」

「まあ、昔からの付き合いですし」

「和人君と皆本君って昔から仲いいの？」

「まあ、そうですね。たまに喧嘩もしましたけど」

「へえ〜以外ね」

「つつても、ほとんど和人の圧勝だったよな」

「そうだったっけ？」

「ああ、お前めちやくちや強かったし」

「だから、僕は強くないってば」

「そう思ってるのは、お前だけだよ」

「そんなこと・・・」

「確かに、和人君は強いわね」

「和人さんってそんなに強いんですか？」

「その気になったらヤクザとかも潰せそうぐらい強いぞ」

「す、すごいんですね和人さん」

「そんなことないってば」

「昔から、自分で鍛えてたって言ってたけど具体的には何してたの？」

「鍛えてたって程のものでもないですよ、普通にランニングしたり筋トレしたり」

「へえ〜そうなの」

「それに、渉も同じぐらい鍛えてましたし」

「でも、良く美晴と亜姫ちゃんに見つからずに続けてこれたわね」

「基本的に和人は、家に来てやってたからな」

「そうだね、はる姉も亜姫も基本的にあんまり外で遊ばないタイプだったからね。渉の家がちょうどよかったんだよ」

「ちよつと前まで・・・和ちゃんが・・・強い・・・全然知らなかった」

「私も・・・です」

「まあ、中学校ぐらいから鍛え始めたし。僕を呼ぶ人たちも二人には気付かれないようにしてたみたいだし」

「今まで、どれぐらいの人に呼ばれたの？」

「どうなんだろう?」

「50人は超えてるんじゃないか」

「そんなに！！」

「高校に入ってから減ったから良かったけどね」

「それで今まで全勝してたの？」

「いえ、ほとんど殴らせてましたね」

「嘘！そんなに強いのに！」

「和人は基本的に平和主義だからな。よっぽどのことがない限りは自分から手を出したりしなかったよな」

「で、でもそれだと美晴たちなら気がつくんじゃない？」

「それはないと思いますよ、僕を呼ぶ人たちは露骨にお腹とか裸にならないと分からないような所しか攻撃してこなかったし」

「でも、前に美晴先輩に手を出そうとした源口先輩のようなタイプには容赦なかったよなお前」

「まあ、さすがにああいうタイプにはちよつとね」

「皆本君、結構知ってるみたいだけど和人君が呼ばれてるときに一緒に行ったの」

「そうっすね、暇な時だけけど」

「なんで、助けなかったの」

「そりゃあ、俺だって目の前でダチがボコボコにされてるのは見られなかったつすよ。でも、和人はいつも攻撃を受け流すようにして受けてたからほとんどダメージなさそうだったし、和人が手を出そうとしてないのに俺が出したら和人に悪いじゃないっすか」

「そうなの」

「まあ、ホントにやばかったら俺も手を貸そうと思ってっいたりしてたって感じっすね」

「一通り話を終えると、皆の空気が暗いのが分かる」

「あ、あのそろそろお店出ませんか皆食べ終わったみたいだし」

「そうね、ごめんねなんか変な事ばかり聞いて皆のテンションを下げる形になっちゃって」

「僕は、気にしませんよ」

「俺もっすよ」

「ありがとね。和人君、皆本君」

「まあ、僕たちは聞かれたことに答えてただけですからね」

「美晴に亜姫ちゃん、由香ちゃんもごめんね」

「そ、そんな私は気にしてないですよ！とゆーか、話がよくわからなかったし」

「私も・・・気にしてません」

「私も・・・」

「そう、じゃあ気を取り直してお昼もたくさん遊びましょ！」

お金を払い、レストランを出てまだ行っていないアトラクションへと僕たちは向かった

それから、店を出た僕たちはいろんなアトラクションへと向かい、時間はあっという間に夕方になった

夕方になり、僕はそろそろ帰ろうと美里先輩に言つと

「そうね、でも観覧車に乗ってないからそれに乗ってからにしましょ」

ということ、観覧車に乗ることになった

こちらもくじでペアを決めて二人一組で乗ることになった

僕のペアは、はる姉になった

「ペアも決まったし、乗りましょうか」

「そうね、じゃあ和人君たちお先にどうぞ」

「ありがとうございます、それじゃあ乗ろつかはる姉」

「うん・・・」

僕とはる姉は観覧車に乗りこんだ

観覧車に乗ってから少ししてから綺麗な景色が見えた

「景色が綺麗だね、はる姉」

「うん・・・」

「どうかしたの、元気ないみたいだけど」

「和ちゃん・・・」

「何？」

「ごめんなさい・・・」

はる姉が僕いきなり頭を下げて謝ってきた

「ど、どうしたのいきなり」

「和ちゃんが・・・中学校の時から・・・暴力振るわれてた・・・お昼に聞いてから・・・ずっと悪いと・・・思ってた」

「そのことなら気にしてないって言ったでしょ」

「でも・・・そのことを知らなかった・・・自分がなんだか悔しくて」

はる姉は、涙を流しながら僕にそう言った

「はる姉……」

「多分……亜姫も……同じ気持ちだと思う」

「はる姉の言いたいことは分かったよ、でも僕はホントに気にしてないんだよ」

「でも……」

「お昼も言ったけど、知らなかったのは僕がそういう風にしてたからだし。僕が暴力をふるわれて黙ってたのも二人に悲しい顔をしてほしくなかったからだしね」

「和ちゃん……」

「僕は、二人の悲しい顔を見たくなかったからね。そのためなら暴力をふるわれても気にしないよ」

「……」

「だからね、はる姉気にしないで、はる姉と亜姫が笑顔でいてくれれば僕は満足なんだよ」

「うん……」

はる姉は、涙をぬぐって笑顔を僕に見せてきた

「良かった、やっぱりはる姉は笑顔が似合うよ」

「ありがと・・・和ちゃん」

「どういたしまして、ほら見てはる姉、景色が綺麗だよ」

「そうだね・・・夕方だから・・・もっと綺麗に見える」

「今日は、楽しかったねはる姉」

「うん・・・また・・・皆で来たいね」

その後もいろいろ話をしてしていると観覧車が一周して僕たちは観覧車から降りた

少しして、皆も観覧車から降りてきた

「和人君、どうだった？」

美里先輩が僕の隣に来て声を小さくして話しかけてきた

「何がですか？」

「もちろん、美晴の事よ」

「もしかして、わざと僕とはる姉のペアにしました？」

「ええ、お昼に和人君たちとあの話から美晴元気なかつたからね、私の責任だしそれぐらいはしないと」

「大丈夫ですよ、はる姉は」

「それなら良かった」

「そろそろ帰りますか」

「そうね、皆そろそろ帰りましょうか」

「そうっすね」

「今日は・・・少し・・・疲れた」

「でも・・・楽しかった・・・です」

「そうだね、亜姫ちゃん」

こうして僕たちの楽しい一日が終わった

第29話

第29話

僕たちは今、朝食の真っ最中だ

昨日、遊園地から戻ってきた僕たちは、皆疲れており夕食やお風呂を済ませて早く寝た

そのおかげで、今朝は皆起きるのが早く朝食の時間もいつもより若干早めだ

朝食を食べながら、今日の予定を美里先輩が話します

「皆、今日は各自フリーでいいわよ」

「どうしてですか？」

「まあ、理由としては何日も連続で遊びに行くのはちょっと疲れるから息抜きもしましょって事で」

「そうですね」

「だから、各自自由でいいわ」

「分かりました」

「和人、お前はどっするよ？」

「どうしよう、多分家でのんびりしてると思っけど」

「じゃあ、ゲームしようぜ！ゲーム機自体は和人も持ってるだろ」

「うん、持ってるよ」

「じゃあ、飯食って少し休憩したら準備しようぜ」

「そうだね、他のみんなはどうするの？」

「私は・・・家に・・・います」

「私は、買い物にでも行こうかしら」

「私も・・・買い物に・・・行く」

「珍しいわね、美晴が出掛けたがるなんて」

「欲しい本が・・・あるから・・・それを買いに行く」

「じゃあ、一緒に行きましょう」

「うん・・・」

「由香ちゃんは？」

「えっと、私は午前中部活なのでもう少ししたら学校に向かおうかと」

「そっか、制服とかちゃんと持ってきてるの？」

「はい、荷物と一緒に持ってきたので」

「それなら良かった」

「すみません、お泊りの最中に」

「仕方ないよ、部活なんだから。帰ってきた時もシャワーとか自由に使っていていいからね」

「はい、ありがとうございます和人さん」

朝食も食べ終わり、由香ちゃんは制服に着替え部活に出掛けた

まだお店が開くには時間的に早いので、他のみんなはくつろいでいる

「たまには、こうやってくつろぐのも良いね」

「そうだな、和人の家に泊りに来てまだ三日目だけど」

「どれぐらい泊る予定なの？いまさらだけど」

「そつえば、言ってなかったわね」

「確かに・・・」

「え〜と、二週間ぐらいかな」

「結構いますね」

「迷惑かしら」

「そんなことはないですよ」

「もちろん、家事とかの手伝いはさせてもらっわ」

「気にしないでいいですよそんなの」

「でも、洗濯とかは和人君も困るでしょ。下着とかあるし」

「ま、まあ確かに」

お泊りになる以上、当然の事ながら洗濯が必要になってくる。特に今は、夏だから洗濯ものもおおのずと多くなってくるそれ自体は僕は一向に構わないけど、下着とかはさすがに戸惑ってしまう。家事は皆で分担して洗濯は女性陣がやっていたりする

「じゃあ、洗濯は女性陣に任せてもいいですか」

「もちろんよ」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。でも、由香ちゃんは大変よねえ、部活があるから」

「じついつ時ぐらいたばればいいのにな」

「そついつわけにもいかないでしょ」

「しかも、由香ちゃんお泊りの日数知らないんじゃないかしら」

「あ……」

「大丈夫なのかな」

「まあ、大丈夫だと思うぞ」

「それならいいけど」

それからしばらく話をして、はる姉と美里先輩は出掛けた。お昼は食べてくるからいらないそうだ

僕と渉そして亜姫はリビングでゲームをしている。亜姫は見ているだけだ

「和人、お昼どうするんだ？」

「何か作るつもりでいるけど、材料がないから買いに行かないと」

「じゃあ、俺も付いていくぜ」

「私は……留守番……してます」

「うん、分かったよろしくね」

「はい……」

「じゃあ、買いに行こうか」

「そうだな、時間もちょうどいいから由香も迎えに行こうぜ」

「でも、迷惑じゃない」

「そんなことないと思うぞ」

「じゃあ、買い物終わってから行こうか」

僕たちは一旦ゲームを消して買い物に行く準備をする

準備を済ませ、近くのスーパーに向かう

スーパーに到着しカゴを取ってメニューを決める

「お昼何が食べたい？」

「俺は、なんでもいいぞ」

「じゃあ、チャーハンにしようか」

僕たちは、チャーハンの材料を買って買い物を済ませた

意外と長くスーパーに居たのか時刻は11時半

「結構時間経ってたね」

「だな」

「それじゃ、由香を迎えに行くか」

「そっだね」

スーパーを出て20分ぐらい歩くと、由香ちゃんの通う高校がある
「さて行くか」

「行くかって校門で待ってるんじゃないの？」

「行った方が早いだろ」

「僕たち、私服だしそれはまずいでしょ」

「それもそっだね、じゃあ待つとしますか」

時間帯がお昼なので部活も終わり帰ろうとしている生徒が夏休みの
割に結構いた

女子生徒が何人かこちらを見ていた気がするけどなんでだろ？

少し待っていると、由香ちゃんが友達と思われる子たちと一緒に
出てきた

「やっと出てきたか、おっい由香」

渉が由香ちゃんを呼ぶ

その声に気付いた由香ちゃんと友達がこっちを向く

「な、なんで兄貴がここにいるのよ！後、叫ばないでくれる恥ずかしいじゃない！」

「別にいいだろ、昼飯の買い物ついでにお前を迎えに来たんだよ」

「ごめんね、由香ちゃん迷惑だったかな」

「か、和人さんまで！べ、別に迷惑とかじゃなくて！そ、その」

「ねえ、由香誰よこの人たち紹介してよ」

「二人ともすごい美形なんだけど！」

「美奈、優菜落ち着いてよ！」

由香ちゃんの友達が僕たちを見てそう言った

「え、えっとこっちがうちの兄貴でこっちは兄貴の友達の和人さん」

「よろしく〜」

「よろしくね」

僕と渉は由香ちゃんの友達に挨拶する

「初めまして私、由香の友達の瀬戸内美奈せとみみなっていいいます！」

「同じく由香の友達の神崎優菜かみさきゆうなです！」

二人は元気に僕たちに挨拶をする

「す、すいません和人さん二人ともうるさくて」

「そんなことないよ気にしないで」

「なるほど、由香が言ってた和人さんってこの人だったのね」

「？」

「ちょ、ちょっと美奈！変なこと言わないでよ」

由香ちゃんが慌てた様子で美奈ちゃんの言動を止めようとする

「和人さんって今付き合ってる人とか居るんですか？」

由香ちゃんが美奈ちゃんを止めている間に優菜ちゃんが僕に質問をしてくる

「優菜も失礼なこと聞かないでよ！」

「大事なことでしょ由香にとっては特に」

「べ、別にそんな事」

「で、どうなんですか和人さん」

「そういう人はいないなあ〜」

「良かったね由香チャンスじゃない！」

「もう！優菜」

由香ちゃんが顔を真っ赤にして美奈ちゃんと優菜ちゃんを止めている

「そういえば今、迎えに来たって言ったけど、お兄さんはともかくどうして和人さんまで？」

「え、え〜とそれはその今、和人さんの家に泊ってるから」

「「ええ〜〜〜！！！」」

美奈ちゃんと優菜ちゃんがものすごく驚いた声を出した

「由香って意外と大胆だったのね」

美奈ちゃんが由香ちゃんに向かってそう言った

「ち、違うそうじゃなくて！今、夏休み中だから遊びに行ってるだけで兄貴や和人さんの学校の知り合いもいるし」

「でも、泊りなんでしょ」

「そ、そうだけど」

しばらく、質問攻めに合っていた由香ちゃんがしばらくして解放された

「和人さん、そろそろ帰りましょうー！」

「そ、そうだね」

「それじゃあ、二人ともじゃあねー！」

由香ちゃんは、僕と渉の手を引いて逃げるようにその場から離れて
行った

第30話

第30話

由香ちゃんは、しばらく僕たちの手を引いて走っていたが学校から大分離れたところで手を離した

由香ちゃんは、走りっぱなしで疲れていたのかハアハアと荒い息をしている

しばらくして落ち着いた由香ちゃんが僕たちの方に振り向いた

「すみませんでした和人さん」

「気にしなくていいよ、いきなりだったからちょっとびっくりしたけど」

「しかし、よくここまで俺たちを引っ張ってノンストップで走れたな」

「確かに由香ちゃんすごい体力だね」

「そ、それはその、部活で鍛えてますから。和人さんだって走りっぱなしなのに息切れしてないし」

「俺も息切れしてないぞ」

「兄貴はバスケット部でしょこれぐらいでへばってたらバスケットなんて出るわけないでしょ」

「まあ、否定はしない」

「後、兄貴、美奈と優菜に美形って言われた時、すごいニヤニヤしてたでしょ」

「そ、そんなことはないぞ」

「でも、涉は確かに美形だよな」

「和人さんだつてカッコイイですよ」

「ありがと、由香ちゃん」

「お前、今心の中でそんなことないって思っただろ」

「え〜とそれは」

「凶星だな」

「そうなんですか和人さん？」

「ま、まあ」

「はあ、和人は少し謙虚すぎると思つぞ」

「そうかな？」

「でも、謙虚なのはいいことだと思いますよ」

「もうちょっと、堂々としててもいいと思うけどな」

「手厳しいこと言うね、渉は」

「そんなことねえよ」

「和人さんは、カッコイイですから自信持ってください」

「ハハ、善処するよ」

そんな事を話しているうちに家に到着した

「ただいま」

扉を開けて家の中に入ると、亜姫がトテトテとこっちにやってきた

「兄さま・・・おかえりなさい」

「ただいま、すぐお昼作るからね」

「はい・・・」

靴を脱いで、キッチンに向かいジュースやアイスなども買ったので
冷蔵庫にしまう

材料はすぐ使うので、そのまま台所に置いておく

「和人さん、シャワー借りてもいいですか？」

「うん、いいよ」

僕に、一言了解をとり、由香ちゃんはシャワーを浴びに行く

「さて、そろそろ作るのかな」

僕は、チャーハン作りに取り掛かった

チャーハンは作りなれているので割りと早く作ることができた

お皿やコップなどを並べる

お皿にチャーハンを盛り、コップにお茶を注ぐ

シャワーを浴び終わった由香ちゃんがりビングに戻ってきた

「すみません、和人さん手伝いもせずにシャワー浴びて」

「気にしないで、作りなれてるからすぐできたしね。冷めないうちに食べよ」

「はい」

「涉、亜姫、お昼ご飯できたよ」

「おーう」

「分かり……ました」

涉と亜姫が席に座る

「おお、さすが和人だなうまそっだ」

「兄さま・・・いただきます」

「いただきますね、和人さん」

「どうぞ」

皆、チャーハンを食べ始める

しばらくしてチャーハンを食べ終えた僕たちは食器を台所に運ぶ

「和人さん、洗いものは私がやりますね」

「いいの？」

「はい、作るのは協力できなかったしこれぐらいさせてください」

「じゃあ、お願いしようかな」

「まかせてください」

由香ちゃんは、台所に向かい食器を洗い始める

「和人、ゲームの続きしようぜ」

「うん、いいよ」

僕は、朝やっていたゲームを再び涉と始めた

ゲームをやっていると食器を洗い終えた、由香ちゃんがソファに座った

「くろつさま由香ちゃん」

「泊らせてもらってるんですからこれぐらいはさせてください」

「うん、ありがとう」

由香ちゃんが話し終え、僕は渋と再びゲームを再開する。亜姫と由香ちゃんは見物している

「和人さん、ゲーム上手ですね」

「そうかな、あんまりやらないから上手かどうか良く分からないんだよね」

「上手ですよ、私も兄貴と良くこのゲームやりますけど結構難しい」

「由香は、弱いからな」

「う、うるさいな兄貴がゲームやりすぎなのよ！」

「アハハ、由香ちゃんもやる？」

「私は、いいです見てる方が楽しいですから」

こうして、僕たちはのんびりとした時間を過ごし夕方になった

「ただいま」

夕方になり、はる姉と美里先輩が帰ってきた

「和ちゃん・・・ただいま」

「はる姉、お帰り。欲しかった本は買えた？」

「うん・・・」

「良かったね」

「美里先輩は何を買ったんすか」

「フッフ、私はこれよ！」

そう言っつて、美里先輩が持っていた大きな袋から買ってきたものを出した

中から出したものは、様々なパーティーゲームだ

「ずいぶんと沢山買いましたね」

「そりゃあ二週間も泊るからね」

「え！このお泊りつて二週間も泊るんですか！」

「あれ？由香ちゃん聞いてないの？」

「そういえば言っつてなかったな」

「すっかり忘れてたよ」

「でもそれって和人さんたちに迷惑なんじゃ」

「そんなことないよ、皆が泊って毎日楽しいし」

「それならいいんですけど」

「でも、美里先輩も一つの袋は何ですか？」

美里先輩が買ってきたのはゲームだけじゃないらしくもう一つ大きな袋があった

「これは、秘密よ」

「はあ、そうですか」

美里先輩が買ってきたゲームなどをリビングの隅に置き、僕たちは夕食にすることにした

夕食を済ませ、皆がのんびりしている時に美里先輩がゲームを持ってきた

「皆、今からゲーム大会を開くわよ！」

「ゲーム大会？」

「私が買ってきたゲームで勝負するのよ」

「大会つて言うからには、何か商品でもあるんすか？」

「それを考えてなかったわ」

「ダメじゃないっすか」

「まあ、商品はおいおい考えるところ。負けた人には罰ゲームも待ってるからね」

「罰ゲームは決まってるんですね」

「さっき和人君が気になってた袋の中にいろいろ入ってるから」

「なるほど、だから秘密にしてるんですね」

「まあ、そういうことね」

「はる姉も中身知らないの」

「うん・・・いつのまにか・・・買ったた」

「そうなんだ」

「で、何のゲームやるんすか？」

「まずはこれよ！」

美里先輩が掲げたのはツイスターのゲーム

「くじを引いてまずペアを決めるわそしてそのペアで勝負して先に

体勢を崩した方が負けね」

「分かりました」

僕たちは、美里先輩が用意したくじを引く

僕の相手は涉だ

「お、和人が相手か」

「男同士だからやりやすいかもね」

「だな」

他は、はる姉と亜姫そして美里先輩と由香ちゃんに決定したようだ

「それじゃあ、始めるわよ」

こうして、僕たちのゲーム大会が始まった

第31話

第31話

ツイスターでの最初の対決は、はる姉と亜姫からになった

先攻、後攻を決めるためのジャンケンをし先攻は亜姫からになった

「それじゃあ、始めるわよ」

美里先輩がそう合図し、ルーレットを回す

「亜姫ちゃん、右手を黄色に」

亜姫が美里先輩の言った場所に手を置く

美里先輩が再び、ルーレットを回す

「美晴、左足を赤に」

はる姉も、美里先輩が言った場所に足を置く

何回か繰り返し、二人ともだんだんつらい状況になってきたようだ

「さて次行くわよ」

「美里・・・早くして」

「少し・・・つらいです」

「頑張れ、亜姫ちゃん」

「それじゃあ亜姫ちゃん、右足を青に」

「青……」

亜姫が少し困った様子で一番近い青に手を置く

それにしても……

「なあ、和人」

「何？ 渉」

「さっきから思ってるうただけどなんかエロくね？」

「た、確かに」

女の子同士でやってるから仕方ないと言えばそれまでかもしれないけど、ゲームをしていくうちにだんだん、絡み合う形になるのもすごくエロく見える

僕たちが話しているうちに美里先輩が次のルーレットをまわしている

「次、美晴左手を赤に」

美里先輩に言われ、はる姉が右手を赤に置こうとした時、はる姉のバランスが崩れ、二人が崩れ落ちる

「ごめん・・・亜姫・・・大丈夫？」

「平気・・・です」

「あらら〜美晴が負けちゃったか、じゃあ美晴が罰ゲームね」

「美里先輩罰ゲームって何するんですか？結局」

「まあ、勝敗も決まったし内容を言ってもいいでしょ。罰ゲームの内容はコスプレよ」

「コスプレっすか！」

「そうよ、私が買ってきたのがいくつかあるからそれを着るの」

「良くそんなの売ってましたね」

「あそこ以外と物がそろってるからねえ〜結構広いし」

「美里・・・私は・・・何着ればいいの？」

「それも、くじで決めるわということだ美晴くじを引いて」

「わかった・・・」

美里先輩に言われくじを引くはる姉

引いたくじの中身を見て、若干赤面している

「なんて書いてあったのはる姉？」

「それは・・・」

「とりあえず、袋を運んで着替えてきてからのお楽しみって事ではないんじゃない」

美里先輩が僕にそう言った

はる姉が別のところに移動した

少しして、はる姉が戻ってきた

「似合うかな・・・和ちゃん」

はる姉が着ているのは、赤いチャイナ服だった

「う、うん良く似合ってると思うよはる姉」

「ありがと・・・和ちゃん」

はる姉が赤面しながら僕にお礼を言う

「あ、ちなみに言い忘れたけどこのコスプレの罰ゲーム男物入っていないから」

「・・・はい？」

僕と渉が声が重なった

「だから、男物入れてないから」

美里先輩の発言を聞き、僕たちは呆然としている

「和人、俺幻聴が聞こえるんだけど」

「大丈夫、僕も聞こえてるから」

「そうか・・・」

「最初は、男物も買おうと思ったんだけどなんか面白くないからやめたわ」

「「やめなくていいじゃないですか！！！」」

僕と渉は、再び声を合わせてそう言った

「大丈夫よ二人とも美形だしきつと似合うわ」

「そういう問題じゃないでしょ！」

「なんやかんやで損するの俺と和人だけじゃないっすか！」

「まあまあ、勝てばいいんだから気にしない気にしない」

「気にしますよ」

僕の突っ込みを無視して、美里先輩が次の勝負を始めようとしている

「じゃあお楽しみは取っておくことにして、次は私と由香ちゃんね」

「はい、よろしく願いします美里さん」

「よろしく〜」

「じゃあ、ルーレットは和人君よろしく」

「・・・はい」

衝撃の事実を聞かされた僕のテンションは著しく下がっていた

しかし、ここで逃げるすべもなくとりあえずルーレットを回す

「じゃあ回しますよ」

「オツケー」

僕は、ルーレットを回し止まった場所を確認する

「それじゃあ、美里先輩左足を緑に」

美里先輩が足を置いたのを確認し次のルーレットを回す

「由香ちゃん、左手を青に」

「はい」

由香ちゃんが言われた場所に手を置く

何回か続けそして

「美里先輩、右足を黄色に」

「く！なんて難しい場所に」

美里先輩が言われた場所に足を置こうとした時、バランスを崩した

「ああ、負けたわ」

「危なかった・・・」

「しょうがない、くじを引きますか」

美里先輩がくじを引いて中身を確認する

「フムフムなるほど、じゃあ着替えてくるから」

美里先輩が着替えるために移動する

「おまたせ」

戻ってきた美里先輩が着ていたのはナース服だった

「どっ？？似合っ？？」

美里先輩がポーズを決めて僕たちに聞く

「似合ってると思いますよ」

「美里・・・良く似合ってる」

「ありがと、二人とも。じゃあ、次はいよいよ和人君と皆本君ね」

「ホントにやらなきゃだめですか？」

「もちろんよ。やらなかったら両方にコスプレさせるわ」

なんて理不尽な・・・

どのみちやらないといけないならもう勝つしか手段はない

そう考えていると、渉も同じことを思っていたようで僕のほつを見る

そして

「和人、いつも世話になっているがこれだけは負けれない」

「悪いけど今回は僕も負けられない手加減はしないよ」

お互いにそう言って勝負を始める体勢になっている

「じゃあ、始めるわよ」

こうして、僕と渉の勝負が始まった

結果は・・・

はい、負けました

「和人君の負けねそれじゃあくじを引いて」

「・・・わかりました」

僕は、くじを引いて中身を確認する。そして啞然とする

「どうしたの、和人君？」

「もう一度聞きますけどホントに着ないとだめですか？」

「もちろん、自分で着ないなら私が着せるわ」

「分かりました着替えてきます・・・」

僕は、別の部屋へと移動する

僕は、着替えを済ませて皆のところへと向かう

部屋に入ると、皆が驚いた様子で僕を見ていた

そりゃあ、驚くよだってメイド服だもん

しばらく驚いて黙っていた皆がいろいろコメントを入れる

「和人！どうしてお前は男なんだ！男じゃなかったら完璧なメイドなのに！」

「嫌なこと言わないでよ！渉」

「か、和人君なんて可愛いの」

「うれしくないですよ・・・」

「兄さま・・・いえ・・・姉さま」

「なんで言い変えたの!?!」

「和ちゃん・・・可愛すぎる・・・もういつそのこと・・・女の子として・・・生活を」

「恐ろしいこと言わないで!はる姉!」

「か、和人さん。性別間違えてないですか?」

「由香ちゃん何気にひどいこと言わないでよ!」

「で、でもいくらなんでもこれは・・・」

「ええビックリだわ、和人君なら似合うとは思ってたけどまさかこれほどとは」

「全然嬉しくくないですよ・・・」

僕は、若干涙目になりながら皆に言った

パシヤ

「渉!無言で写真とらないで!」

パシヤパシヤパシヤパシヤ

「連写っ!」

パシャパシャパシャパシャ

「皆まで写真とらないで！」

皆が無言で写真を取り続けている

ピッ

「誰！今、動画撮影にしたの！」

「和人君、お帰りなさいませご主人様って言って！」

「嫌ですよ！」

「じゃあ、ターンしてウインクでもいいわ」

「だから嫌ですってば！」

「やってくれないと私、いきおいでこの写真をネットに流しそうだわ」

「ホ、ホントにしないですよね？」

「俺は、部活の仲間に見せそうだ」

「わ、分かったよやればいいんでしょやれば」

「大丈夫よ、さっき言ったどっちかにしてあげるから」

「何が大丈夫なんですか・・・」

「どっちにする?」

「・・・前者で」

「じゃあ言ってみよ〜」

「お、お帰りなさいませ、ご、ご主人様」

「」「」「」「」

「皆、何か言つてよ!」

「和人君、性転換に興味ない?」

「怖いと言わないでください!美里先輩!」

「和人、オランダに行こうぜ」

「涉!いつたい僕に何する気なのさ!」

このやりとりがしばらく続いた

今日は、ツイスターだけで終わるらしいが、僕はゲームが終わった後も写真を流すと脅されしばらくメイド服のままだった

ようやく、メイド服から解放された僕はすぐに着替えた

「やっと、解放された」

いろんな意味で疲れた僕はソファに座りぐったりしている

「いや、可愛かった和人君のコスプレ明日のゲームでも罰ゲームはコスプレにしようかしら」

「止めてください、って明日もやるんですか？」

「ええ、明日はゲームを帰るけど一日に一つゲームをしてお泊りの最終日に結果を発表するわ」

「そうですね」

「さて、今日はもう遅いしそろそろ寝ましようか」

「そうですね」

僕たちは、部屋に戻り眠りに着いた

第32話

第32話

トラウマになるようなコスプレ罰ゲームを受けた次の日

僕は、いつもの時間に起きリビングに向かった

リビングに向かうと、すでに由香ちゃんと美里先輩が起きていた

二人は僕がやってきたのに気付いた

「あ、和人君おはよう」

「和人さん、おはようございます」

「美里先輩おはようございます、由香ちゃんもおはよう。今日は、起きるの早いですね何かありましたか？」

「そういうわけじゃないんだけどね、なんか今日は目が覚めちゃってね」

「そういう時ってありますね。由香ちゃんも？」

「はい、私も今日は目が覚めちゃって」

「やっぱり、昨日いいもの見れたから今日の目覚めも良かったのかもしれないわね」

「昨日のことは言わないでください」

「いいじゃない可愛かったし」

「僕にとってはトラウマものですよ」

「またやってもらおうかしら」

「絶対に嫌です」

「由香ちゃんも見たいわよね？」

「え、え〜と私は・・・」

由香ちゃんが美里先輩に聞かれ戸惑っている

「美里先輩、由香ちゃんを困らせたらだめですよ」

「そうね、ごめんね由香ちゃん」

「そ、そんな気にしないでください別に困ってないですから」

「それならいいわ」

「さて、そろそろ朝食作らないと」

僕は、キッチンに行き朝食の支度をする

支度を大方終わらせた時、はる姉に亜姫そして涉が起きてきた

「おはよう、和人」

「和ちゃん・・・おはよう」

「兄さま・・・おはようございます」

「皆、おはよう朝食もうできたから座って待ってて」

僕は、料理をテーブルに運び自分の席につく

「それじゃあ、いただきます」

「」「いただきます」

「」「いただきます・・・ます」

僕たちは、朝食を食べ始める

「相変わらず、和人の飯はうまいな」

「ありがとう」

「この中でいちばん料理上手だもんね和人君は」

「そんなことないですよ。美里先輩の料理だっておいしいし」

「それでも和人君には負けるわよ」

「そうですねか？」

「ええ、自慢していいレベルなもの」

「ありがとうございます。所で今日の予定はどうなってるんですか？」

「今日はボウリングやカラオケに行こうかと思ってるわよ」

「そういえば夏休み前に行くって言ってましたね」

「ええ、ボウリングは今考えたけどね」

「まあ、いいんじゃないっすか面白そうだし」

「じゃあ決まりね」

そんなこんなで僕たちは今日、ボウリングとカラオケに行くことになった

朝食をすませて僕は食器を洗い終え。しばらくテレビなどを見て時間をつぶして出掛ける準備をする

準備を済ませ、僕たちは駅前へと向かう

「今日も暑いわね」

「最近は特に暑いですね」

「でも、天気がいいと気分がいいよね」

「ハハハ、確かに」

そんなこんなで駅前に到着

「駅前まで来ましたけど、ボウリングとカラオケまずどっちに行くんですか？」

「そうねえ〜まずはボウリングかしらねえ〜」

「じゃあ、そうしますか」

僕たちは、ボウリング場がある場所に向かう

少し歩くとボウリング場に到着

中に入った途端、美里先輩がいきなりくじを出してきた

「突然だけど、皆くじ引いて〜」

「どうしてですか？」

「普通にやっても面白くないから、3対3に分けようと思って」

「そういつことなら」

僕たちは、それぞれくじを引く

その結果

僕・亜姫・由香ちゃん

美里先輩・はる姉・渉

こんな感じの組み合わせになった

「よろしくね二人とも」

「はい、頑張りましょうね和人さん」

「私も・・・がんばります」

「うん」

「こっちは、意外な組み合わせかもね」

「そうっすね」

「がんばる・・・」

「それじゃあ、チーム分けもしたことだし受付行きましょうか」

「そうですね」

一つのレーンでするのは、勝敗が分からなくなるため二つレーンを借りてすることになった

名前や人数を書き受付に渡す。シューズを貰うためのコインを受け取りシューズを取りに行く

そして、シューズを持ち自分たちのレーンに向かう

レーンはもちろん隣同士

シューズに履き替え、ボールを選びに行く

「9ポンドのでもいいか」

ボールを取ってレーンのところに戻る

「さて、改めて軽くルールの説明をしておくわ。まず、最初投げる人を決めてその人がまず投げるわピンが残ったら次の人がそのピンを倒して、ストライクなら次投げるとき二番目の人が投げるの」

「つまり一投づつで交代するってことですね」

「そういうこと、じゃあ始めましょ。そっちは一投目誰が投げるの？」

「僕が投げますよ」

「そっじゃあこっちは皆本君投げて」

「了解っす」

こうして僕たちのボウリング勝負が始まった

第33話

第33話

僕と渉は、ボールを持ち構えをとる

「それじゃあ、二人とも投げていいわよ」

「はい」

「ウイース」

僕と渉は、ほぼ同時にボールを投げる

ボールはまっすぐ転がり見事に並んでいるピンの真ん中に当たり全
て倒れる

「よし、まずはこんなもんかな」

「あゝあ、俺3本残ったよ」

僕と渉は、それぞれ席に戻る

「さすがですね和人さん」

「兄さま・・・ストライク・・・さすがです」

「ありがと二人とも」

「皆本君も惜しかったわね」

「すみませんっす」

「まあ、綺麗にスピアとつてみせましょう」

「ん……がんばって……美里」

「まかせなさい」

美里先輩がボールを投げる宣言通り見事にスピアをとる

「どんなもんよ」

「さすがですね」

「さて和人君たちも投げて」

「はい、次は亜姫と由香ちゃんどっちが投げるの？」

「私が……投じます」

「そっか、頑張つてね亜姫」

「はい……」

亜姫がボールを投げる少しボールがそれて4本残ってしまった

「すみません……兄さま……由香さん」

「気にしないで亜姫ちゃん、遊びなんだから気軽にね」

「そつだよ亜姫それにまだ始まったばかりだしね」

「次……がんばります」

「そつだね、じゃあ次は由香ちゃんだね」

「はい、まかせてください」

由香ちゃんも見事にスピアをとり次は、はる姉の番

「美晴先輩頑張ってくださいっす」

「美晴、ストライクとつてね」

「頑張る……」

涉と美里先輩に応援されながらはる姉がボールを投げる

はる姉の投げたボールは、ガーターになりそうなすれすれのところで転がっていたのだが真ん中あたりで急激なカーブを描きピンのど真ん中に当たる

はる姉がストライクを取りこちらにVサインをしている

「はる姉すごすぎ……」

「まさか、カーブでストライクを取ってくるとわね」

「レベルが最早プロだな」

そして、勝負はどんどん進んでいき最終レインになった

「これで最後の勝負ね」

「そうですね」

最終レインで投げるのは、僕とはる姉になった最初に交代で投げる
ことになっていただけ、美里先輩の提案で最後のレインはチー
ムの代表が投げることになった。今のところ点数は、こちらが有利
に立っているがはる姉はここまで自分の番の時は、すべてスペアか
ストライクで取っているので僕がミスすれば確実に抜かれる

僕はボールを投げる、一投目はストライクを取り二投目は2本残り
三投目でスペアになってしまった

はる姉の方は見事に全てを倒し結果はる姉の方のチームが勝利した

「負けちゃったさすがだね、はる姉は」

「そんなことない・・・和ちゃんも・・・すごかった」

「ハハ・・・ありがとう」

「さて、勝敗もついたしここ出てカラオケに行くわよ」

「そういえばカラオケにも行くんだったな」

「そうだったねボウリングが楽しかったから忘れてたよ」

「さあ行くわよー！」

僕たちは、シューズやボールを片付け受付で代金を払い外に出る

カラオケ店は前に行った場所に行くことになった

ボウリング場のあるところからそんなに遠いところにあるわけではないのですぐにカラオケ店に着いた

カラオケ店に着き受付を済ませて渡された番号と同じ部屋に向かう
部屋に入り荷物を隅に置く

「今回は、くじ引きじゃなくてジャンケンで順番を決めるわよ」

そしてじゃんけんの結果

一番：はる姉 二番：渉 三番：由香ちゃん 四番：僕：五番：亜
姫 六番：美里先輩

と言う順番になった

「それじゃあ美晴からね」

「ん・・・分かった」

「頑張つてね、はる姉」

「うん・・・」

そして、イントロが流れ始める曲は、水樹〇々の深〇

結果は、95点

「やっぱり美晴は上手いわね」

「ありがと・・・美里・・・」

「よし！次は俺だな」

渉がマイクを手取る

渉が選んだ曲は、T〇〇I〇の花唄

結果は、はる姉と同じく95点

「へえ〜兄貴って意外と歌上手かったのね」

「まあな、次は由香の番だぞ」

「分かってるわよ」

由香ちゃんが渉からマイクを受け取る

由香ちゃんの選んだ曲は、下川〇くにの君が〇るから

結果は、90点

「あ、兄貴なんかには負けた・・・」

「何かとはなんだ何かとは」

「でも、すごく上手だったよ由香ちゃん」

「あ、ありがとうございます。か、和人さん」

「次は僕だね」

「がんばれ〜和人君」

僕が選んだ曲は、L O a の O - k O z u n a i r o - 色

結果は、98点

「さすがね和人君は」

「そつつすね女の人の歌なのに98点もとるとはな」

「やっぱり性別が・・・」

「なんでそこでその話が出るんですか!?!」

「姉さ・・・兄さま・・・マイク・・・ください」

「今、姉さまって言おうとしたよね!?!」

「気のせい・・・です」

「気のせいじゃなかったよ、はい亜姫」

ツッコミを入れながら亜姫にマイクを渡す

「ありがとうございます・・・姉さま」

「言いきった!!!」

イントロが流れ始める曲は、田村〇かりの星〇の s p i c a

結果は、100点

「亜姫ちゃんって歌上手なんだね」

由香ちゃんが亜姫の歌を聴き感想を述べる

「そ、そんなこと・・・ない・・・です」

亜姫は顔を真っ赤にしながらそう答える。おそらくほめてもらえてうれしかったのだろう

「さて、いよいよ私の番ね」

「がんばってください美里先輩」

「まかせなさい!!」

そして曲が流れ始める曲は、植〇花菜のトイレの〇様とまさかのチヨイスだった

結果は、まさかの100点

「どんなもんよ!」

「まさかあの曲で100点をとるとはな・・・」

「うん、すごいよね」

それから僕たちは、今の順番でしばらくの間歌い続けた

そして何時間かが経ち僕たちはそろそろ帰ろうということになった

夕食は、帰り道にあるレストランで食べた

家に到着し僕たちは、しばらくテレビを見てくつろいでいた

そして順番でお風呂に入り、就寝することになった

今日は、疲れたので罰ゲームはなしだそうだがなみにボウリングでの負けたチームの代表が罰ゲームを受ける予定だったらしく僕としては、助かったというしかない。また女装なんかさせられたらまったもんじゃないし・・・

でも、今日も楽しい一日だった

第34話

第34話

僕は、いつものように皆で朝食を取っている

はる姉、美里先輩、由香ちゃん、渉はすでに起きているけど亜姫がまだ起きてきていない

「そついえば亜姫ちゃん、まだ起きてこないわね」

「私が起きた時は、まだぐっすり寝てましたけど」

「まあ、たまにはゆっくり寝かせてあげるのもいいんじゃないですか」

そんな事を話していると亜姫が起きてきた

「亜姫おはよう」

「・・・」

返事が返ってこない

「亜姫？」

亜姫はしばらく僕をジーと見つめた後、僕に抱きついてきた

「あ、亜姫!」

「あらあら亜姫ちゃん朝から大胆ねえ」

美里先輩が茶化すように僕たちを見ながらそう言った

「亜姫・・・和ちゃんから・・・離れる」

「・・・」

「亜姫、離れてくれないかな？」

「嫌・・・」

亜姫、少し力を入れギューとして僕の胸に頬をすりよせてきた

「和人、亜姫ちゃんいつもよりなんか甘えん坊じゃないか？」

「確かに、まさか・・・」

「なんか心当たりあるのか？」

「多分ね、とりあえずはる姉、体温計持ってきてくれないかな」

「ん・・・分かった」

僕の言ったことではる姉も気づいたのかすばやく体温計を持ってきてくれた

「ありがとう、はる姉」

僕は、はる姉から体温計を受け取ると口にくわえさせる

しばらくしてから啜えさせていた体温計を取る

体温計の温度は、38度と結構、熱が高かった

「やっぱり熱があるね。亜姫、食欲ある？」

僕がそう聞くと、亜姫は首を横に振った

「そっか、じゃあ薬飲んで寝てようか」

「はい……」

今度は、ちゃんと返事を返してくれた

「和人君、亜姫ちゃん風邪？」

「はい、熱も結構高いんで寝かせておかないといけませんね」

「よく亜姫ちゃんが熱だつてわかったな和人は」

「亜姫は、風邪をひくと甘えん坊になるんだよ」

「なんだその羨ましい特徴は」

「バカ兄貴！そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！亜姫ちゃん風邪で苦しいのに」

「そうだったなすまん和人」

「気にしないで渉」

「それより和人君、亜姫ちゃん部屋に連れて行かないと」

「そうですね。亜姫、部屋に戻って寝てないとだめだよ」

僕がそう言つと亜姫はボくとした感じでこっちを見ながら

「お姫様抱っこ……してください」

と言つてきた

「え！お姫様抱っこ！」

「ホントに甘えん坊ね今の亜姫ちゃん」

美里先輩が今のやり取りを見ながらそう言った

「しょうがない今回は特別だからね」

「はい……」

僕は、亜姫をお姫様抱っこして部屋まで連れていく

部屋に到着し扉を開けて亜姫をベッドに寝かせる

「最近、いろんなところに行ったから疲れが出たのかもね」

「兄さま……ごめんなさい……迷惑掛けて」

「迷惑なんかじゃないよ」

「ホントですか・・・？」

「うん」

「ありがとうございます」

「どういたしまして。今日は一日ゆっくり休むんだよ」

「わかりました・・・」

亜姫と話しているとコンコンと扉をたたく音がした

「はい、どうぞ」

僕がそう返事をする、はる姉が入ってきた

「薬・・・持ってきた」

「ありがとう、はる姉。亜姫、薬飲んでから寝ようか」

「はい・・・」

「亜姫・・・大丈夫？」

「大丈夫・・・心配かけて・・・ごめんなさい」

「ん・・・気にしないで・・・ゆっくり休んで」

はる姉は、薬を置いて部屋を出た

「さてと僕も下に降りて食器の片付けしないと」

僕も部屋を出ようと思いい立ち上がろうとした時、亜姫に服の袖を掴まれた

「どうしたの？」

「ここに居てください」

「でも……」

「お願い……します」

「やれやれ、分かった今日はここにいろよ」

僕がそう言つと、亜姫の表情が明るくなった

「ずっと、ここに居るから少し寝なさい」

亜姫は僕の言ったことに従い寝始めた

僕は、することもなくぼくとしていた

しばらくすると、また扉をたたく音が聞こえた

今度は美里先輩が入ってきた

「亜姫ちゃんの具合はどう？」

「今は、ゆっくり眠ってます」

「そう、和人君お昼はどうする？」

「ここで食べようかなと思ってます、亜姫に今日はずっとここにいてるって約束しましたし」

「そうじゃあお昼になったら持ってくるわね」

「ありがとうございます」

「ええ、他に必要なものとかあったら言ってね」

「それじゃあひとつお願いしてもいいですか？」

「何？」

「その、僕の部屋から適当に本とか持ってきてもらえませんか、自分で行きたいんですけど袖ずつと掴まれたままで動けないもので」

美里先輩は、袖を掴んでいる亜姫を見てクスクス笑いながら

「分かったわなんでもいいの？」

「はい、お願いします」

「まかせなさい」

美里先輩は、部屋を出て僕の部屋に行った

少ししてから美里先輩が何冊か本を持って戻ってきた

「とりあえず、目に入ったものを取って持ってきたわ」

「ありがとうございます。美里先輩」

「どういたしまして、それじゃあ下に居るから何かあったら携帯にメールでも入れてね」

「わかりました」

美里先輩は部屋を出てリビングに戻って行った

それから僕は、本を読みながら時間を潰した

しばらく本を読んでいて今の本を読み終えた時、時計を確認すると時刻は丁度12時になっていた

「ん・・・兄さま」

「亜姫、起きたの」

「はい・・・」

「なんか食べれそう?」

「少しお腹がすきました」

「そっかじゃあ何か作ってもらおうか」

僕は、連絡して何か作ってもらおうと思ひ携帯を手に取った瞬間、部屋の扉が開いた

「和人君、お昼持ってきたわよ」

「ありがとうございます美里先輩。ちょうど連絡しようと思ってたんです」

「なら良かったわ。うどんは和人君でたまご粥が亜姫ちゃんね」

「あろがとう……ございます……美里先輩」

「困った時は助け合いでしょ気にしないでいいのよ、亜姫ちゃん早く元気になってね」

「はい……」

「和人君、この本読み終えたのなら別の持ってこようか？」

「いいんですか？」

「もちろんよ」

「じゃあお願いしてもいいですか？」

「了解」

美里先輩が本を持って再び僕の部屋へと戻って行った

そして別の本を持って戻ってきた

「はい、別の本置いておくわね」

「どうもすみません何度も」

「気にしない気にしない、じゃあ私は下に戻るわね」

「はい」

美里先輩が下に戻って行った

「兄さま・・・お昼・・・食べましょう」

「そうだね」

その後、僕と亜姫はお昼を食べた

お昼を食べ終えた亜姫は薬を飲んで再び眠り始めた、僕も読書を再開した

そして、夕方になり亜姫が目を覚ました

「起きたの亜姫、だったら一回体温を測っておこうか」

「わかりました」

亜姫に体温計を渡して体温を測ってもらう

亜姫から体温計を受け取り体温を確認すると36度5分に下がっていた

「熱は下がったみたいだね」

「兄さまたちの・・・看病のおかげです」

「元気になってよかったよ。でも、夕方も一応薬は飲んどこうね」

「分かりました・・・」

時計を見ると時刻は6時になっていた

「もうこんな時間が亜姫夕食はここで食べる？」

「下で・・・皆と・・・食べたいです」

「うん、別も下がってるみたいだし分かった。じゃあ下に降りようか」

「はい・・・」

そして、僕と亜姫はリビングに向かった

リビングに向かうと皆が食事の準備をしていた

「お！和人に亜姫ちゃんどうかしたのか？」

「あれ和人君、もしかして夕食取りに来たの？」

「いえ、亜姫の熱も下がったみたいだしどうせなら皆と一緒に食べたいって亜姫が」

「亜姫・・・熱下がったの・・・和ちゃん？」

「うん、36度5分ぐらいだったからもう大丈夫だと思うよ」

「良かった・・・」

「それじゃあ食べましょうか」

「亜姫ちゃん、熱下がって良かったね」

「はい・・・心配かけて・・・ごめんなさい・・・由香さん」

「友達だもん、気にしないで」

「ありがとうございます」

そして、僕たちは皆で楽しく食事をとった

その後しばらくテレビを見て時間をつぶし、順番でお風呂に入った
亜姫はまだ病み上がりのため由香ちゃんと一緒に入ることになった
皆お風呂に入り今日はしばらく談笑してから寝ることになった

そして、就寝するため部屋に戻ることになったのだが

「兄さま・・・一緒に・・・寝ましょう」

「だからさすがにそれは駄目だよ」

亜姫が僕と一緒に寝ると聞かないのだ

「でも・・・今日は・・・ずっと一緒に・・・居るって言いました」

「確かに言ったけど、さすがに一緒に寝るのは」

「いいんじゃない和人君、今日ぐらい」

「そうだぞ和人、亜姫ちゃんもまだ病み上がりでもしかしたらまた熱が上がる可能性もあるんだからよ」

「和ちゃん・・・今日は・・・亜姫と・・・一緒に寝てあげて」

「分かったよ、今日は特別だよ」

「はい!・・・」

「それじゃあ、由香ちゃん今日は僕の部屋で寝てくれるかな?ベツド使っていいから」

「は、はい分かりました」

なぜか由香ちゃんの顔が赤い

「どうしたの由香ちゃん顔が赤いけどもしかして由香ちゃんも風邪?」

「そ、そういうわけじゃないです」

「和人君、この鈍感さがなければねえ」

「まっただくだな」

「?????」

こうして亜姫と一緒に寝ることになった僕は亜姫の部屋に行った

「今日は……すみません……兄さま……いろいろ我儘……
言って」

「気にしないで、たまには甘えるのもいいんじゃない」

「それじゃあ、そろそろ寝ようか」

「はい……兄さま……おやすみなさい」

「お休み、亜姫」

亜姫の熱も今日中に下がり一安心しながら僕は眠りについた

第35話

第35話

亜姫の熱から翌日、亜姫の風邪は完全に治りいつものように皆と朝食をとった

しかし、今日は亜姫が病み上がりだということもあり家でのんびりと過ごすことになった

まあ、もう一つの理由としては今日は久しぶりに雨が降っていてとてもじゃないが出掛けるのは無理だ。亜姫の病み上がりのときと重なってタイミング的にはちょっと良かったかなって思う

皆、部屋でダラダラとしている

僕と渉はリビングのソファアに座りテレビを見ていたが渉が立ち上がり僕の部屋に戻って行った

しばらくして戻ってきた渉の手にはいくつかのゲームソフトが握られていた

「和人、折角だしゲームやろうぜ」

「そうだね暇だしやろうか」

僕と渉はゲームの準備に取り掛かる

ゲームの準備も終わりゲームを起動させていると、美里先輩がやっ

てきた

「和人君達ゲームやるの？私も混ぜてよ」

「いいですよ多いほうが楽しいですし」

「だな、じゃあ他のみんなも呼ぼうぜ」

「そうだね、ちょっと呼んでくる」

僕は、二階に上がり最初に亜姫と由香ちゃんの所に向かった

扉を軽くノックすると中から返事が聞こえた

「はい……」

亜姫が部屋の扉をあける

「兄さま……何か用ですか？」

「和人さん、どうかしたんですか？」

「うん、今から涉と美里先輩とゲームをするんだけど亜姫と由香ちゃんもどうかと思って誘いに来たんだけど」

「わかりました……私も……やります」

「私も参加させてもらいますね」

「うん、じゃあ下に降りてくれる。僕は、はる姉を呼んでから行

くから」

「わかり・・・ました」

亜姫と由香ちゃんは下に降りていく

僕は、はる姉の部屋に向かう

そして部屋をノックする

「はい・・・どうぞ」

中から返事が聞こえ僕は部屋の扉をあける

部屋を開けると、読書中のはる姉がこっちを向いた

「めずらしいね・・・和ちゃんが・・・私の部屋に・・・来るなんて」

「うん、今から皆でテレビゲームやるからはる姉もどっかと思っ

「わかった・・・たまには・・・ゲームも良いかもね」

「じゃあ下に降りようか」

「うん・・・」

はる姉と下に降りる

「皆、おまたせ」

「おう、和人」

「早く始めましょ、和人君」

「はい」

「さて、皆そろったのはいいけど皆本君一体何のゲームなの？」

「格ゲーっすよ」

「格ゲーね、じゃあトーナメント形式にしましょうか」

「お！いいっすねそれ優勝者には何か商品つけて」

「といっても商品がないわね」

「そっいえばそっすね」

「じゃあ賞品は和人君にしましょう」

「え！僕ですか！」

「勝った人は、明日、和人君と一日二人っきりで出掛けることができるわ」

美里先輩がそう言った瞬間、美里先輩を除く女性陣がぴくつと反応した

「それじゃあ俺、メリットないんすけど」

渉が美里先輩の言ったことに意見する

「いいじゃない別に」

「よくないっすよ」

「じゃあ皆本君が優勝したら明日一日皆に命令ができるっていつの
でぶっっ?」

「マジっすか!うおお燃えてきたぜ」

「僕が勝ったらどうするんですか?」

「うっん、皆本君と同じでいいんじゃない」

「まあ、それでもいいですけど」

「じゃあ始めましょ」

「対戦の組み合わせはどうします?」

「毎度おなじみくじ引きで」

「分かりました」

こうして決まった対戦の組み合わせ及び順番は

第一試合 美里先輩VSはる姉 第二試合 亜姫VS由香ちゃん

第三試合 僕VS渉となった

相手も決まり早速勝負が始まった

「美晴手加減はしないわよ」

「今回は・・・美里でも・・・容赦はしない」

お互いにキャラクターを決めている

「なあ、和人」

「何、涉？」

「美晴先輩って格ゲーやったことあんの？」

「多分ないと思う」

「じゃあ美里先輩の方が有利だな」

「そうだね」

こうして勝負が始まったのだが・・・

「ああ！ちよつと、そこでその技は！」

なんと、はる姉が美里先輩と圧倒しているのだ美里先輩が弱いわけではない。しかし、はる姉の強さが半端じゃない、そしてほとんどHPを残して圧倒的な勝利を獲得した

「勝った・・・」

はる姉は珍しくガッツポーズを決めていた

「強すぎだろ美晴先輩」

「うん、はる姉格ゲーやったことあるの？」

「今日が・・・始めて」

「そうなの・・・」

「うん・・・」

そして、次は亜姫と由香ちゃんの番である

「由香さん・・・負けません」

「私だつて負けないよ亜姫ちゃん」

由香ちゃんと亜姫の勝負も互角の戦いが続いたが始めての亜姫はやっぱり操作が慣れてないせいで結局勝者は由香ちゃんになった

「兄さま・・・負けちゃいました」

亜姫が落ち込みながら僕にそう言った

「亜姫も格ゲー始めてだからね仕方がないよ」

「はい・・・」

「さて次は俺と和人だな」

「だね」

お互いキャラを選び勝負を始める

さすがに普段からやりなれている渉には苦戦させられたが僕も得意のキャラを使いそこそこの勝負ができたそして結果は僕の勝ちだった

「だー！負けた！」

「なんとか勝てた」

「和人なぜお前はこういう時に限って強いんだ」

「なぜって言われても」

こんなやりとりがしばらく続いていたが美里先輩が渉をなだめなんとか終わった

そして、勝ちあがった僕たちは三人なので全員とやって一番勝利数の多い人の勝ちというルールになった

まず僕とはる姉の対決、結果を聞くまでもないと思うけど僕の完敗。次は、はる姉と由香ちゃんだ由香ちゃんは攻撃重視のキャラではる姉を攻撃しまくってなんとか勝っていた。そして最後は僕と由香ちゃんの対戦だ由香ちゃんは今度はスピード重視のキャラで僕を翻弄しながら戦い勝利した

最終的な成績は

僕が2敗

はる姉が一勝一敗

由香ちゃんが二勝して

優勝は由香ちゃんになった

「優勝は由香ちゃんねじゃあ明日は由香ちゃんは和人君と二人つきりて出掛けるってことでいい？他に何か要望があるなら聞くけど？」

「い、いいえ和人さんとそ、その、ふ、二人つきりでいいです」

由香ちゃんが顔を真っ赤にしながら美里先輩に言った

「分かったわ和人君もそれでいい？」

「いいですよ」

その後、僕たちはお昼を食べた後今度は別のゲームで対戦していた

こんな感じで今日一日はダラダラと終わっていった

第36話

第36話

僕は今、着替えの真っ最中だ。というのも昨日のゲーム大会で優勝した人は僕と二人で買い物するということになり見事に優勝した由香ちゃんと出掛けるための準備をしているからだ

時刻は現在朝の九時半、朝食もとくに済ませ他のみんなもそれぞれ自分たちで自由な時間を過ごしている

必要なものを持ち準備も出来たのでリビングに行くことにする

リビングに行くのと涉に美里先輩、亜姫そしてはる姉はテレビを見たり読書をしていた

「和人、下りてきたのか」

「うん、準備も終わったし由香ちゃんは部屋？」

「ああ、あいつ服とか選ぶのめっちゃくちや長いからな」

「そっかじゃあ僕もテレビでも見とこうかな」

「和ちゃん・・・お茶いる？」

「貰おうかな」

「はい・・・」

「ありがとう。はる姉」

「ん……気にしないで」

しばらくお茶を飲みながらくつろいでいると由香ちゃんが下りてきた

「か、和人さん！待たせてしまつてすみません！」

「女の子なんだから準備に時間がかかるのは仕方ないよ」

「あ、ありがとうございます。そ、その今日はよろしくお願いしま
す」

「うん。よろしくじゃあそろそろ出掛けようか」

「は、はい」

「いつてらっしゃい二人とも。家のことは私たちに任せといて」

「よろしくお願いします美里先輩」

「由香さん……いつてらっしゃい」

「亜姫ちゃん、ごめんね私だけ和人さんと出掛けて」

「気にしないで……今日は……楽しんできて」

「うん、ありがとうとそれじゃ行ってくるね」

「はい・・・」

僕と由香ちゃんは家を出て歩き出した

「さて由香ちゃん、どこか行きたいところとかある？」

「え、えくと、見たい映画があるので映画館に行きませんか」

「じゃあそうしょうか」

僕たちは、いつも通り駅前まで到着した僕たちは映画館のほうに向かって歩き始めた

映画館に辿り着き、受付に向かう

「由香ちゃん、どの映画が見たいの」

「その、あれなんですけど」

そう言つて由香ちゃんが指さしたのは最近、テレビのCMでもよく見かけるホラー映画だった

「私、ホラー映画好きなんですけど一人じゃ怖くて」

「そっかじゃあチケット買わないと」

受付に行きチケットを二枚購入する

「いいんですか？私の分まで」

「気にしないのこういうのは男が払うものだしね」

「ありがとうございます」

「じゃあ中に入るうか」

「そうですね」

僕たちは、チケットに書いてある番号席に座る

しばらく座って待っていると映画が始まった

映画の内容は以外とクオリティが高く僕から見たら中々の作品だった

ふと横を見ると由香ちゃんが震えていた

「大丈夫由香ちゃん？」

「は、はい。だ、ただ、大丈夫です」

由香ちゃんは、そう答えているが明らかに声が震えているのがわかる

そんな事を聞いていると由香ちゃんが悲鳴を上げながら抱きついてきた

「ゆ、由香ちゃん!」

「あ!す、すいません和人さん」

「手つなぐ?」

「え？」

「手つないでるだけでも大分恐怖感とか違うと思うし」

「でも、いいんですか？」

「うん、由香ちゃんが良ければだけど」

「じゃあ、お願いします」

「うん」

僕は由香ちゃんの手をぎゅっと握る

そして二時間後、映画の終わった僕たちは近くの喫茶店で休憩していた

「はあ、怖かった」

由香ちゃんが紅茶を飲みながら映画の感想を言う

「あの映画、最近よくテレビのCMでやってたから気になってたんです」

「そっか、中々迫力あっておもしろかったね」

「はい」

「今お昼だし、ここで昼食取ってからまたどこか行こうか」

「そうですね」

僕たちは、昼食を取ってから喫茶店を出ることにした

昼食をとった僕たちはデパートに行くことにし喫茶店を出た

「和人さんは、何かデパートで見たいものがあるんですか？」

「うーん僕は特にないかな。あ、でも、涉に新作のゲームソフトがあつたら代わりに買ってきてくれって言われたからゲームショップに行きたいかな」

「またバカ兄貴は、すいません和人さんにはわかりいつも迷惑かけてしまって」

「別に気にしてないよ、ついでだしね」

僕と由香ちゃんが話しながら歩いていると

「おーい！由香」

後ろの方から由香ちゃんを呼ぶ声が聞こえた

聞こえた声の方を向くと女の子二人が由香ちゃんの方に走り寄ってきた

「美奈！優奈も！」

「和人さんもこんにちは」

「こんにちは」

「こんにちは。美奈ちゃんに優奈ちゃん」

「由香、和人とデート？」

「ち、違うわよ！今日は、昨日いろいろあって和人と出かけることになったただけなんだから！」

「へえ〜」

優奈ちゃんが意味深な笑みを浮かべながら由香ちゃんを見る

「ほ、ほんとに違うんだからね！」

「分かってる分かってる」

「絶対わかってないでしょ！」

「美奈ちゃんと優奈ちゃんは二人でお出かけかい？」

「はい！今日は、部活もないので」

「そうなんだ」

「和人さん、よければ私たちも一緒にでもいいですか？」

「え？」

「ちょ、ちょっと美奈!」

「だって、デートじゃないんでしょう? だったら私たちも一緒についていてもいいじゃない」

「それはそうだけど・・・」

「僕は、別にかまわないけど由香ちゃんはどう?」

「え、それは・・・別にいいです」

「じゃあ決まり!」

こうして美奈ちゃんと優奈ちゃんも一緒に来ることになった

デパートに到着し僕たちはとりあえず服を見に行くことになった

「いいんですか? 兄貴に頼まれた買い物後回しで」

「うん、今回は由香ちゃんに付き合うことになってるんだから涉のは後回しでも別にかまわないよ」

「和人さんこの服どう思いますか?」

優奈ちゃんがいつの間にか服を試着し僕にそれを見せてくる。優奈ちゃんが着ている服は赤を基調とした服のだが若干露出が激しい気がする

「う、うん可愛いと思うよ」

「あ、和人さん変な目で見ないで下さいよ」

「べ、別にそんなことないよ」

「ちょっと優奈！和人さんに失礼なこと言っちゃだめでしょ！」

「和人さ〜ん、こっちの服はどう思いますか？」

今度は美奈ちゃんが試着を済まして服を見せてきた。美奈ちゃんの服も優奈ちゃんと同じくらい露出の激しいもので目のやり場に困る服だった

「い、いいんじゃないかな」

「ちょっと二人とも和人さんが困ってるでしょ！」

「いいじゃない別に」

「良くないわよ！」

「まあまあ、由香ちゃん落ち着いて」

「でも、和人さん……」

「僕は、気にしてないからね」

僕が、由香ちゃんをなだめていると携帯が鳴った

「はい、もしもし」

「あ、和人」

「どうしたの涉？」

「ほら朝言ったゲームの事なんだけどさ」

「ああ、ごめんまだ買ってない」

「そうか、良かった」

「え？」

「いや、別のゲームにしようと思ってな。でも、買ってたらいけな
いから確認したんだ」

「そうなんだ。じゃあどのゲームがいいの？」

「別のアクションゲームのやつで最近発売された奴なんだけどそっ
ちは人気が高くてな売り切れてるかもしれないけど一応確認して
くれないか？」

「うんわかった、じゃあゲームショップに行ったら電話するよ」

「おう！じゃあな」

「うん」

電話を切り携帯をポケットにしまう

「兄貴からですか？」

「うん、別のゲームを買ってきてほしいって」

「自分で買いに行けばいいのに」

「アハハ、でも、ちょうどデパートにいるしついでだよ」

「それなら今から行ったらどうですか？」

「いいの？」

「はい、私たちはここにいますから」

「じゃあそうしようかな、すぐ戻って来るから」

僕は、走ってゲームショップまで向かう

ゲームショップについた僕は、涉に連絡を取りゲームのタイトルを聞いてからソフトを買う

ソフトを買った僕は、急いで由香ちゃんたちのところに向かった

さっきの服売り場に戻って由香ちゃんを確認したのだが、様子がおかしい

「ちょ、ちょっと止めてください」

「いいじゃねえかよ、俺たちと遊ぼうぜ」

「だから人を待ってるって言ってるでしょ！」

「由香ちゃん、美奈ちゃん、優奈ちゃん！」

「あ！和人さん」

三人が僕の方に駆け寄ってくる

「どうしたの一体？」

「和人さんがゲームショップの方に向かった後そのまま買い物をつけてたら絡まれて」

僕が男二人の方を見た

「あなた方は確か・・・」

由香ちゃん達に絡んできた男二人は以前にはる姉と亜姫に絡んできた人たちだったのだ

「てめえあの時の」

「知ってるんですか和人さん？」

「由香ちゃんには話したと思うけど前に僕を噴水に吹き飛ばした人たちだよ」

「この人たちが」

「前はよくもやってくれたな」

「今回は助けしてくれる仲間もいねえぞ」

僕は、深いため息をしながら二人を見る

「なんだその目は文句あんのかよ！」

「和人さん逃げましょう危ないですよ」

「そうですよ和人さん」

美奈ちゃんと優奈ちゃんが僕の心配をして逃げるよう提案してくれた

「大丈夫だよ」

「でも……」

「まあ、どのみち逃がさねえけどな」

周りの人も遠目でこちらを見ているが関わりたくないのだから知らないふりをしている

「ハア、あんたたちホントに学習しないね」

「ああ！」

「前はいきなり殴られたからぶっ飛ばされたけどその後あんたたち、僕と僕の友達に同じ目にあわされたの覚えてないの？」

「うるせえ！仲間がいなきゃてめえなんか唯のザコだろうがよ！」

「その言葉そのままあんたらに返すよ」

「調子こいてんじゃねえ！」

男二人が僕に向かって殴りかかってきた

「和人さん危ない！」

由香ちゃんが僕にそう叫ぶ

しかし、僕は、男二人に裏拳のような感じでアッパーを決める

二人は、僕の裏拳をモロにくらう。宙を舞って少し離れたところに吹っ飛んだ二人は僕を睨んでいる

「てめえ」

「僕は、暴力はあまり好きじゃないけど自分の知り合いに危険が迫るような事があれば話は別だ」

二人は僕を睨んだまま動かないおそろくアゴにもろにくらったから軽い脳震盪で動けないのだろう

「まだやりますか？できれば今の一撃だけで去ってけると嬉しいのですが」

「くそ！」

「おい行こうぜー！」

二人は、文句を言いながらもデパートの出口の方に向かって去って行った

「ふう」

「あの、和人さん大丈夫ですか」

「由香ちゃん・・・ごめんね怖い思いをさせて」

「いえ、私は別に」

「美奈ちゃんと優奈ちゃんも大丈夫？」

「はい、和人さんが守ってくれましたから」

「強いんですね和人さんって」

「そんなことはないよ」

「普段めつたに怒らない人が怒ると怖いっていうけどホントね」

「まあ、もう終わったことだし買い物を楽しもうよ。ね、由香ちゃん」

「はい！」

それから、しばらく買い物続けて夕方になったころ僕たちは帰ることにしデパートを出た

美奈ちゃんと優奈ちゃんは帰り道が違つらしく途中で別れることに

なつた

「じゃあ私たちはこれで今日は楽しかったです和人さん」

「また、いつか遊びましょうね」

「うん、帰りは気をつけてね」

「はい！」

お別れをし僕と由香ちゃんも家に戻るため歩き始める

「今日は一日ありがとうございました和人さん」

「どういたしまして。由香ちゃんは楽しかった？」

「はい！」

「そっかそれならよかった」

こうして僕と由香ちゃんのお出かけは終わった

第37話

第37話

お泊りが始まって今日は丁度一週間経った8月15日

今日は、前から言っていたプールに行く日だ僕と渉はすでに準備を済ませリビングで待っているところだ

女性陣はまだ準備が終わっていないようでそれぞれ部屋で準備をしている

「楽しみだなあ〜プール」

「うん、人気のところだしおもしろそうだよな」

「そういえば和人」

「なに渉？」

「昨日、由香と出かけた時何かあったか？」

「どろしてそう思うの？」

「なんでと聞かれると困るけどなんとなくだな」

「鋭いね渉は」

「じゃあやっぱりなんかあったのか？」

「前に僕が噴水に吹っ飛ばされたの覚えてる？」

「ああ、あの時な」

「その時の二人組が由香ちゃん達に絡んでたんだ」

「和人はその時何処にいたんだよ」

「渉のゲーム買いに行ってたよすぐに電話かけなおしたでしょ」

「そうか」

「ごめんね僕が目を離さないでそのままそこにいればよかった」

「気にすんな二人に怪我ないところを見るとお前がどうにかしたんだろ」

「まあ一応ね」

「ならいいさ悪いなきなりこんなこと聞いちまって」

「家族思いだからね渉は」

「それはお互い様だろ」

「アハハ確かに」

話を終えた瞬間、皆が降りてきた

「和人さん兄貴と何話してたんですか？」

「なんでもない世間話だよ」

「そうですか」

「ごめんねえ〜二人ともまたせて」

「そんなことないですよ」

「そう？それじゃ出発しましょうか？」

「そうっすね」

こうして僕たちは、プールに行くため家を出た

プールは電車をいくつか乗り継がないといけない

駅に着いた僕たちは切符を買って電車に乗り込む

電車の中は思ったよりも人が多くなるとか四人分の席は見つかった
ので女性陣を座らせて僕たちは荷物を足に挟むようにして吊皮を掴む

そして電車が走り出した

「思ったより人が多いわね」

「夏休みですからね皆も遊びに行ったりするんじゃないですか」

「そうかもねえ〜」

「皆も考えることは同じなんすかね」

「そうだね」

しばらくして目的の駅に到着し電車を降りる

改札口を抜けプールまで歩いて向かう

「暑いなあ〜」

「今まで涼しい電車の中にいたからさらに暑く感じるよね」

「そうねでもプールに行けばまた涼しくなるんだから頑張っていきましょ」

「ですね」

しばらく歩いて行くとプールが見えてきた

「お！見えてきたな！早く行こうぜ！」

「うん、そうだね」

歩き始めてからしばらくしてプールに到着した

「さて行くか」

「待って渉」

「なんだ」

「その前に由香ちゃんの分の入場チケット買わないと」

「そういえばそうだったな」

「買って来るからちょっと待ってて」

「すみません私の分なのに和人さんに買わせてしまって」

「前にも言ったでしょ気にしなくていいって」

僕は、急いでチケットを買いに行った

チケットを購入して皆のところに戻る

「おまたせ皆」

「それじゃあ行きましょ」

「そうですね。はい由香ちゃんの分のチケット」

「ありがとうございます和人さん」

僕たちは、入場口に向かいチケットを渡しプールへと入る

更衣室の前で美里先輩が集合場所を決める

「とりあえず各自着替えたら更衣室付近で待っててね」

「分かりました」

「じゃあ後でね」

「行こうぜ和人」

「うん」

僕と渉も更衣室に入り着替えを始める

着替えを済ませた僕と渉は美里先輩に言われた通り更衣室付近で待っていた

「遅いな〜美里先輩たち」

「しょうがないでしょ僕たちはすぐ着替えられるけど女性はそうは行かないでしょ」

「確かにな」

そんな話をしていると、女性の二人組みが話しかけてきた

「ねえねえ君たち二人」

「私たちと遊ばない」

「えっとすいません人を待たせてるんで」

「そうなの残念」

そう言つて女性の二人組は他のところへ去つて行つた

去るのと同時に美里先輩たちが更衣室から出てきた

「和人君、今の人たち誰？」

「一緒に遊ばないかっていきなり誘われたんです」

「そんなの和人君たち顔はいいからねえ、ナンパされても無理はないけど」

「和ちゃん・・・浮気は・・・駄目」

「誰に対しての浮気なのさ・・・」

「まあいいじゃないとりあえず遊びましょ」

「兄さま・・・行きましょ」

亜姫が強引に腕をひいてくる

「う、うん」

「和ちゃんは・・・私と・・・行く」

はる姉も反対の腕をひいてくる

「ちよ、ちよつと二人とも皆で行けばいいでしょ」

二人はしぶしぶといった感じで離れてくれた

「モテモテね和人君は」

「喜んでいいのかどうか微妙です」

そんなこんなで集合した僕たちはウォーターライダーや流れるプールなど様々タイプのプールで遊んだ

しばらくして時計を見るとお昼だったのでいったんプールから上がりお昼を食べることにした

「何食べますか？」

「適当なものでいいんじゃない色々買って皆で食べましょ」

「それもいいかもしれませんね」

僕たちは、それぞれいろんなものを買ってテーブルにおいて食べ始めた

そして、お昼も食べ終わり僕たちはしばらく休んでしばらくしてからまた遊び始めた

僕たちは、プールでボール遊びしているとふと誰かとぶつかってしまった

「すみませんよそ見してて」

相手の人がすぐに謝ってきた

「こちらこそすいません」

そう言いながら相手の方を向くとそこには僕の知っている人物がいた

「あれ和人さん？」

「なんで優菜ちゃんがここに？」

「どうかしたのか和人？」

お互い疑問に思っていると皆がこちらに集まった

「優菜どうかしたの？」

優菜ちゃんの方も友達的美奈ちゃんと来ていたらしく美奈ちゃんもこちらに来た

「なんで美奈と優菜がここにいるのよ！」

「あれ由香じゃない」

「由香ちゃんの知り合い？」

美里先輩が僕に聞いてくる

「由香ちゃんと同じ学校の友達です」

「へえ〜そうなの」

「由香も遊びに来てたんだ」

「まあね」

「由香後ろの人たちは？」

美奈ちゃんが由香ちゃんの後ろに居るはる姉達をみながらそう聞いた

「右から順に和人さんのお姉さんで美晴さん妹の亜姫ちゃん美晴さんの友達の美里さん」

「よろしくね」

「よろしく・・・」

「よろしく・・・おねがいます」

「私の友達の瀬戸内美奈と神崎優菜です」

「よろしくおねがいます！」

「はじめまして！」

「まさかここで美奈ちゃんと優菜ちゃんに会うなんてね」

「そうですね私たちもビックリです」

「美奈ちゃんと優菜ちゃん達も俺たちと一緒に遊ぼうぜ」

渉が二人に対してそんな提案をした

「いいんですか？」

「そうねその方が楽しいかもしれないわね」

「そうですね」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

こうして優菜ちゃんと美奈ちゃんも加わり遊ぶことになった

それから遊びつくした僕たちはそろそろ帰宅しようと思いついてプールから上がり更衣室に戻って着替えを始めた

着替えも終わり皆集合し駅に向かって歩き始める

「いや〜遊んだ遊んだ」

「ちょっと遊び過ぎたね、疲れたよ」

「そうね」

「でも・・・楽しかった」

「そうだね、はる姉」

「私たちも今日は楽しかったですありがとうございます」

「気にしないでいいのよ皆で遊んだほうが楽しいしね」

駅に到着しキップを買って電車に乗る

しばらく電車に揺られ駅に到着し改札口を通り駅から出る

「さて和人んちまでがんばって帰りますか」

「夕食はどうするっ..」

「何かあるもので作ればいいんじゃない」

「何があつたかなあ..」

「和人さんって料理できるんですか？」

僕が夕食の事を皆と話し合っていると優菜ちゃんが質問してきた

「うん、一応ね」

「すごいですね私と美奈なんか全然料理できないのに」

「料理できる男の人ってなんかかっこいいよね！」

「そんなことないよ」

しばらく話しながら歩いていると美奈ちゃんと優菜ちゃんとわかれるところまでやってきた

「じゃあ私たちはこれで今日は楽しかったです」

「また遊びましょうね」

「帰りは気をつけてね」

二人は手を振りながら元気に帰って行った

「さて私たちも帰りましょうか」

「そうですね」

僕たちも自分の家へと帰って行った

第38話

第38話

「やりつくしたわ」

「え？」

プールに言った次の日、僕たちは朝食も済ませのんびりしていると
き突然、美里先輩がそんなことを言った

他のみんなも美里先輩の方を向いている

ちなみに亜姫とはる姉はお出かけ中だ

「だから、夏休みの前に言った私の目標」

「ああなるほど」

美里先輩の言ったことがようやく理解できた

つまり、美里先輩は夏休み前に僕の家泊まりたいと言ってそれから
ら行きたい場所などを話し合っただけでそれを昨日で全て行ってしまった
ということなのだろう

「確かに全部行ったすね」

僕の隣にいた渉がそう言った

「でも、どうしたんですか突然？」

「後一週間、何かイベント的なものはないかしらと思ってね」

「そんな突然」

「だって暇じゃない」

「まあ、確かにそうですね」

「でしょ。だから何かないかなと思ったのよ」

「でも、ほとんど遊びに行ったじゃないっすかもう遊びに行くところなんて全然ないっすよ」

渉がもつともな意見を言った

「うっん、何かないかしらね」

美里先輩が悩んでいるとリビングの扉が開いた

「ただいま・・・和ちゃん」

「兄さま・・・ただいま帰りました」

「あ、二人ともお帰り」

外出していた亜姫とはる姉が帰ってきた

「和ちゃん・・・どうかしたの？」

「美里先輩がもういろんな場所に遊びに行ったから何かイベントはないかって悩んでたんだよ」

「それなら・・・これ」

そう言うってはる姉が見せたのは一つの御祝儀袋のようなもの

「はる姉、何それ」

「招待券・・・三泊四日温泉旅行の」

「ふくんそうなんだ、って！温泉旅行！」

僕以外のみんなもはる姉の発言に驚いている。でも、一緒に外出していた亜姫は特に驚いた様子はなかった

「美晴、どこで手に入れたのよそんなの」

「外出した時・・・くじ引きやってるの見つけて・・・手元に券があったから・・・やったら・・・当たった」

「す、すごいね」

「ん・・・だから・・・温泉旅行・・・行く」

ということとで美里先輩の悩みははる姉の恐るべき強運で見事に解決された

「で・・・温泉旅行いつからなの美晴？」

「夏休み中なら・・・いつでもって・・・言ってた」

「それなら丁度いいわね」

「でも、人数とか大丈夫なのはる姉？」

「十人以上なら・・・問題ないって・・・一応これ当てた時に・・・人数聞かれたから六人って答えたけど・・・増えるようなら・・・連絡くれって・・・言ってた」

「ずいぶん太っ腹だな」

「そうだねしかも三泊四日なんて費用も結構掛かりそうだけど」

「美晴十人までなら増えてもいいのよね？」

「そう・・・言ってた」

「じゃあ由香ちゃんのお友達も呼びましょう」

「え？いいんですか？」

「いいわよ人数は多いほうが楽しいしね」

「じゃあ連絡取ってみますね」

由香ちゃんは携帯電話を取り出して優菜ちゃんと美奈ちゃんに連絡を取り合ってみる

数分後、携帯をしまった由香ちゃんが少し離れた所で電話をしていたが戻ってきた

「あの・・・二人とも大丈夫だって言っていました」

「なら決定ね明日が楽しみだわ」

こうして明日から三泊四日の温泉旅行が決まった

とりあえず今日のところは家でまったり過ごすことになった

お昼も簡単なものを作り食べた

そして午後僕は、ソファアールでしばらく本を読んでいたが読み終わったので部屋に本をしまいに行く

部屋に入り本棚に本をしまう

「全部何回かよんじやったからなあ、本屋にでも行こうかな」

そう思い、僕は着替えて財布などを持って下に降りる

「あれ和人君出かけるの？」

下に降りた瞬間、僕を見つけた美里先輩がそう聞いてくる

「ええ、ちよつと本屋に」

「和ちゃん・・・私も付いて行って・・・いい？」

「うん、いいけどはる姉、朝出かけた時買わなかったの？」

「お昼の材料だけ・・・買って・・・午後に行けばいいと・・・思ったから」

「そうなんだ」

「準備して来るから・・・少し待ってて」

「うん、分かった」

はる姉は二階に上がって行った

少ししてはる姉が下りてきた

「じゃあ行くこうか」

「うん・・・」

家を出て、本屋へと向かう

本屋へと向かう道で僕とはる姉は互いに他愛もない話をしながら本屋へとたどり着いた

本屋に入り僕とはる姉は目的の本が別の場所にあるので一旦別行動にすることにした

僕は、とりあえず適当に見てみて何か面白いのがないか探してみる。一冊今集めているのとは違うが面白そうな本があったのでそのホント今集めている本の続きの計二冊の本を買う事にした

レジに向かい買い物を買った僕は、はる姉が居るであろうコーナ
ーのところに向かった

「はる姉、ほしい本あった？」

「うん・・・でも・・・お金が足りない」

「そうなの？」

「ちゃんと持ってきたと・・・思ったんだけど」

「じゃあ僕が払ってあげるよ」

「いいの・・・？」

「うん」

「ありがと・・・後でちゃんと・・・返すから」

「そんなの気にしなくていいよ」

はる姉から本を受け取り、レジに言って会計を済ます

会計を済ませた僕は、袋に入ったはる姉の本を渡す

「はい、はる姉」

「ありがと・・・和ちゃん」

「どういたしまして。じゃあ帰ろうか」

「うん・・・」

本屋を出て僕とはる姉は、家に向かって歩き始める

意外と時間を使っていたらしく時刻は現在、四時になっていた

「結構、時間使ってたみたいだね」

「うん・・・夕方なのに・・・まだまだ・・・暑いね」

「そうだね夏真っ盛りって感じだね」

「明日は・・・温泉・・・楽しみ」

「はる姉、温泉好きだもんね」

「和ちゃんは・・・温泉嫌い？」

「僕も好きだよ温泉」

「一緒に入る？」

「な、何言ってるのさ！はる姉」

「姉弟だから問題ない」

「問題才オアリだよ！」

良くわからない会話をしながら僕とはる姉は家に到着した

家の中に入り、リビングに向かうと美里先輩がキッチンで夕食の準備をしているのが見えた

「和人君に美晴、お帰りなさい」

「ただいまです美里先輩」

「ただいま・・・美里」

「すみません夕食の準備させちゃって」

「気にしないでいいのよ、夕食にはまだ早いから少し料理は置いておくわね」

「ありがとうございます」

帰ってきた僕は、買ってきた本を自分の部屋にしまいに行った

そして、下に降りてリビングでイスに座って一息つく

しばらくして夕食の時間帯になってきたので皆でお皿などをそろえて食事を始める

今晚のメニューはから揚げに里芋の煮つ転がしそして和風のサラダとなっている

夕食を食べ終えた僕たちは、お風呂を沸かして各自で入った

そして、風呂から上がった皆は明日の旅行のための準備を始めていた
荷物などを整え一か所にまとめておいて僕たちは各自の部屋に戻り
しばらく時間をつぶして就寝した

明日の旅行に備えて

第39話

第39話

時刻は朝の7時50分僕たちは今、駅前に居る

昨日、はる姉が当てた温泉旅行に行くためだ、そして今僕たちが待っているのは、由香ちゃんの友達的美奈ちゃんと優菜ちゃんだ。僕たちはお泊りの最中なのでそのまま家を出ればいいけど二人はそうもいかないので集合場所を朝の8時の駅前に指定したのだ

「遅いなあ〜二人とも」

ボ〜としながら待っていると由香ちゃんがぼつりとそう言った

「ちょっと早く来過ぎたかな」

「もうそろそろ来るんじゃないか」

そう話し始めた途端に二人の姿が見えた

二人はあわてた様子でこちらに走ってきた

「す、すいません。遅れてしまって」

「荷物があつて走りづらくて」

二人があわてて謝罪をする

「もう二人とも遅いよ！」

由香ちゃんが二人に対して注意をする

「ホントにごめんね」

「ごめん由香」

二人がホントに申し訳なさそうに謝る

「まあまあ由香ちゃん、まだ集合時間になってないし別にいいじゃない」

「か、和人さん」

「だな、こっちが出るのが早すぎたせいもあるしな」

「そうよ、時間はあるんだからそんなに謝らなくていいわよ」

僕に続き、渉と美里先輩がそう言った

「和ちゃん・・・そろそろ・・・行かないと」

はる姉が時計を確認しながら言った

「そうだね」

皆が自分の荷物を持ちながら移動を始める

今回は、電車ではなく新幹線で向かうことになる

切符を買い改札口を抜けてすでに止まっていた新幹線に乗り込む、僕たちは自由席なので自分たち席を決める

「和ちゃん……一緒に……座ろ」

「兄さま……一緒に座りましょう」

「うん、いいよ」

席は、イスが三つのところがあるのでそこに亜姫・僕・はる姉その前の方の席に由香ちゃん・渉・美里先輩そして席が二つのところに美奈ちゃん・優菜ちゃんと座っている

新幹線が動き始め僕たちは荷物を上に置いた。僕たちが行く駅は、到着に二時間ぐらいかかるのでトランプや談笑したりして時間をつぶしたりした

しばらくして、朝起きるのが早かったためか亜姫がウトウトし始めた

「亜姫、眠いの?」

「はい……」

「到着したら起こしてあげるから、僕の肩に寄りかかって寝てていいよ」

「ありがとうございます」

亜姫はそう言うってから僕の肩に寄りかかり寝始めた

「亜姫ちゃん、寝ちゃったの？」

前の席にいた美里先輩がこちらに顔を出して僕に聞いてきた

「はい、朝起きるの早かったですからね」

「確かにねそうね」

「和人、このお菓子うまいぞ食ってみるよ」

渉もこちらに向けて僕にお菓子をすすめてきた

「ありがとう、渉」

僕は渉からお菓子を受け取り食べる

「しかし、亜姫ちゃん良く寝てるな」

「そうね、すごく幸せそうな顔してるわ」

「まあ、和人に寄りかかって寝てるからな」

「どづいづいと？」

「和ちゃんの・・・隣に居ると・・・安心する」

隣に居たはる姉がそう言った

「そうかな？」

「和人さんは、やさしいですから」

由香ちゃんも話に混ざり僕の方を向いてそう言った

「ありがとう」

「亜姫ちゃんが寝てるならあまり騒がないほうがいいわね少し声を小さくしましょう」

「そうつすね」

「はい」

美里先輩たちは声を小さくして話を続けた

しばらくして到着する駅が近くなってきたので亜姫を起こすことにした

「亜姫、そろそろ着くから起きて」

「ふみゆ・・・はい・・・兄さま」

亜姫は若干可愛い声を出して目覚めた

「良く眠れた？」

「はい・・・」

「そっか」

「和人、そろそろ駅に着くから荷物降ろしとこうぜ」

「そうだね」

僕と渉は席から立ち皆の荷物を下ろす

降ろした荷物を皆に渡す

そして、駅に着き僕たちは荷物を持って新幹線から降りる

駅を出て旅館までは徒歩で十分ぐらいと言っていたので僕たちは旅館に向かって歩き始める

「ずいぶんのどかなところだな」

「そうだね自然がいっぱいいいところだよ」

「旅館の近くには海もあるらしいわよ」

「明後日には花火大会もあるみたいだし楽しみですね」

そんな話をしながら歩いていると旅館が見えてきた

旅館に到着し中に入ると女将と思わしき人がこちらにやってきた

「お待ちしております、ご予約いただいた文弥様ですね」

「はい」

「私は、当旅館の女将をしている夏目と申します。さっそくお部屋の方へとご案内させていただきます」

「よろしくお願いします」

夏目さんに案内され僕たちは部屋へと向かう

部屋に到着するとそこにはかなり広めの部屋が用意されていた

「今回は八名様ということで広めの部屋をご用意させていただきました。お休みになる時は男女で分けれるようにもなっております」

「ありがとうございます」

「何かありましたらお呼び下さい」

夏目さんは、僕たちにそう言って別の仕事へと戻って行った

僕たちは部屋に入り荷物を置く

僕たちは、しばらく休憩して置いてあったパンフレットみたいなものを見た

「へえ〜露天風呂もあるのね」

「楽しみ・・・」

「その前に、海行くわよ！」

「もう行くんですか!?!」

「もちろんよ！」

「プールに行ったけど海はまた別モノですよね」

美里先輩の発言に優菜ちゃんがそう言った

「優菜ちゃん分かってるわね」

「いや〜それほどでも」

美里先輩に褒められ優菜ちゃんが照れている

海に行くことになった僕たちは、水着や財布を取り出し中に入れておいた少し小さめのカバンに入れて旅館を出ることにした

旅館から海まではそんなに時間もかからないのですぐに着いた

更衣室を見つけてそこに向かい中に入る前に美里先輩からビーチパラソルと砂浜に敷くためであるうシートを渡された

「多分和人君たちの方が着替えが早いだろうからパラソルの設置お願いね」

「分かりました」

「じゃあ、後でね」

「はい」

それぞれ更衣室に入り水着に着替える

早々と着替えをすませた僕と渉は手ごろな場所を見つけてパラソルを設置して皆が来るのを待っている

「結構にぎわってるな」

渉が周りを見ながら僕にそう言った

「そうだね」

しばらく待っていると女性陣がやってきた

「二人ともお待たせ」

美里先輩達が手を振りながらこちらに向かって来る

周りの男の人たちが皆の方を見て見とれている

美少女が集まってるのだから無理はないけど

「どうかしたの・・・和ちゃん？」

はる姉が僕がボーとしてると思ったのか顔をみて聞いてくる

「皆、すごいなあ」と思って

「どっしして？」

「だって他の男の人がはる姉たちを見てみとれてたよ」

「だなそしてこっちには殺意のこもった視線が・・・」

渉がそう言いながら周りを見る

「それは言ったら負けだよ渉」

「すまん」

渉の言うとおりはる姉がこちらに近づいてきて話を始めたあたりから殺気のコもった視線がこちらにもものすごく突き刺さっているのだ
僕たちは、お昼を食べるため海の家でいろいろ食べ物を買って皆で食べた

しばらくすると

「さて皆で遊びましょうか」

そう言つて美里先輩が持ってきたカバンからビーチボールを取り出す

「そうですね」

「それじゃあチーム分けしましょ」

こうして決めたチームは、僕の方に由香ちゃん・優菜ちゃん・美奈ちゃん

渉の方に、美里先輩・はる姉・亜姫となった

「よろしくね」

「は、はい。よろしくお願ひします和人さん」

「私たちがいるから勝つたも当然です！」

「まかせてください！」

「和人の方はかなり強くなつたな」

「そうだね全員現役のバレー部だし」

「でも俺らも負けなげ」

「こつちだつて」

そして、勝負が始まつた

渉の方も皆、運動神経がいいのでなかなかの接戦だつた

しばらくして試合も終わり海で泳いでいた僕は休憩している美里先輩とはる姉の方に目をやると男の人たちが美里先輩とはる姉に声をかけていたさつきからいるんな人が声をかけているがことごとく玉砕していった。しかし、今回の人たちは少し強情な人らしく追い払うのに時間がかかつていた

僕はいったん泳ぐのを止めてはる姉たちのところに向かう

「あら和人君、どうかしたの？」

戻ってきた僕に美里先輩が不思議そうな顔で聞いてきた

「いえ少し休憩しようかなと」

「そうなの」

「和ちゃん・・・飲み物」

「ありがとう、はる姉」

「ん・・・」

僕は、はる姉から飲み物を受け取って飲む

それから僕は遊んでる他のみんなを美里先輩とはる姉と一緒に見ていた

そろそろ夕方なので旅館に戻るため、パラソルなどを片付けて皆を呼び戻す

更衣室に行き着替えて、旅館に戻るため歩きだす

「ふう、疲れたわね」

「そうですね」

「それにしても美里先輩と美晴先輩はめちゃくちゃナンパされてたっすね」

「ものすごく迷惑だったわ」

「追い払う方が・・・疲れた」

「大変だったね、はる姉」

「でも、ありがとね和人君」

「何がですか？」

「和人君、途中で戻ってきたでしょ休憩って言って」

「そうですね」

「あの後からナンパが全然来なくなっただけ助かったのよ」

「別に、僕は何もしてないですし」

「和人君、ホントは私たちが困ってるの見て戻ってきたんでしょ」

「そうなの・・・和ちゃん？」

「まあ、それもあるかな」

「和人君、やさしいから私たちの代わりに男の人を追い払おうとしたんでしょ」

「しつこい人もいましたからね」

「和人君らしいわね」

「そういう性分ですから」

そんな話をしながら旅館に到着した

第40話

第40話

旅館に戻り、しばらく部屋でゆっくりしていると

「皆さま、夕食ができたのでお持ちいたしますがよろしいですか？」

夏目さんが部屋にやってきて僕たちにそう聞いてきた

「はい、お願いします」

「かしこまりました、少々お待ちください」

そう言って夏目さんは、料理を持ってくるために戻って行った

「楽しみねえ〜どんな料理が出てくるのかしら」

「楽しみですね」

少しして、夏目さんが料理を持ってきた

料理を次々に置いて、置き終わった夏目さんは「では、〜ゆっくり
と言って再び仕事に戻って行った

「早く食べようぜ和人」

「そつだね僕もお腹すいちゃった」

僕たちは席について料理を食べ始める

「おいしいわねこのお刺身！鮮度抜群」

「この天ぷらもおいしいぜ！」

「お味噌汁も・・・ダシが良く出てて・・・おいしい」

各々、料理の感想を述べている、確かにここの旅館の料理はかなりの絶品だ

僕も料理を食べていると、横から服をクイクイっと引っ張られた

引っ張られた方を向くと亜姫がこちらを見つめていた

「どうかしたの、亜姫？」

「兄さま・・・あゝん」

亜姫が料理をこちらに向けてくる

「い、いいよ自分で食べられるから」

僕がそう言うと亜姫はシュンっとなってしまった

「わ、分かったからそんなに落ち込まないでよ、あゝん」

僕が口をあけると、亜姫の表情がパアッと明るくなる、そして僕に料理を食べさせてくる

「おいしいですか・・・兄さま？」

「うん、おいしいよ」

「和ちゃん・・・今度はこっち・・・あ〜ん」

「は、はる姉まで、わ、分かったよあ〜ん」

僕は、料理をパクつと食べる

「ど〜・・・？」

「おいしいよ」

「ん・・・良かった」

「由香もやったらあ〜んて」

「へ、変なこと言わないでよ美奈」

「いいじゃない、やったら」

「優菜まで」

「由香がやらないなら私がやるのかな」

「え！」

「和人さん」

「何、優菜ちゃん？」

「はい、あ〜ん」

「え！ゆ、優菜ちゃんまで」

「私がやったらだめなんですか？」

「そ、そういうことじゃないけど」

「じゃあ、あ〜ん」

「え、え〜と、あ〜ん」

僕は、優奈ちゃんが差し出した料理を食べる

「おいしいよ、ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして〜」

「優菜だけずるいわよ、和人さん私もあ〜ん」

「美奈ちゃんまで・・・あ〜ん」

美奈ちゃんの差し出した料理を食べる

「おいしいね、ありがとう」

「どういたしまして、さあ次は由香の番よ」

「わ、私も！」

「もちろんよ」

「いいですか、和人さん？」

「ま、まあ」

「ほら早く」

「そ、それじゃあ、あ〜ん」

由香ちゃんの差し出してきた料理を食べる

「おいしいよ、ありがとう」

「い、いえ／＼／」

由香ちゃんは、顔を真っ赤にして黙ってしまった

「由香ちゃん、大丈夫熱でもあるの顔が赤いけど」

「だ、大丈夫です！」

「それならいいけど」

その後も各々、料理を楽しみながら食事の時間を過ごした

食事を終えて、僕たちは少し休憩を取っていた

「ふう、食った食った」

「すごくおいしかったよね」

「だな」

「お茶でも淹れようか？」

「いいのか？」

「別にいいよ」

「じゃあ悪いけど頼む」

「了解」

僕は、部屋に常備してある保温ポッドに入っているお湯を確認して皆の分も淹れようと人数分の湯呑みを用意する

お茶を入れて、お茶の入った湯呑みをお盆において、皆のところへ運ぶ

「はい、涉」

「おお、サンキュー」

「はい、はる姉、亜姫」

「ありがと、和ちゃん」

「ありがとうございます……」

「美里先輩、どうぞ」

「悪いわね、和人君」

「気にしないでください」

「由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃん、お茶どうぞ」

「ありがとうございます、和人さん」

「ありがとうございます、いただきますね」

「すみません、いただきますね和人さん」

皆、一斉にズズと音をたててお茶を飲む

「……おいしい!」「……」

「うわ、ビックリした!」

「すごくおいしいわ和人君!」

「ただのパックのしかも粉状のお茶なのにどうしてこんなにおいしいんだ」

「和人さん、他に何か入れたんですか?」

「別に何も入れてないよ」

「それでこの味はすごいわね」

「ありがとうございます」

僕たちは、お茶を飲み終えて、お風呂に向かうことになった
必要なものを持って温泉へと向かう

「それじゃあ、後でねえ」

美里先輩が手を振りながら、女湯の方へと入っていく

「俺たちもさっさと行こうぜ」

「そっだね」

僕たちも男湯と書かれたのれんをくぐって温泉に向かう

第41話

第41話

【男性SIDE】

「おお〜意外と広いな!」

渉が温泉を見ながら驚きの声をあげていた

「そつだね」

僕たちは、体を洗い温泉に入る

「ふう〜いい湯だね」

「ああ、他にも色々な風呂があるみたいだからもうちよっとしたら周って見ようぜ!」

「うん、いいよ面白そうだね」

その後、様々なお風呂を回って再び最初の風呂に浸かった

「この旅館いいないろんな風呂があるし、飯もつまかったし」

「ホントにね、これもはる姉のおかげだね」

「だな」

「なあ、和人」

「何？」

「お前、彼女とか作らないのか？」

「どうしたの急に？」

「いや何となくな、お前モテそうなのにそういう話聞かないし」

「僕がモテるわけじゃないでしょ、それを言ったら涉だってそういう話聞かないじゃない」

「うっ！痛いところを突いてくるな」

「先に言ったのは涉でしょ。それで、そうなの涉運動できるし容姿もいいからモテそうなのに」

「今どき、運動できてモテるのは中学生までだ。はあ、俺も彼女ほしいな〜」

「そのうちできるよ涉なら」

「そう願っばかりだぜ。で結局和人はどうなんだ？彼女ほしくないのか？」

「うっん、良くわかんないんだよね。自分でも」

「好きな娘とかいないのか？」

「特にはね」

「はあ、こりゃあ由香も大変だな」

「どうしてここで由香ちゃんが出てくるのさ？」

「なんでもねえよ、そろそろ上がろうぜ」

「それもそうだね」

僕たちは、お風呂を出ることにした

【女性SIDE】

「結構・・・広い」

「そうね、種類も多いみたいだし」

「早く・・・入る」

「楽しみ・・・です」

私たちは、お風呂に浸かる

「由香、あっちのお風呂に行ってみようよ」

「まだ浸かったばかりでしょ、もう少しこの温泉に浸かってようよ」

「それもそうね、他の人たちのスタイルも気になるし」

「いや、そういうことじゃなくて」

「スタイルっていえば由香って日焼け全然しなわね」

「そうかな、そういう優菜と美奈だって全然日焼けしてないじゃない」

「私と美奈は、日焼け止めを塗ってるからよ。でも、由香は塗ってなくても日焼けしないじゃない」

「そうかな」

「そうよ」

「でも、亜姫ちゃんや美晴さん、美里さんだって日焼けしてないし・・・」

「確かに、それにしても皆さんスタイルいいですね」

「ホントホント、美里さんと美晴さん胸も大きいし」

「亜姫ちゃんも肌が透き通るように白いし」

「そんなこと・・・ない」

「そうよ美奈ちゃん優菜ちゃん。それに、胸なんて大きくてもいいことないわよ」

「肩が・・・凝るだけ」

「それは、羨ましすぎる悩みだと思います」

「私たちだって数年もすれば・・・」

「まあまあ、そんなことはいいいじゃない。それよりも由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃんは好きな人とかいないの？」

「え！急になんですか！」

「やっぱりこういうところに来たら、こういう話をしたいじゃない。それで、どうなの」

「え、えくと、それはその」

「由香は、言わなくてもわかるんじゃないですか。美里さん」

「ああ、それもそうね」

「ちょ、ちよつと美奈！」

「由香ちゃんは、和人君が好きなのよね」

「・・・は、はい」

「でも、そういう二人も和人君が好きなんじゃない？」

私は、ニヤニヤしながら二人に聞いた

「え！そうなの！美奈、優菜！」

「え〜と、まあ」

「そう・・・なるのかな」

「どうして好きになったの？」

「えっと、前にチンピラに絡まれてその時助けてもらってからです
ね」

「そうなの？」

「はい、和人は前に自分を噴水に吹き飛ばした人達って言うて
ましたよ」

「ああ、あの時の」

「でも、和さんがあんなに強くてびっくりしましたよ」

「そうそう、一瞬で決着が付きましたし」

「でも、和人君って鈍感なのよね」

「そこが、和さんの弱点なんですよね」

「でも・・・そこが・・・かわいい」

「兄さまは・・・やさしい・・・人ですから」

「そうね」

「はい」

「そうですね」

その後、私たちは他のお風呂も周ってからお風呂を出た

第41話（後書き）

更新が遅れてすみませんでした。

大学が始まってから忙しくなり更新が遅れてしまいました。

これからも、頑張って更新していきますのでよろしくお願いします。

第42話

第42話

僕と渉は、風呂からあがり浴衣を着て風呂場を出るとちょうど女性陣も同じタイミングで出てきた

「あら、和人君達も上がったの」

「はい、同じタイミングでしたね」

「そうですね」

「和ちゃん・・・どうだった・・・お風呂？」

「気持ちよかったよ、はる姉たちは？」

「こっちも・・・気持ちよかった」

「はる姉、お風呂好きだもんね」

「うん・・・」

「ここで、話すのもなんだから部屋に戻りましょ」

「そうですね」

僕たちは、部屋に戻ることにした

部屋に戻った僕たちは、とりあえず布団を敷いた後、一か所に集まった

「さて折角の旅行だし何かゲームでもやらない？」

「いいですね楽しそうだし」

「何やるんすか？」

「そうねえ、トランプでもやる？」

「でも、人数多くないっすか？」

「じゃあ、王様ゲームにする」

「それもどうかと思いますよ」

「でも、おもしろそうじゃない」

「俺はそれでいいっすよ」

「じゃあ僕もそれでいいですよ」

「他のみんなもそれでいいかしら」

美里先輩が皆を見ながら聞くと皆は一斉に頷いた

「じゃあ早速、クジを作りましょう」

そう言って美里先輩は、自分の鞆から割り箸を数本取り出しクジを

次の王様のくじを引いたのは

「今度は私ですね」

今度は、美奈ちゃんが王様になった

「それじゃあえくと、3番の人が7番の人にマッサージするで」

「3番は私か」

3番は由香ちゃんだった

「げっ！俺が7番かよ」

そして7番は涉だった

「ええ〜兄貴にマッサージー！」

「由香、王様の言うことは絶対だよ」

「分かったわよ」

由香ちゃんがマッサージを始める

しかし・・・

「もうちょっと、優しくできねえのかよ」

「うるさいな！兄貴が貧弱なだけよ」

「お前が怪力すぎなんだよ」

「なんですって」

「痛たたたたたた！由香、お前それはマッサージじゃなくてプロレス技だろうが！」

「気のせいじゃないの」

なぜか、マッサージじゃなく一方的なプロレスになっていた

3分後

「大丈夫、渉？」

「体中がミシミシする」

「ゲームが終わったら僕がマッサージしてあげるよ」

「すまん、願する」

解放された渉は、少しポロポロになっていた

「さて次行くわよ」

「「「「「王様だ」れだ」「」「」「」

次の王様は、由香ちゃんだった

「え〜とじゃあ、2番の人が4番の人にポツキゲームをする」

「由香にしては中々ハードな命令ね」

「し、仕方ないでしょ、よくわからないんだから！」

「2番は私ね」

2番は、美里先輩になり

「4番は・・・私」

4番は、はる姉になった

「じゃあ、始めましょ」

「うん・・・」

由香ちゃんからポツキを受け取りお互いに両端から啜って食べ始める

「な、なんか見てる方がドキドキするな」

涉が生唾を飲み込みながら僕にそう言った

「た、確かに」

二人は着実にポツキを食べ進めていたが数センチ残っていたところで折れてしまった

「あら、折れちゃったわね」

「別に・・・いい」

「そうね、じゃあ次に行きましょう」

こうして、何度かゲームを繰り返していき次で最後のゲームとなった

「それじゃあ、最後行くわよ」

「「「「「「「王様だ」れだ」「「「「「「」

最後の王様は

「私みたいね」

最後の王様は美里先輩だった

「さてじゃあ、3番の人と5番の人が7番の人の頬にキスをするで」

「3番・・・私です」

「5番・・・私」

3番と5番は亜姫とはる姉になったそして7番は

「7番は、僕だ」

7番は僕だった

「あら最後は和人君の頬に二人がキスして終わりのようね」

「え、えっとホントにするんですか？」

「あたりまえじゃない王様の命令は絶対よ」

「和ちゃん・・・」

「兄さま・・・」

そして僕が戸惑ってる間に二人が僕の頬にキスしてきた

「ふ、二人とも！」

「命令だから・・・仕方がない」

「そうです・・・命令だから・・・仕方ないです」

その後、ゲームも終わり寝ることになった僕たちは、自分たちの布団に入る。僕は、少し渉と約束していたマッサージをしてから布団に入った

こうして、僕たちの旅行の一日目が終わった

第43話

第43話

旅行二日目の朝、僕たちは朝食をとっていた

「はあ、朝のみそ汁はおいしいわね」

美里先輩がみそ汁をすすりつぶやく

「そうですね」

「旅館の朝食ってうまいっすよね」

「そうそう、和食だからいいのよね。これが洋食とかだったら多分テンション下がるわ私、まあ、ホテルとかじゃないからさすがに洋食は出ないと思うけどね」

「あ、なんか分かる気がします。周りの雰囲気合わないものがあるとなんか冷めるっていうか」

そんな話をしながら朝食を食べ終えた僕たちは今日のことを話し合う

「さて、今日はどうしようかしら」

「昨日、海に行きましたからどこか別のところがいいですよね」

「そうね、となると観光名所を回るとかになるかしら」

「でも、この辺って何があるんですかね？」

「聞いてみましょ、夏目さんに」

「じゃあ、僕が行ってきますよ」

「頼むわね和人君」

「はい」

と、いうことで僕は、夏目さんのもとへと向かう

しばらく探していると夏目さんを発見した

「あら？どこかいたしましたか文弥様？」

「ちょっと聞きたいことがあります」

「はい、なんででしょうか？」

「今日どこに行こうか迷ってましてこの辺って、どこか観光できそうな場所がありますか？」

「この辺は、田舎ですからあまりそう言ったものはないですね」

「そうですか・・・」

「あ、でも、電車をいくつか乗り継いだところに大きなショッピングモールがありますよ」

「ホントですか！」

「ええ、なんでしたら地図を書きましようか？」

「はい、お願いします」

「それでは少しお待ちください」

夏目さんがどこからか取ってきた紙とペンで地図を書く

「はい、どうぞ」

書き終えた地図を渡してくれた

「ありがとうございます」

「また、何かありましたらお伝えください」

「わかりました」

僕は、地図を持って部屋へと戻る

「お、戻ってきたか和人」

「それで、どうだった？和人君」

「観光できる場所はないそうです。でも、電車をいくつか乗り継いだら大きなショッピングモールがあるそうなのでそこに行ってみませんか？地図も書いてもらいましたし」

「そうなの、じゃあそうしましょ」

今日の予定も決まり各自準備をし始める。といっても服に着替えて貴重品を大きなカバンから取り出すだけなので皆、短時間で準備が終わった

そして、準備を終えた僕たちは旅館を出て駅へと向かう。目的の駅へと到着し電車を降りる、そして、夏目さんに書いて貰った地図を頼りにして複合商業施設へと向かった、歩くこと数十分やると目的のショッピングモールに到着した

「ホントにでかいな」

渉がショッピングモールを見ながらそう言った

「そうね、とりあえず中に入りましょ」

美里先輩の意見に賛成し僕たちはショッピングモールの中に入る、入ってすぐのマップを見てみる地下1階から7階まであり、地下1階は食品で1階から2階が服売り場、3階が飲食店、4階が雑貨屋などで、5階はゲームなどのおもちゃ売り場や本屋があり、6階はゲームセンターや映画館などの遊技場になっており、7階はヒーローショーなどをやる屋上になっている

「さてどこから回ろうかしらね」

「別行動でいいんじゃないっすか」

「それもそうね、各自回りたいところを回ってお昼ごろになったらメールで連絡して集合してお昼を食べて午後のことは食べながら考

えればいいわね」

皆、美里先輩の意見に賛成した

「それじゃあ、一時解散」

美里先輩の一声で各自行きたい場所に向かう

「和人、一緒に回ろうぜ」

「いいよ、どこにする？」

「そうだな、俺も和人も服にはあまり興味がないし、とりあえず5階を回るか」

「そうだね」

「よし！それじゃ行くうぜ」

「うん」

行く場所を決めた僕と渉は、5階へと向かった

5階に到着した僕たちは、最近発売されたゲームなどを見たり、本屋に行ったりを繰り返して時間をつぶした

しばらくして、携帯にメールがきた

「美里先輩からだ」

『3階の飲食店コーナーに集合』

と短い文章でそう書いてあった

渉の方にも同じメールが来たらしく携帯を見ていた

「渉の方にもメールが来たんだ」

「ああ、一応全員に送ってるんじゃないか、もしかしたら一人で行動してるやつもいるかもしれないし」

「そうかもね」

「とりあえず3階に向かうか」

「ちょうどお昼頃だしね」

そして、美里先輩のメール通り3階へと向かう

「こっちこっち」

僕と渉に気づいた美里先輩が手を振ってアピールした

すでに僕と渉以外は集合していた

「皆、集合早いですね」

「まあ、私たちは服とか雑貨を皆で見回ったりしてたからね」

「そうなんですか」

「ええ、まあ、皆集まったことだしお昼食べに行きましょう」

「そうっすね」

僕たちは、手ごろなレストランに入って食事を取りながら午後のこと話を話し始めた

「午前中で大分行きたい場所は回ったし、午後は、6階で遊びましよう」

「そうですね、皆6階には行って無いみたいだし」

僕たちは、ご飯を食べ終え6階へと向かった

6階に到着した僕たちは、ボーリングをすることになり受付で人数などを書いていた。美里先輩が今回も対戦形式でやると言ったので半分ずつに分かれて申し込みを行っている。

チームは、僕・美里先輩・美奈ちゃん・優菜ちゃん

渉・由香ちゃん・亜姫・はる姉となった

申し込みを終わらせた僕たちは、自分たちのレーンにボールなどを取りに向かった

ボールを選び終えた僕たちの前で美里先輩が

「あ、ちなみに、これ罰ゲームありだから」

と言った

それを聞いた僕は嫌な予感がした

「どうしたの和人君？」

「ちなみに罰ゲームって何ですか？」

「それを言ったら面白くないじゃない」

美里先輩が笑みを浮かべながらそう言った

「それじゃあ始めるわよ」

美里先輩の一声で勝負が始まった

あれ・・・なんだろうこのデジャヴ

第44話

第44話

デジャヴを感じながら始まった、ボウリング勝負

美里先輩の軽い説明を聞く限りでは、前回とルールは同じらしい投げる順番は、さすがに違うらしいが最初に投げるのは僕と渉かららしい

「さあ、和人君に皆本君投げていいわよ」

「わかりました」

僕たちは、ボールを持って構えを取る

「和人さん頑張ってください！」

「ストライク取っちゃってくださいね」

後ろから美奈ちゃんと優菜ちゃんがそれぞれ声援を送ってくる

僕と渉は、ボールを投げる

投げたボールはまっすぐ進みピンの真ん中をとらえ見事にストライクを取った

「よっしゃー」

渉もストライクを取ったみたいでガッツポーズを取っている

僕と渉は、ボールを投げ終え皆のところに戻る

「さすが、和人君ね」

席に座ると美里先輩がそうやってきた

「ハハ、ありがとございます」

「次はだれが投げるんですか？」

「はいはい私です」

僕の質問に手を挙げて反応したのは美奈ちゃんだった

「頑張ってストライクとりますよ」

「頑張つてね、美奈ちゃん」

「はい、まかせてください」

そうやって美奈ちゃんは、ボールを持ちかまえる

相手の方は、由香ちゃんが投げるようだ

「美奈、手加減しないからね」

「フフーン、こっちには美里さんと和人さんがいるから私が失敗しても大丈夫」

「美奈、私のことも入れなさいよ。」

優菜ちゃんがやや不機嫌気味に美奈ちゃんに行った

「アハハごめんね、優菜。」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら謝る美奈ちゃん

しばらくコントっぽい事をして美奈ちゃんと由香ちゃんは互いにボールを投げる

美奈ちゃんが投げたボールはやや左にずれてしまい何本か残ってしまった

対する由香ちゃんは、涉に続きストライクを取った

「よし、これで差が出てきたわよ。」

「うう、ストライク取れなかった。」

美奈ちゃんが悔しそうな顔をしながらこちらに戻ってきた

「どんまい美奈ちゃんまだ始まったばかりだし、遊びなんだから気楽にね。」

「でも、やっぱり悔しいです。」

美奈ちゃんは以外と負けず嫌いらしい

「うっう、こうなったら、優菜に仇を」

「まかせなさい！美奈の残したピンはすべて私が倒してあげるわ！」
そう言いながら優菜ちゃんがボールを投げる

そして、投げたボールは宣言通り残りのピンをすべて倒した

「フフン、どんなもんよ」

ボールを投げ終えた優菜ちゃんは、こちらに戻ってきて胸を張っていた

「なんか美奈ちゃんと優菜ちゃんっていいコンビよね」

美里先輩が二人を交互に見まわしそう言った

「確かに、二人ともすごく仲がいいもんね」

「付き合いが長いですからね」

優菜ちゃんが満面の笑みでそう言った

僕が優菜ちゃんと話していると、亜姫に袖をひっぱられた

「どうしたの、亜姫？」

「兄さま・・・私・・・ストライク・・・とりました」

亜姫がそう言うて上にあるモニターを指さす、確かに表を見ている

と亜姫はストライクを取っていた

「すごいね、亜姫」

僕は、亜姫の頭をなでてやる

「・・・//」

亜姫は、頬を赤く染めながら笑みを浮かべていた

「だめよ和人君、相手チームを褒めたら」

僕が亜姫をなでていると美里先輩がそう注意してきた

「相手チームって、何もそこまで全力でやらなくても」

「勝負とは、相手がどこの誰であろうとも全力でやるものなのよ。そこに友達、家族は関係ないのよ勝負の世界は厳しいの」

美里先輩が目をつぶって真剣な顔でそう言った

「そんなものですか？」

「そんなものよ」

「そういうことらしいから。ごめんね、亜姫、頭をなでるのはここまでってことで」

僕は、亜姫の頭から手をどかす

亜姫は、残念そうな顔をしながらも再びスコアに顔を向けていた

「さて、次はいよいよ私ね」

美里先輩が立ち上がり自分の選んだボールを持って構える

きれいなフォームで投げられたボールは、絶妙なカーブを描いてピンの真ん中をとらえ見事ストライクを取った

「まあ、ざつとこんなものね」

美里先輩は、うんうんと頷き戻ってきた

「さすがですね」

「でも、美晴も負けてないわよ」

美里先輩は、はる姉の方を指さす

はる姉も、美里先輩と同じように綺麗なカーブを投げてストライクを取っていた

そして、それがしばらく続きいよいよ勝負は終盤にさしかかった

スコアに微妙な差はあるものの互いに勝負は接戦だ

最後のボールを投げるのは、僕とはる姉だ・・・あれ、またデジャヴを感じるぞ

「頑張つてね〜和人君、負けたら和人君に女装させるからねえ〜」

美里先輩が、スペシャル不吉なことを言ってくる

「和ちゃんの・・・女装・・・負けられない」

はる姉が、燃えている！

「和人さんくはずしてもかまいませんよ」

「見てみたい、和人さんの女装」

なぜか、美奈ちゃんと優菜ちゃんまでもが僕に負けると遠まわしに言っている

何この四面楚歌状態・・・

女装なんて絶対に嫌な僕は、本気でストライクを取りに行こうとボールを投げるが力みすぎてしまいガーターになってしまった

「しまったー！」

そして、はる姉はぶれることのない見事なフォームでストライクを取り勝ったのは、はる姉達のほうのチームだった

僕は、勝負に負けたことよりも罰ゲームのほうがよくばど嫌だった

「さして、和人君は旅館に戻ったら女装よ」

「い、いやですよ」

「見苦しいぞ和人、負けたんだからおとなしく女装するがいい」

「じゃあ、涉がやればいいじゃないか」

「いやだね、俺負けてないし」

「あきらめなさい和人君、これが勝負の世界なのよ」

僕は、絶望に打ちひしがれながらショッピングモールから出て駅に向かう

旅館に戻るころには、すっかり夕方になっており僕たちは部屋に戻り温泉に入ってから夕食を食べた

そして、ついに僕にとって嫌な時間が来てしまった

第45話

第45話

「さうて、どんな格好をさせようかしら」

美里先輩が腕を組んでニヤニヤしながらそう言った

ちなみに僕は、美里先輩がどこからともなく出した縄で縛られていて逃げることにすらできない状況になっている

「和人君、何か着たいものない？」

「あるわけないじゃないですか・・・大体なんで僕だけ罰ゲーム受けなきゃいけないんですか！」

「和人君がうちのチームの代表だもの」

「そんなのいつ決まったんですか！」

「今」

「理不尽だーーーーー」

「みんなは何か着せたいものはないかしら？」

そう言つて美里先輩が皆のほうを見る

「そうですねえ、バニーとか」

美里先輩の質問に美奈ちゃんが答えた

「チャイナ服はどうですか！」

「メイド服でもいいんじゃないですか」

「幼稚園児の服・・・がいい」

「女の子用・・・パジャマ・・・がいいです」

美奈ちゃんに続きたくさん意見が出てきた

「由香ちゃんは、何かないの？」

「えっと・・・浴衣とか」

「なるほどそれもありね・・・」

神妙な顔つきで美里先輩が考え始めた。そして、結果・・・

「なら全部やつちゃいましょ」

なんてこった・・・一番最悪の結果となった

「というわけで和人君、まずはバニーからね」

「いやですよ！なんで全部着なきゃいけないんですか！」

「罰ゲームだからよ！」

その後もいろいろ言ってみたが全然ダメだった

そして・・・

「うう、なんで僕がこんな格好しなくちゃいけないんだよ・・・」

結局、僕はバニー服を無理やり着せられてしまった

「あ、相変わらずクオリティーが高いわね」

美里先輩が驚きの表情をしながらそう言った

「はあはあ・・・」

渉に関しては、最早、危ない人になっている

「和人さん、なんでそんなに似合ってるんですか!」

なぜか優菜ちゃんに怒られた

「知らないよ、それに似合っても嬉しくないよ!」

「ジユルリ、まだ、他にもあるから着替えてもらつわよ」

美里先輩が涎を拭きながら僕に言った

「・・・もうやだ」

その後も、皆がリクエストした衣装を無理やり着せられた。毎回、

「僕にそんなこと言われても・・・でも、今まで着たのよりは幾分かマシですね」

「そう、まあ、これで罰ゲームも終わりだし着替えていいわよ」

「はい」

僕は、美里先輩に一言だけそう返すとすぐに元の旅館の浴衣に着替えた

「はあ、やっと終わった・・・」

僕は、着替えを済ませ座布団の上に座る

「いや〜楽しませてもらったわ、和人君」

「僕は、疲れましたよものすごく」

「まあ、今日はもう遅いし和人君も疲れてるだろうからもう寝ましようか」

「そうっすね」

「うん・・・」

こうして、僕たちの旅行の2日目は僕に精神的ダメージを大きく残して終わった

第46話

第46話

旅行3日目、今日は夕方まで自由に過ごすことになった。夕方には花火大会も始めるのでそれまで好きなように行動し6時くらい集合するようにしたのだ

はる姉と美里先輩そして亜姫は、昨日言ったショッピングモールに買い物に由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃんは、海に遊びに行った。

僕と渉は、旅館でのんびりしている

「はあく暇だなあ〜」

渉がマンガを読みながらそう言った

「暇ならどこか行けばよかったじゃない」

「一人でどっか行っても退屈だろ」

「まあ、確かに」

「なあ、和人ナンパでもしに行かね〜か」

「なんでそうなるのね」

「だって暇だしよ〜」

「もっとマシな事考えなよ」

「じゃあ、なんかあんのかよ」

「うーん、ナンパはともかく海に行けば時間つぶせるかもね」

「そうかあ？」

「どのみちお昼はどこかで食べないといけないし」

「それもそうだな、じゃあ海行くか」

「時間もつぶせるだろうしね」

ということ僕と渉は必要最低限の物を持って海へと向かった

10分後、海に到着した僕たちは一応水着に着替えて、お昼を食べるにはまだ早いのでその辺を歩いてみることにした

しばらく、渉と話しながら砂浜を歩いていると

「あれ？兄貴と和人さん」

由香ちゃんたちと出会った

「やあ、由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃん」

「おいす」

「どうかしたんですか？」

優菜ちゃんが僕たちに聞いてくる

「旅館に居ても暇だったからな、お昼を食べるのも兼ねて遊びに来たんだ」

涉が優菜ちゃんの質問に答える

「そういえば、そろそろお昼の時間ですね」

優菜ちゃんの横に居た美奈ちゃんが答える

「でも、それならどうして水着なんですか？」

今度は、優菜ちゃんが質問してきた

「一応だよ私服のままだと暑いしね」

今度は僕が、質問に答えた

「つつても、ダラダラこの辺歩いてただけで特にこれといって何もしなかったけどな」

僕の言ったことに涉がそう付け足した

「そろそろ食べようと思ったところだから三人も一緒にどう？」

「いいんですか？」

「別にいいよ、ね、渉」

「まあ、出会ったのに別々に食べるのも変だしな別にいいぜ」

「じゃあ、御一緒させていただきますね」

「それじゃあ行くこうか」

そして、僕たち5人は、海の家でお昼を取ることにした

そして僕たちは、お昼を食べた後しばらく遊んでから旅館へと戻った

旅館に戻った時、時間はまだ4時くらいだったのでトランプや小さなボードゲームなどをして時間をつぶした

そして、一時間半ほど経ってはる姉達も帰ってきた

「兄さま・・・ただいま」

「お帰り、以外と早かったね」

「浴衣着る・・・時間が・・・無くなるから」

「あゝなるほど」

僕が納得していると

「折角持ってきたのに着ないのはもったいないしね」

美里先輩がそう言った

「浴衣は・・・あまり着慣れてないから・・・少し時間に余裕を・・・持つことにしたの」

はる姉がそう言った

「そうなんだ」

「というわけで、今から着替えるから和人君たちはどこかで別の場所まで時間つぶしとしてくれないかしら」

「二つに分けるためにある襖を閉めればいいんじゃないっすか？」

渉の言った事に対して美里先輩は

「それでも、良いけど皆本君なんか覗きそっだし」

「う・・・」

「なんでそこで、言葉に詰まるのさ渉」

「そ、それはだな」

「最低ね兄貴は」

「そこで、言葉に詰まっちゃうのはさすがに」

「ちよっと引きました」

由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃんという順番でそれぞれ渉に文

句を言った

「涉、今回ばかりは僕もフォローできないよ」

「和人、俺を見捨てるのか！」

「見捨てるも何も、今のは涉の発言がいけないんでしょ」

「というわけだから和人君たちは部屋から出といてくれないかしら」

「分かりました、その流れで花火大会に行くんですか？」

「ええ、多分30分も着替えに時間かからないと思うからホントに少し時間をつぶしておいてくれればいいのよ」

「そうですね、じゃあお土産コーナーでも見てますよ。行くよ涉」

「分かったよ」

僕と涉は部屋から出てお土産売り場に向かった

お土産売り場に到着した僕たちは、雑談をしながら商品を見ていた

しばらくして、浴衣に着替えた皆がやってきた

「おまたせ」

皆、可愛い浴衣を着ていた

美里先輩は、緑っぽい感じの浴衣ではる姉は藍色の浴衣、亜姫は水

色で、由香ちゃんはピンク、美奈ちゃんはオレンジで優菜ちゃんは赤い感じの浴衣と皆それぞれ違った良さがあった

「どう二人とも似合っ？」

「ええ、良く似合ってますよ」

「似合ってるっすよ」

「ありがと二人とも、それじゃあ行きましょっか」

「そうですね」

こうしてそろった僕たちは、花火大会に向かった

第47話

第47話

花火大会の会場に到着した僕たちは、花火が始まるまでまだ3時間ぐらい時間があるのでいろんな所を見て回ることにした

「とりあえず、何か買って食べましょうか」

美里先輩がそう言った

夕食は今回、花火大会が始める前に会場のほうで見て回りながら食べると夏目さんに言ったのでまだ食べていない

「そうですね、まだまだ時間もありますし。お腹空きましたしね」

「じゃあ、たこ焼き食おうぜ！」

渉が目を輝かせながらそう言った

「私は、焼きそばがいいわねえ」

「私は・・・」

一人一人がそれぞれ違う意見を出し合っている

結局、二つのグループに分かれて行動することにした

僕・渉・亜姫・由香ちゃん

美里先輩・はる姉・美奈ちゃん・優菜ちゃん

といった感じに分かれた

「和ちゃんと・・・回リたかった」

はる姉は、ぶすつとすねた感じでそういった

はる姉は、このグループ分けに納得してない様子だった

「まあまあ美晴、たまには女の子同士で回リましょう」

「わかった・・・」

しぶしぶといった感じではる姉は、美里先輩たちと人混みの中へと入っていった

「俺たちも行こうぜ」

「そうだね」

僕たちの方もお店を見て回るため、歩き出した

「とりあえず、たこ焼き食べる？涉」

「おう！祭りと言ったらたこ焼きだろ」

「じゃあ、食べようか」

「おう」

というわけで、たこ焼きを人数分買った

「どうする、いくつかいろいろなもの買ってどこかに座って食べる？それとも、移動しながら食べる？」

「うーん、人混みではぐれたりすると面倒だしどこかに座って食べようぜ」

「わかった」

僕たちは、たこ焼きのほかにもいろいろ買って、近くにあったベンチに腰かけた

「予想以上に、人が多いね。亜姫、疲れてない？」

「はい・・・大丈夫です」

「疲れたら・・・ちゃんといいなよ？」

「はい・・・ありがとうございます・・・兄さま」

「うん、それじゃあ食べようか」

「はい・・・」

「おお！うまい！和人此処のたこ焼きめちやくちやうまいぞ」

涉は、すでに自分の分を取り出し食べていた

「もう兄貴ったら、自分のことしか考えてないの!」

その様子に由香ちゃんが少し怒っている様子だった

「まあいいじゃない由香ちゃん、僕たちも食べようよ」

「そうですね」

僕たちも、自分たちの分のたこ焼きを取り出して食べた

しばらく、買ったものを食べながらゆっくりしていると、携帯が鳴った

「はい、もしもし」

「もしもし、和人君」

電話は、美里先輩からだった

「どうしたんですか?」

「それがね、美晴が和人君と回りたいってまた言い始めてね。さっきはしぶしぶ納得したみたいだったけど」

「そうなんですか」

「そうなの、だから今から来れないかしら」

「だったら今から、皆で回りますか。僕たち、いろいろ食べたしそ

「うちも食べたのなら今からは、遊びメインで回ればいいんじゃないですか？」

「そうね、その方がいいかもしれないわね。それじゃあ私たちが行くわ、今どこに居るの？」

「え〜と、たこ焼き屋の近くにベンチがあったのでそこに座ってます」

「分かったわ、じゃあちょっと待っててね」

「分かりました、それじゃ」

僕は、電話を切る

「美里さんからですか？」

由香ちゃんが聞いてくる

「うん、今からこっちに来るらしいから。もうちょっとここに居よう」

「分かりました」

「なんだ、今からは皆で回るのか？」

渉がそう聞いてくる

「うん、なんか、はる姉が僕に会いたがってるらしいから」

「美晴先輩がなんで？」

「やっぱり一緒に回りたらしい」

「そうなのか、じゃあ待ってた方がいいな」

「うん」

そして数分後、美里先輩たちがやってきた

「お待たせ〜ごめんねえ和人君。待たせちゃって」

「そんなに待ってませんよ」

「和ちゃんと・・・回る」

はる姉がそう言いながら僕の腕に抱きついてきた

「うん、そうだね一緒に回ろう。で、でもとりあえず離れてくれな
いかな？」

なんか胸とか当たってるし・・・

「やだ・・・」

「そこをなんとか」

「和人君、諦めなさい、美晴もこれまでずっと我慢してたわけだし」

「それとこれとは、微妙には話が違つ気がするんですけど」

「気のせいよ」

「そうですか……」

僕はもう諦めるかしかないようだ

「姉さま……ずるい」

反対側の腕に今度は、亜姫が抱きついてきた

「あ、亜姫まで」

「良かったわね和人君、両手に花じゃない」

「美里先輩、もしかして楽しんでます？」

「まあ、楽しみ半分祝福半分」

なんてこった今日の美里先輩は悪意100%で構成されていた

「まあ、とにかくその辺回りに行きましょう」

「そうですね……」

両手に抱きついていている姉妹が離れてくれることはないだろうとあきらめた僕は、抱きつかれた状態のまま、お店を回ることになってしまった

「和ちゃん……射的やろ」

「兄さま・・・輪投げやりに・・・行きましょう」

はる姉と亜姫がお互いに行きたい場所を言ってきた

「両方、ちゃんと回るから。最初どっちに行くか決めようよ」

僕がそういうとお互い同時にうなずき、僕の腕を離さないようにしながらジャンケンをし始めた

勝ったのは、はる姉だった

「はる姉が勝ったから、まずは射的だね」

「うん・・・」

ということ射的をやっているお店に向かう

お金を払って、弾と銃をもらう

「まずはる姉がやりなよ」

僕は、はる姉に銃と弾を渡す

「ん・・・ありがと・・・和ちゃん」

「美晴は、何かほしいものがあるの？」

「特に・・・ないけど・・・やってみたかった」

「そうなの」

「うん……」

はる姉は、美里先輩と話しながら銃を構える

狙いを定めて撃った弾は、景品に当たったものの当たった場所が甘かったのか倒れなかった。その後も同じ景品を狙ったけど、はずしたりして結局、はる姉の獲得したものは0だった

「はる姉、残念だったね」

「ん……次は……和ちゃんの番」

「うん」

僕も自分の持っていた銃に弾を入れて、狙いを定めて撃つ

弾は景品に当たり見事に倒れた

「おおーやるな和人」

後ろで見ていた渉がそう言った

「たまたまだよ」

僕は、倒した景品をお店の人から受け取りながらそう言った

倒した景品は、可愛いクマのぬいぐるみだった

「はい、はる姉これあげる」

僕は、取ったぬいぐるみをはる姉に渡す

「いいの？」

「うん、僕が持ってもしょうがないしね」

「ありがと・・・和ちゃん・・・大切にするね」

「どういたしまして」

「良かったじゃない、美晴」

「うん・・・」

はる姉が笑顔を浮かべながら美里先輩に返事を返した

次に、僕たちは亜姫の行きたいと言っていた輪投げのお店に行った

お店に行くまでまた腕を組んだままだったけど・・・

お金を払い、輪っかをいくつかもらう

さっきと同じで最初に亜姫が輪っかを投げたそして、見事に景品に入れて景品をもらっていたのだが、ほしい景品じゃなかったのかあまりうれしくなさそうだった

「亜姫、何がほしかったの？」

僕が、そう聞くと

「あれ・・・です」

と言って亜姫が指さしたのは、猫の小さなぬいぐるみだった

「そっか、じゃあ僕が取ってあげるよ」

僕は、自分の分の輪を持ち、亜姫のほしがっていたぬいぐるみに狙いを定めて投げた、しかし、投げた輪は、少し横にそれてしまった。続いて2投目もはずしてしまい、最後の3投目よく狙って投げる。投げた輪っかは、なんとか猫のぬいぐるみに入った

そして、猫のぬいぐるみをお店の人から受け取りそれを亜姫に渡す

「兄さま・・・ありがとうございます」

「うん、喜んでもらえて良かったよ」

僕たちは、その後もいろんな場所に回りいよいよ花火が始まる時間となった

僕たちは、花火が良く見えそうな場所をさがして歩いているのだが

「なかなか、いい場所見つからないわね」

「人が多いですからね」

「あ！あそこなんかいいんじゃないですか！」

そう言つて、優菜ちゃんがその場所を指さす

その先には、2つ程ベンチが設置してあり見晴らしも特に悪くなく人がそんなにいない中々いい場所だった

「へえ〜いい場所ねえ〜」

美奈ちゃんがそう言った

「それじゃ、あそこにしましようか」

美里先輩がそう言つと皆が一斉にうなずいた

僕たちは、ベンチの近くに移動した

さすがに全員は座れず、僕と渉は立ったまま見ることにした

「ホントにいいの私たちが座つて？」

美里先輩が僕と渉を見ながら聞いてきた

「別にいいつすよ、俺そんなに疲れてないですし」

「僕も、特に疲れたわけではないので。それにこういつときは女の子に譲るものでしょうし」

「フフ、ありがと二人とも」

「お二人とも、けっこう紳士ですよね」

僕たちを見ながら、美奈ちゃんがそう言った

「そうかな？」

「はい、だって二人とも女性に優しいし」

「別に普通じゃないか」

渉が、美奈ちゃんのいったことにそう返した

「そんなことないですよ人にやさしくするのって中々できることじゃないですしね」

今度は、優菜ちゃんがそう言った

「まあ、僕の場合はそういう性分だし渉も人にやさしいからね」

「お前の場合は、もっと自分に自信を持つべきだと思うがな」

「アハハ、善処するよ」

「善処するって、あまりする気のない時に使う言葉ですよね」

美奈ちゃんが、そう言った

「だよな」

「二人とも、手厳しいね」

「ホラホラ、いつまでも話してないで、そろそろ始まるわよ」

美里先輩がそう言った瞬間、空に綺麗な花火が打ち上がり始めた

「綺麗……」

はる姉がそう言った

「ホントね」

「たーまや〜！」

「かーぎや〜！」

美奈ちゃんと優菜ちゃんが上を見上げながら、そう叫んでいた

「大したもんだな」

渉が、感心したように花火を見ながら言った

その後も、綺麗やよくある掛け声などを何回か言っていた

そして、しばらくして花火が終わった

花火大会も終わり旅館に帰るため、歩き始めた僕たち

「綺麗だったわね」

「そうですね、いい場所で見れましたしね」

「それに……お祭りも……面白かった」

「明日には、もう帰るのよねえ」

「まだ遊びたいっすねえ」

「また・・・皆で・・・来たいです」

と亜姫が言った

「そうね、私と美晴は今年で卒業だけど、近くの大学に進学するつもりだからいつでも遊べるしね」

「うん・・・」

「だから、皆ともまだまだ遊ぶわよ！私は！」

美里先輩が元気よくそう言った

そんな話をしていると旅館に到着した

僕たちは、部屋に戻りお風呂に入って、しばらく話をしていたが全員疲れていたためすぐに眠りについた

第48話

第48話

今日で旅行も終わりの朝、僕たちはいつもより少し遅い時間に起きて朝食を取っていた

「今日で、旅行も終わりね」

美里先輩がご飯を食べながらそう言った

「そうですね、良い思い出になりましたね」

「ええ、朝食を食べたら荷物をまとめてもう帰宅だから残念よね」

「そうっすね、それに和人の家へのお泊りも明日までだしな」

「そういえばそうね、残念だわ」

「楽しかったですね」

由香ちゃんが笑顔でそう言った

「いいなあ〜由香は和人さんたちとお泊りで」

「そうだよねえ〜私たちは旅行で終わりだもんねえ〜」

美奈ちゃんと優菜ちゃんは残念そうな顔で由香ちゃんに言った

「今度のときは美奈ちゃんと優菜ちゃんも泊りに来なよ」

「良いんですか？」

「もちろん、とはいえ長い休みに入らないと無理だけどね」

「そうですね、じゃあその時まで楽しみにしてますね」

「うん」

その後、朝食を終えた僕たちは、荷物をしまい旅館を出ることにした

「皆様また、いらしてくださいね」

旅館の入り口で夏目さんがそう言った

「はい、いつかまた来ますね。それじゃお世話になりました」

「はい、お気をつけてお帰りください」

旅館を出て駅へと向かう僕たち

駅に到着し、切符を買って新幹線に乗り込む

席を確保した僕たちは、荷物を荷台に置いて席に着く

「ねえ、和人君？」

「なんですか？」

「私、思ったんだけど明日までお泊り続くんだし、明日、美奈ちゃんも優菜ちゃんを家に招待したら」

「あ、なるほど確かにそうですね」

「え、いいんですか？」

「うん、お泊りとはいかないけど遊びに来るくらいなら特に問題はないよ」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「行ったことないから楽しみです」

その話を終えた僕たちはしばらくトランプなどを楽しんでいた

そして、しばらくして新幹線は、いつもの駅に到着した

駅から降りた僕たちは、お昼を近場のレストランで適当に済ませて途中で美奈ちゃん優菜ちゃんと分かれ僕たちも家へと向かった

そして、数十分後僕たちは家へと帰宅したのだが・・・

鍵を開けようとドアに手を伸ばした時

「あれ？」

僕は、違和感に気付く

「どうしたの和人君？」

僕の反応に疑問を持つ美里先輩

「鍵が開いています」

「それってまさか……」

「わかりませんがもしかしたら」

「泥棒か……」

渉が怪訝そう顔でそう言った

「そ、そんな！」

皆が驚いている

「兄さま……怖いです」

亜姫が怯えて僕の袖をつかんでいる

「大丈夫だよ、僕が守るから」

「和人、俺もいるぜ！」

「渉……」

僕は、渉と一緒に警戒しながらドアを開ける、中は静まり返っており少し不気味な感じをかもし出している

僕たちは、ひっそりと家に入りリビングのドアの前へと立った

そして、ドキドキしながらドアを開けると

そこには・・・

倒れた女性がいた

その女性を見た僕とはる姉、亜姫は驚いていた

「和ちゃん・・・もしかして」

「うん・・・多分」

「何々、和人君この人知ってるの？」

「ええまあ、知ってるどころじゃないですね」

「？」

美里先輩がよくわからないといった感じで首をかしげている

僕たちがしばらく困惑していると倒れていた女性は、僕たちの声に気付いたのか起き上がってこちらを見る

そして、その女性はこっちを見て驚きの表情を一瞬見せたがすぐにウルウルとした表情になり

「か、か、和く〜ん」

僕に抱きついてきた

「和くん!!!」

それを聞いたはる姉と亜姫以外のメンバーが皆驚いている

「ちょ、ちょっと離れてよ」

「いいじゃない!久しぶりの和くんの感触を味わいたいんだから」

「皆がいるんだから!」

「か、和人君、結局のその人は一体誰なの?」

このままでは埒が明かないと判断したのか美里先輩がまだ驚きつつも僕にそう質問してきた

「僕たちの母です」

僕がそう言った瞬間

「~~~~~ええ~~~~~!!!!!!」

驚愕の聲がこだました

「嘘、和人君たちのお母さん!」

「めちゃくちゃ若いじゃねえか!」

「大学生でも通りますよ!」

と次々に驚きの声をあげている

「和くん、この子たちは？」

今度は、母さんが僕に質問をしてきた

「この人たちは、僕やはる姉、亜姫の友達だよ」

「へえ〜そうなんだ」

僕がそう言っていると母さんは納得した様子で僕から離れ

「皆、初めまして母の文弥美空ふみやみそらです。和くんたちがいつもお世話になってます」

と礼儀正しくお辞儀をした

「じ、こちらこそ」

美里先輩たちは、自分たちも自己紹介をしてお辞儀をしていた

しばらくして、だんだんと落ち着いてきた僕たちは、荷物を隅っこの方に置いておいて母さんと話をすることにした

「母さん、どうしてここに？」

僕は、単刀直入に聞いた

「それはもちろん、和くんたちの様子を見に帰ってきたのよ」

「母さま・・・いつ帰ってきてたの？」

今度は、亜姫がそう質問した

「昨日の夜よ、でも、家が暗いし入ってみても誰もいないからご飯を食べようと冷蔵庫を探しても何もなし・・・皆で一体どこに行ってたの！」

母さんが涙目になっている

「くじ引きで・・・温泉が当たったから・・・温泉旅行に・・・行ってた」

はる姉が母さんの質問に答えると

「ずるいよ！和くん、春ちゃん、亜姫ちゃん！私が飢えて苦しんだのに自分たちだけ温泉だなんて！」

母さんは、少し怒りながらそう言った

「そう言われても・・・」

僕は、プンスカ怒っている母さんを見て困っていた

「母さんが・・・帰ってくるって・・・連絡しないのが悪い」

「姉さまの・・・言う通り」

はる姉と亜姫がそう言った

「ひどい！和くん、春ちゃんと亜姫ちゃんが冷たいよ〜反抗期だよ〜」

またしても母さんが僕にひつついてきた

「はる姉に亜姫、言いすぎだよ。母さんは何も悪いことしてないでしょ」

「うう〜和くんありがとう、私を癒してくれるのはやっぱり和くんが一番だよ〜」

「あ、あの〜和人君」

僕がはる姉と亜姫をなだめていると美里先輩が僕に話しかけてきた

「そろそろ、私たちも話に混ぜてくれる」

「すみません美里先輩」

僕たちは、その後、皆を混ぜて母さんたちと話をしたりしていた

しかし、数時間が経った時

「和くん、私はお腹がすいたよ〜」

母さんがそう言ってきたので、僕たちは一旦夕食を作ることにした

近くのスーパーまで急いで行って材料を買い、素早く夕食を作る

人数が人数なので、涉や美里先輩にも手伝ってもらった

皆で作ったので思ったよりも早く夕食を作ることができた

「うーん、おいしい久しぶりの和くんの料理」

母さんは、パクパクと夕食を食べていた

「それは良かった」

その後母さんは、ご飯を5杯もおかわりしていた

僕たちは、片付けを済ませてからお風呂に入ることにした（母さんには、皆がお泊りをしていることをきちんと説明した）

僕が入ろうとした時、母さんが「私も、一緒に入る！」と言ってきたがはる姉と亜姫が全力で阻止していた

そして、全員がお風呂からあがり、しばらくダラダラしていたが長旅の疲れなのか家ならではの安心感からなのかすごい眠気が襲った

「そろそろ、寝ましょうか」

「そうですね」

「和くん」

「嫌だ」

「まだ何も言っていないよー！」

「どうぞせ一緒に寝ようとかでしょ」

「な、なんで分かったの！」

「いや、分かるでしょ普通」

「だな・・・」

「涉ちゃんまで！」

涉もだんだん母さんのキャラに慣れてきたようで普通に発言できるようになってきた

ちなみに、母さんは人のことをちゃんづけにする癖があるので（僕だけはなぜかくん付け）

「いいじゃない、私だけ下で寝るのはさびしいよ」

「いいんじゃないの和人君、久しぶりにお母さん帰ってきたんだし一緒に寝るくらい」

「さすが、美里ちゃん良いこと言うわ〜！」

「でも、それならはる姉か亜姫のところでも」

「和人君を指名しているんだから、ここは和人君じゃないと」

「そうだよ、和くん」

母さんが、ウルウルとした目で僕を見る

「わ、分かったよ」

僕は、ため息をつきながらそう言った

「さて、和人君たちのお母さんの寝る場所も決まっただし寝ましようか」

美里先輩の一言で僕たちは各自の部屋に戻ることにした

亜姫とはる姉は納得していない様子だったが、美里先輩及び由香ちゃんになだめられて渋々了解した

こうして、僕たちは眠りに着いた

ちなみに、母さんは僕のベットと一緒に寝ることになりずっと僕の腕をがっちりつかんで寝ていた

第49話

第49話

パシヤッ、パシヤッ

うーん、何の音だろう？

今朝僕は、何かの音で目が覚めた

目を開けるとそこには、いろんな角度から僕の写真を撮っている母さんがいた

「あ、和くん。おはようよく眠れた？」

母さんは僕が起きたのに気づいて僕に挨拶をしてきた

「母さんおはよう、後なんで僕の写真を撮ってるの？」

僕がそう聞くと母さんが

「和くんの寝顔があまりにも可愛かったからついね」

「ついじゃないよ・・・まったく、あれ涉は？」

「もっ下にいるわよ」

「そっなんだ、じゃあ僕らも降りようよ」

「そうね、和くんの写真もいっぱいとれたし」

「僕は、あんまりとってほしくないんだけど・・・」

僕がそう言ったが僕の言葉は母さんには聞こえていなかったようだ
僕と母さんは下に降りる

「おう、和人目が覚めたか」

「うん、涉おはよう」

「和ちゃん・・・おはよう」

「兄さま・・・おはようございます」

「和人さん、おはようございます」

「はる姉、亜姫、由香ちゃんおはよう」

僕が三人に挨拶をすると、キッチンの方から朝食を作っていた美里先輩がこちらにやってきた

「おはよう和人君、珍しいわね和人君が私たちよりも遅く起きるなんて」

「すみません、朝ご飯作らせてしまって」

「いいのよ、和人君もきつと旅行の疲れが出たんだと思うし、それよりちよつと出来上がったところだからみんなで食べましょう」

「ありがとうございます」

僕たちは、それぞれ椅子に座って朝ご飯を食べ始める

「今日は、美里先輩たちはどうするんですか？」

「何が？」

「今日でお泊りも終わりだし皆いつごろ帰るのかなって」

「ああ、そういえばそうねどうしようかしら」

「どうすっかな〜」

「なんだったら、夕飯食べてからにしなよ今日は美奈ちゃんと優菜ちゃんも来るからあっちさえよければ夕食を御馳走するつもりであるから」

「じゃあ、俺はそうすっかな」

「そうね、私もそうするわ」

「私もそれでいいですよ」

と涉、美里先輩、由香ちゃんの順番で言った

「ねえねえ、和くん」

「どうかしたの、母さん」

「美奈ちゃんと優菜ちゃんって誰？」

「由香ちゃんの友達でね前に知り合っただよ」

「ふうん、その子たちが今日、家に来るの？」

「そっだよ」

「じゃあ、掃除した方がいいかもしれないわね」

「そっだね」

確かに母さんの言うとおり、しばらく家を開けていたせいか少し汚れているし昨日はすぐに寝てしまったから荷物の整理とかもしていないし

「じゃあ、今日は家の掃除でもしようかな」

「それだったら私たちも協力するわよ、和人君」

「ありがとうございます美里先輩」

「それじゃあ、朝食も食べ終わったし少し休憩してから始めましょうか」

美里先輩の言葉に皆頷いて僕たちは食器を台所に下げる

そして、数十分の休憩を終えて僕たちは各自掃除に取り掛かる

僕と渉は、窓やフローリングの床を雑巾で拭いたりしていた

美里先輩とはる姉は洗濯をして

亜姫と由香ちゃんは皆の部屋の掃除をしてもらっている

そして母さんは台所やお風呂場などの掃除をしてくれている

しばらく、黙々と作業をしていた僕たちは、思いのほか掃除を早く終わらせることができたのでテレビなどを見てくつろぐことにした

「思いのほか早く終わることができたわね」

テレビを見ながら美里先輩がそう言った

「そうですね、これも皆が頑張ったからですよ」

「そうね」

「和人、美奈ちゃんと優菜ちゃんは何時ぐらいに来るんだ？」

渉がそう聞いてきた

「多分、一時から二時くらいには来ると思っけど」

「そうか」

「和く〜ん、それなら私とお昼までお出かけしよっよ〜」

母さんがそう言いながら後ろから僕に抱きついてきた

「ちょっと母さん抱きつかないでよ」

「え〜いいじゃない、減るもんじゃないし」

「そう言う問題じゃないよ・・・」

「ぶう〜」

母さんは子供のように頬を膨らませる

「母さん子供じゃないんだから・・・」

僕は、若干苦笑いでそう言った

それからしばらく似たようなやり取りがあったものの僕たちは午前中はダラダラと過ごしていた

その後、僕たちは各自で適当に昼食を食べた

そして、お昼の一時を過ぎた頃

ピンポーン

玄関のインターホンが鳴り僕は、玄関を開ける

来たのは、優菜ちゃんと美奈ちゃんだった

「こんにちは、和人さん」

「こんにちは」

「二人ともいらっしゃい、どうぞ」

「お邪魔します」

僕は、二人を連れてリビングに向かう

「こんにちは」

「遊びに来ました」

と二人が言っていると

「いらっしゃい・・・ゆっくりしていったね」

とはる姉が言った

「綺麗ですね、和人さんの家」

「うん、ビックリした」

「二人も来るし今日は朝から大掃除だったからね」

「そうなんですか」

僕たちが話していると

「和くくん、お菓子買ってきたよ！」

母さんがたくさんのお菓子を買って帰ってきた

「和人さん、この人は？」

「僕の母さんだよ」

と僕が答えると

「嘘、お母さん！全然見えない！」

「大学生くらいに見えますよ！」

最初に母さんを見たときの皆の反応と同じ反応をした

「こんにちは、美奈ちゃんと優菜ちゃんだよね和くんから話は聞いてるよ！今日はゆっくりして行ってねお菓子も買ってきたからね！」

母さんは二人にそう言った、こういうときは母さんはちゃんとして
いるからさすがだなと僕は思った

「はい」

「ありがとうございます」

いきなりの事で二人は少しびっくりしている

「まあ、折角母さんが買ってきてくれたことだし、皆で食べようよ
お茶入れるからさ」

そして、僕は人数分のお茶を入れてテーブルに運ぶ

いくつかのお菓子はすでに開けられており皆少しずつではあるがフイワイと楽しみ始めている

「皆、お茶入れたから各自で取ってきてくれる」

僕がそう言つと皆がハイと言つてお茶を取る

僕もイスに座り会話に混ざる

数時間後、僕は片付けをしながら皆に夕食のことをきりだす

「皆、今日は外でバーベキューでもしようかと思うんだけどそれでもいいかな」

「おついで！バーベキュー楽しそうじゃねえか！」

「いいわね、皆そろつてることだし」

「楽しそう・・・」

などと次々に賛成の意見が出る

「じゃあ、材料買ってこなくちゃ」

「私が・・・手伝つ」

「私も・・・」

と手伝いを申し出てくる人が何人か現れたが・・・

「和くん、申し訳ないんだけど私皆と少し話があるから一人で行ってもらえないかしら」

母さんがそう言った

「母さん・・・さすがに和ちゃんだけじゃ・・・人手が足りないと
思う」

「そうだよな、さすがにこれだけの人数の材料を一人で運ぶのはちょっときついよな」

とはる姉と渉が言うが母さんは

「そうなんだけどね、こっちも結構真面目な話なのよ」

と珍しく母さんが真顔で言う

こついった顔をするときの母さんはホントに真面目だからはる姉と亜姫は少し驚いている

「分かったよ、少し大変だけど多分運べると思うし一人で行ってくるよ少し時間を使うと思うけどね」

「ごめんね、和くん」

「母さんは、気にしないでそれじゃあ行ってくるね」

僕は、財布に少し多めにお金を入れて買い物に向かう

【美里視点】

和人君が出掛けて数分後皆は一回リビングに集まりイスに座る

さつきまで明るく接していた美空さんが真面目な顔をしているので
いまだに皆少し驚いている

「さてと、それじゃあ少し話をしましょうか」

美空さんが話を切り出す

「話はもちろん和くんの事」

まあ、それはそうよね和人君だけを買い物に行かせたところを見せ
られればここに居る皆なら簡単に気がつくだろう

「母さん・・・早く・・・話して」

美晴は少し苛立った様子を浮かべながらそう言ったおそらく和人君
だけに大変な思いをさせたことにイライラしているのだろう

「あなたたちは和くんの事をどう思ってる」

私達はその言葉に驚きの表情を出す

「別にアナタたちが和くんの事を嫌っているとかそういう意味じゃ
ないのよ、私も和くんを見ていてホントに楽しそうだと思うもの」

美空さんはホントに嬉しそうな顔で言った

「和くんは、昔から優しい子だった私やお父さんが仕事でほとんど家に居ないときでもあの子は文句ひとつ言わずに家のことをやってくれていた。そのことに春ちゃんと亜姫ちゃんが怒っているのは私にでもわかるわ」

美空さんがそう行った時、美晴と亜姫ちゃん表情が少し変わった。「春ちゃんと亜姫ちゃんも家のことをよくやっている、でも二人にとってそれはたいした問題じゃないのよね」

「私は・・・そんなことはどうでもいい・・・和ちゃんは・・・ずっと寂しがってた・・・私にはそれが一番つらかった」

美晴がそう言うと美空さんの表情が曇った

「特に・・・小学生の時の和ちゃんが・・・一番可哀想だった」

美晴がその時の事を思い出してか少し目をつるませていた

「運動会や・・・参観日なんかの・・・行事にも母さんも父さんも・・・来なかった」

「和ちゃんは・・・私と亜姫の前ではいつも笑顔でいたけど・・・和ちゃんはその後・・・必ず部屋かトイレに入って・・・泣いていたのを私は知ってる」

美晴がそう言い終わると今度は亜姫ちゃんが口を開いた

「兄さまは・・・いつも・・・笑顔で私達に接しています・・・でも・・・それと同じくらい兄さまは・・・泣いていました」

「そう・・・」

美空さんは、それだけ言うのも精一杯の様子だった

「母さんが・・・帰ってきたとき・・・私は正直・・・いまさら何をしに帰ってきたのかと思った」

と美晴が言った

「そうね、何を言われても言い返す気はないわ全部春ちゃんの言うとおりだし。だからこそあなたたちに和くんをどう思ってるのか聞きたいのよ。今、和くんに必要なのは私でもお父さんでもなくて、いざという時に和くんを心から支えてくれる仲間だと思っているわ」

美空さんがそう言った

「だから教えてほしいの和くんのことをどう思ってるか」

美空さんがそう言った時、皆本君が口を開いた

「和人は俺にとって大切な親友ですよ」

「涉ちゃん・・・」

「和人が困ってんなら助けるし、嬉しいことがあるなら一緒に笑ってやろうと思ってます。まあ、といってもいつもは俺が和人に助けられてばかりですが」

皆本君が苦笑いしながらそう言った

「でもだからこそ俺はいざとなったらアイツのためになんだってできる覚悟があります。助けられてばかりじゃ親友とは言えないですからね」

皆本君がそう言い終わった後、今度は由香ちゃんが口を開く

「私も、和人さんのためなら何でもできる覚悟があります！」

「私も……」

「私も……です」

「もちろん私だって！」

「まだ会ってから日は浅いけど和人さんは私たちにとって大切な人です！」

と次々に和人君の事を思う発言が飛び交う

そして、私も口を開く

「美空さん、確かに和人君はつらい思いをした時もあるかもしれませんがせんが今はそんなことないと思いますよ、だって和人君の周りには和人君の事を一生懸命に考える仲間がいっぱいいるんですから。それは、私が保証します」

私がそう言い終わると美晴が

「母さん……私は確かに……いまさら何をしに来たかと思った

けど・・・それと同時に・・・和ちゃんの事を考えてくれている母さんに・・・やっぱりさすがだなとも思った」

「私も・・・そう思います・・・母さまは・・・何も気にする必要
ないです」

二人がそう言うつと

「ありがとう・・・皆」

美空さんは涙を流しなら私たちにお礼を言った

和人君は幸せね、こんなに和人君を思ってくれている人たちがいて

「さてと美空さんいつまでも泣いてないで、こっちはこっちでバーベキューの準備を始めましょう」

私がそう言うつと

「そうね、もう少しで和くんも帰ってくるだろうし」

こうして私たちの話は終わり私たちも和人君が帰ってくる間にバーベキューのセットなどをそろえ始めた

【和人視点】

ふう、さすがに重いな

僕は、買い物を終えて今、家に向かって帰っているところだししかしさすがに9人分の材料は重く少しふらふらしながら歩いている

「お〜い、和人！」

荷物の重さに苦戦していると前から渉がやってきた

「あれ渉、母さんの話はもう終わったの？」

「ああ、以外とすぐに終わったぜ、だから荷物持ちをしようと思っ
てな」

「ありがと渉、さすがに9人分はきつくってさ」

「まかせとけ！」

僕は、渉に半分荷物を渡す

「しかし、和人ならもう少し家の近くまで帰ってきてきてると思ったん
だがな」

「さすがにこの量だときついよ」

「確かにな、半分で結構重いぜ」

「そりゃいっぱい買ったからね」

と僕たちが話していると家が見えてきた

家の前では、すでに皆がバーベキューのセットなどを出していた

「和ちゃん・・・買い物お疲れ様」

「兄さま・・・荷物持ちます」

「ありがとはる姉、亜姫」

「あ！ずるいよ二人とも私も和くんのお手伝いするんだから！」

と母さんも出てきた

「お手伝いって、普通なら立場が逆だと思っただけど」

「和くん、細かいこと気にしてたら駄目だよ！」

「やれやれ、相変わらずだな母さんは」

「ま〜ね！」

「褒めてないからね・・・」

「え！」

そんなやりとりをしながら僕は材料を切ったりして準備を始めた

そして、僕たちはジュースの入ったコップを持って乾杯の合図とともにバーベキューを開始した

バーベキューは数時間行い終わったころにはすっかり日が暮れていた

そして、バーベキューの片付けを終わらせよいよ皆が帰る時間だ

「2週間もお泊りして楽しかったわ、またやりましょうね和人君」

「今度は冬休みだな！」

「また兄貴と一緒に来ますね」

「ハハ、そうだね楽しみにしてるよ」

「その時は私たちも参加させてくださいね」

「今回は、だめだったけど私たちも今度はお泊りしたいです！」

「うん、美奈ちゃんと優菜ちゃんもその時は一緒にね」

「はい！」

「さてと、それじゃあそろそろ帰りましょうか」

「そうつすね」

「以外と時間が経っちゃったですしね」

そして、皆はそれぞれの家に帰る

しばらく見送っていたが皆の姿が見えなくなったので家の中に戻ることにした

リビングに戻った僕は静かになった、家を見わたして少しさびしい気持ちになる

その時、両腕にはる姉と亜姫が抱きついてきた

「ど、どうしたの2人とも」

「大丈夫・・・和ちゃんには・・・私がいるから」

「私もいます・・・兄さま」

二人とも僕の気持ちを感じ取ったのかそう言ってきた

「ありがとう二人とも」

「ん・・・」

「はい・・・」

「ちょっと、私もいるからね!」

そう言って母さんも僕に抱きついてきた

「ちょっと母さんまで!」

しばらく、そんなやりとりが続いたが数十分後、お風呂に入って寝ることにした

その日の夜は、家族で仲良く布団を並べて寝た

第50話（前書き）

すみません、最近更新が遅れ気味になっています

それもこれも大学が忙しいせいだ！

・・・すみません言いわけです

これからも更新が遅れる可能性が非常に高いですが、ちゃんと更新はしていきますので見守ってくださいると嬉しいですよ

第50話

第50話

お泊りが終わった次の日の朝、僕は暑苦しさから目が覚めた

夏だから暑苦しいのは当たり前だと思うがそれとはまた別の暑苦しさがあつた

そして、目が覚めた僕はその原因にすぐに気がついた

なぜか、僕の布団の中にはる姉がいるのだ

はる姉は、僕の腕をがっちりと抱きしめてスヤスヤと気持ちよさそうに寝ている

なんで僕の布団にはる姉がいるのだろうか、昨日は確か同じ部屋に布団を引いて寝たのは確かだが一緒の布団に寝た覚えはない

となれば話は簡単だ僕が寝ている間にはる姉が僕の布団に潜り込んできたということだ

まあ、冷静に状況を分析してる場合じゃないけどもうなんか慣れてしまった、いや・・・慣れたらだめなんだと思うけど

とりあえず、はる姉を起こさなければ

「はる姉、起きて」

「ん……ふぁ……和ちゃん……おはよう」

「うん、おはよう。とりあえず離れてくれないかな、暑いし」

「もうちょっと……だけ……このままが良い」

そう言うてはる姉は抱きついて腕にぎゅつと力を入れる

痛くはないけど力を入れたことにより僕の腕にはる姉の胸が当たってきた

「あ、あのさ、胸が当たってるんだけど」

「和ちゃんになら……別にいい」

「いや、はる姉が良くても僕がよくないよ」

「むう……」

「頬を膨らませて駄目なものはだめ、早く離れて」

「分かった……」

はる姉は渋々ながらも僕の腕から離れてくれた

「じゃあ僕は着替えて朝ごはんの支度をするから」

「私も……手伝う」

「ありがと、でもお互に着替えてからにしよう」

「ん……」

僕とはる姉は、自分の部屋に戻り着替えてから下に降りた

「さて、何にしようかな」

「私は……和食が……良い」

「それじゃあ、今日は和食にしようか」

「ん……」

和食を作ることにした僕たちは、材料を冷蔵庫から取り出して作り始める

僕は、みそ汁と卵焼きを作ることにした

しばらくして、出来上がったみそ汁と卵焼きをお皿に移してテーブルに並べる

はる姉の方も焼き魚などが出来上がったようのでテーブルに並べ始めた

「久しぶりだね、はる姉と一緒に朝ごはん作るのって」

「ん……最近は……和ちゃんに……まかせつきりだったから……ごめんね」

「気しないでいいよ、料理も慣れてくると楽しいしね。でも、こうやって誰かと作るのも楽しいね」

「うん・・・今度からは・・・私もなるべく・・・手伝うようにするね」

「ありがとう、はる姉」

「ん・・・そろそろ・・・お母さんと亜姫・・・起こさないと」

「そうだね」

朝ごはんも用意できたので母さんと亜姫を起こすため二人のところに行こうとした時、リビングのドアが開いた

「ふあゝ、和くん、春ちゃんおはよう」

母さんが起きてきた

「母さん、おはよう。朝ごはんできたから席について、僕は亜姫を起こしてくるから」

「ふあゝい」

まだ眠たそうな感じで返事を返した母さんは少しフラフラしながら席に着いた

亜姫の所に行くとな案の定、亜姫はまだスヤスヤと気持ちよさそうに寝ていた

「亜姫、朝ごはんできたからそろそろ起きよう」

「ふえ……兄さま？」

亜姫は目をこすりながら僕を見る

「おはよう亜姫、よく眠れた？」

「はい……」

「良かったね、朝ごはんできたから食べよう」

「ごめんなさい……兄さま……私だけ……ずっと寝てて」

「きつと疲れがたまってたんだよ、母さんもさっきまで寝てたし気にしないでいいよ。それより、朝ごはん食べよう」

「はい……」

亜姫はすぐに立ち上がり、僕の腕に抱きついてくる

「じらじら、亜姫」

僕は、苦笑いしながらも腕に抱きついてニコニコしている亜姫に注意ができなかった

「兄さま……いきましよう」

「うん、そうだね」

僕は、亜姫と一緒にリビングに向かう

「母さま・・・姉さま・・・おはようございます」

リビングに着いた亜姫ははる姉と母さんに挨拶をした

「おはよう〜亜姫ちゃん」

「おはよう・・・亜姫・・・ところでなんで・・・和ちゃんにくっついてるの？」

「なんとなく・・・です」

「早く・・・離れて」

「嫌・・・です」

「離れる・・・」

「嫌・・・」

「二人とも喧嘩しないの・・・亜姫も僕にひつついたままじゃ朝食食べれないよ」

「はい・・・」

亜姫は、不満そうな顔をしながらも僕の腕から離れて席に着く

やっと皆が席に着いたところで朝食を食べ始めた

数十分後、朝食を食べ終えた僕は、ソファーに座り本を読んでくつろいでいる

片付けは、母さんが「後片付けは私に任せなさい！」と胸を張って言うのでお願いした。亜姫も片付けを手伝っている

はる姉は、僕の隣に座ってテレビを見ている

僕が本を読んでいると後ろから母さんに抱きつかれた

「和くん、暇だよ」

「暇って言われても・・・」

「何処かに遊びにこうよ」

「何処かってたとえば？」

「えっとね、映画とかゲームセンターとかカラオケとか」

「私も・・・行きたい」

「私も・・・です」

両隣りに座っているはる姉と亜姫もそう言った

「僕は、別にいいけど」

「やったー!!」

母さんが飛び跳ねて喜んでいる

僕は、それを見ながら僕たちよりも子供っぽいんじゃないかと思った
母さんの提案により出掛けることになった僕たちは自分の部屋に戻り準備を始めた

といつても僕とはる姉はすでに着替えていたから必要なものを取りに行ったただけだ

母さんと亜姫の準備も早く終わった

戸締りを確認し僕たちは家から出た

母さんは、免許を持っていないので結局は歩きでの移動なんだけど

僕たちは他愛もない話をしながら目的の場所に

行く順番は、映画・カラオケ・ゲームセンターの順番になった

映画は、母さんの要望で恋愛ものだったのだが・・・

僕は、あんまり恋愛系の映画に興味がないため正直言って退屈だった。僕的にはコメディ系かホラーが良かったんだけどはる姉と亜姫も母さんと同じ映画がいいと言ったので結局恋愛ものになった

内容もかなりありきたりなもので余命が後わずかなヒロインと主人公のラブストーリーだった

僕以外の三人は涙を流しながら映画を見ていたが

映画も終わり、僕たちはカラオケに向かった三人はカラオケに着く

まで涙を流していたけど、おかげで僕に対しての周りの視線がとてつもなく鋭かったけど

カラオケではさっきまで泣いていた三人も元気になり皆それぞれ得意な歌を披露して楽しんでた

カラオケを数時間歌った僕たちは、ゲームセンターに向かった

ゲームセンターに着いた僕たちは、お金を小銭に替えているんなゲームをやった

某太鼓ゲームでは母が驚異的なテクニックを見せていた

まさか一人で二面打ちとは

そのせいで、僕たちの周りにはギャラリーが増えていた

僕たちはその後もいろんなゲームをやった

しばらくして、そろそろ帰ろうと思い三人に声をかける

「そろそろ帰った方がいいんじゃない？」

「ん・・・そろそろ・・・夕食時」

「そうね、お腹も空いてきたし」

「私も・・・お腹空きました」

「それじゃあ夕食の材料買って帰ろうっつよ」

「和くん、どうせなら外で食べようよ、たまには外食もいいんじゃないかな」

「それもいいかもね」

「それじゃあ行きましょう」

僕たちはゲームセンターから出て近くのファミレスに向かう

ファミレスに向かっていると

「あら、和人君たちじゃない」

美里先輩に出会った

「こんにちは、美里先輩」

「こんにちは和人君、家族でお出かけ？」

「はい、今から夕食を食べに行こうと」

「美里も・・・お出かけ？」

「ええ、お泊りが終わって急に暇になっちゃってねえ。だから暇つぶしに出掛けてたのもう帰るところだけどね」

「そうなんですか」

「だったら、美里ちゃんも一緒に食べに行かない？」

母さんが美里先輩を食事に誘った

「ありがとうございます、でも折角の家族水入らずに私が入るわけにはいかないですよ」

そう言つて美里先輩は母さんの誘いを断っていた

「そう残念、一緒に行きたかったのに・・・」

母さんは、肩を落として落ち込んでいた

「ま、また今度機会があればということだ」

母さんの落ち込みように美里先輩が少し困った様子だった

「母さん、あんまり美里先輩を困らせたらだめだよ」

「うう、仕方ない今日はあきらめるわ」

「それじゃあ、私は帰るから和人君たち、またね」

美里先輩は手を振りながら僕たちから去って行った

「母さん、そろそろ行かないとレストラン混んじゃうよ」

「分かったわ」

再びレストランに向かって歩き始める僕たち

数分後、レストランに着いた僕たちはウェイトレスに席に案内され席に着き注文をして雑談をしていた

しばらくして注文した料理が徐々に来た

全員分の料理がそろったところで僕たちは料理を食べ始める

「和くんの食べてるのおいしそう〜一口ちょうだい私もあげるから」

「別にいいよ」

「和ちゃん・・・これおいしいよ・・・少しあげるね」

「ありがとはる姉、じゃあ僕もあげるよ」

「兄さま・・・私も・・・あげます」

「じゃあ、僕の間もあげる」

互いに食べている料理を交換したりしながらゆっくり夕食を食べた

夕食を終えお会計を済ませてレストランを出る

そのあと賑やかに家へと帰る僕たち

家に着いた僕たちは、早々とお風呂を済ませ家族でゲームをやったりして寝るまでの時間を過ごした

そして、夜の12時ぐらいになって僕たちは眠くなりゲームを片づ

けて各自の部屋に戻った

僕は、自分の部屋のベッドにもぐり今日一日のことを少し考えていた
たまには家族でこんな一日を過ごすのもいいなあと思いつつ僕は
目を閉じた

第51話

第51話

8月24日、午後1時僕は今、渉の家にいる

僕以外にもはる姉、美里先輩、美奈ちゃん、優菜ちゃんそして母さんがいる

なぜ渉の家に母さんまで集まる状況になっているかというところ、明日の8月25日は亜姫の誕生日であり、亜姫の誕生日会のための作戦会議をしているところだ

ちなみにここに由香ちゃんがないのは、亜姫を買い物に連れ出してもらっているからだ

会議の内容は後で渉に知らせてもらうから由香ちゃんに行ってもらったのだ

「さて、それじゃあ明日の亜姫ちゃんの誕生日の役割分担を決めましょうか」

美里先輩がそう言った

「そうですね、必要な分担は、家の飾りつけと料理、それと亜姫と一緒に出かける人かな」

「なんで出かける必要があるんだ和人？」

「亜姫が目の前に居るのに誕生日の準備をするの涉は」

「おっとそれもそうだな、じゃあその役は和人でいいじゃん」

「そうね、和人君が連れ出すのが一番適任よね」

「どうしてですか？」

「亜姫ちゃんのことだから、和人君が出かけようって言えばすぐについていくもの」

「はあ、じゃあ僕がやります。出かける時間とか帰ってくる時間はどうします？」

「出かけるのは朝の10時くらいにしてもらえ、帰ってくる時間帯は私たちの準備の速さによるから終わったら連絡入れるわ」

「分かりました」

「つーことは、準備は7人になるな」

「そうね」

「どう分けましょうか」

「料理に三人、飾り付けに4人でいいんじゃない」

「そうね優菜ちゃんの言うとおりその分け方がベストね」

「料理は・・・私と・・・美里・・・母さんでやる」

「ええ」

「まかせなさい！可愛い娘のために腕をふるっておいしいものを作るよ〜！」

母さんが燃えている

「じゃあ、飾り付けは俺と由香、美奈ちゃんに優奈ちゃんだな」

「はい」

「亜姫ちゃんのためにも頑張りましょう」

「ねえねえ、和くん」

母さんが僕を呼ぶ

「何？母さん」

「プレゼントはどうするの？」

「「「「「「あー！」「」「」「」」

母さん以外の6人がその場で固まった

「もしかして、和くんまだ用意してないの？」

「か、母さんは準備したの？」

「え、うん、家に隠してあるけど」

「どうする和人」

「今日買っしかないでしょ・・・」

「だな、後で買いに行くか」

「それはまずいわ」

「どうしてですか？」

「もうすぐ、由香ちゃんと亜姫ちゃんが帰ってくるころだわ、今出ていってもし鉢合わせなんてことになったら」

「「確かに・・・」」

僕と渉は声を合わせてそう言った

「今日行くしかないけど、行く時間帯は何人かで分けないとバレちゃうわよ」

「そうっすね」

「二人くらいに分けましょうか」

「そうね、後で皆で買い物に行く名目で私たちもプレゼント買っておかないと」

「「です」

そんな話し合いをしていると玄関の方からただいまあくと聞こえてきた

「ただいま・・・帰りました・・・兄さま」

亜姫が僕に抱きついてきた

「おかえり、楽しかった？」

「はい・・・」

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい由香ちゃん」

僕たちは、亜姫を一回離して由香ちゃんに小声でさっきのことを話す

「あのさ、由香ちゃんプレゼントってもう買った？」

「え？プレゼントですか、はい買いましたよ」

僕たちは由香ちゃんの発言を聞いてずくと落ち込んだ

「僕たちって一体・・・」

「????？」

亜姫が落ち込んだ僕たちを見て首をかしげている

僕たちが落ち込んでいると不意にドアが開いた

「皆、おやつにケーキ作ったんだけど良かったら食べてね」

春香さんがエプロン姿で現れた

「どうかしたの皆々？」

「いえ、ケーキいただきますね」

「ええ少し運ぶには量が多いから悪いんだけど下に降りて来てくれるかしら？」

「わかりました」

僕たちは、ひとまず下に降りた

下に降りると人数分のケーキと紅茶がテーブルに置いてあった

「わあ、おいしそう！ありがとうございます！春香ちゃん！」

母さんは、春香さんに抱きついていて

春香さんは「あらあら」と言いながら母さんが抱きついてきたのを受け止めていた

ちなみに、母さんと春香さんは涉の家に行ってからすぐに仲良くなつた

僕たちは、とりあえずそれぞれ席についてケーキを食べ始める

春香さんの作ったケーキはすごくおいしく皆も大絶賛の味だった

僕たちは、しばらくケーキを食べている時、美里先輩が話を切り出してきた

「ねえ、和人君この後デパートにでも行かない？」

美里先輩がそう言った瞬間、僕はとっさにさっきの話し合いを思い出して美里先輩の話に乗った

「そうですね、僕も買いたいものがありますし行きます」

「私も・・・」

「じゃあ、俺も行くかな」

「私たちも付いて行って良いですか？」

「私たちも買いたいものがあるので」

皆それぞれ、そう言っているがデパートに行く目的は全員決まっている。皆それぞれアイコンタクトをひそかに取り合っている

「そうじゃあ、決まりねこの後、行きましようか」

この話がここで終わると思ったその瞬間

「私も・・・付いて行って・・・いいですか？」

亜姫がそう言ってきたのだ

その瞬間、再び周りの空気が変わった

亜姫、以外の皆がアイコンタクトで相談し合う

(どうしましょう美里先輩)

(どうしましょうって言われても、連れていくしかないじゃない)

(でも、そしたらプレゼント買いつらくなるっすよ)

(でも・・・ダメって・・・言ったら逆に・・・怪しまれるかもしれない)

(連れていくしかないでしょうね)

(そうですね)

注意：これはあくまでアイコンタクトです

「駄目ですか・・・？」

いつまでも返事が返ってこないのを不安に思ったのか亜姫が少し声を小さくして聞いてきた

「そんなことないよ、一緒に行こう」

「はい・・・」

こうして、僕たちは春香さんの作ってくれたケーキを食べ終えて渉の家を後にしてデパートへと向かった

しばらくして、デパートに到着した僕たちは再びアイコンタクトを取っていた

（これから、どうやってプレゼントを買います？）

（そうねえ、私たちはまだ何とかなるかもしれないけど・・・）

（問題は和人だよな・・・）

（亜姫ちゃん、和人さんにべったりですもんね）

僕は、腕に抱きついている亜姫を見る

（困ったなあ、これじゃあプレゼント買いに行けないよ）

（それなら、私たちの誰かにメールしてプレゼントを代わりに私たちが買ってくればいいんじゃないかしら）

（なるほど、それがいいかもしれませんね）

（確かに、じゃあ僕は亜姫と一緒に行動しますメールはばれないようにタイミングをはかって送ります）

（了解）

注意：あくまで！アイコンタクトです！！

「じゃあここからは自分たちの行きたい場所に行きましょうか」

「そうですね、時間を決めてまた今いる場所に集合しましょう」

「だな！それじゃあ俺はこっちに行くから後でなあ」

「私と・・・美里は・・・あっちに行くね」

「そうね」

「和人さん、私たちは下に降りますから！」

「またあとで！」

こうしてそれぞれバラバラになった今いるのはプレゼントを買い終えた由香ちゃんと母さんそして僕と亜姫だけだ

「さて僕たちはどこに行こうか？」

「はい！ゲームセンターに行きたいです！」

真っ先に提案したのは母さんだった

「母さん、ゲームセンターはこの前言ったでしょ」

「ええ〜良いじゃない、またいこうよ〜」

母さんは、亜姫が抱きついていない反対側の腕をブンブンと振ってくる

それを見ていた由香ちゃんが僕の耳元に近づいてきて

「和人さん、美空さんの言うとおりにした方がいいんじゃないですか？」

「どうして？」

「もし、他のところで皆と鉢合わせになったら大変じゃないですか」

「なるほど、確かに」

僕は少し考えてから

「それじゃあ、ゲームセンターに行こうか」

「わーい、それじゃあレッツゴー」

母さんは、ゲームセンターに走り出した

「まったく母さんは・・・」

「でも、母さまらしいです」

「まあね」

「和人さん、早く行かないと私たち置いていかれちゃいますよ」

「そうだね、早く行かないと」

僕たちも母さんの後を追った

そして、ゲームセンターに到着した僕たちは、どんなゲームがあるのか見て回って、面白そうなのがあればそれにチャレンジしてを繰り返していた

しばらくして、僕はタイミングを見計らいプレゼントを購入してもらうために皆にメールを送る

買うものはもう決めていたので素早くメールを送る

数分後、皆はすでに買い物が終わったのかすぐにメールが返ってきた。メールを見る限りではもう帰れそうなので皆にそろそろ集まった方が良いんじゃないかとメールを送る

今度はさっきよりも早くメールが返ってきた

皆それぞれ、了解と送ってきた

僕は、それを見て僕たちも戻ろうと思いきや母さんたちに声をかける

「そろそろ、皆用事も済んだみたいだからさ、さっきの場所に戻らない？」

「そうね、戻りましょうか」

「はい」

「もっと・・・遊びたかったです」

「ごめんね、その代わり明日行こうよ」

「明日……ですか？」

「うん、駄目かな？」

「わかりました……でも兄さまと二人つきりが……いいです」

「うん、まあ我慢してもらおうからね僕は別にいいよ」

僕がそう言うと亜姫の表情が明るくなり、また僕の腕に抱きついてきた

「ちょ、ちょっと亜姫」

「兄さま……大好き？」

「それはありがたいんだけど、離れてくれない周りの視線が……」

「いやです……」

「じゃ、じゃあとりあえずここから出よう」

「はい……」

亜姫、僕に抱きついていて腕にギュッと力を入れる

今日の亜姫は上機嫌なようだ

集合場所に戻ると、すでに皆が待っていた

「遅いぞ和人」

「ごめんごめん」

そう言うと渉が耳元に来て

「メールに書かれてたものちゃんと買っておいたぜ」

「サンキユ渉、そのまま明日まで持っておいてくれないかな」

「了解」

「兄さま・・・何の話ですか？」

僕の腕に抱きついてる亜姫が不思議そうな顔で聞いてきた

「別に大した話じゃないよ、ね、渉」

「ああ」

「それより、早く帰りましょう思ったより時間かかったせいとお腹が空いたわ」

「今日は、皆で何処かで食べましょうか」

「いいですね、あ、でも、その前に一回うちに戻ってもいいですか？お母さんも一緒に誘いたいんですけど・・・」

由香ちゃんがそう言った

「もちろん、春香さんにはいつもお世話になってるしね」

こうして、僕たちは一回渉の家に戻り春香さんも誘って皆で外食することにした

渉の家に到着し春香さんに外食のお誘いをする

「ありがとうね〜皆〜それじゃあすぐに準備してくるわね〜」

そう言って、準備を始めた

春香さんは言った通りすぐに準備を終えて僕たちの前に現れた

いままで外出時の春香さんを見たことなかったので少し新鮮でもある

「あら、どうかした和人君〜」

「あ、いえ、春香さんの外出の時の服装始めてみるなあって思ってた」

「そうだったの〜良かったわ〜服が似合ってた無いかと思ってたわ〜」

「そんなことはないですよ似合ってますよ」

「いやだわ〜こんなおばさん褒めたって何も出ないわよ〜」

「ホントのことですよ」

「そうありがとう〜」

「さて皆そろったわけだし行きましようか」

僕たちは、レストランに向かって歩き始めた

その後、僕たちはレストランで楽しく夕食を済ませてしばらく話をしてから解散になった

家に帰った僕は、お風呂に入り明日のことについて軽いメールを皆としながらリビングでテレビを見たりしていたが数時間後眠くなり自分の部屋へと移動した

携帯を充電器に置いて、電気を消して僕は眠りに着いた

第52話

第52話

ユサユサ、今朝僕は誰かに体を揺さぶられて目が覚めた

「う、うゝん誰？」

「兄さま・・・起きて」

「亜姫？どうかした」

「昨日の・・・約束・・・二人で出掛ける」

「あ！そうだったね、今何時？」

「7時・・・です」

「・・・あのさ亜姫、出掛けるのはもうちょっと遅くてもいいと思
うけど」

「楽しみ・・・」

「楽しみだから、早く僕を起こしたと」

僕がそう言つと、亜姫は「クン」とうなずいた

「そっか、じゃあ起きようかな」

「ん・・・朝ごはん・・・できてます」

「うん、着替えたらすぐ行くから、下に行つてね」

「はい・・・」

亜姫は、僕が言った通りにすぐに下に降りた

僕もすぐに着替えを済ませ下に向かう

下に行くとはる姉がエプロンを着て朝ごはんをテーブルに並べていた

「和ちゃん・・・おはよう」

「うん、おはようはる姉」

「あ、和くんおはよう、ふああ」

「母さんおはよう眠そうだね」

「昨日夜遅くまで漫画読んでたんだ、テヘッ」

「テヘッじゃないよ、あんまり夜更かししたらだめだよ」

「はい」

まったくこれじゃどちらが親か分からないよ

「和ちゃん・・・ご飯冷めちゃうから・・・早く座って」

「うん、分かった」

それぞれ、いつも座っている場所に座る

朝食を皆でワイワイと食べた

朝食を食べ終えた僕は、はる姉の入れてくれたお茶を飲みながらのほほんとしていた

すると後ろからクイクイと服をひっぱられた

引っ張られた方を見ると亜姫が若干頬を膨らませていた

「どうしたの、亜姫？」

「兄さま・・・私との・・・約束」

そう言われ時計を見ると、いつのまにか9時になっていた

「いつのまに、こんなに時間が」

「そろそろ・・・行きます」

「そうだね、ごめんねぼーとしてたね」

僕は一言謝って、亜姫の頭をなでる

「・・・／／／」

亜姫は、今度は頬を赤く染めていた、表情はさっきとは反対に明る

かった

僕は、自分の部屋に戻り財布、携帯を持って下に戻る

亜姫は、準備を終えていたのですぐに出掛けることができる状態になっていた

「じゃあ、行こうか」

「はい……」

僕たちが出掛けようとしたら

「和ちゃん……出掛けるの？」

とはる姉が言ってきた

「うん昨日、亜姫と約束したしね」

「そっか……気をつけてね……いってらっしゃい」

「ありがとう、はる姉」

「行ってきます……姉さま」

僕と亜姫は、はる姉に一言そう言って出掛けた

ちなみにこの場に母さんがいないのは、朝食を食べる前に母さんが自分で行っていた通りで昨日夜遅くまで漫画を読んでいて夜更かしをしたため再び夢の世界にダイブしたのだ

いつも通る道を亜姫と進みながら、どこに行こうかと話し合っていた

「亜姫は、どこか行きたいところとかある？」

「えっと・・・映画をみたいです」

「何か見たいのがあるの？」

「前に姉さまと・・・母さまの・・・四人で行ったとき・・・にも
う一つ見たいのが・・・あったんです」

亜姫は、少し遠慮気味にそう言った

「じゃあ、映画見に行こうか」

「でも・・・少し早い気がします」

亜姫は、残念そうにそう言った

僕は時計を確認する、確かに少し早い気がする

「少し早いね、でもゆっくり歩きながら行けばちょうどいい時間に
着くと思っよ」

「ホント・・・ですか？」

「うん」

「分かりました・・・ゆっくり行きます」

そう言って亜姫は、僕の腕に抱きついてきた

「最近、亜姫は、僕の腕に良くくっついてる来るよねどうして？」

「マイブーム……です」

「そう……なんだ」

僕は、少し苦笑いしながら亜姫の方を見る

亜姫は満足そうな笑顔を浮かべていた

(まあ、これぐらいで喜んでくれるんなら僕もうれしいけどね)

そして、駅前に到着した。映画が始まる時間にも丁度いい感じだ

映画館の方に行き、亜姫に何が見たいのか聞く

「それで、亜姫は何が見たかったの？」

「あれ……です」

そう言って亜姫が指さしたのはなぜかホラー映画

「ホントにこれがいいの？」

「はい……少し怖いですけど……見てみたいです」

「亜姫がそういうなら」

僕たちは二人分のチケットを買ってその後ジュースなどを買って中に入った

しばらくして、他の映画などのCMが流れていたが時間になり映画が始まった

映画の内容は思いのほかショッキングな映像などが流れて中々衝撃的な内容だった

隣で見ていた亜姫も終わるまでずっと僕の手を握って震えていた

映画が終わり館内から出る

「結構怖かったね」

「はい……でも面白かったです」

「そうだね、さて次はどこに行こうか」

僕はそう言いながら時計を確認する時刻はちょうど12時だった

「時間もちょうどいいし昼食も食べに行く？」

「食べたいです……お腹すきました」

「じゃあ、近くのファミレスにでも入ろうか」

僕がそう言っていると、亜姫はコクンとうなずいた

その後、僕たちは近くのファミレスで昼食を取り、そのあとはいろんな店を回ったりして楽しい時間を過ごした

そして、夕方になり僕たちは帰ることにした

「今日は、楽しかった？」

「はい……今日は一日……付き合ってくれて……ありがとう
ございます……兄さま」

「気にしないで、昨日約束したのは僕だしね。楽しんでもらえたんなら僕もうれしいよ」

そんな話をしながら僕と亜姫は家に到着した

「さて、ここからが本番だね」

「何が……ですか？」

「家の中に入ればわかるよ」

僕はそう言いながら玄関の扉をあける

そして、亜姫を最初リビングに向かわせる

亜姫は若干不思議そうな顔をしながらリビングのドアを開けると

パンツパンツ

クラッカーの音がリビングに響き渡った

「飾り付けだつて頑張りましたよ！」

「おお、この飾り付けにはかなり時間かかったからな」

「亜姫ちゃんに喜んでもらえたらうれしいな！」

「どうかな亜姫ちゃん？」

「とっても・・・嬉しいです」

亜姫は笑顔でそう答えた

飾り付けをしたメンバーは亜姫の返答に喜びハイタッチをしている

僕たちは、その後ワイワイと料理やケーキを食べながら騒いでいた

亜姫はずっと笑顔で嬉しそうに料理を食べたり、皆と談笑していた

こんなに嬉しそうにしてもらえると僕たちも頑張ったかいがあるという者だ（僕はほとんど何もしてないけど・・・）

料理もあらかた食べ終えた僕たちは亜姫にプレゼントを渡すために自らが用意したプレゼントを持つ

最初に動いたのは、はる姉だ

「亜姫・・・これ・・・私からのプレゼント」

「姉さま・・・ありがとうございます」

はる姉がプレゼントしたのは、ワンピースだ

「じゃあ、次は私ね！」

そう言っつて母さんもプレゼントを渡す

母さんが用意したのは、可愛いブックカバーと亜姫好んで読んでいるジャンルの小説だった

「亜姫ちゃんはこのジャンルの本が好きだからこれにしたんだ」

「母さま……ありがとうございます」

それに続き皆がプレゼントを渡す

涉は、少し大きめのクマのヌイグルミで由香ちゃんは可愛いフォトスタンド

美里先輩は、自分がお勧めのCDで美奈ちゃんと優菜ちゃんは、美奈ちゃんが星の形をしたイヤリングで優菜ちゃんはハートの形をしたネックレスをプレゼントした

そして、最後は僕が渡す番だ

「はい、亜姫これが僕からのプレゼントだよ」

僕は、自分のプレゼントを亜姫に渡す

亜姫は、僕から貰ったプレゼントを開けた

「可愛い……です」

そう言ってプレゼントをテーブルに置く

「ホント……綺麗なオルゴールね」

美里先輩がそう言った

そう僕がプレゼントしたのはオルゴールだ

「聞いて……みていいですか？」

「もちろん」

亜姫がオルゴールを開けると綺麗な音楽が流れ始めた

）

「綺麗な……音色」

「それに、オルゴールの装飾もとってもかわいいです」

「兄さま……ありがとうございます……大切にします」

「喜んでもらえて僕もうれしいよ」

「今日は……ホントに……ありがとうございます」

その後も僕たちはワイワイとしばらく騒いでいたが時間が結構経っていたのでそろそろお開きにすることにした

「じゃあ俺たちはそろそろ帰るか」

「そうね、もう結構遅い時間だし片付けもあらかた終わったしね」

「そうですね、今日は楽しかった〜」

「うん、またこんな風に騒ぎたいね〜」

皆、それぞれ今日の感想を言いながら、玄関に向かう

僕はそれを見送りに玄関に向かう

「皆今日はありがとね」

「何言ってるんだよ、お礼なんていらねえよ俺たちも楽しかったしな
」！
」

「そうよ和人君、お礼なんていらないわよ」

「そうですねよ和人さん私たちは友達の誕生日を祝っただけですから」

「そうですねよ〜私たちもおいしいものとか食べれたし満足ですよ！」

「そうそう！私たちは騒げただけで満足ですよ！」

「それじゃあ、帰りましょうか」

「そうですね」

「お邪魔しました和人さん」

「うん、また暇なときにも遊びに来てね」

「はい！」

そんなやりとりを終えて皆が帰って行くのをしばらく見送り僕も家の中へと戻る

「和ちゃん・・・皆は・・・帰った？」

「うん、皆楽しかったって」

「そう・・・亜姫に楽しんでもらうのが・・・一番だけど・・・皆にも楽しんでもらえて・・・良かった」

「そうだね」

その後、僕たちはまだ少し散らかっている所を片づけてお風呂に入り眠ろうと部屋に戻る

二階に上がり自分の部屋に入ろうとした時に

「兄さま・・・」

亜姫に呼び止められた

「どうかしたの亜姫？」

「あ・・・今日は・・・ホントに・・・ありがとございました・

・楽しかったです」

「そっか、楽しんでるもあえて何よりだよ、プレゼントも喜んでもらえたし僕もうれしいよ」

「それで・・・その・・・」

「????」

「その・・・誕生日だから・・・とかじゃないけど・・・一緒に寝てくれませんか？」

亜姫は少しうつむき気味にそう言った

僕はクスツと笑って

「うんいいよ」

僕の答えにペアッと笑顔になる亜姫

「じゃあ、もう遅いし部屋においで」

「はい・・・」

僕と亜姫は部屋に入り布団にもぐる

僕は、しばらく亜姫の幸せそうな寝顔を眺めてから眠りに着いた

第53話

第53話

8月27日、亜姫の誕生日から数日後、僕たちは特にすることもな
くだらだらと過ごしていた

最近は、いろんなイベントがあったからこうやってダラダラするの
は久しぶりな気がする

亜姫とはる姉は、紅茶を飲みながら本を読んでいる、しかし僕は二
人を見る

紅茶を飲みながら本を読んでいる二人は、まるでどこかのお嬢様な
んじゃないかと思うくらい絵になっている

しばらく、ボくつと眺めているとその視線に気づいた二人が僕に視
線を移す

「どうかしたの・・・和ちゃん？」

「あ、いや、二人の姿があまりに絵になっていたからつい見とれち
やって」

「兄さま・・・ずるいです・・・急に／＼」

「僕何か悪いこと言ったかな？」

「そういう・・・わけじゃないけど・・・こういつ時に・・・いき

なり言うから・・・恥ずかしくなる」

それを、聞いた僕はハツとなった

「い、ごめんね、いきなりこんなこと言って」

僕は、少し赤くなりながらそう答える

「気にしないで・・・恥ずかしかったけど・・・うれしかった・・・から」

「私も・・・うれしかったです」

そういつて二人はまだ少し頬を赤くしながらも読書に戻った

「和くん、兄妹で仲良くするのもいいけど、親子でも仲良くしたほうがいいと思うな」

そう言いながら、母さんが後ろから抱きついてきた

「そうだね、でも、とりあえず離れてくれない」

「え、じゃあ一緒にゲームやる！」

「はい」

「ホント！じゃあすぐに準備するね！」

母さんは、すぐに僕から離れてゲームの準備を始めた

すぐに準備が終わり、僕は母さんと一緒にソファーに座りコントローラーを握る

母さんがやるうと言ってきたゲームは、前にお泊りの時に皆とやった格闘ゲームだ

僕と母さんは、すぐにキャラクターを選び対戦を始める

「和くんは、このゲームやったことあるの？」

「うん、お泊りやってたときに皆でやったよ、あのときは優勝した人と二人で出掛けるっていう約束したりして条件付けてたけど」

それを聞いた瞬間、母さんの目が輝いた気がした、そして僕はまずいと思った

「ふっふっふ、それを聞かされたら私も何かお願いを聞いてほしくなってきたよ！」

「NO!!」

「なんで！なんで英語で却下したの！」

「いや、なんとなくだけど」

「ひどい！私のお願いも聞いてくれてもいいじゃない！」

「だって、嫌な予感しかしないし」

「そんなことないよ！」

「じゃあ、一応聞くよ」

「そんなにひどいお願いしないよ！二人で親子仲良くお出かけしたいと思っただけだよ！」

「あれ、意外とまともな気がする」

僕がそう言つと母さんはふふんと胸を張った

「そうでしょうそうですね、というわけで和くん！私がゲームで勝つたら一緒に出掛けてもらおうよ！」

母さんは、そう言つて今までやっていた対戦を一回やめて、キャラクター選択の画面に戻った

「さあ、キャラを選びなおして再戦だよ！」

「分かったよ・・・仕方ないなあ」

僕は、母さんに言われてキャラを選びなおした

そして再び対戦を始める、しかし、さっきまでと違うのは母さんの圧倒的なコントローラー捌き

さっきまで普通のプレイだったのに今の母さんのプレイは、そこらへんのゲーム大会なら簡単に優勝してしまいそうなほどすごい勢いでキャラを動かしていた

それをガードする暇もなく僕はぼこぼこにされて負けた

結果、僕は母さんと出掛けることになってしまった

「ふぶん」

母さんは上機嫌で僕の少し前をスキップで進んでいる

「和くん、まずはどこに行く？」

「うん、母さんはどこか行きたいところないの？」

「そうねえ、それじゃあ本屋にいきましょう、漫画の続きが気になるから！」

「はいはい」

僕は、苦笑いしながらそう答える

そして、僕と母さんは本屋へと向かう

数十分後、本屋へと到着した僕たちは、漫画コーナーへと向かう

母さんがワクワクしながら欲しかった漫画のところを見て絶望した。

・

「そ、そんな、よりもよって続きから買われているなんて・・・」

母さんの欲しかった本は、ちょうど今持っている巻の次からがないのだ

「か、母さん、そんなに落ち込まなくても、ほら他にも面白そうな漫画はいっぱいあるよ!」

僕は、そう言っつて母さんを励ます

「か、和くん」

母さんは、僕の方を見る

「これなんか面白いんじゃないかな、前に涉にすすめられた奴なんだけど」

そう言っつて母さんにその漫画を見せてみる

母さんは、僕から漫画を受け取り、裏に書いてあるあらすじを読んでみる

「なんかおもしろそう」

そう言っつて母さんは、いくつかその本を取っつてレジへと向かった

良かった、母さんが元気になっつて

さっきまで、愕然としていた母さんの機嫌はいつも通りの上機嫌に戻った

本屋を出て、僕たちはいろいろ見て回りながら駅前のほうへと向かった

駅前に到着し、僕たちは次はどこに行くかと話していた

「和くん、行きたい場所ないの？」

「特にはないかな、ほしいものもこれといって無いし」

「そう、じゃあ少しその辺の喫茶店にでも入って休憩しましょうか」

「そうだね」

僕たちは、近くにあった喫茶店に入りケーキとコーヒーを注文した、
母さんも同じようなものを頼んでいた

しばらく、ワイワイと話しながら食べていたのだけど、ふと母さん
に元気がないのに気づく

「どうかした母さん？元気なさそうだけど」

僕がそう言つと母さんは今までとは違う真面目な表情で話を切り出
した

「ねえ和くん、私って頼りないかな・・・」

「え・・・」

母さんの口元は笑っているが声が真面目なので僕はビックリしていた

「ほら、和くんと今日出掛けたけど私ばっかり楽しんでいる感じが
するし、和くん楽しくないのかなって」

「そんなことないよ、確かにいきなりだったけど久しぶりに母さん

と出掛けるわけだし、僕も楽しいよ!」

僕は、母さんにそう言った

「じゃあもつと私に甘えてほしいな、私は和くんたちのお母さんなんだよ、今日だって私の行きたいところばっかり行って和くんは行きたい場所ないっていうけど、あれって結構寂しいんだよ・・・和くん、私にまで遠慮しないでよ私だって母親なんだから少しは子供に親らしいことさせてよ」

「母さん・・・」

母さんの顔は、今にも泣きそうなくらい辛い顔をしている

「私は、母親として今まで和くんたちに何もしてあげられなかった、仕事で忙しいから仕方がないなんてそんなの言い訳にもならない親ならちゃんと両立して行かないといけないのに、だから今年は少しでも親らしいこととしてあげたいと思って夏休みに帰ってきたんだ、家族でいろいろ出掛けたりして思い出いっぱい作れたらなああって、でも和くんたちは友達と一緒にたくさん思い出を作ってた。和くんが嬉しそうな顔をしているのは嬉しかったけど、私は結局何もできなかつたんだなってまた思わされちゃったんだ」

もう母さんからは完全に涙がこぼれていた

「私は・・・和くんの友達が当たり前のようにやってることを・・・全然できてなかったことに・・・気付かされて・・・それでそれで」

母さんは、もう言葉をひねり出すのもつらそうな感じだ

僕は今、どんな顔をしているのだろうか母さんと同じで悲しい顔をしているのかそれとも別に気にする必要なんてないよとほほえましい顔をしているのかそれさえわからないほど僕は今困惑していた

いつも、元気で明るい顔をしている母さんのこんな顔を見るのは始めてだったのだ

「僕も・・・寂しかったよ」

「和・・・く、ん」

「子供のころから母さんたちは仕事に出掛けていなかったし学校行事の時もほとんど着てもらえなかった、亜姫とはる姉がいたから少しは寂しくなかったけどそれでもやっぱり寂しかった」

母さんはそれを聞いて顔を下に向ける

「でも・・・」

僕は、言葉を続ける

「でも、僕たちは母さんに感謝してるよ、そんなに僕たちの事を思ってくれてる母さんに感謝してる。それに今年は帰ってきてくれたし最初に会った時はびっくりしたけどすごくうれしかったよ、友達ともすぐ仲良く接してくれたしね」

「和くん・・・」

「母さんが気にすることなんて一つもないよ、家族ならなおさらね」

「で、でも」

「母さんは、いつまで家に入れるの？」

「え、えっと、あと数日かな夏休みが終わったら私も仕事に戻るつもりだよ、だから和くんはこの話をしておきたくて」

「じゃあ今日は母さんに僕の話聞いてほしいな」

「え？」

「僕が今まで体験した思い出を母さんにも聞いてほしいよずっと話したかったんだ、これは母さんにしか頼めないことなんだから」

「うん・・・うん」

母さんは泣きながら返事をする

「だからさ、今日はもう家に帰ろう帰って僕の話聞いてほしいから」

「うん・・・」

こうして僕と母さんはレジで会計を済ませて家に帰宅することにした

僕は、帰るときにもう一つお願いをした、それは手をつないで家に帰ってほしいというお願いだ

高校生なのに何言ってるんだと思うかもしれないけど、これは僕の子供のころからの夢なのだ

いつもはる姉や亜姫とは手をつないで帰ったけど母さんとは手をつないで帰ったことがないから、まさか今になってかなうとは思って無かったけど、まあそれを聞いて母さんが笑顔でうんと言ってくれたからよしとしよう

その後、僕と母さんは家に帰りながらも今まで僕が体験してきた出来事を話した、良い思い出からあんまり良いとは言えないものまでたくさんのお話を話した

家に帰った後も、ご飯やお風呂を済ませた後でたくさん話した、母さんは話の一つ一つを興味深く聞いてくれて話している僕もすごく楽しかった

そして、そろそろ寝ようと思った時、母さんが元気よく「私と一緒に寝よう！」というのでこの状態の母さんを自分の部屋へと戻すのは無理だと即座にあきらめた僕は、母さんの提案を了承して

今日は、二人で寝ることにした

意識がぼんやりしてきたころに耳元で「ありがとう」と聞こえた声に安心しながら僕は眠りに着いた

番外編

番外編

これはまだお泊りに行っていた時、和人が罰ゲームでコスプレをした後の和人以外のみんなに起こった悲劇である

深夜の12時、いつもなら眠っている時間に和人以外のメンバーがリビングに集まっていた

そして、皆は席についてあることを企てていた

「皆本君、和人君の様子は？」

美里が皆本にそう尋ねる

「ぐっすり眠ってるっすよ」

「そう、それじゃあ・・・」

美里は、少し間をおいてからこう宣言した

「今から、和人君の寝顔を写真に収めに行くわよ！！」

『おおー！！』

美里の宣言に皆のテンションがあがる。とはいえ和人が起きないように声を抑えているのはさすがといえよう

「あゝ」

そのテンションに混じってはいたが我慢しきれずに由香ちゃんがここで手を挙げる

「どうしたの、由香ちゃん」

「あのくやっぱりやめといた方がいいんじゃないですか、和人さんに申し訳ないですし」

「だから、ばれないようにすればいいのよ」

「でも・・・」

「由香ちゃんは、和人君の寝顔写真ほしくないの？」

「そ、それは、ほしくないと言えば嘘になりますけど」

「でしょ、それに他のみんなもやる気満々だし」

そう言っつて、美里は周りの人に目をやるといつても、いるのは文弥姉妹と皆本だけなのだ

「あ、兄貴も和人さんの寝顔の写真なんか撮ってどうするのよ!」

「単純に面白そうだから」

この時由香は思った、この兄貴はもう駄目だと

「それにいまさら中止なんてできないわよ、美晴と亜姫ちゃんを見

なさい」

今度は、美晴先輩と亜姫ちゃんの方に目をやる

「和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・
和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・
和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・和ちゃんの寝顔・・・」

「・・・兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔・・・
兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔・・・兄さま
の寝顔・・・兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔・・・兄さまの寝顔」

二人は、和人の寝顔を見れる&写真ゲットという喜びから和人の寝顔と連呼していた

しかも、交互に連呼しているからものすごく怖い。普段から寝顔は
見ているはずなのに・・・

由香ちゃんもそれを見て反論するのをあきらめた、そこは恋する乙女
こんなところで妙なことを言っつて命を散らせるわけにはいかない
のだ

それぐらい今の美晴と亜姫はヤバかった

「まあ、そういうわけだから諦めて和人君の寝顔を見に行くのを進
めるわ」

「わかりました」

由香は心の中で和人に謝りながら皆と一緒に和人の部屋に行くこと

にした

しかし、その考えが甘かったとこの後皆が実感するのである

そして、皆は和人の部屋の前に居る

「じゃあ、まずは皆本君が最初に入ってくれる、もしも和人君が起きていてもいいわけできるのはこの中で唯一皆本君だけだから」

「分かりました、つつても和人は一回寝たら途中で中々起きませんけどね」

そう言いながら部屋のドアを開ける、そして、皆本は一人先行して和人の部屋へと突入する、一応ドアは開けっぱなしにしているがさすがにそんなところからじゃ和人の寝顔は見れなかった

そうここからが悲劇の始まりだった

物音をたてないように皆本は和人のところまで寄って行く

そして、和人の寝顔を眺めるために顔をのぞかせる

その瞬間

「この世は、萌えがあれば十分、ぐぼべら!!」

皆本が変な奇声&言動をしこの世の法則ではありえないような回転をしながら部屋からぶっ飛んできた

「み、皆本君!!」

皆本君のあまりの反応に驚く一同

「な、何があつたの皆本君！」

「萌え死ぬとはこのことか。み、美里先輩、俺たちは俺たちは・・・甘く見ていた、たかが寝顔の写真を撮るだけだと、しかしこれは」

全てを言おうとした瞬間皆本は気を失つた

「い、一体、部屋の中で何が・・・」

皆本君を一階に運んでから他のメンバーは再び和人の部屋の前に居る

「良い、皆、さっきの皆本君の反応は尋常ではなかったわ、気を引きしめて、行きましょう」

美里先輩の言葉に他のみんなはうなづく

そして、皆は和人の部屋へと足を踏み入れた

そこに居たのは

「むにゃむにゃ・・・すうすう」

皆本を一瞬で戦闘不能にした究極兵器である和人の寝顔があつた

「くくくく（か、可愛い！！！！）」

和人は、自分の枕を抱きしめるようにして寝ていた

あまりの衝撃的可愛さに4人はその場に立ち尽くしていた、しかし、なんとか我に返った美里がその場の3人をなんとか我に返らせ一時撤退と目でサインを送りひとまず部屋を出る

「な、なんて強力なの」

「な、なんですか！あの反則的な寝顔は」

「私も・・・ヤバかった」

「はい・・・一瞬・・・立ち尽くしていました」

今なら皆本君の言いたいことが分かる

確かに私たちは侮っていた、たかが寝顔の写真を撮るだけだと・・・しかし、これは大きな間違いだった

これはそんなレベルではない

これは最早・・・戦争であった

「と、とにかく！今からは今さっき以上に気を引き締めていくわよ！このままじゃ全滅しちゃうわ！」

「」「はい！」「」

私たちは、気を引き締め再び戦場へと赴いた

さっきと同じ態勢で寝ている和人の前に4人は立っていた

「さて、早速寝顔を写真に収めましょうか」

そう言っつて、美里はカメラを取り出す

「美里さん、その写真後でください」

由香がそう言っつた

「私も……」

「私にも……ください」

「ええ、分かつたわ」

そう言いながらカメラのピントを合わせる美里だったが

和人が何か言おうとしているのを見て警戒態勢を取る

「ね、寝言かしら」

そして

「お、おねーちゃん、むにゃ」

「ぐはっ……」

年上であるこの二人には和人の寝言は効果抜群であった

この寝言によって二人の犠牲者が出た

「美里さん、美晴さん！」

由香が安否を確認した時にはもうすでに遅かった、そこには鼻血を流しながら幸せそうに気絶している二人がいた

由香と亜姫は再び二人を運ぶために撤退を決意した

「こ、これから、どうしよう亜姫ちゃん」

「最後に……もう一回だけ……行ってみましょう」

「そうね、美里さんたちのためにも写真を手に入れないと」

最初に反対していた由香でさえ最早、その場の空気に完全にのまれ
ていた

そして、由香と亜姫は最後の戦いへと向かうのだった

「おいしそう……むにゃ」

由香と亜姫が部屋に行った時、和人はどうやらさっきとは別の夢を
見ているようだ

内容は食べ物関連らしい

「こ、これなら、なんとか写真を撮れるかな」

「そう……ですね」

そして、写真を取ろうとした時、和人は抱きしめていた枕にカプツとかみつきもきゅもきゅと口を動かしていた、どうやら夢の中で何かを食べているらしい

だが、この動きが二人の度ツボにはまってしまった

そして、二人は声をそろえて

「もう・・・駄目」「

そう言って由香と亜姫も鼻血を流しながらその場に倒れた

その後、しばらくして二人は復活を遂げた美里と美晴によりリビングへと運ばれて目が覚めた

こうして、今回の悲劇は幕を下ろした

番外編（後書き）

どうもマロンです

今回は、このような話が頭の中にふと浮かんだので書いてみました
何か感想などももらえると嬉しいです

第54話

第54話

9月1日時刻は6時半、今日から二学期がスタートする、僕は制服に着替えてリビングへと降りる

「和ちゃん・・・おはよう」

「兄さま・・・おはようございます」

「はる姉、亜姫、おはよう」

すでに下に居た二人と挨拶をする

「朝ごはん・・・もうできてるから・・・食べよ」

「うん」

なぜ二人が僕より早く起きてるのかというと

8月27日の事を次の日に二人に話したら「私たちにも・・・遠慮しないで・・・何でも言っつて」と言っつて家事全般を前より手伝っつてくれるようになったのだ

僕は、気にしないでいいのと言っつたが

そしたら今度は母さんが「和くん！遠慮しちやだめつて言っつたでしよ！めっつ！」となんだかよくわからに怒られ方をしたので僕もなる

べく手伝ってもらおうようにしたのだ

その母さんは昨日、仕事のため海外にある自分の家へと帰って行った
まあ、帰る直前に「和くと、離れたくないよー!!」と言って僕
を無理やり一緒に連れて行こうとしたけど・・・

でも、飛行機に乗るとき最後に「文化祭なんかのイベントのときには連絡してね！必ず行くから!!」と言ってくれたのは嬉しかったな
そんな事を思いながら朝食を済ませた僕は食器を洗うため、はる姉
と亜姫の食器も片付け始める

そして、食器を洗い始めたとした時

「兄さま・・・私も・・・手伝います」

亜姫が僕の隣に来て一緒に食器を洗い始めた

「ありがと亜姫、じゃあ一緒にやろう」

「はい・・・」

僕がそう言うと亜姫は、少し頬を赤らめて返事をした

ちなみにはる姉も洗おうとしていたようだったが出遅れたのか少し
残念そうな顔をしてからテレビのほうへと向かった

二人で洗ったため思いのほか早く済んだ僕たちは、まだ学校に行く
には早いと思いテレビを見てしばらくぼーっとしていた

しばらくお茶を飲みながらのんびりしていたがテレビの左上に表示されている時計が7時半を表示していたのでそろそろ家を出ることにした

鍵を閉めたか確認して僕たちは家を出た

しばらく歩いていると

「おゝす、和人」

少し眠そうな顔をしながら渉が近づいてきた

「おはよう渉、なんか眠たそうだね」

「ああ、昨日遅くまでゲームしててな、すっかり寝不足だぜ」

渉はそう言い終わると大きな欠伸をした

「涉らしいね」

「そうか、そう言う和人こそなんか今日はすっきりしてるぞ」

「そうかな？」

「ああ具体的には、家族間で少しトラブルがあったけどそれが無事解決されたような顔をしてるな」

「具体的すぎるよ！ほとんどピンポイントじゃないか！..」

「お、当たったか？」

僕のツッコミに涉が図星かみたいな顔をしながら聞いてくる

「ま、まあ、当たり前かな」

「そつか、なら良かったじゃねえか！」

「うん」

涉は、詳しいことは聞いてこないで素直に喜んでくれていた

その後学校に到着した僕たちは、はる姉と亜姫と別れて自分の教室に向かった

教室に入るとすでに半分くらいの人が来ており僕と涉は挨拶してくるクラスメイトに返事を返しながら自分の席に着いた

しばらく涉や他の友達と話をしていたがチャイムが鳴り先生がきたのでそれぞれ前のほうに向きなおる

「えー、今日から二学期が始まる今日は始業式だけで学校が終わるがこれから学校がまた始まるから夏休みボケで寝坊などをしないように」

先生は、軽く諸注意をしてから僕たちに体育館に行くように指示して教室から出て行った

僕たちは、先生に言われた通り体育館へと向かった

少しして全校生徒が集まったので始業式が始まった

しばらくして始業式が終わった僕たち生徒は一回教室に戻りSHR
を行って今日はもう学校は終わった

「和人、帰ろうぜ」

「うん、今日は部活ないの？」

「ああ、明日からだ」

「そうなんだ、じゃあ帰ろうか」

「おう！」

僕と渉は教室を出て昇降口に向かう

昇降口に行くとするでに、はる姉・亜姫・美里先輩が待っていた

「和人君、皆本君、おはよう！」

美里先輩が元気いっぱい挨拶してきた

「おはようございます美里先輩」

「どもっす、美里先輩」

「皆本君は今日部活ないの？」

「ないっすよ」

「へえ、そうなの」

「バスケットは結構適当なところがあるっすからね」

「それって、駄目なんじゃないかしら？」

美里先輩が呆れ気味に言った

「まあ、確かにそうかもしれないっすけど。うちの部員は基本的に身体スペックは悪くないっすからねなんやかんやでなんとかなるんすよ」

「それは、自分の身体スペックが良いという自慢かしら皆本君」

美里先輩がニヤニヤしながら渉に言った

「そ、そういうわけじゃないっすよ。それに俺よりうまいやつが隣に居ますし」

渉はそう言いながら僕の方を見る

「帰宅部の僕が渉よりうまいわけないでしょ」

そんな会話をしながら学校を出る

そして、それぞれ自分の家に帰る

美里先輩と別れもうしばらく帰り道が一緒な渉と駄弁りながら帰る

そして、渉と分かれるところまで来たときに

「そつだ和人、今日家に飯に食いにこないか？」

「急にどうしたの？」

「泊りが終わった後、家に帰ったら母ちゃんがいろいろお世話になったんだし機会があったら和人を家に誘えって言われたんだよ」

「へえそうなんだ、でも良いの今日で？」

「良いんじゃないか別に、後和人だけじゃなく美晴先輩と亜姫ちゃんも誘えって言われたな」

「だったらお邪魔になるけど二人は今日でも大丈夫？」

僕は二人に予定を聞いてみた

「大丈夫・・・」

「特に予定は入って・・・ないです」

「そつじゃあ、今日は3人でお邪魔しようかな」

「おうじゃあ夕方にな、母ちゃんに報告しとくから」

「わかった、じゃあ夕方に」

夕方に渉の家に向かう約束をして僕たちは自分の家へと帰って行った

家に到着した僕たちは私服に着替え軽いお昼を取って休憩していた
しばらくすると亜姫がおもむろに口を開いた

「兄さま・・・本屋と一緒に・・・行きませんか？」

「いいけど、何かほしいものでもあるの？」

「はい・・・新しい本が今日・・・発売予定なので・・・皆本先輩
の家に行くのも・・・まだ時間があるから・・・一緒に行こうかと」

「そうなんだ、じゃあ行こうか僕はこの恰好のままでいいけど亜姫
そのままでもいいの」

「はい・・・私も・・・このままで・・・いいです」

「じゃあ行こうか」

そう言いながらリビングを出ようとする後ろからはる姉に服を掴
まれた

「どうかしたのはる姉？」

「私も・・・行く」

「いいけど、はる姉も何かほしい本あるの？」

僕がそう聞くとはる姉はコクリとうなずいた

「そっか」

ということと結局3人で出掛けることになった僕たちなのだ

「あの〜二人とも結構良く言ってると思うんだけど、少し離れてくれないかな」

僕の両腕には亜姫とはる姉がくっついていたしかも二人とも毎度のことながら結構力強く抱きついているので特に痛いとかはないのだが胸が当たってしまってもものすごくドキドキしてしまう

しかし二人は

「いや・・・です・・・最近・・・くっついてなかったです」

「私も・・・最近・・・くっついてない」

そう言って再びぎゅっと抱きついている腕に力が入る、む、胸が・

しばらくドキドキしながら歩いているとようやく本屋に到着した

本屋に到着した僕たちは各自、自分の好きなところに向かったそこで僕もやっとドキドキから解放された

「ふう、やっと解放されたよ、さてと僕も漫画でも見て回ろうかな」

そう思い僕は漫画コーナーのほうに行く

ちらほらとどんな漫画があるか見ていると前に母さんが買えなかった漫画があった

今度帰って来たときのために買って置いてあげようと思いいその本を手取る他にも僕が前に母さんと来た時に進めた漫画の続きをいくつか手に取りレジに向かう

レジで会計を済ませてから僕は二人を待ってようと店内の入り口付近に設置してあった自動販売機で飲み物を買って飲みながら待っていた

しばらく買った飲み物をチビチビ飲んでいると二人がやってきた

「兄さま・・・お待たせしました」

「和ちゃん・・・待たせて・・・ごめんね」

「そんなに待ってないから大丈夫だよ」

「それなら・・・良かった」

「兄さま・・・帰りましょう」

「うん、でもその前にデパートまで買い物に行ってもいいかな、涉の家に行く前にケーキでも買っていこうかと思うんだ、多分まだ行くには早いけど、買って冷蔵庫にでも入れとけばいいし折角外出したからついでに買っておきたいんだ」

「わかり・・・ました」

「私たちに・・・付き合って・・・もらったから・・・それぐらい別にいい」

「ありがと二人ともそれじゃあ行くかうか」

二人の了解も取りデパートのほうへと向かう

数十分歩いてデパートに到着した僕たちはケーキ屋さんに向かう

いくつかケーキを買ってから僕たちはしばらくデパートを回ってから帰ることにした

以外と長い時間デパートを回っていたのか時計を確認すると今から向かえばちょうど良い感じの時間になっていた

ホントは一回自分の家に戻ろうかと思っていたのだが時間がちょうどいいのでそのまま行くことにした

しばらく歩いてようやく渉の家に到着した

インターホンを鳴らすと春香さんが出てきた

「いらっしゃい和人君、美晴ちゃん、亜姫ちゃん、渉から話は聞いているわ」

「こんにちは春香さん。あのこれケーキ買ってきたんで良かったら食べてください」

「あらごめんなさいね気を使わせちゃって」

「そんな気にしないでください」

「それじゃあ食後にでも食べましようとりあえず入って」

「はい、お邪魔しますね」

「お邪魔します……」

「お邪魔……します」

靴をそろえてリビングのほうへと向かう

リビングに入るとすでに料理が並べられていた

「おう！和人来たか」

「あ！和人さん、美晴さん、亜姫ちゃん。こんにちは」

「こんにちはは由香ちゃんお邪魔するね」

「お邪魔します……由香さん」

渋そして由香ちゃんと話をしていると後ろからドアを開く音がした

「お！和人君来ていたのか！久しぶりだな！」

「お久しぶりです、勇次さん」

僕に挨拶をしてくれたのは、春香さんの夫の皆本勇次さんだ

明るく優しい性格で昔からよくお世話になっていた人だ

「おや？そちらの二人は兄妹かな」

「初めまして・・・姉の・・・美晴です」

「妹の・・・亜姫です」

「かわいい姉と妹がいて和人君は幸せ者だな」

「アハハ、そうですね」

そんな会話をしていると春香さんがやってきた

「勇次さん、和人君たちを立たせたままじゃかわいそうよ」

「おお、そうだな和人君たちも座りなさい」

「はい、失礼しますね」

僕は渉の隣に座りはる姉は僕の隣、亜姫は由香ちゃんの隣に座った
ようだ

皆が座った所で食事を始める

「さあ、いっぱい食べてね」

「はい、いただきます」

「いただきます・・・」

「いただきます・・・ます」

僕たちは、近くにあったおかずをお皿に移して食べた

「この唐揚げおいしいです！」

僕は春香さんが作ってくれた唐揚げを食べながらそう言った

「ホントにそう言ってもらえるとうれしいわ」

春香さんはほわほわした表情でそう言った

「ハツハツハ！春香の料理は世界一だからな！」

勇次さんが笑いながらそう言った

「もう、勇次さんったら」

春香さんも顔を赤くして喜んでいる

「相変わらず仲が良いね春香さんと勇次さんは」

「こっちからしてみれば、いい年して何言ってるんだと思っけどな」

涉は呆れながらそう言った

「そんなこと言っちゃだめだよ良いことじゃない」

「まあ、そうなんだけどな」

「あ、あの和人さん、飲み物どうぞ」

渉と話していると由香ちゃんが飲み物を渡してくれた

「ありがと由香ちゃん」

「い、いえ」

由香ちゃんは赤面しながらそう言って自分が座っていた席に戻って行った

「由香は相変わらず、和人君一筋なんだな！」

その光景を見ていた勇次さんが大きな声でそう言った

「な、ななな、何言ってるのよお父さん！」

由香ちゃんは、勇次さんの言葉に顔を赤くしながら怒っていた

「わ、私は、別に、そういうことは・・・その」

由香ちゃんはモジモジしながらうつむいてしまった

「?????」

「和人、お前今の状況理解してないだろ・・・」

「ま、まあ」

「この鈍感さえなければ完璧なんだけどなお前」

「なんのこと？」

「まあ、気付いてないならそれでもいいけどな、俺も同い年の親友にお義兄さんなんて言われたくないしよ」

「なんで僕が渉をお義兄さんなんて呼ぶのさ」

その言葉を聞いた周りの人たちは若干のため息とあきれ顔になっていた

春香さんと勇次さんだけはその光景をほほえましそうに眺めていたが

その後、食事を終わらせた僕たちは僕が買ってきたケーキを春香さんが用意してくれたので食べてからしばらくゲームをしてそして7時を回ったころ帰ろうと思いいゲームの片付けを渉と始めた

ゲームをかたしてリビングを出る

玄関まで皆がお見送りに来てくれた相変わらずこの人たちは優しいなど僕は思った

「今日は悪かったな、急に呼んじまって」

「そんなことないよ、春香さんの料理もおいしかったし楽しかったよ」

「ありがとゝ和人君」

「また来てくださいね和人さん」

「そうだぞ和人君、涉もだいぶ世話になってるし世話になりっぱなしじゃこちらが申し訳ないからな」

「はい、また暇があればきますね」

「亜姫ちゃんも遊びに来てね」

亜姫に向かって由香ちゃんがそう言った

「はい・・・またきます」

「それじゃあ、そろそろお邪魔しました」

「おう、また学校でな」

「うん、また明日」

「お邪魔・・・しました」

こうして2学期初めの今日は、皆本家との楽しい交流をして終わった

第55話

第55話

二学期も始まってから日がたち今は、9月の半ばだ

特にこれといって何かあるわけでもなく毎日をそれなりに楽しく過ごしていた

しかし、最近気になることがあった

それは、亜姫の元気がないことである

二学期が始まったころは普通だったのだが数日前ぐらいからどうも様子がおかしいのだ

最初僕は、元気がない時たまにはあるかなと思いつつとしておいたのだが何日たっても全然元気がないのである

今日も食事もほとんど取らずに一緒に学校に登校したのだがやはり元気がない

隣を歩いている亜姫をチラッと見てみる

一件普段と同じようにしているがやはり元気がない

「ねえ、亜姫」

「・・・」

聞こえていないのか返事がないはる姉も最近の亜姫の様子には気づいているらしく心配そうな目で亜姫を見ている

「亜姫」

「！！は、はい・・・なんですか・・・兄さま？」

亜姫は少し驚いた様子でこちらに顔を向けた

「最近元気がないけど、何かあった？」

「な、なんにもありません・・・」

「亜姫・・・」

「ホントに・・・なんでもないです・・・今日は日直の仕事があるので・・・先に行きます」

亜姫はニコッと微笑んでから逃げるようにその場から離れて行った

「和ちゃん・・・」

はる姉が話しかけてくる

「亜姫どうしたのかな・・・」

「分からない・・・でも、何かに脅えてる気がする・・・」

「脅えてる？」

「なんとなく・・・だけど・・・そんな感じがする」

「でもいつたい何に・・・」

「分からない・・・ごめんね・・・力にあんまりなれなくて」

「はる姉が謝る必要ないよ。それより僕たちも早く学校に行こう、結構ここで立ち話してたからこのままじゃ遅れちゃうよ」

「ん・・・そうだね・・・急がないと」

僕たちも少し急ぎ気味で学校に向かう

学校に到着しはる姉とも別れた僕は自分の教室に向かう

教室に入り席に着くと渉が話しかけてきた

「よう和人、お前にしては遅かったじゃねえか」

「渉おはよう、ちょっとね」

「何かあったのか？」

「最近、亜姫の元気がなくてね。何かあったのか聞いてみたんだけど話してくれなくて」

「そういえば、確かに元気ない気がするな」

「だから、心配だね」

「なるほどな」

そんな話をしていると先生がやってきてSHRが始まった

授業も始まり4時間目に突入し数十分立った時、教室のドアが荒々しく開いた

開いたドアの方を見るとはる姉が血相を変えて立っていた

「和ちゃん・・・大変なの・・・亜姫が倒れた！」

「なっ！」

僕は、驚いて席から立ち上がった

他のみんなも今の発言に驚き一気に教室がざわつき始めた

「おい！静かにしろ！」

先生が生徒を怒鳴りその場は何とか静かになった

「皆本、お前は妹のところに行きなさい」

先生が皆を静かにした後、僕にそういつてくれた

「はい、そうさせてもらいます！」

僕は、はる姉と一緒に急いで保健室に向かった

保健室に行くとき亜姫がベットで眠っていた

「先生、亜姫は大丈夫ですか！」

僕はその場にいた保健室の先生に容態を聞いた

「大丈夫よ文弥君、亜姫ちゃんは寝不足で倒れたただけだから」

保健室の先生は、僕のことを文弥と呼び。はる姉と亜姫のことは下の名前で呼んでいる

「ホントですか!？」

「ええ、だから少しここで休ませればすぐに治るわよ、美晴ちゃんも安心しなさい」

「よかった・・・」

はる姉は、目につつすら涙を浮かべて笑って安堵していた、僕もそれを聞いて少し安心した

「んにゅ、兄さま・・・姉さま？」

先生と話していると亜姫が目を覚ました

「目が覚めたみたいね、私は亜姫ちゃんの教室に行つてカバンを取つて来るから二人はそばに居てあげなさい」

「はい、ありがとうございます先生」

先生にお礼を言って、置いてあった椅子に僕とはる姉は座った

「亜姫、大丈夫?」

「亜姫・・・心配したよ」

「ごめんなさい・・・兄さま・・・姉さま・・・心配かけて」

亜姫は申し訳なさそうにこちらを見る

「気にしなくていいよ倒れたって聞いたときはびっくりしたけど、亜姫が無事ならそれでいいよ」

「そうだよ・・・亜姫・・・無事でよかった」

「もう少しでお昼休みだけど、今日はもう家に帰って休んだ方がいいよ。先生には僕が言っておくから」

僕がそう言つと亜姫は目を見開いて僕に抱きついて来て

「嫌です!一人は・・・嫌です!」

いつもの数倍大きな声でそう言った

「ど、どうしたの亜姫!」

「ひ、一人に・・・しないで・・・ください」

亜姫は僕に抱きつきながら震えていた

「亜姫……一体何があつたの？最近、元気がなかったことに関係してるのかな？」

「はい……お昼休みに話します……今は……こうさせてください」

そう言つて亜姫はさっきよりも少し強めに僕に抱きつく

「うん、いいよ」

僕は、亜姫の頭をなでながら了承した

しばらくして、戻ってきた先生がカバンをベットのそばに置いてからお仕事に戻った

昼休みを知らせるチャイムが鳴った

「亜姫、お昼はどうする少しは食べないと最近食欲もなかったしまずは何か食べないと、お話はその後でもいいからさ」

「はい……先生……ここで食べてもいいでしょうか？」

「かまわないわよ、文弥君と美晴ちゃんもここで食べて行きなさい」

「はい、それじゃあお弁当取ってこないと」

でも、今の亜姫をこのまま放っておいたら行けない気がするしどうしよう……

どうしようか考えていると保健室のドアが開いた

ドアの方を見ると渉と美里先輩が立っていた

「渉、美里先輩もどうしたんですか？」

「お弁当、持ってきたんだよお前のことだからここで食べるんじゃないかと思ってな」

「私も同じく美晴にお弁当を持ってきたのよ」

「美里・・・ありがとう」

「というわけで私たちもここで食べるわ、いいですか先生？」

「仕方ないわねえ、今回は特別よ」

先生は微笑みながら美里先輩の願いを了承してくれた

それから皆それぞれお弁当を食べてしばらく休憩し亜姫にいよいよ本題を聞くことにした

ちなみに先生は途中で職員室に用事があると言って保健室から出て行った

「それで亜姫さっき話そうとしていたこと話してくれるかな」

「はい・・・」

亜姫、少し震えながらポケットに手を入れ一枚の手紙を渡してくる

「それを・・・読んでみて・・・ください」

亜姫にそう言われ僕は手紙を開く他のみんなも僕の後ろに回り手紙に目を通す

その手紙にはこう書いてあった

『僕と君は結ばれる運命なんだそれは絶対に揺らぐことはない。その証拠に僕は君のすべてを知っている。君は僕の物だ愛してるよ亜姫』

僕たちは、この手紙に驚愕した

「これって・・・」

「完全にストーカーね」

「文面からみても間違いないっすよね」

「しかも・・・相当・・・悪質」

亜姫、震えて下を向いている

「これ、いつ送られてきたの？」

「数日前・・・です・・・それから毎日誰かの・・・視線を・・・感じて・・・たまに写真が・・・送られてきたり」

亜姫は、泣きながらも懸命に説明する

「だんだん怖くなって・・・家に居ても・・・全然安心・・・できなくて」

「それで、ずっと一人で我慢してたの？」

「はい・・・」

僕は、亜姫のそばに行きギュッとやさしく抱きしめる

「兄・・・さま・・・」

「ごめんね、気づいてあげられなくて。一人でずっと怖い思いをしてたんだよね」

「怖かった・・・です・・・兄さま・・・うわああああん」

亜姫は話して緊張の糸が切れたのか僕の胸の中で思いつきり泣いていた

しばらくして、泣きやんだ亜姫はまだ疲れが残っていたようで再び眠りについた

「よっぽど疲れが残っていたのね亜姫ちゃん」

「そうですね、無理もないですよ」

「だな、ずっと怖い思いをしてたらしいし」

「その・・・ストーカー・・・許さない」

「そうだね、そのストーリーカーをなんとかしないと亜姫はずっと怖い思いをすることになるし」

「しかし、どうやって突き止めるんだ？警察に知らせるのか？」

「それは止めた方がいいと思うわ、正体かわからない以上むやみに警察に知らせたりしたら逆に亜姫ちゃんを危険に晒す可能性があるし。そもそも警察なんかじゃ大して当てにならないわ」

美里先輩の言うとおりだ、さっきの手紙を見せたとしても警察が素早く動くとは限らないその場合亜姫が危険な目に会うのは目に見えるている

「私たちが・・・何とかする」

「そうね、危険だけど美晴の言うとおり私たちが何とかするしかないと思うわ」

「そうですね」

「そうになると一番の問題はやっぱりストーリーカーの正体だよな。正体がわからない以上手の出しようがないしな」

「そうですねどうやってあぶりだそうかしら」

「一番手っ取り早いのは、亜姫ちゃんが誰かとイチャイチャして相手が切れて現れたのをボコるのが一番なんだけどな」

「じゃあ和人君が相手でいいんじゃない」

「僕ですか？でも、相手が亜姫の事をストーカーしてるんなら家族構成とか知ってるんじゃないですか？」

「そうかもしれないけど、おそらくストーカーは相手が男ならだれでも亜姫ちゃんとかくつついていれば痺れを切らして現れるんじゃないかしら」

「その・・・可能性は・・・高い」

「じゃあ僕が亜姫のそばに居るとして美里先輩たちはどうするんですか？」

「私たちもすぐに駆けつけられるようにスタンバイしておくわよ最もストーカーに見つかるといけないから一定の距離は取るけど学校ならそれは必要ないだろうから学校では普段どおりにするわ」

「俺もそうするかな、今のところむやみに動けないしな」

「私も・・・亜姫のそばに・・・なるべくいるようにする」

「でも、そしたら美晴にも危険が及ぶ可能性があるわよ」

「構わない・・・和ちゃんが体張るのに・・・私だけ黙って見てるわけには・・・いかないから」

「なら、美晴の好きにきなさい」

「ん・・・」

「とはいえ相手がすぐに出てくる可能性は低いわね、あぶりだすの

に数日かかるかもしれないわ」

「ですね、でもやるしかありません」

「もちろんよ」

「それじゃあ、決まったことですし亜姫が起きたら事情を説明してさっそく行動に移しましょう」

「ええそうね」

その後お昼休みが終わったので涉と美里先輩は授業に戻って行った、僕とはる姉は午後の授業は欠席して亜姫のそばに居てあげることにした

時間的に5時間目の終わりにさしかかった頃、亜姫は目を覚ました

「兄さま・・・そばに居ますか？」

寝ぼけて回りをまだ良く見渡していない亜姫がそう聞いてきた

「いるよ、良く眠れたかな」

「はい・・・久しぶりに・・・よく眠れました」

「そっかそれは良かった」

その後、僕は皆と話したことを亜姫に報告した

「兄さま・・・姉さま・・・ごめんなさい・・・迷惑掛けて」

「なんで亜姫が謝るのさ、亜姫は何も悪くないよ」

「気にしなくて・・・いい」

「でも・・・」

「それ以上、同じこと言うと怒るよ亜姫。僕たちは亜姫に元気になつてほしいから勝手に行動してるのだから気にしないの分かった？」

「はい・・・ありがとうございます・・・兄さま・・・姉さま」

「よろしい、今日は僕もはる姉も授業には出ないから早いけど帰るかいそれとももう少しここに居る？」

「もう少し・・・ここに居たいです」

「分かった、じゃあ帰るのは放課後にしようかそれまではゆっくり休むといい、夜までもう眠れそうになかったら話でもすればいいし」

「そう・・・します」

ということで小1時間ほど亜姫とはる姉三人で話をして放課後になった

渉と美里先輩とも合流していつものメンツで帰り始めた

いろいろ話して楽になったとはいえやはりまだ亜姫は震えていた

「亜姫、はい」

僕は手を差し出す

「なん・・・ですか？」

「手をつないで帰れば少しは恐怖も薄くなると思つよ」

「いいん・・・ですか？」

「別にいいよ」

「じゃあ・・・」

そう言つて亜姫は僕の手を握つた

「こうして見ると作戦とか関係なしに普通のカップルに見えるわね」

「まあ、確かにお似合いつすよね」

「ん・・・少し嫉妬」

「どう反応していいか困る発言は控えてくださいよ」

「私は・・・うれしい・・・です」

「いいじゃない亜姫ちゃんは嬉しそうだし」

「まあいいですけど」

しかし、あるところを通り過ぎたあたりから妙な視線を感じる

皆もその視線に気づいているらしく普段どおりにふるまいながらも後ろを気にしている

「意識していると意外と気づくもんだな」

渉が小声でそう言った

「そうね気味の悪い視線をこれでもかかってくらい感じるわ」

「ん・・・不愉快」

「今は耐えるしかないよ」

僕の言葉に皆がうなずく

「亜姫、大丈夫？」

「兄さまが・・・手を握ってくれてるから・・・平気です」

とは言うものの若干震えている

「やっぱり、ここでぶちのめしとくか和人？」

渉が亜姫の様子を見ながらそう言った

「それはまずいでしょ、今手を出したら警察に捕まるのは僕たちだよ」

「なんでだ、相手はこうしてついてきてるじゃないか」

「今付いてきてる人がストーカーだとしても決定的な証拠がないからね亜姫に写真を送りつけたらしいけどそれを撮った証拠もないし」

「和人君の言うとおりね今は様子を見るしかないわ」

その後も不快な視線は消えることはなくそのまま各自の家へ帰ってしまい僕たちも自分の家へと付いてしまった

そんな状態が数日続いていていたある日

いつものメンバーで帰っていた時、特に何か気にするわけでもなく近くの公園でジュースでも飲もうという話になり最近亜姫も落ち着いてきていたので皆了承して一息入れようと近くのベンチに座ったのだ

渉と美里先輩そしてはる姉が自動販売機までジュースを買いに行き僕と亜姫がベンチに座って待っていたのだ

「亜姫、大丈夫？」

僕は最近、このような質問を良くしている亜姫からすれば何度も聞かれて鬱陶しいかもしれないがやはりまだ問題が解決していないので心配なのだ

「はい・・・大丈夫です・・・兄さまがそばに居るので」

「ならいいけど、もう少しで皆戻ってくるからね」

「はい・・・ちょうど喉乾いてたので・・・嬉しいです」

「アハハ、そつか少しでも亜姫が元気なら僕たちもうれしいよ」

僕の言葉に若干亜姫の顔が赤くなった

その時、少し離れた所から渉がジュースを持って戻ってくるのが見えた

「おい駄菓子屋にも寄ってきたからお菓子も食おうぜ」

「渉ってばいつの間に・・・」

僕は若干苦笑いしながら皆のほうを見る良く見ると皆も袋を持っていたどうやら僕と亜姫が話している間に素早くお菓子を買ってきたらしい

「ホントいつの間にか買ったって感じだよね」

「そう・・・ですね」

やや駆け足気味でこっちに向かっていている皆の所に向かおうと立ちあがったとき

「「「!?!?!」」」

ふいに3人の表情が変わった

「和人！逃げろ！」

「え？」

渉の言葉に戸惑っているのと頭に鈍い衝撃が走った

「ぐっ！」

僕は痛みには耐えられなくなりそのまま倒れた

「兄さま！」

頭の痛みをこらえながら痛みの走った方を見ると

一人の男がバットを持って立っていた

男は僕の頭にもう一度バットを振り下ろす動作を見せる

なんとかその一撃を避けて亜姫を抱えて距離を取る

そして、男と対峙する形を取った

男は中肉中背の体系で顔は目元が長い髪で覆われておりよくわからない

亜姫を後ろに居た美里先輩たちのところまで行かせ僕は数歩前が出る

「誰だ！あなたは！」

僕は、頭の痛みをこらえながら男に話しかける

「僕は、亜姫の結ばれる男だよ」

「あんたがストーカーの正体か」

「ストーカー？違うよ僕は亜姫を守るために君たちをつけていたんだ」

「ふざけるな！あんたのせいで亜姫がどれだけ怖い思いをしていると思ってるんだ！！」

僕は精一杯の怒りを込めて叫んだ

「怖い？亜姫が僕を怖がるわけじゃないじゃないか僕と亜姫は結ばれる運命なんだからそうだろ亜姫」

男は詫びれもなくそう言いながら亜姫のほうを見る

ちらつと後ろを見る亜姫は恐怖で完全に足がすくんでいてそれをはる姉がかばうように抱きしめていた

「わ、私は・・・あなたなんて・・・し、知りません」

亜姫は震えながらも相手の言葉を否定する

「し、知らないだつてこの僕を君と結ばれるこの僕を」

「し、知り・・・ません」

「そんなはずはない！亜姫が僕を知らないなんて嘘だ！」

男は驚愕の声をあげて叫ぶ、亜姫はビクツとなってはる姉にすがりつく

男はしばらく亜姫を睨んでいたが再び視線を僕に移した

「お、お前が亜姫を操っているんだな、そうに違いない！それでもないかぎり亜姫が僕を忘れるなんてありえない！」

男は僕に殺意のこもった視線を向けて亜姫を再度見る

「待っててね亜姫すぐにこいつを殺して、洗脳をとりあげてから」

そう言いながら男は再びバットを力強く握り僕を睨む

まずい！

「美里先輩！早く警察を！渉は亜姫のそばに居てくれ頼む！」

「わかったわ！」

「ああ！」

美里先輩はすぐに携帯を取り出し連絡を入れる

渉も亜姫の一步手前に立ちいつでも相手と戦える体勢を取る

男はバットを僕に向かって振り下ろす

ギリギリで僕はそれをかわす

正直言って、頭の痛みが強すぎてかわすので精一杯だった

しかし、このままではやばい

再び男がバットを振り上げた瞬間僕は男の懐に飛び込みバットを持っている手を思いつきりつかむ

これですばらく時間を稼げるだろうと思っていたのだが、男は懐から素早く何かを取り出し僕の体に押し付けた

その瞬間、体に痺れが走り僕はその場に倒れ込む

「ス、スタンガンまで持っていたのか・・・」

男は僕の発言など気にもせずバットを思いつきり振り下ろす

ゴキんと鈍い音が僕の左腕からした

「ぐああああああ！」

僕は左腕を抑えてもがく

男はそれをチャンスと思ったのかそのままバットを振り続ける

「兄さま！いやあああ！」

「和ちゃん！」

「和人君！」

亜姫が悲鳴を上げる他のみんなも悲鳴をあげるような声で僕の名前を呼ぶ

僕はされるがままに男に殴られ続ける

「ぐあっ！うぐー！」

僕の呻き声を聞いてそれに痺れを切らした渉が男に駆け寄り相手を
思いっきり殴った

「うぐっ！」

男はとっさのこととでよけられずに拳をまともに食らった

「和人！」

渉が僕の所に駆け寄る

「わ、たる」

「和人！しっかりしろ」

僕は何とか立ち上がる

頭にもいくつか良いのを貰ってしまい意識がもろもろとしている目
の焦点も合わない

それでもなんとか言葉を発する

「わ、たる、この場から、亜姫たち連れて、に、逃げてくれ」

「何言っただんだそんなことできるわけないだろ！このままじゃお前

が殺されるぞ！」

「た、頼む、よ、わ、たる……」

その時、相手の男が起き上がり再びバットを握り襲いかかってきた

僕は、もろろとうとする意識の中、相手の懐にまた入り込んで拳を入れる

しかし、全然力の入っていない今のパンチでは男は怯みもしなかった

ニヤリと笑いながら男は僕にバットを振り下ろす

僕は、バックステップをするような形でそれを間一髪かわすが勢いに負けて尻もちをつく形こけてしまった

男はゆっくりこちらに歩み寄ってくる

「ふひひ、お前が死ねば亜姫は僕のもとに帰ってくるんだ」

なんとか体を動かさそうとするがすでにボロボロで全然言うことを聞いてくれない

「くっそたれ！」

渉がもう一度男に駆け寄り止めようとするが渉もスタンガンを押すつけられてその場に突っ伏してしまふ

「くそ！和人！逃げろー！ー！」

男は僕の前に立ちこれで最後だと言わんばかりにバットを振り上げてそして振り下ろす

「兄さまー！ー！」

「和ちゃん！お願いだから動いて！」

「和人君しっかりして！」

亜姫たちが遠くから僕を呼ぶ、もう駄目だとあきらめて覚悟を決めた時

「その不審者！止まりなさい！」

警察の人が数人立っていた

そして、素早く男に駆け寄り数人で男を取り押さえる

「は、話せ！僕は亜姫と結ばれる男だ！話せー！ー！」

男はその場で手錠をかけられなんとか行動は制限された

男の逮捕を確認した警察が倒れている僕と涉そして亜姫たちのもとにそれぞれ駆け寄った

「君たち大丈夫か！すぐに病院に運ぶからなもう安心していいぞ！」

人のよさそうな警察の人が僕のそばに来てそう言ってくれた

僕はその言葉に安堵し意識を手放した

「う、うんこは？」

僕は、見知らぬ白い天井を眺めてぼそつと呟いた

周りを見渡すと僕はここが病院だということがすぐに分かった

あれからどれぐらい立ったのか外はすっかり暗くなっていた

すると、ドアを開く音が聞こえた

僕はそちらの方に目を向ける

そこには渉と美里先輩が立っていた

「和人！目が覚めたのか！」

「和人君！大丈夫！」

「は、はい、なんとか、あのはる姉と亜姫は？」

「二人は病棟の休憩所に居るよ目の前でお前が殺されかけて亜姫ちゃんにシヨックを受けて泣いてるから美晴先輩がそばで慰めてるんだ」

「そうなんだ・・・」

「でも目を覚まして良かったわ、お水でも飲む？」

「あ、はい、お願いします」

僕は、渋にそつと起こされ何とか起き上がった

「じゃあ、俺二人を呼んでくるわ」

「うん」

「はい、和人君、水よ」

「ありがとうございます、美里先輩あの後ってどうなったんですか？」

「あのストーカーは警察に連行されたわその間もずっと亜姫ちゃんの名前を呼んでいたけど」

「そうですか」

「あの男は、この街に住む大学生らしいのあんまり周りからの評判も良くなかったみたいだね、亜姫ちゃんを何処かで偶然見たとき一目ぼれしてそのまま勘違いし続けてあの状態に至ったんじゃないかと警察は言ってるわ」

「でも何とか捕まってよかったです」

「良くないわ」

「え？」

美里先輩の発言にぼかんとする

「和人君！あのまま警察が来なかったらあなた死ぬところだったのよ！しかも皆本君から話を聞く限りあなた自分だけ残って皆を逃がそうとしたらしいじゃない！」

「でも、あのままじゃ皆が危なかったし」

「ええそうね危なかったかもしれない！でもねだからと言って和人君を置いて逃げれるわけないでしょ！自分だけ犠牲になるうなんて考えはやめなさい！そんな事をされたら私たちは死んだ方がましだわ！」

美里先輩が普段見せないような怒りの表情を見せる

「自分の命を大切にしなさい！今度同じようなことを言ったら許さないわよ！」

涙目になりながら美里先輩が僕に説教をする

「は、はい、すみません・・・」

僕は返す言葉もなくただただ美里先輩の言葉を聞いている

一通り言いたいことを言い終わったのか美里先輩は今度はさっきとは違って変わって優しい表情になった

「ホントに無事でよかったわ、数時間も眠りっぱなしで皆不安だっ

たのよ」

「すみません心配かけて」

「謝るのなら最初っからあんな無茶はしないこといいわね？」

「はい、もう一人でなんとかしようとは考えません」

「ならばよし！それともう一つ問題があるのよねえ」

「何かあつたんですか？」

「えーっと、あの後、以外と事件が大きくなってねテレビ局の人がが病院の前に群がってるのよ」

「マ、マジですか」

「マジよ、その証拠にほら」

美里先輩がテレビをつけるとそこには今現在入院している病院が移つており、そこにたくさんマスコミが押し寄せていた

「しかも私たち独断で動いたから学校側にも苦情の電話が鳴りつばなしらしいのよ、学校側はこの問題に気付いていなかったのかったね」

僕は、目の前のテレビを見て啞然としていた

まさか、こんな騒ぎになると思わなかった

これからどうしようか悩んでいると再びドアを開く音がした

涉がはる姉と亜姫を連れて戻ってきたのだ

「に、兄さま・・・兄さまー！ー！」

亜姫が泣きながら僕に抱きついてきた

僕は、抱きついて泣いている亜姫の頭をなでてやる

「し、心配・・・しました・・・し、死んじゃうかと・・・思いま
した」

「ごめんね心配かけてもう大丈夫だから」

「ホント・・・ですか？」

「うん」

「良かった・・・です・・・ホントに・・・良かった」

亜姫は僕から離れ涙をぬぐっている

「和ちゃん・・・良かった」

「はる姉もごめんね心配かけて」

「ん・・・もうあんな無茶・・・したらだめ」

「分かってる、さつき美里先輩に説教されたしね」

「美里に？・・・」

「うん、自分の命を粗末にするなってね」

「そう・・・」

はる姉が美里先輩のほうを見る

「ごめんね美晴でも我慢できなくてね」

「ん・・・気にしなくていい」

二人の光景に微笑んでいると渉がヘッドロックをおみまいしてきた

「ちょっとわ、渉！」

「たくよく心配掛けやがって！この野郎」

「い、痛いって！」

「うるせえ！心配かけた罰だ！」

そう言って渉がさらに力を強めてくる

亜姫たちも笑いながらそれを見ている

その後、看護婦とお医者さんが来て軽い診察をした

話を聞くと骨も複雑に折れてはいなそうで1か月もすれば元に戻る

し、頭の方も特に問題はないらしい

とはいえかなり身体中を殴られたため検査のために一週間ほどの入院をすることになった

着替えなどは後ではる姉と亜姫が持つてきてくれると言ってくれた

そのあとはしばらく皆としゃべっていたが皆もさすがに帰らないとまずいので今日はもう解散となった

その日は僕も問題が解決し安心して眠りに着くことができた

第56話(前書き)

今回は、かなり長い文章になりました

第56話

第56話

事件の次の日、僕は病院の起床時間である6時に目が覚めた

結構早い時間に起床するが僕はいつもこれぐらいに起きていたので普通に起きることができた

しかし、左腕にギブスがはめられているため少し起きづらかった

少しして看護婦さんがやってきた

やってきた看護婦さんはだれが見ても美人と答えるだろう容姿をしていた

「今日から退院までの間、文弥くんの担当になった水瀬ですよろしくね」

水瀬と名乗った看護婦さんはにっこりとほほ笑みながらそう言った

「あ、はい、よろしくおねがいます」

僕はその笑顔に少しドキッとしてしまった

しかし、それと同時に一つの疑問が浮かぶ

「あの今、退院までって言いました？」

「ええ、この病院は、一人の患者さんに一人の看護婦がつくのよ。その方が患者さんとのコミュニケーションもとりやすいし患者さんもコロナと担当が変わらないから余計な気を遣わなくて済むのよ。昨日は突然の入院だったから担当とかは特に決まっていなかったけど今日の朝に私が担当に決まったのよ」

「そうなんですか、でもそれって夜勤のときとか大変なんじゃないですか」

「そうね大変だけど、ちゃんと睡眠を取る場所とかもあるし慣れれば平気よ」

「それに文弥君のような可愛い子の担当ならお世話も苦にならないわよ」

「あ、ありがとうございます」

「それじゃあ、血圧と体温を計るわね」

水瀬さんが血圧や体温などを計り部屋から去って行ったあとは朝食まで少し時間があるのでテレビを見て過ごすことにした

ホントはヘッドホンをつけるべきなのだろうけどいきなりの入院だったのでそう言った準備はしていなかったのだ

しかし僕が入院した部屋は個室なのでテレビも周りの迷惑も気にせず見ることができた

テレビには昨日の事件のニュースが流れていたが・・・

テレビを見始めてから1時間ぐらいたった時、病室の扉が開いて僕はそちらに目を向けた

そこには、はる姉と亜姫がいた

「兄さま・・・おはよう・・・ごじやいます」

「和ちゃん・・・おはよう」

「おはよう二人ともどうしたの朝早くに？」

「和ちゃんの・・・着替え・・・持ってきた」

「そうなんだ、でも朝じゃなくてもよかったのに」

確かに昨日、はる姉たちは明日必要なものを持ってくると言っていたが僕は学校が終わってから来るものだと思わず少し驚いていた

「出来るだけ・・・早い方が・・・良いと思って」

「でも、面会なんかの許可とれたの？確か個々の病院面会はお昼の1時くらいからだったよね？」

「さっき・・・受付で事情を説明したら・・・許可くれました」

僕の質問に亜姫がそう答える

「そうなんだ」

「はい・・・後少しぐらいなら・・・ここに居てもいいって・・・」

言っていました」

「だから・・・少しここでお話でも・・・してから学校に向かう」

「まあ確かに少し早いよね」

「だから・・・少しの間ここに・・・居ます」

「うん」

二人は近くにあったイスをベツトに近くに並べ座った

「兄さま・・・腕痛くない・・・ですか？」

亜姫が心配そうな顔でそう聞いてきた

事件は解決したけどやっぱりまだ少し恐怖心があるのだろう

「うん大丈夫だよ」

「良かった・・・」

亜姫がホツと胸をなでおろす

「そういえば、昨日あれからどうだった今日もテレビ見てたら昨日のニュースが流れてたんだけど」

「帰るときに・・・マスコミの人いろいろ・・・聞かれた」

疲れた顔をしてはる姉が説明してくれた

「なんとかそれをくぐりぬけて・・・家に走って帰ったけど・・・家にもマスコミの人がいて・・・とても大変だった」

ホントに大変だったようでその話を聞いていた亜姫も思い出したように疲れた表情をしている

「た、大変だったね」

僕は苦笑いでそう返すしかなかった

そして時刻は8時、そろそろ二人は学校に行く時間になった

「じゃあ・・・学校行ってくるね」

「行ってきます・・・兄さま」

「行ってらっしゃい二人とも」

「学校終わったら・・・また来るから・・・何かほしいものとか・・・あったら・・・学校が終わるぐらいの時間に連絡してね」

「何か食べたいものでも・・・いいですから・・・看護婦さんに許可も取りました」

「うん、わかった」

二人はそう言ってから部屋を出た2人と入れ替わりに水瀬さんが朝食を持ってきてくれた

「文弥君、朝食を持ってきたわよ」

「ありがとうございます水瀬さん」

「フフ、ちゃんと名前呼んでくれるのね」

「そうですね、癖みたいになってるので」

「そうなの、今の二人はお姉さんと妹さんかしら」

「はい、そうです」

「文弥君の家族ってレベル高いわね」

「そうですね、二人は学校でも人気者ですから」

「へえ〜そうなの、あ、朝食はここに置くわね」

朝食をベットの隣に置いてある台に乗せてから水瀬さんはイスを用意して腰かける

ん？あれ？

「あの、水瀬さん何やってるんですか？」

「イスに座ってるのよ」

「いや見ればわかります、どうしてイスに座ってるんですか？」

「まあ、文弥君とコミュニケーションを取るためかな。後、食事が

終わった時すぐに片付けられるように。あ！もちろん食べるのはゆっくりでいいわよ片腕使えないわけだし、それとも私が食べさせてあげよっか」

「い、いいです自分で食べますから」

「あらそう残念」

水瀬さんは微笑みながらそう言った

「まあ実際、ホントにコミュニケーションを取るためのよ」

「そうなんですか、それじゃあいただきます」

僕は、箸を取りご飯を食べ始める。しかし、見られているため少し食べづらい

「じゃあ今日の予定を少し説明するわね、食べながらでいいから聞いてね」

「はい」

「今日は、エコーの検査を受けてもらうわね後はレントゲンね両方とも朝のうちに検査があるから検査の直前になったらまた知らせるわね」

「分かりました、お昼は何もないんですか？」

「ええ、お昼は検査入れてないわ。だから自由にしておいていいわよ少し外を散歩したかったら別にしてもいいわよ」

「分かりました」

「文弥君って真面目なのね」

「どうしてですか？」

「だって私と話すときはちゃんと食事の手を止めるんだものいまだきなかないわよ」

「そうですか？」

「ええ」

「まあ、人が話してるのに何か食べながら聞くのも失礼だと思うし」

「やさしいのね」

「そんなことないですよ」

「でも、一週間も入院じゃ大変よね学校の授業とかも遅れちゃうでしょう」

「そうかもしれないですね、まあ友達とかにノート見せてもらえばいいし多分なんとかかなりますよ」

僕は、そう言いながら朝食を食べ終える

「朝食食べ終えたみたいだねそれじゃあ持っていくわね、検査の前にまた来るけど何かあったら気軽に読んでね」

「はい、ありがとうございます」

水瀬さんはそう言って部屋から出て行った

僕は、特にすることもなく再びテレビを見ることにした

数時間後、検査をしに行くと水瀬さんが知らせてくれた

僕は、水瀬さんに連れられ検査室へと向かう

まずはエコーの検査をするため受付に診察券を出して順番を待つ

すぐに名前が呼ばれて呼ばれた番号の部屋に入る

ベットに横になりエコー検査が始まる

しばらくしてエコー検査が終わり次はレントゲンを取るため場所を移動する

その後のレントゲンもすぐに終わり僕は診察券を受け付けの人から返してもらって案内のためにずっとついていてくれた水瀬さんと病室に戻る

病室に戻りついでだからと血圧などを計ってから水瀬さんはナースステーションに戻って行った

再びテレビに目を向け時間をつぶす

どんなものを行っているかとチャンネルをこころ変えているとま

た昨日のニュースが流れていた

「はあ、ホントに大変なことになってるなあ」

僕は、テレビ画面を見ながらため息を漏らす

そのニュースを見てみるやはり何度も見たとはいえ自分の周りで起こったことなので何かまた変わったことがあったかどうか気になるのだ

テレビには今、昨日僕たちがストーカーに襲われた公園が映し出されてきた

公園には、血の跡などがまだ残っており完全に封鎖されていた

しばらくニュースを見ていると水瀬さんが入ってきた

「文弥君、昼食持ってきたわよ。ってどうしたの怖い顔してるけど」

「え？」

水瀬さんの言葉に僕は少し驚いていた、普通に見ていたつもりだったのだがまさか自分がそんな顔をしているとは思わなかったからだ

「もうしかして左腕が痛むのかしら」

「い、いえ、そのなんでもありません」

「ホントに？」

「はい、ホントです」

「じゃあどうして怖い顔してたのかしら？」

「えーと、ニュースを見てて」

「ニュース？」

「はい、今流れている」

僕がそう言つと水瀬さんは昼食を朝と同じ場所においてテレビを見る

「ああこのニュースね、なるほどそりゃあ怖い顔にもなるわね」

「はいまあ、この事件の事知ってるんですか？」

「そりゃあ患者さんのことはある程度知っておかないといけないからねあなたの治療をした医者から説明されてるのよ」

「そうなんですか」

「ええ」

「自分では、普通にただ見ているつもりだったんですけどね」

「もう解決したんでしょ？だったら気にしちゃダメよ」

「はい、そうですね」

「さてお昼でも食べましょ、おいしいもの食べれば気分も良くなる

わよ」

「はい、って水瀬さんもここで食べるんですか？」

「もちろんよ、朝と違って用意に抜かりはないわ」

そう言っつて水瀬さんはコンビニで買ってきたであろうお昼の入った袋を見せてきた

「いいんですか？そういうこととして」

「いいのいいの、それに見たいテレビ番組もあるしまた文弥君があのニユースを見ないように見張っておかないと」

「でも、ホントの理由は前者でしょ」

「まあね」

「まあ、別に見たい番組があるわけじゃないから僕はいいですけど」

「それじゃあ変えてもいいかしら？」

「いいですよ」

僕がそう言っつと水瀬さんはリモコンを取りチャンネルを変えた

僕は、水瀬さんが見たがっていた番組を一緒に見ながら食事を食べることになった

昼食は、洋食だった箸ではなくフォークやスプーンでの食事になる

ので朝よりは食べやすいかもしれない

水瀬さんも自分用に買ったサンドイッチを食べていた

僕も昼食を食べ始める

先におかずなどを食べてから僕は、食パンと一緒に付いてきたジャムを口と右手を使って開けてパンに塗る

それを手に取りテレビを見ながらモフモフと食べているとなぜか途中から視線を感じた

「あの〜なんですか水瀬さん」

僕は、感じた視線の方へ目を向けた、というよりここには僕以外には水瀬さんしかいないのだから感じた視線は水瀬さんしかあり得ないんだけど

「いや〜食べる姿も可愛いなと思ってね、なんか癒されるわ」

「癒されるって・・・普通に食べてるだけなんですけど」

「でも見ている方は癒されるわよ、知らないかもしれないけど文弥君他の看護婦からも人気あるのよ私が担当になった時も変わってほしいって何度も言われたしね」

「そうなんですか？」

「そうよ、今日検査に行くために少し病室から出ただけでそれに拍車がかかっているもの、なんていうか母性本能をくすぐられる感じが

するのよねえ」

「よくわからないですね僕には」

「アハハ八そうかもね、さてとそろそろ仕事に戻ろうかしらね昼食も片付けて大丈夫かしら」

「はい、もう食べ終わりましたから」

「了解、それじゃ片付けるわね」

「お願いします」

「夕方頃にまた血圧とか計りに来るから」

「はい」

また後でねと一言言って水瀬さんは病室から出た

「しかし、ホントにすることがないな売店にでも行ってみようかな暇つぶしになりそうなものがあるかもしれないし。あ、でも、財布入ってるかな」

僕は、はる姉と亜姫が持ってきてくれたのもつの中から財布を探してみる

「あったあった」

僕は、荷物にまぎれていた財布を取り出して病室を出る

とはいえまだほとんど病棟内を把握しきれていないので近くにあった案内図を見る

「売店は、1階と2階にあるのかすごいなこの病院」

ちなみに僕がいる病室は4階でこの階からは病棟しかない

「とりあえず、2階でいいか」

僕はエレベーターに乗り2階のボタンを押す

2階に到着し降りてさっき見た案内図通りに進み売店を目指す

売店名に到着し店内を見て回る

思っていたよりも広かったのでいろいろと見て回ってみた

大分時間が潰せた僕は、暇つぶし用にクロスワードの本とペンを一本買って病室に戻ることにした

4階に戻り自分の病室に到着してドアを開けようとした時、消してきたはずのテレビの音が聞こえた

「誰かいるのかな？」

僕がドアを開けるとそこには

「あら、和人君、こんにちは」

そこには春香さんがいた

「こんにちは、春香さんいつここに？」

「今さっきよ、涉から話を聞いてねお見舞いにきたの」

「わざわざ、ありがとうございます」

僕はお礼を言いながら自分のベットに腰かける

「いいのよ、気にしないで、そうだフルーツ買ってきたんだけど良かったら食べる？」

「はい、いただきます」

「それじゃあ、用意するわね」

そうやって春香さんはあらかじめ用意していたであろう果物ナイフを取り出し皮を剥きだした

リンゴの皮をむきながら春香さんが僕に話しかけてくる

「怪我の具合はどうなの和人君？」

「何箇所か軽い打撲がありますね。後は、まあ見ての通りなんですけど左腕の骨折ですね」

「そうなの、最初に涉から話を聞いたときは少し疑ってたんだけど本当に大変だったみたいね」

「そうですね、でも、この程度の怪我ですんだのは不幸中の幸いで

すね」

「ニュースでも大分話題になってるわよ、家にも何人か記者の人が来たもの」

「ホントいろんなところに迷惑かけてるみたいですね・・・」

「そんなことないわよ。和人君には感謝してるわ、涉も助けてもらったみたいだしそれに和人君のことを知ってる近所の人ものすごく感心してたわ」

「まあ、警察の人が来なかったらヤバかったですけど」

「皆が無事なら何も文句はないわよ、今は怪我を治すことだけ考えなさい」

「はい、そうします」

「はい、リンゴ皮剥いたから食べてね」

「ありがとうございます」

「夕方には、涉も来るし由香も友達と一緒に見舞いに来るって言うてたわ。お昼まで時間もあるし散歩でもする？気分転換にはなるかもしれないわよ」

「そうですね、少し外に出てみたいですね」

「それじゃあ、リンゴを食べ終わったら行きましょう」

「はい」

僕は春香さんが切ってくれたリンゴを食べる

「他の果物も食べやすい大きさに切って冷蔵庫に入れておくわね」

そう言っつて春香さんは病室に完備されていた冷蔵庫に果物を入れる

「ありがとうございます春香さん」

「フフ、どういたしまして」

しばらくしてリンゴを食べ終えた僕は春香さんと一緒に外に散歩に行くことにした

外をブラブラと散歩しながら春香さんと話をする

「9月に入って結構たつのにまだ暑いわねえ」

「そうですね」

しばらく同じように話しながら歩いていると知らない人がこちらに近寄ってきた

「もしかして、文弥和人君ですか？」

「はい、そうですね」

「私は、〇〇テレビの者なんですが先日の事件について詳しく話を聞かせてもらえませんか？」

「そ、その、すみません、あんまり話したくないので」

「そこをなんとかお願いします！」

相手の記者の人は何度も同じようなことを言っただけで頼んでくる

だが僕としてもあんまり話したいものではないのでそれを拒否する

しかし、他の記者の人も何人かいたらしく此処の騒ぎを聞きつけ数人の人が近寄ってくる

少しは覚悟していたことだがやはり精神的に結構きつい

何かやましいことがあるわけじゃないし気にする必要がないと言えばそれまでだがやはり助かったとはいえ殺されかけた身としてはあんまり話したい気分じゃない

相手の記者の人も人数が増えて勢いがついたのでか答えるとも言っていないのにいろいろ質問してくる

僕が相手の勢いに負けて困り果てていると春香さんが僕を庇うように前に出てきた

「いい加減にしてください！さっきから黙って見ていけば！なんですかあなたたちはこの子は話したくないって言ってるんです！お帰りください」

春香さんが普段からは想像もつかないような大きな声を出して記者の人たちにそう言った

相手の方も少し驚いて少し後ずさったがすぐに質問の対象を春香さんに向けた

「あなたは文弥和人君の母親ですか！それなら代わりに詳しくお話を」

「私は、この子の友達之母です今日はお見舞いに来ただけです！それよりこれ以上この子を追い込むのはやめてください！」

その後も春香さんは数人の記者の人たちと口論する

しばらくは相手の方も粘っていたのだがやつと無駄だと判断したのだろうやつと記者の人たちは退散してくれた

記者の人たちが帰って行くのを春香さんは少し睨みながら見ている見えなくなったところで僕の方に顔を向けいつもの様子で話かけてきた

「大丈夫、和人君？ごめんなさいね私が散歩に行ってみようなんて言わなければこんなことにはならなかったのに」

春香さんが申し訳なさそうに僕に謝る

「そんな大丈夫ですよ僕は、いい気分転換にもなりましたからホント大丈夫ですから」

「もう戻りましょうか、少し休んだ方がいいわよ」

「すみませんそうさせてもらいます」

僕と春香さんは病室に戻った

病室に戻った僕はベットに横になった

「和人君、少し眠りなさい」

春香さんがやさしく布団をかぶせながらそう言った

「私は、ここにいるから安心なさい」

「はい、すみませんご心配かけて」

「気にしないの今は休みなさい」

「はい・・・」

僕は、春香さんの言うとおりに少し休むため目をつぶった

ホントに疲れていたのか目をつむるとすぐに眠気が襲ってきてすぐに眠りについた

眠ってから数時間後、再び意識が戻ってきた僕はゆっくり目を開けるまぶしいライトに一瞬目がくらむもののすぐに視野も回復し僕は体をゆっくり起こす

「あ、和人さん起きたんですね」

僕は、聞き覚えのある声の方に顔を向ける

顔を向けるとそこには由香ちゃん、優菜ちゃん、美奈ちゃんがイスに座っていた

「由香ちゃん、優菜ちゃん、美奈ちゃんもお見舞いに来てくれたの？」

「はい、そうですよ」

と由香ちゃんが言った

「和人さん、腕大丈夫ですか？」

美奈ちゃんが僕の腕を見て心配そうに言った

「私、ギブスって初めて見ました」

優菜ちゃんが物珍しそうにギブスを眺める

「ちよ、ちよつと優菜」

優菜ちゃんの若干ズレタ発言に由香ちゃんがあきれながら優菜ちゃんを見る

「あ、ごめんごめんついね大丈夫ですか和人さん？」

「うん、大丈夫だよ3人とも心配してくれてありがとう」

「和人さんが怪我したって兄貴から聞いて昨日からずっと心配してたんですよ」

「そうそう私も、あの強い和人さんがまさか怪我して入院するなんて由香から話を聞いてびっくりしましたよ」

「私もビックリしましたよ」

「まあ怪我と言っても大きなけがは骨折だけだし入院もあくまで検査のためだからね検査が終わればすぐに退院できるよ」

「そうなんですか良かったです」

由香ちゃん達と話していると病室のドアが開いた

「お、和人起きてたのか」

「和ちゃん・・・お見舞いに来た」

「兄さま・・・具合はどうですか」

「やつほー！和人君元気」

「和人君、起きたのね」

涉、はる姉、亜姫、美里先輩、春香さんの順番で病室に入ってきた

「皆、来てたんだね」

「当たり前だろ、友達の見舞いに来ないやつはいねえよ」

「夕方にまた来るって・・・朝言っただから」

「私も・・・兄さまと約束・・・しました」

「私も和人君の様子は気になるしね」

「ありがとう、皆」

皆に一言お礼を言うと、渉が僕に話を振ってきた

「そっだ、なあ和人何か文化祭のアイデアあるか？」

「え？文化祭？」

「学校で文化祭の話し合いが始まってんだ。それで何かアイデアがないか聞いて来いって頼まれてな」

「そっいえばもう話し合いが始まるころだったね」

「まあ、1か月ちょいしか時間ないしな、で、何かあるかアイデア」

「今何が出てるのアイデアは？」

「今有力なのは、執事&メイド喫茶とフリーマーケットの二つだな」

「なるほど、でも僕はあんまりアイデアないかな」

「そうなるよ、前者が結構決まりかけてるんだよなフリマも結構票が入ったけど喫茶店ほどじゃねえし」

「でも、服はどうするの？」

「服はどうにかしてかき集めるさ最悪自分たちで作ればいいし」

「まあそうだね」

「ふうん和人君たちは執事&メイド喫茶ねえ」

「美里先輩のクラスは何やるんですか？」

「うちも喫茶店よ」

「どんな喫茶店なんすか」

涉が興味深そうに質問した

「私たちのクラスはなんと！猫耳喫茶よ！」

「ね、猫耳喫茶ですか」

「しかも、語尾を猫にするわよ」

「なんか美里先輩ウキウキしてますね」

「まあ、今年で最後の文化祭だしね今からもう楽しみなわけよ！」

「なるほど。亜姫のクラスは何やるか決まった？」

「私の・・・クラスは・・・お化け屋敷です」

「なるほどそういう手もあったか」

渉がフムフムとうなずいている

「へえ、それも面白そうだね」

「そういえば、由香たちの学校の文化祭はいつなんだ？」

渉が由香ちゃんにそう聞いた

「私たちは、9月のちょうど終わりごろですね」

渉の質問に美奈ちゃんが答えた

「じゃあ行ってみようかな」

「か、和人さん、く、来るんですか？」

僕の発言に由香ちゃんが驚いた様子でたずねてくる

「え、行くつもりだけど、駄目かな？」

「い、いえその、駄目ってわけじゃないんですけど」

僕がそう聞くと由香ちゃんは困った表情でそう言った

「違いますよ和人さん、私たちもメイド喫茶やるんですけど由香は

その衣装を見せるのが少し恥ずかしいだけなんですよ」

由香ちゃんの隣で優菜ちゃんが笑ってそう答えてくれた

「ちよ、ちよつと優菜」

由香ちゃんが頬を真っ赤に染めて優菜ちゃんに抗議の目を向けていた

「由香ちゃんたちもメイド喫茶やるんだね、あれ執事はやらないの？」

「はい、うちのクラスは女子のレベルが高いから男子には全員料理とか飾り付けをまかせてるんです。まあ良く言えば裏方、悪く言えばパシリですね」

「そ、そうなんだ」

美奈ちゃんのズバツとした回答に少し苦笑いの僕

「まあ、確かに前に由香の学校まで行った時ちらほらとその辺にいた女子もレベル高かったしな」

「そういうわけでぜひ遊びに来てくださいね！由香のメイド姿も見れますよ」

「由香ちゃんメイド服似合いそうだもんね」

「え！そ、そうですか？」

「うん」

「あ、ありがとうございます」

「そういえば、今年の文化祭ではもう一つイベントがあるわね」

美里先輩が思い出したようにそう言った

「そうなんですか？」

「ええ、今年は仲良し同士でバンドを組んで演奏もできるわよ去年までは軽音部とか吹奏楽部だけの演奏だったけど」

「それは面白そうですね」

「そう？だったら私たちで出してみる？」

「え！僕たちですか！？」

「そりゃあいいな面白そうだ」

美里先輩の提案に涉が食いつく

「和人君はどうする？」

「どうするって言われても僕の骨折が治るのはちょうど1ヶ月後ですから楽器を練習する暇はありませんよ」

「だったらボーカルでいいじゃない、歌ならいつでも練習できるし和人君歌うまいし」

「そ、それなら、まあできますけど」

「じゃあやりましょ、思い出づくりだと思って」

「分かりました、少し興味もあるし僕もやります」

「なら・・・私も・・・やる」

「私も・・・やります」

「このメンツならかなり盛り上がりそうね」

「そうっすね」

「いいわねえ、青春って感じね」

春香さんが僕たちの会話を聞いて微笑みながらそう言った

しばらく話し合っていると水瀬さんが入ってきた

「おお！いつのまにか賑やかになってるわねえ」

水瀬さんがそう言いながら近寄ってくる

「文弥君、血压測るわねそのあと夕食持ってくるから」

「はい、わかりました」

「この人、和人の担当の看護婦か？」

「うん、そうだよ」

「なんて、うらやましい！なんでお前の周りには美人が寄ってくるんだ！」

「わ、涉、少し落ち着こうよ」

「あらあら、嬉しいこと言ってくれるわねえ」

そんな会話をしながら血圧や体温を計り、そのあとすぐに夕食を持つてきてくれた

「それじゃ、私たちは帰りましょうか」

「そうっすね、和人もあんま大勢の前じゃ食事しづらいだろうしな」
そう言っって皆が帰る支度を始める

「私は、もう少し残ってるわねえ」和人君のこと心配だし
周りが帰ろうとするなか春香さんが意外な言葉を発した

「お母さん、まだ残ってるの？」

春香さんの言葉に由香ちゃんがそう聞いた

「ええ、やっぱりいきなり皆がいなくなるのは寂しいと思うし。涉、悪いんだけど夕食代わりに作ってくれる」

「了解」

「そ、そんな、僕は大丈夫ですよ」

「まあいいじゃねえか、和人、母ちゃんがいたって言うてるんだし」

「でも悪いよ」

「だったら・・・私と・・・亜姫が・・・残ります」

「もっと・・・兄さまと・・・話も・・・したいですし」

はる姉と亜姫がそう言つと

「駄目よ」

春香さんが真面目なトーンでそう言つた

「また何かあつたら大変でしょ二人は帰りなさい」

「でも・・・」

「私も、和人君が夕食を食べ終わる頃には帰るわ」

「・・・わかりました」

「今日は・・・帰ります」

はる姉と亜姫はしぶしぶと引き下がった

「それじゃあ、決まったみたいだし帰りましようか」

「うーす、じゃあな和人またなあ」

「うん、それじゃあ」

皆、一言さよならと言って病室を出る

「皆帰ったわね」

「そうですね、すみません春香さん迷惑かけてしまって」

「気にしないで、私が残りたいただけなんだからもちろん面会時間ぎりぎりまでいるわよ」

「え、でもさつき、僕が夕食を食べ終わる頃には帰るって」

「ああでも言わないと美晴ちゃんと亜姫ちゃんは帰らないでしょ、ああもちろん家のことは大丈夫よ涉はきつと私が最後まで残るの気付いているから大体のことはやってくれると思うわ」

「どうしてわかるんですか？」

「あの子は、こういうときは鋭いのよ」

「そうなんですか」

「そうそう、それより夕食冷めないうちに食べちゃいなさい」

「はー」

僕は、夕食を食べ始める

しばらくして、夕食を食べ終えた僕は、少しゆっくりした後、お風呂に向かい素早く体を洗った

そのあとは、春香さんといろいろ話をして時刻は8時になった

「それじゃあ、そろそろ帰るわね」

「はい、ありがとうございます最後までいてもらって」

「ウッフ、どういたしまして」

春香さんは、椅子を片づけて持ってきていたかばんを持ちドアの方へ向かう

「それじゃあ、ゆっくり休むのよおやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

一言そう言って春香さんは帰って行った

正直言って春香さんの厚意は嬉しかった春香さんの言つとおり皆が帰ると行った時、僕は寂しさが込み上げてきたからだ

春香さんはおそらくそのことを理解して僕のそばに最後までいてくれたのだろう

春香さんが帰った後もしばらくテレビを見ていたが眠くなってきた

のでテレビを消して僕は眠りに着いた

第57話

第57話

あれから一週間後、僕は今退院の準備をしている

一週間、いろいろ検査を受けたけど特に問題もなく予定通りの退院となった

マスコミの人もさすがに一週間も同じネタを引っ張っているわけにはいかないのか2、3日前から姿をほとんど見なくなり僕の周りは大分落ち着いた

私服に着替えて荷物をかばんにしまい準備を終える

「文弥君、支度は終わってたかしら？」

準備を終えた頃に水瀬さんが病室にやってきた

「はい、今終わりましたよ」

「そうじゃあ、受付で退院手続きを済ませなきゃね」

「そうですね」

水瀬さんにそう言われ病室を出ようとした時

「よ、和人」

明るい声で僕の名前を呼びながら渉が病室に入ってきた

「渉！、どうしてここに！」

「今日、退院だろだったら荷物持って帰るのは大変だろうと思ってな手伝いに来た」

「でも、学校は？今日は金曜日だしまだ午前中だから授業あるはずだよ」

「サボりだ」

「サボりって、はあまったく」

「まあ、良いじゃねえかどのみち片腕じゃあ荷物持つのに苦労するだろ」

「そうね文弥君折角なんだから渉君に家まで荷物持って帰ってもらいなさい」

水瀬さんは、僕を見ながらそう言った

ちなみに水瀬さんはこの一週間で僕の周りの人とかなり仲良くなっており今のように渉のことを普通に名前と呼んだりしている他のみんなも水瀬さんはちゃん付けや君付けで呼んでいる

「仕方ない、じゃあお言葉に甘えるよ」

「まあ、いざとなったら和人に勉強教えてもらえばいいしな」

「その前に進んだ分だけノート写させてよ」

「もちろんだ」

「文弥君って頭いいの？」

「成績はいつも上位のほうにいますよ和人は運動神経もいいですし」

渉が水瀬さんのほうを見ながらそう言った

「へえ、すごいわね。そんな文武両道の人始めてみたわ」

「渉、過大評価しすぎだよ僕はそんなにすごくないよ」

「そうか、お前は自分のことを過小評価し過ぎだと思っぞ」

そんなやりとりを渉していると自然と自然と笑みがこぼれてくる

僕の表情を見て渉が

「やっとお前らしくなったな」

「僕らしく？」

「ああ、上手く言えないがこの一週間お前は俺たちの前で笑ってはいるがなんか別の感情も入り混じってる感じだったからな、でも、今のお前はそんな感じがしない」

「そうかな」

僕は、自分ではそう感じていなかったのだが渉にはそう感じたらしい

「そうだよ、まあ元気が戻ったってことだろ、美里先輩たちも今日は夕方から和人の家で退院祝いをしてくれるって言ってたぞ。その前にいつも通りになって良かったよかった」

渉は、笑いながらそう言った

「青春ねえ」

水瀬さんが腕を組んでうんうんと頷きながらそう言った

「さて、元気になった人がいつまでも病室にいたら駄目よそろそろ受付に行きましょう」

「はい、分かりました」

僕は、自分の荷物を肩に担ぎながらそう言った

「じゃあ、俺はもう一つの荷物を持つか」

渉はもう一つ置いてあったカバンを肩に担ぐ

「うん、頼むよ渉」

「おう！頼まれた」

僕たちは、忘れ物がないか軽くチェックして受付へと向かった

受付に言った僕は、水瀬さんに簡単な説明を受けながら退院手続き

を済ませて入院費を払いに行く

お金の方は入院中に母さんに連絡をしたので問題はない

まあ、事情を説明した時、仕事を放って僕のところに戻ってくるって言った時は説得に苦労したけど

会計を済ませた僕は病院の出る

水瀬さんもお見送りで一緒に着いてきてくれた

「水瀬さん一週間お世話になりました」

「もう入院になんてなっちゃだめよ、文弥君たちはまだ若いんだから」

「ええ、気を付けます」

「でも、寂しくなるわ〜文弥君と話をしたりするの結構癒しになってたから」

「アハハ、今度水瀬さんが暇なときにでも家に招待しますよ、お茶菓子とお茶ぐらいは出しますから」

「ありがとう、そうねいつか御馳走になりに行くわ。もちろん和人君たちの文化祭にも行くわよ」

「はい、楽しみにしてますね」

「ええ、それじゃあね気をつけて帰るのよ」

「はい、それじゃあ」

僕と渉は水瀬さんに頭を下げて病院を後にした

しばらく、ボくっとながら歩いていると渉が話しかけてきた

「外に出て疲れでも出たか和人？」

「そんなことないよ久しぶりに外に出たなと思ってね」

「でも散歩とかしてたんじゃないのか許可されてたんだろ」

「許可は出てたけど、病院に運び込まれた次の日に春香さんと一緒に散歩しようと病院の敷地内を軽く回ってたんだけどマスコミに見つかっているいろいろ聞かれちゃってねそのあとから出てないんだよ」

「そう言えば母さんがそんなこと言ってたな、一緒に話を聞いてた由香や父さんもかなり怒ってたしな」

「そうなの」

「ああ、それ以前に母さんがキレたことに驚きだ普段はあんまり怒らないタイプだからな」

「僕もその時はビックリしたよ」

「まあ、それだけ心配されてるってことだ」

数十分後、ようやく家に到着

鍵を開けて家の中に入る

リビングに行きソファアの近くに担いでいた荷物を下ろす

「やっぱり少し疲れたか和人？」

「少しね、ほとんどベットの上であんまり動いてなかったからね」

「しょうがねえよ、病院だしな」

「まあね、そういえば今日皆がうちに来るんだよね？」

「ああ、学校終わってな美里先輩たちは俺が休んでるの知ってるしな」

「じゃあ、材料とか買いに行かないと」

「おいおい、祝われる人間が準備してどうするんだよ」

「でも、悪いよそれに軽い運動も兼ねて外に出たいしね」

「なら、俺も付いていくか一人ではさすがに無理があるだろ」

「そうだね、難しいかもじゃあもう少し休憩したら行くこつよ」

「了解」

その後、僕と渉は家に置いてあったカップラーメンを食べてからしばらくして材料を買いに出掛けた

「さてと、どこで買い物するよ材料だけならスーパーか？」

「そうだね、あそこならそんなに遠くないし商品も安いし」

「んじゃ、行くか」

僕と渉は適当に話をしながらスーパーに向かった

数十分後、スーパーに到着した

「それで和人、来たのはいいが何をかうんだ？」

「どうしようかな、よく考えたら何を用意すればいいかわからないや。渉は何か聞いてないの？」

「退院祝いをやるとしか聞いてないな」

「じゃあ、お菓子やジュースでも買っていこうお菓子なら多めに買っても置いておけるし」

「そうだな」

僕たちは、カゴを取りジュースやお菓子をたくさん買って会計を済ませスーパーを出た

家に帰ってきた僕たちは、時間が3時を少し過ぎたところだったの
でおやつも兼ねて買ってきたお菓子とジュースを少し食べることに
した

もちろん、夕方用に使う分なのでほとんどはしまっているが

お菓子を食べたりボードゲームでしばらく時間をつぶしていると玄関のドアが開く音が聞こえた

「…………おじゃまします」「」

「皆が来たみたいだね」

「みたいだね」

そして、はる姉を先頭に次々といつものメンツがリビングに入ってきた

「和ちゃん……ただいま」

「兄さま……ただいま」

「おかえり、二人とも」

「和人さん、退院おめでとうございます」

「…………おめでとうございます」

由香ちゃんが言葉に続き美奈ちゃんと優菜ちゃんが同時におめでとうと言ってくれた

「ありがとう、由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃん」

「やっぱりこの家には和人君がいないとね」

「美里の言うとおり・・・和ちゃんがないと・・・家にいてもあんまり・・・落ち着かない」

「一週間・・・寂しかったです」

「ごめんね」

僕は謝りながら亜姫の頭をなでる

亜姫は、嬉しそうに微笑んでいる

「亜姫だけ・・・ずるい・・・私も頭なでて」

はる姉がそう言うので今度は、はる姉の頭をなでる

「癒される・・・」

「いつも通りの日常に戻ってよかったわ」

美里先輩が僕たちのほうを見ながらそう言った

「さて、じゃあそろそろ和人君の退院祝いの準備しなきゃね」

「とりあえず・・・私たちで・・・夕食作る」

「そうね、材料も買ってきてあるし」

「一応、僕と涉で散歩も兼ねてお菓子とかは買ってきてるので夕食の後、好きに食べてください」

「ありがとう、お菓子とかは準備中に誰かに買ってきてもらおうと思っただけけど手間が省けたわね」

「それじゃあ、私たちはどうしましょう?」

由香ちゃんが少し困ったようにそう言った

「さすがにキッチンにはそんなにたくさん入れませんしね」

「だったら、由香ちゃんたちは和人君を見張っていてちょうだい」

「美里先輩、見張るって・・・」

「だって和人君のことだから、お皿運ぶだけでも手伝うって言いそうだし」

「それぐらいは手伝わないと悪いし」

「だから見張ってもらおうよ」

「分かりました! 私たちで和人さんを見張っておきます」

優菜ちゃんが元気よくそう言った

「そうですね。今回の主役は和人さんなんですから、和人さんに手伝ってもらったら私たちが悪い気分になっちゃいますよ」

「そういうことなので、主役の和人さんは椅子に座って待っていてくださいね」

そう言って美奈ちゃんが僕の肩を少し押してイスに座らせる

「それじゃあ、お願いね」

美里先輩がそう言いながらはる姉と一緒にキッチンに向かう

一方、そのまま座らされた僕は、なぜかすかさずやってきた亜姫に抱きつかれており身動きがほとんど取れない状態になっていた

「あの一、亜姫、離れてほしいんだけど」

「駄目です……兄さまが……動かないように……捕まえておきます」

「和人あきらめろ、亜姫ちゃんは料理が来るまで離れる気はなさそうだぞ」

涉が笑いながらそう言った

「離れません……抱きついてると……落ち着きます」

「亜姫、そつちが本音でしょ」

「はい……」

「まったく、今日だけだからね」

「といいながらもこれからも同じことをされても許しそつだな和人は」

「アハハハ、そうかもね」

僕たちは結局、料理が完成するまでボードゲームなどで時間を潰した、亜姫も僕に抱きついたまま器用にゲームをやっていた

しばらくして、料理を作り終えた美里先輩とはる姉がたくさんの料理を運んできた

唐揚げやサラダなど様々な料理が並べられていった

「たくさん作ったから、おかわりしてね」

「和ちゃん・・・いっぱい・・・食べてね」

「うん、ありがとはる姉」

「……………いただきます」

自分の食べたいものを小皿にいくつか取り、食べ始める

美里先輩とはる姉が作った料理はどれもおいしく皆も皆しゃべりながらも夢中で食べている

そして料理を食べ終え片付けも終わり、大分時間が経った頃さすがに皆も帰らないといけない時間になってきたのでここでお開きにすることにした

見送りをするため玄関に向かう

「じゃあ和人君、また月曜日に会いましょう」

「はい、今日はありがとうございました」

「じゃあな和人、あ！後これ学校のノートな渡すの忘れるところだったぜ」

「ありがと涉、じゃあ借りるね」

「まさか、俺が和人に何か貸すことになるのかな」

「今回限りでしょ兄貴が何か貸すことは」

「だろうな」

涉が苦笑いでそう言った

「今日は、お邪魔しました和人さん」

「とっても楽しかったです」

「また来ますね」

由香ちゃん、美奈ちゃん、優菜ちゃんの順に笑顔でそう言った

「じゃあ帰りましようか、ゆっくり休むのよ和人君」

「はい、美里先輩たちも帰りは気を付けてくださいね」

「ええ」

皆、さよならと一言言ってから家を出る

皆を見送った後、お風呂に入ってからしばらくリビングでゆっくりしていたのだが疲れが出たのかだんだん眠くなっていきました

部屋に戻り、寝ることにした

自室に戻り、やっぱり自分の部屋が一番落ち着くなあと思いつつ僕は眠りに着いた

第58話

第58話

月曜日の朝、いつも通りの時間に起床し、はる姉と亜姫と一緒に朝食を取っている

久しぶりの学校だし渉にノート見せてもらったとはいえ授業も遅れてるだろうから頑張らないと、それに、後一カ月ぐらいで文化祭もあるし

朝食の食べ終えて食器をキッチンに運ぶ

家事ができない僕に変わってはる姉と亜姫が食器を洗ってくれた

その後は、いつも通りテレビをしばらく見てから家を出て学校に向かった

しばらく歩いていると、渉と合流した

「おはよう和人」

「おはよう渉」

「久しぶりの学校だな」

「そうだね、そうだから借りてたノートありがと」

僕は、カバンから借りてたノートを取り出し渉に返す

「おう、どういたしまして」

「なんとか、二日で写せたよさすがに一週間分の授業の内容を移すのは苦労したよ」

「無理しないでゆっくり書けばよかったじゃねえか、別にしばらく借しといてもかまわなかったぜ」

「でもそしたら渉が困るでしょ」

「そんなことねえよ、予備で一応ノート持ってるしなそもそも授業は基本的に寝てるしな」

「いや、寝ちやだめだから」

僕は苦笑いで渉にそう返した

15分ぐらいして学校に到着した僕たちは各自の下駄箱に向かう

僕は、カバンを一旦下に置き下駄箱を開けた

すると、ドサドサとたくさんの手紙が落ちてきた

「何だろこれ？」

「あゝなんか予想通りになつたな」

僕は落ちてきた手紙の一枚を見ながらそうつぶやいた

「和ちゃん・・・何かあったの？」

「兄さま・・・どうしましたか？」

上履きに履き替えたはる姉と亜姫がこちらにやってきた

「いきなりたくさんの手紙が出てきたから少しびっくりしちゃって」

「それ、全部ラブレターだろうな」

「ラブレター僕に？」

「そりゃあ、お前の下駄箱に入ってたんだからお前のだろ」

「でも、なんで？」

「もともと和人は人気あったからな、しかもそれに一週間前の事件だる普段優しい和人が家族のために体張ってストーカー撃退したから優しいだけじゃなく勇敢なところも持ち合わせてるから女の子にとっては理想の男なんだろうな」

「撃退って・・・ほとんどボコボコだったけど」

僕は少し苦笑いでそう言った

「でも、お前がいなきゃあのストーカーは警察が来る前に逃げたと思うぞ。まあ、いまさらこんな話をする必要もないか。とにかく今のお前はこの学校の女子に大人気なんだよ」

「僕がねえ・・・」

「まあ、その話はこれまでにしてボチボチ教室行かないといけなしな」

「そうだね、それじゃはる姉、亜姫、お昼休みにね」

「わかった・・・お昼休みに・・・和ちゃんの教室に・・・行くから」

「私も・・・姉さまと一緒に・・・兄さまの教室に・・・行きます」

「ありがと、じゃあまたあとで」

僕は二人にそう言うってから小走りで自分の教室に向かう

自分の教室に辿り着き渋の後に教室に入ると視線が一気にこちらに集中した

そして、今まで座っていたクラスメイトも含め皆が一斉にこちらに来る

「大丈夫だったのかよ！文弥！」

「心配してたんだぞ！この野郎！」

「ニュース見たぞ！すげえなお前！」

「妹を守ってストーカーを撃退するなんて、なかなかできないわよ！」

「文弥君って、やさしいだけじゃなくて強いのね!」

みんな口々に僕に言葉をかけてくれる

「はいはい、皆ここまでく和人が困ってるだろ」

「なんだよ、皆本、少しくらいいいだろ」

「そつよそつよ!」

皆が渉の言葉に不満を漏らす但其の時、チャイムが鳴り先生が教室に入ってきた

「全員席に着け」

先生がそつという其皆がそれぞれの席に着いた

その後、いくつかの軽い連絡事項がありホームルームは終了した

先生が教室から出た後、また皆が質問してきたりしたが渉が適当にあしらったりしてくれていたのであんまり大きな騒ぎにはならなかった

授業が始まり僕は、ノートや筆記用具を取り出す

やっぱり片腕使えないとノートも写しづらいなと思いつながらもなんとか遅れずにノートを写していく

こんな感じで午前中は、少しノートを写したりするのに苦戦しながらも無事に終わった

お昼休みになり、ノートなどを片付けていると朝言っていた通りは
る姉と亜姫そして朝は一緒にならなかったが美里先輩も教室にやっ
てきた

「やつほ〜和人君」

「美里先輩、どうも」

「和ちゃん・・・お昼食べよ」

「兄さま・・・何処で食べますか？」

「何処にしようか」

「屋上でいいんじゃないか外で食う方が飯もうまいだろ」

「そうだね、じゃあ屋上に行こうか」

「私は、別にいいわよ」

「ん・・・私も」

「兄さまが・・・いるなら・・・何処でもいいです」

場所が屋上に決まったので僕と渉も自分のカバンから弁当を取り出
して皆で屋上に向かう

屋上には、すでに何人かの生徒が昼食を取っていた

僕たちも開いてる所に座りお昼を食べ始める

「和ちゃん・・・授業大丈夫だった？」

「うん、片腕使えないから少し不便だけどなんとか大丈夫だよ」

「あんまり・・・無理しちゃダメ・・・授業遅れても・・・私が教えてあげるから」

「うん、ありがとはる姉」

「そつえば和人、今朝のラブレターはどうしたんだ？」

「一応、カバンにしまっただけ・・・どうしよう」

「和人君がたくさんラブレターもらったのって本当だったのね」

「美晴先輩や亜姫ちゃんが貰うのと同じくらいの量があったっすよ」

「まあ、和人君ならそれぐらいもらっても不思議じゃないけどね。私や美晴も授業の合間の休み時間に和人君について色々聞かれたわ
「よ」

「私も・・・聞かれました」

「ん・・・大変だった」

「僕のことってどんなこと聞かれたんですか？」

「色々好きな子いるのかとか趣味とかね後は年上と年下どっちが

「好きなのかとか」

「私も・・・似たようなことを・・・聞かれました」

「そ、そうなんだ大変だったね」

「まあ、そんなことは別にいいんだけどね、それより和人君バンドの練習のこと覚えてる？」

「文化祭のやつですよね、覚えてますよ」

「ええ、それで練習なんだけどそろそろ始めたいのよね、後、3週間ぐらいだから和人君はボーカルだからともかく私たちは練習しないとね」

「それもそうですね、でも申し込みはもう済ませてるんですか？」

「今日、申込用紙を書くつもりなのさすがにグループでの参加は全員の名前がいるからねさすがに勝手に書いたら申し訳ないだから放課後に申込用紙を持っていくわ。ということできれば今書いてほしいんだけど」

「いいですよ」

「俺も別にいいですよ」

「分かり・・・ました」

「ありがと、美晴にはさっき書いてもらったから。後は3人だけなの」

そうやって美里先輩は申込用紙を取り出す

僕たちは順番に名前を書いていきその申込用紙を美晴先輩に返した

「よし、後はこれを放課後に出すだけね」

「なんか、今から文化祭が楽しみになってきたな」

「そういえば、来週は由香ちゃん達の学校の文化祭だよね」

「そういえば、そうだな」

「9月の最後の辺りって言ってたけど、具体的にはいつなの？」

「ちょうど来週の土曜日だな」

「そっか」

「あ！後、うちのクラスの喫茶店だけどなんか服はどっにかなりそ
うって言うってたぞ」

「そうなんだ、こっとも順調ってことかな」

「だな、まあ本格的な準備は残り一週間ぐらいからだと思うけどな。
今は、軽く役立ちそうなものを各自で持ってくるみたいな感じだし」

そんな話をしているとお昼休み終了のチャイムが鳴り僕たちは自分
のクラスに戻って行った

午後の授業は、2時限とも体育だったので僕は見学していた

午後の授業も終わり、放課後になったのでカバンを持ち教室を後にする。渉は部活があるので荷物を持って体育館の方へと走って行った昇降口に行くとはる姉と亜姫がカバンを持って待っていた

「二人ともお待ちせ」

「ん・・・後・・・美里が来るから・・・ちょっと待ってて」

「そっか、申込用紙を持っていくって言ってたもんね」

「うん・・・もう少しで来ると・・・思うから」

はる姉がそう言ってから少しして小走りで美里先輩がやってきた

「お待ちせ！皆それじゃあ帰りましょ」

僕たちは、上靴をしまつて学校を後にする

いつものように適当に談笑しながら帰る

途中で美里先輩とも別れ僕たちも自分の家に戻る

家に到着した僕たちは、カバンを部屋に置いて着替え始める

ギブスがはめてあるので少し着替えづらかったがなんとか着替えも終わり下に降りる

下に降りるとはる姉と亜姫が夕食の準備を始めようとしていた

「和ちゃん・・・ちょっと待っててね・・・すぐ夕食作るから」

「ごめんね、僕にも何か手伝えることない？」

「大丈夫です・・・兄さまは・・・ゆっくりしてて・・・ください」

亜姫がそう言うてくれたので少しお言葉に甘えてゆっくりしておくことにした

さすがに久しぶりの学校だったし少し疲れてしまった

しばらくして、夕食を作り終えたようなので僕はソファアールからテーブルの椅子に移動する

そして、夕食を食べ始めるのだが

「和ちゃん・・・あ〜ん」

「兄さま・・・あ〜ん・・・してください」

二人が僕にご飯を食べさせようとしてくるのだ

「じ、自分で食べられるから」

「でも・・・食べづらいかも・・・しれない」

「だから・・・私たちで・・・食べさせます」

そう言つて箸を突き出してくる

二人を見ると意地でも食べさせるみたいな顔をしているので、僕は、あきらめて二人に食べさせてもらうことにした

夕食を食べ終えてしばらくゆつくりしていたが時計を見ると8時になつていたので着替えを部屋から持ってきてお風呂に入る事にした途中で二人が背中を流してあげると言いながら僕についてきたのでなんとかそれを止めてお風呂に入る

さすがにあの二人が入って来たら姉と妹とはいえ僕の理性が持たなくなるよ・・・

二人を警戒しながら髪と体を洗いお風呂に浸かる

お風呂からあがりパジャマに着替えてリビングに戻る

僕が上がってきたのを見て二人もどっちが先に入るかを決め順番にお風呂に入り始めた

二人もお風呂に入り終わりしばらくお茶を飲みながらテレビを見たり本を読んだりしていたがぼちぼち寝ようと思ひ自分の部屋へと戻った

僕は、明日の準備を済ませてから布団の中に入り眠りについた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0680q/>

僕とブラコン姉妹の日常

2011年10月9日16時52分発行